第3号地点貝塚（第44号住居跡覆土内貝層）（第159図）

本跡は，調査区の中央部I3i_3区に確認された第44号住居跡の中央部の覆土内に検出されている小規模な貝ブロックである。本跡の最下層と住居跡床面との比高は，13cmほどであることから本跡は，住居跡廃絶後に投棄されたものと思われる。

平面形は，長径0.47m，短径0.37mの楕円形を呈し，長径方向は，N－42°－Wを指し，層厚20cmほどである。貝層は，上層に混土貝層，下層に混貝土層が堆積し，シオフキを主体にハマグリ，サルボウ等が出土している。シオフキは，比較的小型で殻高は19～30mmの個体のものが多く，最大殻高は44mmである。ハマグリは，殻高22～28mmと33～36mmの間に比較的集中し，最大殻高は44mmである。本跡は，シオフキ118点，ハマグリ95点，サルボウ60点，アカニシ8点，アサリ，カワアイ各2点，ヤマトシジミ，オキシジミ，ヒメシラトリ，イボニシ，ウミニナ，アラムシロ各1点により構成されている。

第4・27号地点貝塚（第102号土坑覆土内貝層）（第160図）

第4・27号地点貝塚は，調査区の中央部I3i_2区に確認された第102号土坑の覆土内に検出され，土坑の中央から南側に第4号地点貝塚が，北西側には，第27号地点貝塚が形成されている。なお，第4号地点貝塚については，層位発掘を採用したので，堆積順に8段階に分けて説明を加えることにする。

第4号地点貝塚は，土坑の覆土上層に検出され，平面形は，長径1.3m，短径0.71mの不定形を呈している。長径方向は，N－71°－Eを指し，層厚は48cmほどである。

第1段階（21・19層）

21・19層は，本跡の最下層に堆積する層で共に極暗褐色土上の層である。21層は，楕円形を呈するハマグリを主体とする混貝土層であり，ハマグリの殻高は，20～25mmのものが多く，最大殻高は25mmである。19層は，不整台形を呈する層で，ハマグリを主体とする混貝土層である。ハマグリの殻高は，25～35mmのものが多く，最大殻高は45mmである。

第2段階（18層）

18層は，19層上をスッポリ覆う形で不定形を呈して堆積している。ハマグリとシオフキがほぼ同量ずつ含まれる層であり，ハマグリの殻高は，23～34mmのものが多く，最大殻高は43mmである。

第3段階（17層）

17層は，18層上に不定形を呈して堆積し，ハマグリを主体にシオフキ，サルボウ等を含む混貝土層である。ハマグリは，殻高22～30mmのものが多く，最大殻高は45mmである。

第4段階（16層）

16層は，17層を包む形で不定形を呈して堆積している。シオフキを主体にハマグリ，ヒメシラトリ等を含む混土貝層である。ハマグリは，殻高29～35㎜のものが多く，最大殻高は43㎜であり，シオフキは，殻高31～38㎜のものが多く，最大殻高は40㎜である。

第5段階（15・14・13層）

15層は，16層上に堆積し，不整楕円形を呈する層である。ハマグリを主体にシオフキ等を含む混土貝層であり，ハマグリは，殻高25～37㎜のものが多く，殻高47㎜が最大である。14層は，極暗褐色土上に堆積する不定形の層で，ハマグリ等を少量含む混貝土層である。ハマグリの殻高は23～32㎜のものが多く，最大殻高は36㎜である。13層は，15層の西側で，破砕貝を極少量含む極暗褐色土上に投棄された貝ブロックで，ハマグリ2点のみしか含まれていない。

第6段階（12・11・10・9層）

12層は，15層上に不定形を呈して堆積し，ハマグリを主体としシオフキ等を含む混貝土層である。ハマグリは，殻高26～37㎜のものが多く，最大殻高は39㎜である。11層は，12層の西側に接して一部15層上に堆積する貝ブロックで，ハマグリ等を少量含む混貝土層である。9層は，極暗褐色土上で，東側の一部は10層下に流れ込むように堆積する不整隅丸方形を呈する貝ブロックである。ハマグリの殻高は22～31㎜のものが多く，最大殻高は38㎜である。10層は，14層上で，一部9層上にも堆積する不定形を呈する層である。ハマグリ等を少量含む混貝土層である。ハマグリの殻高は22～28㎜のものが多く，最大殻高は36㎜である。

第7段階（20・8・7・6・5層）

20層は，8層の北側に接して極暗褐色土上に楕円形を呈して堆積する層である。シオフキを主体としハマグリ等を含む混貝土層である。ハマグリの殻高は28～37㎜のものが多く，最大殻高は41㎜である。シオフキの殻高は，29～34㎜のものが多く，最大殻高は38㎜である。8層は，12層上に不定形を呈して堆積する層で，ハマグリを主体とする混貝土層である。ハマグリの殻高は，19～31㎜のものが多く，最大殻高は41㎜である。7層は，12・11層上に不定形を呈して堆積し，シオフキ，ハマグリをわずかに含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，24～31㎜のものが多く，最大殻高は46㎜である。6層は，10層上に不定形を呈して堆積する層で，ハマグリ等を少量含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，28～33㎜のものが多く，最大殻高は43㎜である。5層は，6層の北西側の9層上に堆積する不定形を呈する層である。少量のハマグリ等を含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，24～28㎜のものが多く，最大殻高は35㎜である。

第8段階（4・3・2・1層）

4層は，20・8層上に不定形に広がって堆積し，ハマグリ等を少量含む混貝土層であり，ハマグリの殻高は，29～32㎜のものが多く，最大殻高は39㎜である。3層は，7・5層上に堆積する

不定形の層で，ハマグリを主体としシオフキ等を含む混貝土層である。ハマグリの殻高は21～33㎜のものが多く，最大殻高は40㎜である。２層は，６層上に不整楕円形を呈して堆積するハマグリを主体とする混貝土層である。ハマグリの殻高は，23～31㎜のものが多く，最大殻高は47㎜である。１層は，５層と一部６層上に不整円形を呈して堆積する層である。ハマグリを主体としシオフキ，サルボウ等を含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，26～32㎜のものが多く，最大殻高は47㎜である。

本跡は，ハマグリ825点，シオフキ570点，サルボウ61点，ヒメシラトリ28点，オキシジミ13点，カワニナ10点，ウミニナ９点，ヤマトシジミ，オオノガイ各８点，アサリ６点，アラムシロ４点，ナミマガシワ３点，アカニシ２点，イボニシ，イボウミニナ各１点により構成されている。

第27号地点貝塚は，第４号地点貝塚と同様に覆土上層に３ケ所にわたりブロック状に点在して黒褐色土上に投棄されている。堆積順序は，レベル等から３層が最初に，次いで２・１層が，ほぼ同時に投棄されたものと思われる。

３層の平面形は，長径0.43ｍ，短径0.13ｍの不定形を呈し，長径方向は，Ｎ－35°－Ｗを指している。層厚は33㎝ほどである。ハマグリを主体にシオフキ，サルボウを含む混土貝層で，ハマグリの殻高は，22～35㎜のものが多く，最大殻高は50㎜である。２層の平面形は，長径0.42ｍ，短径0.26ｍの楕円形を呈し，層厚は８㎝ほどの薄い規模で，ハマグリ，シオフキ等を含ふ混土貝層である。ハマグリの殻高は，26～34㎜のものが多く，最大殻高は51㎜である。１層の平面形は，長径0.47ｍ，短径0.26ｍの不整楕円形を呈し，層厚は６㎝と薄く，ハマグリ主体の混土貝層である。ハマグリの殻高は22～30㎜のものが多く，最大殻高は47㎜である。

本跡からは，９種類の貝が同定され，ハマグリ208点，サルボウ69点，シオフキ41点，アカニシ４点，ヤマトシジミ，オキシジミ各２点，アサリ，ヒメシラトリ，ナミマガシワ各１点が出土している。

第５・10・32号地点貝塚（第41号住居跡覆土内貝層）（第165図）

第５・10・32号地点貝塚は，調査区の中央部I3j_4区を中心に確認された第41号住居跡覆土内に検出されている。第５号地点貝塚は，第41号住居跡の北東側に位置し，貝層の南東側の一部が，第５号溝によって切られている貝ブロックである。第10号地点貝塚は，第41号住居跡の南西側に位置し，貝層の北東側を第５号溝によって切られている。さらに，第32号地点貝塚は，第10号地点貝塚のやや南側に位置する貝ブロックである。

第５号地点貝塚は，住居跡の覆土に検出された貝ブロックで，本跡の最下層と住居跡床面との

比高は，ほとんどみられないことから，住居跡廃絶後間もなく貝が投棄されたものと思われる。

平面形は，長径0.61ｍ，短径0.43ｍの楕円形を呈し，長径方向は，Ｎ－29°－Ｗを指し，層厚19cmほどである。本跡の貝類組成は，ハマグリ178点，シオフキ120点，ウミニナ５点，オキシジミ３点，オオノガイ１点が同定され，ハマグリを主体にした混土貝層である。ハマグリの殻高は，19～27mmの小型の個体が非常に多いが，最大殻高は44mmである。シオフキの殻高は，31～37mmに集中し，最大殻高は41mmで，全体的にやや大型化の傾向がみられる。

第10号地点貝塚は，住居跡の南西側，炉のほぼ上面に位置し，貝層の最下層と住居跡の床面との比高は，20cmほどである。貝層の平面形は，長径1.5ｍ，短径1.3ｍの不定形を呈し，長径方向は，Ｎ－58°－Ｅを指し，層厚25cmの規模である。本跡を調査するに当っては，層位発掘を採用したので，堆積関係を，堆積順位の古い方から説明を加えることにする。堆積順位は，平面及び断面観察をもとにして便宜的に７段階に分けたが，新旧を決められない層は，同時存在として調査を進めた。

第１段階（21・20・19層）

21層は，本跡の最下層で東側の褐色土上に堆積する不定形の貝ブロックであり，ハマグリを主体とし，シオフキ等を含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，24～32mmの個体のものが多く，最大殻高は44mmである。20層は，21層の西側に位置し，褐色土上に楕円形を呈して堆積する貝ブロックで，ハマグリを主体とし，シオフキ，サルボウを含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，23～30mmの個体のものが多く，最大殻高は39mmである。19層は，20層の西側の褐色土上に堆積し，ハマグリを主体とし，シオフキ等を少量含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，24～35mmの個体のものが多く，最大殻高は39mmである。

第２段階（18・17・16層）

18層は，東側に位置し，不定形の貝ブロックで，21層をスッポリ覆う形で堆積している。ハマグリを主体としてシオフキ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，23～31mmの個体のものが多く，最大殻高は45mmである。17層は，20層の南側上面に18層と16層に挟まれるように堆積する楕円形の貝ブロックでハマグリを主体とする混土貝層である。ハマグリの殻高は，22～30mmの個体のものが多く，最大殻高は47mmである。16層は，18層の西側に位置し，長楕円形を呈して，19層上に堆積している。ハマグリを主体としシオフキ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，20～30mmの個体のものが多く，最大殻高45mmである。

第３段階（15・14・26層）

15層は，東側に位置する不整長方形の貝層で，北東側で26層に一部もぐり込む形で18層をほぼスッポリ覆い，南西側の一部は，17層上に堆積している層である。ハマグリ主体の混土貝層であ

る。ハマグリの殻高は，23～31㎜の個体のものが多く，最大殻高は36㎜である。14層は，15層の西側に接し，16層の南側上面に不定形を呈して堆積し，シオフキを主体としてハマグリを多量含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，27～35㎜の個体のものが多く，最大殻高は53㎜である。シオフキの殻高は，26～35㎜である。最大殻高40㎜である。26層は，16層の北側上に不整楕円形を呈して堆積するハマグリを主体としてシオフキ，サルボウを含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，25～30㎜の個体のものが多く，最大殻高は45㎜である。

第4段階（13・12・11・25層）

13層は，東側に位置する不定形の貝層で，15層上に堆積し，シオフキを主体に，ハマグリ，ヒメシラトリ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，28～35㎜の個体のものが多く，最大殻高は47㎜である。シオフキの殻高は，32～38㎜であり，最大殻高は38㎜である。12層は，13層の西側に接し，11層の東側に接している不定形の小貝ブロックで，15・14層上に堆積している。ハマグリを主体とする混土貝層である。ハマグリの殻高は，23～35㎜の個体のものが多く，最大殻高は40㎜である。11層は，不定形を呈する貝層で，14層上に堆積している。ハマグリを主体に，シオフキ，サルボウ等を含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，23～28㎜であり，最大殻高は41㎜である。25層は，12層の北側に位置する不定形の貝ブロックで，26層上に堆積し，ハマグリを主体にシオフキを含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，24～35㎜の個体のものが多く，最大殻高は39㎜である。

第5段階（10・9・8・7・24層）

10層は，東側に位置する不定形の貝層で，13層上に堆積している。シオフキを主体として，ハマグリを含む混土貝層で，本跡の中でも一番シオフキの量が多い貝層である。ハマグリの殻高は，24～34㎜の個体のものが多く，最大殻高は62㎜である。シオフキの殻高は，28～35㎜である。9層は，10層の南西側に位置し，13層上に堆積し，ハマグリを主体とする混土貝層である。ハマグリの殻高は25～32㎜の個体のものが多く，最大殻高は46㎜である。8層は，11層上に不定形を呈して堆積する層で，ハマグリを主体とするシオフキ等を少量含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，29～31㎜の個体のものが多く，最大殻高は40㎜である。7層は，9層の西側，8層の北側の一部を覆うようにして，12層，11層上に堆積している。ハマグリを主体として，シオフキ，サルボウを含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，23～30㎜の個体のものが多く，最大殻高は49㎜である。24層は，10層の北西側で接し，25層上に堆積しているハマグリ主体の混土貝層である。ハマグリの殻高は，20～27㎜の個体のものが多く，最大殻高は44㎜である。

第6段階（6・5・4・23層）

6層は，東側に位置し，不定形を呈する貝層で，10層上にほぼ覆うように上面全体に堆積する層で，シオフキを主体にハマグリ等を含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，25～35㎜の個体

のものが多く，最大殻高は47㎜である。５層は６層と４層に挟まれる小貝ブロックで，９層上に堆積し，ハマグリを主体としシオフキ等を含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，24～33㎜の個体のものが多く，最大殻高は45㎜である。４層は，６層の西側に位置する不定形の貝層で，８層，７層上に堆積するハマグリを主体とする混貝土層である。ハマグリの殻高は，28～31㎜・35～39㎜の個体のものが多く，最大殻高は45㎜である。23層は，４層の南側で，24層上に堆積する小貝ブロックであり，ハマグリ主体の混貝土層である。ハマグリの殻高は，19～29㎜の個体のものが多く，最大殻高は40㎜である。

第７段階（３・２・１・22層）

３層は，東側に位置する不定形の貝層で，６層上に堆積するシオフキを主体としハマグリ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，23～35㎜の個体のものが多く，最大殻高は44㎜である。２層は，３層の西側で，４層上に堆積する貝ブロックで，ハマグリ主体の混土貝層である。ハマグリの殻高は，24～30㎜の個体のものが多く，最大殻高は41㎜である。１層は，２層の西側に位置し，４層上に堆積するハマグリを主体とする混土貝層である。ハマグリの殻高は，22～30㎜の個体のものが多く，最大殻高は46㎜である。22層は，２層の南側で，23層上に堆積するハマグリ主体の混貝土層である。ハマグリの殻高は，18～30㎜の個体の間に分布しているが，ハマグリの量が少ないため，集中範囲は不明である。

本跡を構成する貝類組成をみると，ハマグリ4,480点，シオフキ3,179点，サルボウ275点，ウミニナ52点，ヒメシラトリ43点，アカニシ40点，アサリ26点，カワニナ19点，アラムシロ19点，オキシジミ９点，ヤマトシジミ５点，ヒロクチカノコ５点，オオノガイ２点，カワアイ２点，キセルモドキ科１点が出土しており，ハマグリを主体とする貝塚である。アカニシ40点が出土していることは，他の遺構と比べると，若干多いように思われ，また，ヒロクチカノコは，他の地点貝塚からほとんど出土していない。

第32号地点貝塚は，住居跡覆土の上面に検出された貝ブロックで，平面形は，長径0.34ｍ，短径0.31ｍの不整円形を呈し，長径方向は，Ｎ－15°－Ｅを指し，層厚は，13㎝ほどである。貝類組成によると，本跡は，ハマグリ54点，シオフキ11点，サルボウ４点が，わずかに出土したのみで，ハマグリを主体とする混貝土層である。ハマグリは，殻高32～39㎜の間の個体のものに比較的集中しており，最大殻高は45㎜でやや大型に近いハマグリが採集されている。

第６・７・８・９・29・30号地点貝塚（第39号住居跡覆土内貝層）（第163・164図）

第６・７・８・９・29・30号地点貝塚は，調査区の中央部I3j_2区を中心に確認された第39号住居跡の中央部から南側にかけての覆土内から検出されている。これら６か所の地点貝塚は，第39

号住居跡のほぼ中央部に第30号地点貝塚，中央からやや南東側に第８号地点貝塚，さらに，南東壁の上面に第９号地点貝塚，南側に第29号地点貝塚，南西側に第７号地点貝塚，北西側に第６号地点貝塚がそれぞれ形成されている。なお，第６・30号地点貝塚については，層位発掘を採用したので，堆積順序の古い方から説明を加え，堆積順位は，平面及び，断面観察をもとにして，前者を７段階，後者を８段階に分けた。新旧を決められない層については同時期に存在したものとして説明を加えた。

第６号地点貝塚は，住居跡覆土の上面に検出された貝塚である。貝塚最下層と住居跡床面の比高は40cmほどである。

平面形は，長径1.35ｍ，短径0.77ｍの不定形を呈し，長径方向は，Ｎ－54°－Ｗを指し，層厚は29cmである。

第１段階（11層）

11層は，本跡の最下層で，本跡の南東側黒褐色土上に不定形を呈して堆積する層である。ハマグリを主体にシオフキ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，28～39㎜の個体のものが多く，最大殻高は50㎜である。

第２段階（10・９層）

10層は，９層の北西側の黒褐色土上に堆積している不定形を呈する最下層で，ハマグリを主体とした混土貝層である。ハマグリの殻高は，24～32㎜の個体のものが多く，最大殻高は40㎜である。９層は，11層上と一部10層上に堆積している不定形を呈する層で，ハマグリを主体とした混土貝層である。ハマグリの殻高は，27～34㎜の個体のものが多く，最大殻高は37㎜である。

第３段階（８・７層）

８層は，10層上に堆積している不定形を呈するハマグリを主体とする混土貝層である。ハマグリの殻高は，23～34㎜の個体のものが多く，最大殻高は45㎜である。７層は，９層上に堆積する不定形を呈するハマグリを主体とする混土貝層である。ハマグリの殻高は，22～29㎜の個体のものが多く，最大殻高は46㎜である。

第４段階（22・６・５層）

22層は，８層の北側上に堆積している不定形を呈するハマグリを主体とする混土貝層である。ハマグリの殻高は，19～28㎜の個体のものが多く，最大殻高は45㎜である。６層は，22層と５層に挟まれる状態で，８層上に堆積している不整長方形を呈するハマグリを主体とする混土貝層である。ハマグリの殻高は，21～30㎜の個体のものが多く，最大殻高は45㎜である。５層は，７層の上面に不整長方形を呈するハマグリを主体とする混土貝層である。ハマグリの殻高は，22～29㎜の個体のものが多く，最大殻高は45㎜である。

第5段階（21・20・19・4層）

21層は，22層上に堆積している不定形を呈するハマグリ主体の混貝土層である。ハマグリの殻高は，25～34㎜である。最大殻高は44㎜である。20層も22層上に不定形を呈して堆積する層で，ハマグリ主体の混土貝層である。ハマグリの殻高は，23～31㎜の個体のものが多く，最大殻高は46㎜である。19層は，6層上に堆積し，不整楕円形を呈し，ハマグリを主体とし，シオフキ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，27～37㎜の個体のものが多く，最大殻高は43㎜である。4層は，5層上に堆積し，不定形を呈し，ハマグリ主体の混土貝層である。ハマグリの殻高は，19～28㎜の個体のものが多く，最大殻高は44㎜である。

第6段階（18・17・16・3層）

18層は，21層上に不定形を呈して堆積している貝ブロックで，ハマグリを少量含む混貝土層である。ハマグリは，殻高30～39㎜の間にあり，最大殻高は39㎜である。17層は，20層から21層上にかけて堆積している貝ブロックで，ハマグリの混貝土層である。ハマグリの殻高は，19～32㎜の間にあり，最大殻高は32㎜である。16層は，20層上に不定形を呈して堆積しているハマグリ主体の混土貝層である。ハマグリの殻高は，23～29㎜の個体のものが多く，最大殻高は50㎜である。3層は，4層上をスッポリ覆う状態で堆積している不定形を呈する層で，ハマグリ主体のシオフキ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，18～25㎜・33～34㎜の個体のものが多く，最大殻高は37㎜である。

第7段階（15・14・13・12・2層）

15・14・13層は，本跡の北東側の暗褐色土上に堆積している貝ブロックである。15・14層は，共にハマグリをわずかに含む混貝土層であり，ハマグリの殻高は，20～42㎜の間にあり，最大殻高は42㎜である。13層は，ハマグリを主体とする混土貝層で，ハマグリの殻高は，22～25㎜の個体のものが多い。最大殻高は41㎜である。12層は，16層上に堆積している不定形を呈する貝ブロックで，ハマグリをわずかに含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，18～32㎜の個体のものが多く，最大殻高は32㎜である。2層は，3層上に堆積している不定形を呈する層で，ハマグリを主体とする混貝土層である。ハマグリの殻高は，18～25㎜の個体のものが多く，最大殻高は37㎜である。

第8段階（1層）

1層は，2層上に不定形を呈して堆積しており，ハマグリを主体とした混土貝層である。ハマグリの殻高は，20～31㎜の個体のものが多く，最大殻高は38㎜である。

本跡は，圧倒的にハマグリを主体とする混土貝層で，貝類組成をみると，ハマグリ1,497点，シオフキ234点，サルボウ104点，ウミニナ16点，オオノガイ9点，アラムシロ6点，オキシジミ5点，ナミマガシワ4点，ヒメシラトリ3点，アサリ，ヤマトシジミ，カワニナ，イボニシ各1

～２点が出土している。

第７号地点貝塚は，第30号地点貝塚の南西側に接して暗褐色土上にほぼ円形を呈して堆積する貝ブロックである。本跡の最下層と住居跡床面との比高は，40cmほどである。

平面形は，径0.42ｍのほぼ円形を呈し，層厚は20cmほどである。本跡では，比較的多種類の貝類遺体が同定され，ハマグリ190点，シオフキ136点，サルボウ53点，ウミニナ５点，オオノガイ３点，オキシジミ，イボニシ，アラムシロ，ナミマガシワ各１点ずつが出土し，ハマグリ主体の混土貝層である。ハマグリは，殻高23～35mmの個体のものが多く，最大殻高は48mmである。シオフキは，殻高29～38mmの個体のものが多く，最大殻高は38mmである。

第８号地点貝塚は，住居跡の上面に検出され，貝塚の最下層と住居跡の床面との比高は45cmほどである。

平面形は，長径1.28ｍ，短径0.64ｍの楕円形を呈し，層厚は18cmほどである。本跡は，貝類組成をみると，ハマグリ297点，シオフキ77点，サルボウ30点，オキシジミ３点，アカニシ４点，ウミニナ４点，カワニナ１点，ナミマガシワ１点が出土し，ハマグリを主体とする混貝土層である。ハマグリは，殻高19～28mmの間の個体のものが多く，最大殻高44mmである。

第９号地点貝塚は，住居跡の南東壁上に検出され，貝塚の最下層と住居跡の床面との比高は38cmほどである。

平面形は，長径0.72ｍ，短径0.45ｍの楕円形を呈し，長径方向は，Ｎ－24°－Ｅを指し，層厚20cmほどの規模である。本跡を構成する貝類組成は，シオフキ306点，ハマグリ155点，サルボウ48点，ウミニナ５点から成り，シオフキを主体とする混土貝層である。シオフキの殻高は，30～37mmの個体のものが多く，最大殻高は37mmである。ハマグリの殻高は，21～25mmと35～39mmの間に比較的集中し，最大殻高は44mmである。

第29号地点貝塚は，第30号地点貝塚の南側に接して褐色土上に２か所の貝ブロックをもって検出された。北東側を１層，南西側を２層として調査した。本跡の最下層と住居跡床面との比高は，１層が42cm，２層が５cmである。

平面形は，長径0.9ｍ，短径0.64ｍの不定形を呈し，長径方向は，Ｎ－27°－Ｅを指し，層厚は，１層が13cm，２層が49cmである。本跡からは，ハマグリ，シオフキ、サルボウ，ヤマトシジミ，オオノガイの５種が同定された。貝類組成からみると，１・２層を合せて，ハマグリ144点，シオフキ27点，サルボウ16点，ヤマトシジミ３点，オオノガイ２点が出土しているが，量的には少な

く，ハマグリ主体の混貝土層である。ハマグリの殻高は，20～32㎜の個体のものが多く，最大殻高は，50㎜である。

第30号地点貝塚は，住居跡の覆土上層に検出され，貝層の最下層と住居跡床面との比高は，34㎝ほどである。貝層の平面形は，長径1.62ｍ，短径1.00ｍの不定形を呈し，長径方向はＮ－69°－Ｗを指し，層厚は19㎝ほどである。

第１段階（13・14・10層）

13層は，本跡からやや北東側の暗褐色土上に堆積し楕円形を呈する貝ブロックで，ハマグリを主体にヤマトシジミ等を含む混土貝層である。ハマグリは，殻高23～32㎜の個体のものが多く，最大殻高は41㎜である。14層は，13層の北西側の同じく黒褐色土上にほぼ円形を呈して堆積する貝ブロックである。ハマグリ等を少量含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，23～32㎜の間に比較的集中し，最大殻高は45㎜である。10層は，本跡の南西側の暗褐色土上に位置する楕円形のブロックで，ハマグリを主体としたシオフキ，サルボウを含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，21～22㎜，35～39㎜の間に比較的集中し，最大殻高は55㎜である。

第２段階（９層）

９層は，10層上に堆積し，楕円形を呈する貝ブロックで，ハマグリ主体にシオフキ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，22～29㎜の個体のものが多く最大殻高は40㎜である。

第３段階（８・７・12層）

８層は，本跡のほぼ中央に位置し，南側で７層と接し５層の貝層下にもぐり込むようにして暗褐色土上に堆積している。ハマグリを主体にシオフキやアカニシ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，24～27㎜と35～37㎜の間の個体のものが多く，最大殻高は47㎜である。７層は，北側で８層と接して堆積するハマグリを主体にシオフキ等を少量含む混土貝層である。12層は，本跡の南東側に位置し，14層をスッポリ覆う形で堆積している不定形の広がりをもった貝層で，ハマグリを主体としてシオフキ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，25～33㎜と37・38㎜の間に比較的集中し，最大殻高は50㎜である。

第４段階（11層）

11層は，12層の北東側の暗褐色土上に単独で不定形を呈して堆積するブロックで，ハマグリを主体として，シオフキ，サルボウ，ヤマトシジミ，ナミマガシワを少量含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，22～29㎜の個体のものが多く，最大殻高は43㎜である。

第５段階（６・５層）

６層は，北西側で５層と接し，８層の直上に堆積する不定形を呈するブロックで，ハマグリを主体にシオフキ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，24～30㎜の個体のものが多く，最

大殻高は47㎜である。５層は，南東側では一部８層上に不定形を呈して堆積し，６層と接する貝ブロックで，ハマグリを主体にシオフキ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，21～30㎜と35～37㎜に比較的集中し，最大殻高は50㎜である。

第６段階（４・３層）

４層は，７層上に堆積し不整円形を呈している貝ブロックで，ハマグリを主体としてシオフキ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，24～33㎜の個体のものが多く，最大殻高42㎜である。３層は，西側で一部８層上に堆積しているやや層厚の厚い貝層で，不定形を呈する広がりをもっている。ハマグリを主体として，シオフキ，サルボウを含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，23～34㎜と37～39㎜の間に比較的集中し，最大殻高は45㎜である。

第７段階（２・１層）

２層は，３層の上面に堆積するもので，ほぼ三角形を呈し，ハマグリを主体にシオフキ等を少量含む混土貝層である。１層は，南東側一黒褐色土上，北西側で５層上に不整楕円形を呈して堆積するハマグリを主体にシオフキ等を少量含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，26～37㎜の個体のものが多く，最大殻高は52㎜である。

本跡は貝類組成をみると，ハマグリ2,359点，シオフキ459点，サルボウ219点，ヤマトシジミ111点，ウミニナ27点，オオノガイ21点，アサリ15点，ヒメシラトリ15点，ナミマガシワ８点，アラムシロ６点，アカニシ２点，イボニシ２点，カワニナ２点，カワアイ１点により構成されている。本跡は，ハマグリが圧倒的に多い混土貝層で，貝層断面図などから主として南東側から投棄されたものと考えられる。

住居跡内には，以上のように６か所の地点貝塚が点在して堆積しているが，第29号地点貝塚の２層を除いては，各貝塚の最下層と住居跡床面との比高は，34～45㎝であることから，住居跡廃絶後に投棄されたものと思われる。また第29号地点貝塚の２層は，住居跡床面との比高が５㎝であるので、これらの貝塚より若干早く投棄されたものと思われる。

第11・12号地点貝塚（第38号住居跡内貝層）（第163図）

第11・12号地点貝塚は，調査区の南部J3b$_3$区を中心に確認された第38号住居跡の覆土内に検出されたものである。第11号地点貝塚は，第38号住居跡のほぼ中央部の炉の上面に広がっている貝塚であり，第12号地点貝塚は，南東部にブロック的に検出されたものである。

第11号地点貝塚は，覆土の上層から下層にかけて純貝層，混土貝層，混貝土層からなる。貝層の最下層と住居跡床面との比高は，４㎝ほどである。このことから本跡は，住居跡廃絶直後に北側から南側にかけて貝の投棄により形成されたものと思われる。

平面形は，長径3.12m，短径2.35mの不定形を呈し，長径方向は，N－35°－Eを指し，層厚25cmほどである。

同定された貝類遺体は，18種類で，貝類組成をみると，シオフキ19,144点，ハマグリ3,315点，ヒメシラトリ1,234点，サルボウ496点，アサリ349点，ウミニナ65点，アラムシロ39点，オキシジミ34点，ナミマガシワ，キセルガイ各14点，カワニナ10点，オオノガイ９点，イボニシ，サビシラトリ各７点，ヤマトシジミ３点，ヒダリマキマイマイ２点，アカニシ，ヒロクチカノコ各１点が出土している。シオフキは，殻が薄く破損しやすく計測不能の資料が多いが，殻高27～37mmの間の個体が主体となっている。最大殻高は41mmである。ハマグリは，殻高28～35mmの間の個体が多く最大殻高は50mmである。本跡の主体貝種は圧倒的にシオフキである。陸生の貝類遺体としてはキセルモドキ科，ヒダリマキマイマイも出土している。

第12号地点貝塚は，貝層が薄くブロック状をなしており，平面形は，長径0.51m，短径0.26mの楕円形を呈し，長径方向は，N－２°－Wを指して，層厚は，わずかに４cmほどの規模である。本跡を構成する貝種及び数量は少なく，ハマグリ87点，サルボウ16点，シオフキ７点が同定されたのみである。ハマグリの殻高は，24～32mmの個体のものが多く，最大殻高は44mmである。

第13号地点貝塚（第80・83号土坑覆土内貝層）（第161・162図）

本跡は，調査区の南部J3b$_6$区を中心に確認された第80・83号土坑の覆土上層に検出されている。第80号土坑は，第83号土坑の東側0.3mに隣接しており，本跡は，これら両土坑をスッポリ覆う状態で形成されている。貝層の最下層と土坑底面との比高は，ほとんどみられないことから，第80・83号土坑が廃絶された後ただちに貝の投棄が行なわれたものと考えられる。平面形は，長径2.46m，短径1.8mの不定形を呈し，長径方向は，N－73°－Eを指して，層厚は13～28cmである。調査方法は，層位発掘を採用したので，堆積順序の古い方から順に説明する。

第１段階（34・33・16・15層）

34層は，本跡の北東側褐色土上に堆積している層で，不定形を呈しており，ハマグリを主体にシオフキ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，25～38mmの個体のものが多く，最大殻高は50mmである。シオフキの殻高は，30～38mmの個体のものが多く，最大殻高は43mmである。33層は，北東側で34層，南東側で16層に挟まれるように褐色土上に不定形を呈して堆積している層で，ハマグリを主体にシオフキ，サルボウで構成されている混土貝層である。ハマグリの殻高は，29～40mmの個体のものが多く，最大殻高は47mmである。シオフキの殻高は，32～39mmの個体のものが多く，最大殻高は43mmである。16層は，15層を取り囲むように弧状を描いて堆積している層である。ハマグリを主体とし，シオフキ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリ

の殻高は，27～35㎜の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。シオフキの殻高は，32～36㎜の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。15層は，本跡の中央部褐色土上に堆積して，不整楕円形を呈しており，シオフキを主体にハマグリ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，26～32㎜の個体のものが多く，最大殻高は43㎜である。シオフキは，32～38㎜の個体のものが多く，最大殻高は43㎜である。

第2段階（32・30層）

32層は，34・33層上に不整楕円形を呈して堆積する層で，シオフキを主体としハマグリ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，25～30㎜の個体のものが多く，最大殻高は50㎜である。シオフキの殻高は，33～39㎜の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。30層は，16・15層上に不定形を呈して堆積する層で，シオフキを主体として，ハマグリ，サルボウ等で構成され，貝層上面に破砕貝層を含む純貝層である。ハマグリの殻高は，25～34㎜の個体のものが多く，最大殻高は50㎜である。シオフキの殻高は，32～37㎜の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。

第3段階（31・29・28・27・14・13層）

31層は，32層上にスッポリ覆う形でほぼ円形に堆積する層で，ハマグリを主体としサルボウ，ヤマトシジミ，シオフキ等で構成される純貝層である。ハマグリの殻高は，22～30㎜の個体のものが多く，最大殻高は47㎜である。シオフキは少なく計測できない貝が多いが，31～39㎜の間に殻高がみられる。29層は，30層上に不定形を呈して堆積する層で，ハマグリを主体としシオフキ，サルボウ等を含み，破砕貝層を貝層上面に含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，25～34㎜の個体のものが多く，最大殻高は50㎜である。シオフキの殻高は32～37㎜の個体のものであり，最大殻高は42㎜である。28層は，29層の西側に不定形に堆積するシオフキを主体としハマグリ，サルボウ等をわずかに含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，28～33㎜の個体のものが多く，最大殻高は45㎜である。シオフキの殻高は，28～38㎜の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。27層は，30層上に不定形に堆積する層で，ハマグリを主体とする純貝層で，ナミマガシワを若干含んでいる。ハマグリの殻高は，28～35㎜の個体のものが多く，最大殻高は43㎜である。14層は，本跡の東側に位置し，北西側で32層に接して堆積する不定形の層で，ハマグリ，サルボウを主体としたシオフキ，ナミマガシワを含む層の厚い混土貝層である。ハマグリの殻高は，23～24㎜・30～35㎜の個体のものが多く，最大殻高は48㎜である。シオフキの殻高は，35～38㎜の個体のものが多く，最大殻高は41㎜である。13層は，15・16層上を覆う形で広がり不定形を呈して堆積する層で，シオフキを主体としハマグリ，サルボウ等で構成される純貝層である。ハマグリの殻高は，31～41㎜の個体のものが多く，最大殻高は41㎜である。シオフキの殻高は，30～40㎜の個体のものが多く，最大殻高は43㎜である。

第4段階（26・25・24・23・22・12・11・10層）

26層は，28層上に楕円形を呈して堆積する貝ブロックで，ハマグリ，シオフキを主体とする混土貝層である。ハマグリの殻高は，23～30㎜の個体のものが多く，最大殻高は49㎜である。シオフキの殻高は，32～39㎜の個体のものが多く，最大殻高は40㎜である。25層は，北東側で26層と接して28層上に堆積する貝ブロックで，不定形を呈している。シオフキを主体としアサリが他の貝層に比べて多く含まれている混土貝層である。ハマグリの殻高は，25～32㎜の個体のものが多く，最大殻高は46㎜である。シオフキの殻高は32～38㎜の個体のものが多く，最大殻高は39㎜である。24層は，本跡の西側の褐色土上に堆積するハマグリ，シオフキをほぼ同量ずつ含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，23～28㎜の個体のものが多く，最大殻高は47㎜である。シオフキの殻高は，33～39㎜の個体のものが多く，最大殻高は41㎜である。23層は，29層上に不定形に広がって堆積するハマグリを主体とし，シオフキ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，25～36㎜の個体のものが多く，最大殻高は45㎜である。シオフキの殻高は，32～38㎜の個体のものが多く，最大殻高は43㎜である。22層は，32・14層上にかけて不定形に広がって堆積する層である。本貝層は，他の貝層にあまりみられないヤマトシジミを主体とした層でハマグリ，シオフキ等を含む純貝層である。ヤマトシジミは，殻高13～17㎜の個体のものが多く，最大殻高は21㎜である。ハマグリの殻高は，22～32㎜の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。シオフキの殻高は，32～38㎜の個体のものが多く，最大殻高は40㎜である。12層は，褐色土上に不定形に堆積する層で，ハマグリを主体にシオフキ，サルボウを含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，26～32㎜の個体のものが多く，最大殻高は49㎜である。シオフキの殻高は，33～40㎜の個体のものが多く，最大殻高は43㎜である。11層は，東側で13層の一部上面に，また，10層上に一部流れ込むように堆積する細長い不定形の層である。ハマグリの殻高は，26～39㎜の個体のものが多く，最大殻高は45㎜である。シオフキ，ハマグリを主体としサルボウを若干含む混土貝層である。10層は，13層上に不定形の広がりで堆積するハマグリ，シオフキを主体としサルボウを含む混土貝層である。

第5段階（21・20・19・18・17・9・8・7・6・4層）

21層は，22層上に不定形に堆積するハマグリ主体の混土貝層である。ハマグリの殻高は，25～32㎜の個体のものが多く，最大殻高は43㎜である。シオフキの殻高は，32～38㎜の個体のものが多く，最大殻高は40㎜である。20層は，21層の南側に位置し22層上に不定形に堆積するシオフキ主体の混土貝層である。ハマグリの殻高は，25～33㎜の個体のものが多く，最大殻高は48㎜である。シオフキの殻高は，32～38㎜の個体のものが多く，最大殻高は40㎜である。19層は，22層上に，西側では一部20層下に堆積している層で，小型のヤマトシジミを主体としハマグリを含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，30～36㎜の個体のものが多く，最大殻高は48㎜である。ヤマ

トシジミの殻高は，12～18㎜の個体のものが多く，最大殻高は22㎜である。18層は，24層上にほぼ楕円形を呈して堆積するシオフキ，ハマグリをほぼ同量ずつ含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，24～30㎜の個体のものが多く，最大殻高は46㎜である。シオフキの殻高は，32～38㎜の個体のものが多く，最大殻高は40㎜である。17層は，23・11層上に堆積する不定形の層である。ハマグリ，シオフキ，サルボウをほぼ同量ずつ含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，23～33㎜の個体のものが多く，最大殻高は46㎜である。シオフキの殻高は，32～38㎜の個体のものが多く，最大殻高は43㎜である。９層は，12層上に堆積するハマグリ主体の混土貝層である。ハマグリの殻高は，23～27㎜と35～39㎜の個体のものが多く，最大殻高は47㎜である。シオフキの殻高は，32～38㎜の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。８層は，10層上に堆積するハマグリ主体にシオフキ，サルボウを含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，25㎜・32～33㎜・38～45㎜の個体のものが多く，最大殻高は46㎜である。シオフキの殻高は，28～38㎜の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。７層は，11層上に不定形に堆積するハマグリ主体の混土貝層である。ハマグリの殻高は，28～37㎜の個体のものが多く，最大殻高は43㎜である。シオフキの殻高は，34～40㎜の個体のものが多く，最大殻高は43㎜である。６層は，南側で10層上に堆積し不定形に広がる層で，ハマグリを主体にシオフキ，サルボウ等にナミマガシワを若干含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，25～35㎜の個体のものが多く，最大殻高は40㎜である。シオフキの殻高は，33～38㎜の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。４層は，11層上に「Ｙ」字状に堆積する層で，ハマグリを主体にサルボウ，シオフキを含む純貝層である。ハマグリの殻高は，25～33㎜の個体のものが多く，最大殻高は50㎜である。シオフキの殻高は，30～37㎜の個体のものが多く，最大殻高は47㎜である。

第６段階（５・２層）

５層は，６層上にスッポリ入る形で不定形を呈して堆積しており，ハマグリ，シオフキを主体としサルボウを含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，27～40㎜の個体のものが多く，最大殻高は41㎜である。シオフキの殻高は，33～40㎜の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。２層は，９層上に堆積し不定形を呈しており，ハマグリを主体とする混土貝層である。ハマグリの殻高は，26～30㎜の個体のものが多く，最大殻高は40㎜である。シオフキの殻高は，31～37㎜の個体のものが多く，最大殻高は40㎜である。

第７段階（３・１層）

３層は，５層上に細長く堆積している。ヤマトシジミを主体にハマグリ，シオフキ，サルボウがほぼ同量ずつ含まれている純貝層である。ヤマトシジミの殻高は，15～17㎜に比較的集中している。１層は，２層上に不定形に堆積する層で，圧倒的にハマグリが多くシオフキ，サルボウを含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，25～31㎜の個体のものが多く，最大殻高は44㎜である。

シオフキは少量のため計測不能のものが多いが，殻高は30～40㎜の間に分布している。

本跡は，貝類組成をみると，ハマグリ，シオフキ，サルボウ，ヤマトシジミ等の順で構成されている。他の地点貝塚と若干違うことは，５か所の貝層から小型のヤマトシジミが多量に出土し，特に，22層は，ヤマトシジミを主体とする純貝層であることである。同定された貝類は，多種類で前述のほかにナミマガシワ，アサリ，オキシジミ，ウミニナ，イボニシ，アカニシ，アラムシロ，カワアイ，カワニナ，ヒメシラトリ，ヒロクチカノコ，オオノガイ，キセルモドキ科，ヒダリマキマイマイの合せて18種類である。さて，これらの貝層は，貝層断面や破砕貝層の含まれる30・29層，さらに調査日誌等を検討すると，北西方向から南東方向に向けて貝殻の投棄が行われたものと思われる。

第14号地点貝塚（第159図）

本跡は，調査区の南部J3c$_5$区に確認されたもので，凹地に一括投棄された貝ブロックである。

平面形は，長径0.45ｍ，短径0.39ｍの楕円形を呈し，長径方向は，Ｎ－22°－Ｅを指し，層厚は13㎝ほどである。貝層は，褐色土上に堆積し，シオフキを主体にハマグリ等を含む混貝土層である。シオフキの殻高は，35～37㎜の間に比較的集中しており，最大殻高は45㎜である。ハマグリの殻高は，31～37㎜のものが多く，最大殻高は50㎜である。本跡は，シオフキ98点，ハマグリ78点，サルボウ13点，アサリ１点により構成されている。

第15号地点貝塚（第85号土坑覆土内貝層）（第160図）

本跡は，調査区の南部J3c$_5$区を中心に確認された第85号土坑覆土内に検出されている。覆土の上層には，層の薄い貝ブロックがみられ，貝ブロックの最下層と土坑底面との比高は，約87㎝で，土坑の廃絶後しばらくして，一括投棄されたものと思われる。本跡の平面形は，長径0.2ｍ，短径0.18ｍの不整楕円形を呈し，長径方向は，Ｎ－46°－Ｅを示し，層厚は0.22ｍほどである。本跡は，他の貝塚よりも出土する貝類遺体量，種類とも少なく貧弱である。

本跡からは，ハマグリ40点，シオフキ６点，サルボウ４点，オオノガイ，アカニシ各１点が出土している。

第16号地点貝塚（第94号土坑覆土内貝層）（第160図）

本跡は，調査区の南部J3e$_4$区を中心に確認された第94号土坑の覆土内に検出されている。土坑の覆土上層には，層厚の薄い貝殻の堆積がみられ，貝層の最下層と土坑底面との比高は，33㎝ほどであり，土坑の廃絶後しばらくして貝殻の投棄が行なわれたものと思われる。本跡は，層位発掘を採用したので２段階に分けて堆積順位の古い順に説明を加えることにする。

本跡の平面形は，長径1.13ｍ，短径0.54ｍの不整楕円形を呈し，長径方向は，Ｎ－84°－Ｗを指

し，層厚は，12cmほどの薄いものである。

第1段階（3・2層）

3層は，締まりのある黒褐色土上に不定形を呈して堆積する層で，シオフキを主体にハマグリ等を含む混土貝層である。シオフキの殻高は，30～38mmの個体のものが多く，最大殻高は48mmである。ハマグリの殻高は，28～34mmの個体のものが多く，最大殻高は44mmである。2層は，3層の西側に位置し，黒褐色土上に不定形を呈して堆積する層である。ハマグリ，シオフキ，サルボウをほぼ同量ずつ含む混土貝層である。シオフキの殻高は，35～40mmの個体のものが多く，最大殻高は43mmである。ハマグリの殻高は，28～35mmのものが多く，最大殻高は49mmである。

第2段階（1層）

1層は，ほぼ2層上に堆積する層で，不定形を呈するシオフキ主体のハマグリ等を含む混土貝層である。シオフキの殻高は，30～37mmの個体のものが多く，最大殻高は41mmである。ハマグリの殻高は，27～37mmの個体のものが多く，最大殻高は55mmである。

本跡を構成する貝類組成をみると，シオフキ503点，ハマグリ333点，サルボウ129点，ヤマトシジミ17点，アサリ8点，ナミマガシワ4点，オキシジミ，アカニシ各3点，カワニナ1点が出土し，全体的にシオフキを主体に出土しているが，第2層では，他の層に比べるとサルボウが若干多く出土している。

第17号地点貝塚（第46号住居跡覆土内貝層）（第167・168図）

本跡は，調査区の南部J3d_3区を中心に確認された第46号住居跡のほぼ中央部覆土内に検出されており，当遺跡の中では，やや規模の大きい貝塚である。しかし第46号住居跡の西側は，古墳時代の第37号住居跡により切られているため，その際に本跡の貝層も切られていることが確認された。貝層は，覆土の中層から上層にかけて堆積し，貝層の最下層と，住居跡床面との比高は，13cmほどであることから，本跡は，住居跡廃絶後間もなく貝殻の投棄がなされたものと思われる。本跡の調査方法については，層位発掘を採用し，平面観察や貝層断面から50層に分けられたが，整理の際には，貝層堆積関係図等をもとに10段階に分けた。堆積の順に説明を加えることにする。

第1段階（39・21・20層）

39層は，本跡の北西側の最下層で，20層と同一の貝層と思われ極暗褐色土上に不定形を呈して堆積する層である。シオフキ主体のハマグリは，サルボウを若干含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，26～36mmの個体のものが多く，最大殻高は50mmである。シオフキの殻高は，31～38mmの個体のものが多く，最大殻高は38mmである。21層は，本跡の南側の極暗褐色土上に不定形を呈して堆積する最下層である。シオフキを主体にハマグリ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，25～30mmの間に集中し，最大殻高は45mmである。シオフキの殻高は，31～37mm

の間に集中し，最大殻高は39㎜である。20層は，21層上と一部貝層下土層の22層上に堆積する不定形を呈している層である。ハマグリを主体にシオフキ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，30～35㎜の間に集中し，最大殻高は53㎜である。シオフキの殻高は，33～36㎜の個体のものが多く，最大殻高は43㎜である。

第2段階（38・37・18層）

38層は，39層上に不整方形を呈して堆積する破砕貝を含む層で，ヒメシラトリを主体にシオフキ，サルボウ等を含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，24～29㎜の個体のものが多く，最大殻高は52㎜である。シオフキの殻高は，25～34㎜の個体のものが多く，最大殻高は43㎜である。ヒメシラトリの殻高は，20～23㎜の個体のものが多く，最大殻高は26㎜である。37層は，38層上をほぼ完全に覆うように堆積する層で不定形を呈して広がっており，破砕された貝を含む。シオフキ主体のハマグリ，サルボウ等やヒメシラトリを若干含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，24～35㎜と40～42㎜の間の個体のものが多く，最大殻高は55㎜である。シオフキの殻高は，25～35㎜の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。18層は，攪乱層である19層の南西側に接し，20・21層上に長楕円形を呈して堆積する層である。ハマグリ主体のシオフキ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，27～33㎜の個体のものが多く，最大殻高は50㎜である。シオフキの殻高は，32～36㎜の個体のものが多く，最大殻高は39㎜である。

第3段階（36・16層）

36層は，不定形を呈して広がる一番大きい貝層で，貝の範囲としてはさらに16層とに分けられると思われるが，不明瞭であったので一つの層としてとらえたものである。37・19・18・17層上にまたがって堆積しており，シオフキを主体にハマグリ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリは，殻高32～40㎜の個体のものが多く，最大殻高は49㎜で大型なものが目立つ貝層である。シオフキは，殻高31～37㎜の個体のものが多く，最大殻高は39㎜である。

第4段階（34・33層）

34層は，31層の南側に位置し，36層上一部間層（35－C層）の褐色土上に，隅丸長方形を呈して堆積しているハマグリの混貝土層である。ハマグリは，殻高35～40㎜のものが多く，最大殻高53㎜で，大型化が目立っている。シオフキは4点のみしか出土しなかったため計測はしなかった。33層は，36層上に堆積する間層の暗褐色土上に不定形を呈して堆積する層で，シオフキ，ハマグリをほぼ同数ずつ含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，27～36㎜の個体のものが多く，最大殻高は45㎜である。シオフキの殻高は，30～37㎜の個体のものと40㎜の個体のものが多い。

第5段階（32・5層）

32層は，36層上に堆積する間層（35－B層）上に不整方形を呈して堆積する層で，シオフキ主体のハマグリ，サルボウ等を含む純貝層である。ハマグリの殻高は28～35㎜の個体のものが多く，

最大殻高は40㎜である。シオフキの殻高は，32～37㎜の個体のものが多く，最大殻高は41㎜である。５層は，12層上に不定形を呈して堆積する層でシオフキを主体にハマグリ等を含む純貝層である。ハマグリは，殻高23～30㎜の間に集中し，最大殻高は47㎜である。シオフキは，殻高32～37㎜の間に集中し，最大殻高は40㎜である。

第６段階（31層）

31層は，32層の一部を覆う形で堆積する不定形の層で，シオフキ主体のハマグリ，サルボウ等を含む破砕貝層である。ハマグリの殻高は，27～37㎜の個体のものが多く，最大殻高は54㎜である。シオフキの殻高は30～37㎜の個体のものが多く，最大殻高は41㎜である。

第７段階（30・29・４層）

30層は，31層上をほぼ覆う形で堆積する不整楕円形の層である。ハマグリを主体にシオフキ等を含む混土貝層である。ハマグリは，殻高25～35㎜の間に集中し，最大殻高は42㎜である。シオフキは，殻高31～37㎜の間に集中し，最大殻高は39㎜である。29層は，間層（35－Ａ層）の暗褐色土上に不整楕円形を呈して堆積する層で，ハマグリを主体とするシオフキ，サルボウ等を含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，25～30㎜の間と34㎜に集中し，最大殻高は40㎜である。シオフキの殻高は，34～38㎜の間の個体のものが多く，最大殻高は38㎜である。４層は，５層上をスッポリ覆う形で堆積する不定形を呈する広い貝層であるが，量的には少ない。ハマグリを主体にシオフキや破砕貝等を含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，23～28㎜の個体のものが多く，最大殻高は41㎜である。シオフキの殻高は，33～36㎜の個体のものが多く，最大殻高は38㎜である。

第８段階（24・28・27層）

24層は，南側で33層上に，北側では，破砕貝片を含む暗褐色土上に堆積する不定形を呈する層である。シオフキを主体にハマグリ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，27～32㎜の個体のものが多く，最大殻高は47㎜である。シオフキの殻高は，33～37㎜の個体のものが多く，最大殻高は39㎜である。28層は，29層上に楕円形を呈して堆積する層である。ハマグリは，殻高23～32㎜の間に集中し，最大殻高45㎜である。シオフキは，殻高30～36㎜の間に集中しており，最大殻高は41㎜である。27層は，貝片を少量含み締まりのある暗褐色土上に堆積する貝ブロックで，ハマグリ主体の混貝土層である。ハマグリの殻高は，23～43㎜の間に分布している。

第９段階（23・25・26層）

23層は，24層上に不定形を呈して堆積する層である。大型サルボウやシオフキを含むハマグリ主体の混貝土層である。ハマグリの殻高は，23～37㎜の個体のものが多く，最大殻高は40㎜である。シオフキの殻高は，32～36㎜の個体のものが多く，最大殻高は38㎜である。25層は，ほぼ27層上に堆積する貝ブロックで，ハマグリ５点，サルボウ１点が出土しただけである。ハマグリの

殻高は，24～37㎜の間に分布している。26層は，28層をスッポリ覆う形で堆積する不整長方形を呈し，ハマグリなどを少量含む混貝土層である。ハマグリは，殻高24～26㎜の個体のものが多く，最大殻高は34㎜で比較的小型化している。シオフキは少量で，殻高が薄くて破損し易いため完形貝がなく計測ができなかった。

第10段階（17・15・14・13・12・11・10・9・8・7・6・3・2・1層）

本段階は，第1～9段階のように堆積関係を明瞭に把握できなかった貝層群のため，一括して説明を加えることにする。

17層は，本跡の南東端に位置し，20層上に不定形を呈して堆積する層であり，ハマグリ主体のシオフキ，サルボウ等を少量含む混貝土層である。ハマグリ，シオフキとも少量のため集中する範囲は明確ではない。ハマグリの殻高は，19～44㎜の間に分布し，最大殻高は44㎜である。シオフキの殻高は，28～37㎜の間に分布し，最大殻高は37㎜である。15層は，36層上に不定形を呈して堆積する層で，38層と同様にヒメシラトリを主体にシオフキ，ハマグリ等を含む純貝層である。ヒメシラトリの殻高は，20～24㎜の間の個体のものが多く，最大殻高は27㎜で，殻高の集中する範囲は38層とほぼ同じである。ハマグリの殻高は，21～31㎜の間の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。シオフキの殻高は，28～36㎜の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。14層は，15層上に不定形を呈して堆積する層である。シオフキ主体のハマグリ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，24～29㎜の間の個体のものが多く，最大殻高は43㎜である。シオフキの殻高は，27～35㎜の個体のものが多く，最大殻高は41㎜である。13層は，14層上に堆積する不整円形を呈する層で，ハマグリ主体のシオフキ等を含む混貝土層である。ハマグリは，殻高22～33㎜と41～43㎜の間の個体のものが多く，最大殻高は43㎜である。シオフキは，殻高28～29㎜の個体のものが多く，最大殻高は38㎜である。12層は，14層上に不整楕円形を呈して堆積する層で，ハマグリ主体のシオフキ等を含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，25～35㎜の個体のものが多く，最大殻高は52㎜である。シオフキは少なく，27～35㎜の間に殻高が集中しており，最大殻高は41㎜である。11層は，15層上に堆積するほぼ三角形を呈する層で量的には少ないがハマグリ主体のシオフキ，サルボウ，ウミニナを含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，21～50㎜の間に分布し，26～28㎜の間に集中している。最大殻高は50㎜である。シオフキは少なく，殻高は23～39㎜の間に分布しており，最大殻高は39㎜である。10層は，本跡の東端に位置し，極少量の破砕貝片を含む暗褐色土上に堆積する層で，不整長方形を呈している。シオフキ主体にハマグリ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリは少なく，殻高33～34㎜の間に比較的集中しており，最大殻高は51㎜である。シオフキは，殻高34～38㎜の間に集中しており，最大殻高は42㎜である。9層は，ローム粒子を極少量含む褐色土上に堆積する不定形を呈する細長い層で，ハマグリ等を少量含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，29～33㎜の個体のものが多く，最大

殻高は38㎜である。８層は，９層と７層の中間の暗褐色土上に不定形を呈して堆積する層である。ハマグリを主体にシオフキ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，22～27㎜の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。シオフキは少量で，殻高30～37㎜の間に分布している。最大殻高は41㎜である。７層は，11層上に堆積する不定形を呈する層で，ハマグリ等を少量含む混貝土層である。ハマグリは少量で，殻高23～42㎜の間に分布している。シオフキは，少量のため計測ができなかった。６層は，13層上に不定形を呈して堆積する層で，ハマグリを主体にシオフキ等を含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，18～34㎜の間に分布している。シオフキは完形貝がないため計測できなかった。３層は，27・５層と同様に暗褐色土上に堆積する不整三角形を呈する層である。ハマグリを主体にシオフキ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，25～32㎜の間に集中し，最大殻高は54㎜である。シオフキの殻高は，34～37㎜の間に集中し，最大殻高は41㎜である。２層は，本跡の最南端の暗褐色土上に堆積するほぼ三角形を呈する層で，ハマグリを主体に少量のシオフキ，サルボウ等を含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，21～43㎜の間に分布しており，最大殻高は43㎜である。シオフキの殻高は，27～32㎜の間に分布しており，最大殻高は32㎜である。１層は，２層上にほぼ半円形を呈して堆積するハマグリを主体にシオフキ、サルボウ等を含む混貝土層である。ハマグリは，殻高20～50㎜の間に分布しており，最大殻高は50㎜である。シオフキは殻高30～36㎜の間に分布しており，最大殻高は36㎜である。なお，40－Ｂ～49層については，セクションベルト中の貝層をブロック分けしたものであり，各層は第225図のように対応する。

本跡から同定された貝類は，17種類で，貝類組成をみるとシオフキ4,894点，ハマグリ4,577点，ヒメシラトリ1,280点，サルボウ726点，ウミニナ109点，アラムシロ46点，アサリ38点，カワニナ34点，ナミマガシワ37点，ヤマトシジミ16点，オキシジミ15点，オオノガイ10点，アカニシ11点キセルモドキ科９点，イボニシ６点，カワアイ２点，ムギガイ２点が出土している。

第18・19・20・24・26号地点貝塚（第42号住居跡覆土内貝層）（第166図）

第18・19・20・24・26号地点貝塚は，調査区の南部J3d_5区を中心に確認された第42号住居跡覆土内に検出されている。これら５ヶ所の地点貝塚は，第42号住居跡の中央部には第18号地点貝塚，北側には第24号地点貝塚が，東側には第26号地点貝塚，南東側には第19号地点貝塚，南西側には第20号地点貝塚がそれぞれ検出されている。

第18号地点貝塚は，住居跡の覆土から検出された貝ブロックで，住居跡の床面との比高は，17㎝ほどあるので住居跡の廃絶後やや時間をおいて貝の投棄が行なわれたものと思われる。

平面形は，長径0.26ｍ，短径0.16ｍの楕円形を呈し，長径方向は，N－64°－Wを指し，層厚は４

cmほどの浅いものである。本跡は，ハマグリを主体とした混貝土層で，ハマグリ６点，シオフキ，サルボウ各１点が出土したのみである。

第19号地点貝塚は，住居跡の覆土から検出された貝ブロックで，本跡最下層と住居跡床面との比高は17cmほどであることから本跡廃絶後貝が投棄されたものと思われる。

平面形は，長径0.32ｍ，短径0.18ｍの楕円形を呈し，長径方向は，Ｎ－37°－Ｗを指し，層厚６cmほどの浅いものである。本跡は，ハマグリを主体としたシオフキ，サルボウ等を含む混土貝層で，貝類組成をみると，６種が同定され，ハマグリ106点，シオフキ47点，サルボウ24点，アカニシ３点，オオノガイ１点，ナミマガシワ１点が出土している。ハマグリの殻高は，24～28mmの個体のものが多く，最大殻高は41mmで全体的に小型である。

第20号地点貝塚は，住居跡の覆土から検出され，本跡最下層と住居跡床面との比高は33cmほどであり，住居跡廃絶後かなりの時間が経過して後貝の投棄が行なわれたものと思われる。

平面形は，長径0.66ｍ，短径0.35ｍの楕円形を呈し，長径方向は，Ｎ－47°－Ｗを指し，層厚９cmほどで浅いものである。同定された貝類は，５種でハマグリを主体とした混貝土層である。貝類組成をみるとハマグリ98点，サルボウ25点，シオフキ19点，ヤマトシジミ２点，アサリ１点が出土し，他の遺構とほぼ同じような貝類組成である。

第24号地点貝塚は，住居跡の覆土から検出された貝ブロックで，本跡最下層と住居跡の床面との比高が12cmほどであることから，住居跡廃絶後投棄されたものと思われる。

平面形は，長径0.44ｍ，短径0.36ｍの楕円形を呈し，長径方向は，Ｎ－22°－Ｅを指し，層厚12cmほどのものである。本跡は，貝類組成をみるとハマグリ90点，シオフキ26点，サルボウ26点，ウミニナ８点，オキシジミ３点，オオノガイ，カワアイ，ナミマガシワ各１点ずつが出土し，ハマグリを主体とした混土貝層である。ハマグリは，殻高22～52mmの間に分布しており，25～28mm・34・35・38・39mmの間に比較的集中している。

第26号地点貝塚は，住居跡の覆土から検出され，本跡の最下層と住居跡の床面との比高は，ほとんどみられないことから，住居跡の廃絶とほぼ同時に貝が投棄されたものと思われる。

平面形は，長径1.0ｍ，短径0.4ｍの不定形を呈し，長径方向は，Ｎ－61°－Ｗを指す貝層と，径0.34ｍのほぼ円形を呈する貝層の２か所に分かれている。調査方法については，層位発掘を採用したので，４段階に分けて堆積順に説明を加えることにする。

第1段階（6層）

6層は，本跡の最下層で南東側の締まりのある暗褐色土上に堆積する不定形の層で，住居跡床面との比高はほとんどみられない層である。小型ハマグリを主体にシオフキ，サルボウ等を含む純貝層である。ハマグリの殻高は，28～32㎜と34～35㎜の間に比較的集中しており，最大殻高は50㎜である。シオフキの殻高は，30～35㎜に集中しており，最大殻高は44㎜である。

第2段階（4層）

4層は，6層上に暗褐色土が堆積しており，その上面に堆積する瓢箪形を呈する層で，ハマグリを主体にシオフキ，サルボウ等を含む純貝層である。ハマグリの殻高は，21～26㎜・29～31㎜・35～37㎜に比較的集中している。最大殻高は45㎜である。シオフキの殻高は，30～36㎜に集中しており，最大殻高は40㎜である。

第3段階（5・3層）

5層は，本跡の南側暗褐色土上に投棄された貝ブロックで楕円形を呈している。ハマグリを主体にシオフキ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，23～32㎜に比較的集中しており，最大殻高は50㎜である。シオフキの殻高は薄くて破損し易いため計測可能な完形貝が少なかった。3層は，4層上をスッポリ覆う形で堆積する不定形の層である。ハマグリを主体にシオフキ，サルボウを含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，24～26㎜と30～34㎜の間に比較的集中している。最大殻高は50㎜である。

第4段階（2・1層）

本段階は，最後に本跡に投棄された貝層と思われる。2層は，3層の北西側上に堆積する不定形の層であり，ハマグリを主体にサルボウ，シオフキを含む混土貝層である。ハマグリは，殻高24～30㎜の間に比較的集中しており，最大殻高は45㎜である。シオフキは，殻高34～38㎜の個体のものが多く，最大殻高は48㎜である。1層は，3層の南東側上に不定形を呈して堆積する層で，ハマグリを主体に，シオフキ，サルボウを含む混土貝層である。

本跡からは，15種の貝が同定されており，小規模な貝塚にしては多種類にわたり，特に，4層からは，他の貝層に比べてハマグリが多量に出土している。なお本跡は，ハマグリ2,648点，シオフキ393点，サルボウ197点，ヤマトシジミ19点，ウミニナ16点，アサリ11点，アラムシロ10点，オキシジミ，アカニシ各8点，サビシラトリ3点，カワニナ，ナミマガシワ，キセルモドキ科各2点，ヒメシラトリ，カワアイ各1点により構成されている。ハマグリの殻高は，22～30㎜の間に比較的集中しており，最大殻高は39㎜である。シオフキの殻高は，34～36㎜の個体のものが多く，最大殻高は44㎜である。

第21号地点貝塚（第78号土坑内覆土貝層）（第160図）

本跡は，調査区の南部J3j$_4$区を中心に確認された第78号土坑の覆土内から検出されている。土坑の覆土内には，上層と下層に貝殻の堆積がみられ，貝層の最下層と土坑底面との比高は，18cmである。本跡は，土坑廃絶後，ややしばらくして貝殻の投棄が行われたものと思われる。貝層は堆積過程を平面及び断面観察から復元すると２層に分けられ，堆積順位の古い方から説明を加えることにする。

貝層の平面形は，長径0.6m，短径0.39mの楕円形を呈し，長径方向は，Ｎ－62°－Ｗを指し，層厚は，２か所の貝ブロックに分かれ，合わせて42cmほどである。

２層は，最下層でローム粒子を含む軟らかい暗褐色土上に堆積し，不定形を呈する層である。ヤマトシジミ主体の混貝土層である。２層上には，暗褐色土の間層が入っている。１層は，焼土粒子，ローム小ブロックを少量含む暗褐色土上に堆積する長楕円形を呈する層である。シオフキを主体にサルボウ，ハマグリ等を含む混土貝層である。ハマグリは，殻高22～30mmの間に比較的集中し，最大殻高は45mmである。シオフキは，殻高27～36mmの個体のものが多く，最大殻高は39mmである。ハマグリは，比較的小型なものを，シオフキは，大型に近いものを採集していることがわかる。本跡における貝類組成は，シオフキ111点，サルボウ77点，ハマグリ59点，ヤマトシジミ50点，オキシジミ３点が出土している。第１層の主体貝種は，シオフキ，サルボウ，ハマグリの３種に対して，第２層の主体貝種が，ヤマトシジミであり，また，第１層と第２層との間に約24cmほどの暗褐色土層があることから，２層が投棄され，ある期間が経過したあと１層が投棄されたものと思われる。

第22号地点貝塚（第77号土坑覆土内貝層）（第161図）

本跡は，調査区の南部K3b$_3$区に確認された第77号土坑の覆土上層に貝殻が投棄されて形成されている。本跡の最下層と土坑底面との比高は17cmほどであり，土坑廃絶後投棄されたものと思われる。本跡は，層位発掘を採用し，平面観察により５段階に分けられたので，堆積順に説明を加えることにする。

第１段階（７層）

７層は，本跡の最下層で，焼土粒子，炭化物，貝片を極少量含む黒褐色土上に不定形を呈して堆積する層で，ハマグリ等を少量含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，24～35mmの間に集中し，最大殻高は50mmである。シオフキの殻高は，33～38mmの間に集中し，最大殻高は41mmである。

第２段階（６・５層）

６層は，７層上に楕円形を呈して堆積する層で，ハマグリを主体にシオフキ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，25～37mmの間に集中し，最大殻高は48mmである。シオフキは，殻高

31～38㎜の間に集中し，最大殻高は42㎜である。５層は，北側の暗褐色土上に堆積する不整楕円形を呈する層で，ハマグリを主体にシオフキ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリは，殻高23～33㎜の間に集中し，最大殻高は48㎜である。シオフキは，少量のため計測不能である。

第３段階（４・３層）

４層は，６層上にほぼ円形を呈して堆積する層で，シオフキを主体にハマグリ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，23～31㎜の個体のものに集中し，最大殻高は45㎜である。３層は，６層上に堆積する軟らかい暗褐色土の上面に不整円形を呈して堆積している層で，ハマグリを主体にシオフキ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，18～45㎜の間に分布し，22～33㎜の間に比較的多く集中している。シオフキは，少量のため計測不能である。

第４段階（２層）

２層は，３層の上面に堆積する軟らかい暗褐色土上に楕円形を呈して堆積する層で，ハマグリ主体にシオフキ等を含む混貝土層である。ハマグリは，計測可能なものは４点のみで，殻高25・26・34・40㎜である。

第５段階（１層）

１層は，北側から東側にかけては４・２層上に，他は軟らかい暗褐色土上に不定形の大きな広がりをもつ層で，ハマグリとシオフキをほぼ同量ずつ含む混土貝層である。ハマグリは，殻高27～37㎜の個体のものが多く，最大殻高は45㎜である。シオフキは，計測可能なものが少なく，殻高30～35㎜の間に分布しているのみである。

本跡からは，ハマグリ458点，シオフキ328点，サルボウ71点，ヤマトシジミ27点，カワニナ３点，アサリ，オキシジミ各２点，オオノガイ，アカニシ，イボニシ，ウミニナ各１点が出土している。ハマグリの成長度は，殻高の計測値でみると，６層が大型に近いものがやや多く含まれているが，他は全体的に小型ハマグリを採集している。なお，少量であるが，ヤマトシジミが出土している。

第23号地点貝塚（第40号住居跡覆土内貝層）（第166図）

本跡は，調査区の南部K3d$_4$区に確認された第40号住居跡の西側の覆土内に検出されている。貝層は、覆土の上層から下層にかけて堆積し，貝層の最下層と住居跡床面との比高は８㎝ほどであることから，本跡は，第40号住居跡廃絶後間もなく貝殻が投棄されたものと思われる。調査方法については層位発掘を採用したので，３段階に分けて堆積順に説明を加えることにする。

本跡の平面形は，長径2.7ｍ，短径1.2ｍの不定形を呈し，長径方向は，Ｎ－37°－Ｗを指し，層厚は14～22㎝である。

第1段階（14・10層）

14層は，本跡の北側暗褐色土上に不定形を呈して堆積する層で，ハマグリを主体にシオフキ，サルボウを含む混貝土層である。ハマグリは，殻高24～35㎜の間に比較的集中しており，最大殻高は50㎜である。10層は，14層の南側暗褐色土上に不定形の広がりをもって堆積する層で，ハマグリを主体にシオフキ，サルボウ，破砕貝等を含む混土貝層である。ハマグリは，殻高25～34㎜の間に比較的集中しており，最大殻高は45㎜である。

第2段階（13・12・9・8・7・6層）

13層は，8層の東側に接して暗褐色土上に堆積する不定形を呈する貝ブロックであり，ハマグリ，サルボウに若干シオフキを含む混貝土層である。計測可能なハマグリの数は少ないが，殻高25～30㎜のものが多く，最大殻高は40㎜である。12層は，13層の北側に接し，一部は14層の上に貝が堆積しているが，大半は暗褐色土上に不定形を呈して堆積する層で，ハマグリを主体にサルボウを含む混貝土層である。ハマグリの殻高は25～35㎜の間に比較的集中しており，最大殻高は50㎜である。9層は，10層上に不整方形状を呈して堆積する層で，ハマグリ主体の混貝土層である。ハマグリの殻高は，24～34㎜の間のものが多く，最大殻高は46㎜である。8層は，10層をスッポリ覆う形で不定形に堆積する層である。ハマグリを主体にサルボウの破砕貝等を含む混土貝層である。ハマグリは，殻高25～31㎜の間に比較的集中し，最大殻高は49㎜である。7層は，14層をほぼ覆う形で不定形に堆積する層である。ハマグリを主体にサルボウ，シオフキ，ヤマトシジミを含む混土貝層であり，ハマグリの殻高は，25～35㎜の間に比較的集中している。最大殻高は44㎜である。ヤマトシジミは，殻高20～26㎜のものが多く，最大殻高は28㎜である。6層は，7層の西側暗褐色土上に不整楕円形を呈して堆積する層である。本跡のなかでは唯一のヤマトシジミを主体にハマグリ等を含む混貝土層である。ハマグリの殻高は，25～30㎜の間に集中し，最大殻高は38㎜である。ヤマトシジミは，7層とほぼ同じ規模で19～24㎜の間に集中し，最大殻高は26㎜である。

第3段階（11・5・4・3・2・1層）

11層は，本跡の南東側黒褐色土上に堆積する不定形を呈する層で，ハマグリを主体にサルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリは，殻高25－36㎜の間のものが多く，最大殻高は46㎜である。5層は，9層上に不定形を呈して堆積する層で，ハマグリ主体の混貝土層である。ハマグリの殻高は，25～34㎜で，最大殻高は42㎜である。4層は，8層上に不定形を呈して堆積し，ハマグリを主体にハマグリの破砕貝やサルボウを含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，28～32㎜のものが多く，最大殻高は45㎜である。3層は，8層上に不整楕円形を呈して堆積し，サルボウを主体にハマグリ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，23～36㎜のものが多く最大殻高は48㎜である。2層は，7・6層上に不整長方形状に堆積する層で，サルボウを主体にハマグリ，ヤマ

トシジミ，ナミマガシワ等を含む混土貝層である。ハマグリは，殻高24～31㎜のものが多く，最大殻高は50㎜である。ヤマトシジミは，殻高20～25㎜のものが多く，最大殻高は26㎜である。1層は，2層の北側黒褐色土上に不定形を呈して堆積する層である。他の貝層に比べ圧倒的にハマグリの多い混土貝層である。ハマグリは，殻高24～34㎜の間に比較的集中し，最大殻高は45㎜である。

本跡から同定された貝種は，ハマグリ2,980点，サルボウ1,087点，シオフキ511点，ヤマトシジミ220点，ナミマガシワ92点，オキシジミ11点，アサリ10点，カワアイ6点，アカニシ5点，オオノガイ，ウミニナ各3点，イボニシ，カワニナ各2点，ヒメシラトリ，アラムシロ，ヒロクチカノコ，キセルモドキ科各1点の17種である。中でも本跡の北側の7・6・2層から比較的多量のヤマトシジミが出土していることは，本跡の貝類組成からするとやや注目に値いすると思われる。

第25号地点貝塚（第67号土坑覆土内貝層）（第161図）

本跡は，調査区の南部J3c$_4$区を中心に確認された第67号土坑のやや南側の覆土内に検出されている。本跡の最下層と土坑底面との比高は，ほとんどないことから土坑廃絶後間もなく投棄されたものと思われる。本跡は，4層に分けられ層位発掘を採用したので，堆積順序を復元し堆積の古い順に説明を加えることにする。

本跡の平面形は，長径0.71m，短径0.62mの不整楕円形を呈し，長径方向は，N－44°－Wを指し，層厚は38cmほどである。本跡の最下層の第4層は，ほぼ土坑底面の褐色土上に不整楕円形を呈して堆積し，サルボウ主体にハマグリ，シオフキ等を含む混土貝層である。サルボウは，殻高29～32㎜の個体のものが多く，最大殻高は39㎜で，ハマグリは，殻高30～38㎜のものが多く，最大殻高は50㎜である。3層は，4層上に不定形を呈して堆積する層で，サルボウを主体にハマグリ，シオフキ等を含む混土貝層である。サルボウは，殻高33～37㎜のものが多く，最大殻高は40㎜で，ハマグリは，殻高29～39㎜のものが多く，最大殻高は50㎜である。2層は，3層上をスッポリ覆う形で堆積し不定形を呈する層で，ハマグリを主体にシオフキ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリは，殻高32～38㎜のものが多く，最大殻高は46㎜である。1層は，2層上に不定形を呈して堆積する層で，本跡において最終投棄がなされた層である。ハマグリを主体にシオフキ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリは，殻高26～31㎜と34～36㎜の間の個体のものが多く，最大殻高は44㎜である。

本跡からは，13種の貝類遺体が同定されている。貝類組成をみると，サルボウ707点，ハマグリ674点，シオフキ191点，ヤマトシジミ23点，ウミニナ18点，アラムシロ10点，アサリ，ナミマガシワ各8点，アカニシ5点，オキシジミ2点，オオノガイ，ヒメシラトリ，イボニシ，カワニナ各1点が出土している。調査した地点貝塚の中で，本跡は，サルボウが他の貝種よりも多く出土し

ている。

第28号地点貝塚（第114号土坑覆土内貝層）（第160図）

本跡は，調査区の南部J3d$_3$区中心に確認された第114号土坑の覆土内から検出されている。貝層の最下層と土坑底面との比高が余りみられないことから，土坑廃絶後間もなく貝殻の投棄が行なわれたものと思われる。なお，第114号土坑は第46号住居跡と重複しているが，出土遺物から土坑の方が古い遺構である。本跡の調査については，埼玉大学教養部助教授小池裕子氏がステレオ写真を用いて層位発掘を行った。ここでは，10段階に分けて堆積順に説明を加えることにする。

本跡の平面形は，径0.65ｍのほぼ円形を呈している。

第１段階（11層）

11層は，本跡の最下層で褐色土上に不定形を呈して貝が堆積している。ほぼ同数のハマグリとシオフキを主体とし，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は21～32㎜のものが多く，最大殻高は41㎜である。シオフキの殻高は27～36㎜のものが多く，最大殻高は37㎜である。

第２段階（10層）

10層は，11層上をほぼ覆う形で不定形に堆積する層で，ハマグリ主体にシオフキ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，23～32㎜のものが多く，最大殻高は51㎜である。シオフキの殻高は，20～34㎜のものが多く，最大殻高は37㎜である。

第３段階（９層）

９層は，10層をスッポリ覆う形でほぼ円形を呈して堆積する層である。ハマグリを主体にシオフキを多量に含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，21～30㎜のものが多く，最大殻高は41㎜である。シオフキの殻高は，25～37㎜のものが多く，最大殻高は38㎜である。

第４段階（８・７層）

８層は，９層上の北東側に不定形に堆積している層である。本跡の貝層の中で最もハマグリの出土している層で，シオフキ，サルボウ等を含む純貝層である。ハマグリの殻高は，25～31㎜のものが多く，最大殻高は55㎜である。シオフキの殻高は，25～32㎜のものが多く，最大殻高は40㎜である。７層は，９層の南東側に不定形を呈して堆積する層で，ハマグリ主体にシオフキ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，22～28㎜のものが多く，最大殻高は55㎜である。シオフキの殻高は，22～34㎜のものが多く，最大殻高は38㎜である。

第５段階（６層）

６層は，８・７層上に不定形を呈して堆積する層で，ハマグリ主体にシオフキ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，21～30㎜のものが多く，最大殻高は37㎜である。シオフキは，19～34㎜のものが多く，最大殻高は36㎜である。

第6段階（5層）

5層は，6層上にほぼ同じ形状で堆積する層で，ハマグリ，シオフキをほぼ同量に若干サルボウを含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，20～30㎜のものが多く，最大殻高は45㎜である。シオフキの殻高は，23～36㎜のものが多く，最大殻高は40㎜である。

第7段階（4層）

4層は，5層上に堆積する不定形の層で，ハマグリを主体にシオフキ，サルボウ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，20～30㎜のものが多く，最大殻高は42㎜である。シオフキの殻高は，21～28㎜のものが多く，最大殻高は36㎜である。

第8段階（3層）

3層は，4層上に不定形を呈して堆積する層で，サルボウがやや多くハマグリ，シオフキを含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，21～28㎜のものが多く，最大殻高は44㎜である。シオフキの殻高は，18～26㎜のものが多く，最大殻高は38㎜である。

第9段階（2層）

2層は，3層上をスッポリ覆う形で不定形に堆積し，本跡で唯一のシオフキを主体とする層で，ハマグリ，サルボウを含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，16～28㎜のものが多く，最大殻高は47㎜である。シオフキの殻高は，25～36㎜のものが多く，最大殻高は41㎜である。

第10段階（1層）

1層は，ほぼ2層上に堆積する不定形の層で，ハマグリを主体にシオフキ，サルボウを若干含含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，21～36㎜のものが多く，最大殻高は42㎜である。シオフキは23～30㎜のものが多く，最大殻高は36㎜である。

本跡からは，14種が同定され，貝類組成をみると，ハマグリ4,059点，シオフキ1,650点，サルボウ574点，アサリ44点，ウミニナ15点，ヤマトシジミ，ナミマガシワ各6点，ヒメシラトリ，オカチョウジガイ各5点，カワニナ3点，オキシジミ，イボニシ，アラムシロ各2点，イシガイ1点が出土している。

第31号地点貝塚（第116号土坑覆土内貝層）（第162図）

本跡は，調査区の中央部I3i_1区を中心に確認された第116号土坑のほぼ中央部の覆土内に検出されている。

平面形は，長径0.81ｍ，短径0.52ｍの楕円形を呈し，長径方向は，N－39°－Eを指し，層厚は20㎝ほどの浅いものである。本跡の最下層と土坑底面との比高は，4㎝ほどであり，土坑廃絶後間もなく貝殻の投棄が行われたものと思われる。調査方法は，層位発掘を行ったので，2段階に分けて堆積順序の古い方から説明を加えることにする。

第1段階（3層）

3層は，自然堆積している暗褐色土層の凹地に不定形に堆積している層で，ハマグリを主体にサルボウ，シオフキ等を含む混土貝層である。ハマグリは，殻高24～40㎜の間に集中しており，最大殻高は50㎜である。

第2段階（2・1層）

2層は，3層の南側上面に堆積する不定形の貝ブロックで，ハマグリを主体にサルボウ，シオフキ，ヤマトシジミ，カワニナやよごれた破砕貝を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，25～33㎜の間の個体が多く，最大殻高は47㎜である。1層は，2層の北東側に位置し3層上に堆積する不整楕円形を呈する層である。ハマグリを主体にサルボウ，シオフキ，オオノガイ等やよごれた破砕貝を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，23～32㎜の間の個体が多く，最大殻高は49㎜である。

本跡からは，12種が同定され，ハマグリ627点，サルボウ159点，シオフキ130点，ヤマトシジミ30点，ウミニナ10点，オオノガイ7点，カワニナ，アサリ各4点，アカニシ3点，オキシジミ2点，アラムシロ，ナミマガシワ各1点が出土している。

第33号地点貝塚（第162図）

本跡は，調査区の中央部I3j_2区の黒褐色土の凹地に検出され，平面形は，径0.25ｍの円形を呈し，層厚は，3㎝ほどの極めて薄い貝ブロックである。同定された貝種は，ハマグリ9点，サルボウ5点，シオフキ2点，カワアイ1点のみである。

第34号地点貝塚（第127号土坑覆土内貝層）（第162図）

本跡は，調査区の中央部I3i_2区を中心に確認された第127号土坑覆土内に厚い貝の堆積として検出されている。なお，第127号土坑は，第39号住居跡の北西壁を切っているので第39号住居跡よりも新しい遺構である。本跡の最下層と土坑底面との比高は，25㎝ほどであることから，土坑廃絶後間もなく貝の投棄が行なわれたものと思われる。層位発掘を採用したので堆積順位の古い方から復元し，11段階に分けて説明を加えることにする。

平面形は，径1.1ｍほどの円形を呈し，層厚は70㎝ほどである。

第1段階（17・16層）

第1段階の17・16層は，本跡の最下層にあたる層で，17層は，土坑のやや西寄りの少量のローム粒子や極少量の破砕貝を含む褐色土上に不整円形を呈して堆積している。一部破砕されたヒメシラトリ，シオフキ，ハマグリをほぼ同量ずつ含む混土貝層である。ハマグリは，殻高23～30㎜・35㎜に比較的集中し，最大殻高は50㎜である。シオフキは，殻高33～40㎜に比較的集中し，最大

殻高は43㎜である。16層は，本跡のほぼ中央部に17層を取り囲むようにドーナツ状を呈して褐色土上に堆積する層である。ヒメシラトリを主体にハマグリ，シオフキ等を少量含む純貝層である。ヒメシラトリの殻高は，20～25㎜の間に集中し，最大殻高は27㎜である。ハマグリは，少なく殻高26～37㎜の間に比較的集中している。最大殻高は45㎜である。シオフキの殻高は，27～29㎜・33～35㎜の間に比較的集中し，最大殻高は40㎜である。

第2段階（15層）

15層は，17・16層をスッポリ覆う形でほぼ円形を呈して堆積する層で，ヒメシラトリを主体にシオフキ，ハマグリ等を含む純貝層である。ヒメシラトリの殻高は，19～25㎜の間の個体のものが多く，最大殻高は28㎜である。ハマグリの殻高は，25～27㎜の間の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。シオフキの殻高は，23～38㎜の間の個体のものが多く，最大殻高は45㎜である。

第3段階（14層）

14層は，15層上のやや南西側に小山状に堆積しており，不整楕円形を呈する貝ブロックである。ヒメシラトリとシオフキの個体数はほぼ同じであるが，殻高，殻長の大きさ等からシオフキが目立つ混土貝層である。シオフキの殻高は，35～41㎜に比較的集中し，最大殻高は42㎜である。

第4段階（13層）

13層は，14層を完全に包む形でほぼ円形を呈し，15層上に堆積している。南側には径36㎝ほどの範囲で多量の灰が含まれる層でもある。また，本層は，15層と貝類組成はほぼ同じであり，14層の最下層の所を貝の廃棄単位の境界と考え層位を入れたものである。ヒメシラトリ主体にシオフキ，サルボウ等を含む純貝層である。ヒメシラトリの殻高は，20～25㎜の個体のものが多く，最大殻高は29㎜である。ハマグリの殻高は，27～38㎜の個体のものが多く，最大殻高は51㎜である。シオフキの殻高は，25～37㎜の個体のものが多く，最大殻高は40㎜である。

第5段階（12・10層）

12層は，13層上に不定形の広がりを有して堆積する層で，シオフキ主体にヒメシラトリ等を含む混土貝層である。ハマグリは，殻高25～35㎜に比較的集中し，最大殻高は48㎜である。シオフキは，殻高26～28㎜の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。10層は，12層の南側で13層上に堆積する不整楕円形を呈する貝ブロックで，シオフキ主体にヒメシラトリ等を含む純貝層である。ハマグリは少量のため正確な殻高分布とはいえないが，35～41㎜の間の大型のハマグリを比較的多く採集している。シオフキは，殻高28～34㎜の間に比較的集中し，最大殻高は41㎜である。

第6段階（9層）

9層は，13層上に12・10層を挟むような形で，土坑の周縁部を馬蹄形を呈して堆積し，ヒメシラトリ主体にシオフキ等を含む混土貝層である。ヒメシラトリの殻高は，20～24㎜に集中しており，最大殻高は28㎜である。ハマグリの殻高は，25～39㎜の間で32㎜前後をピークに分布し，最

大殻高は52㎜である。シオフキは，殻高32～39㎜の個体のものが多く，最大殻高は40㎜である。

第7段階（11層）

11層は，12層上の北東側に横「U」字状を呈して堆積し，ヒメシラトリ主体にシオフキ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，24～32㎜に比較的集中し，最大殻高は47㎜で大型ハマグリも少量含まれている。シオフキの殻高は，26～37㎜に比較的集中し，最大殻高は42㎜である。

第8段階（８・５層）

８層は，５層の南側に接し11層上に不定形を呈して堆積する層で，シオフキ主体にヒメシラトリ等を含む混土貝層である。ハマグリは少量であるが大型化し，シオフキの殻高は，35～40㎜の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。５層は土坑の北側を巡るように不定形を呈して，12・11層上に堆積する層で，ヒメシラトリ主体にシオフキ等を含む純貝層である。ヒメシラトリの殻高は，17～24㎜の個体のものが多く，最大殻高は25㎜である。ハマグリの殻高は33～41㎜に比較的集中し，最大殻高は41㎜で大型化が目立つ。シオフキの殻高は，24～35㎜の個体のものが多く，最大殻高は47㎜である。

第9段階（７・６層）

７層は，南西側から12層上に堆積し，貝片を極少量含み軟らかい暗褐色土上に不整三角形を呈している層である。シオフキを主体にハマグリ，ヒメシラトリ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，28～34㎜・41～46㎜の間に比較的集中して大型ハマグリが含まれ，最大殻高は47㎜である。シオフキの殻高は，25～35㎜の個体のものが多く，最大殻高は45㎜である。６層は，５層上に不整楕円形を呈して堆積する貝ブロックで，シオフキ主体にヒメシラトリ等を含む混土貝層である。ハマグリは少量のため分布状態は不明であるが，最大殻高60㎜である。シオフキは，30～40㎜の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。

10段階（４・３層）

４層は，５層上に勾玉状を呈して堆積する層で，シオフキとヒメシラトリを主体にハマグリ，アサリを少量含む破砕貝が堆積している。ハマグリは量的には少ないが，殻高は，21～48㎜の間に分布し，40～42㎜に比較的集中している。最大殻高は48㎜で大型のハマグリが目立つ。シオフキの殻高は，27～32㎜の個体のものが多く，最大殻高は42㎜である。シオフキの殻高は，20～26㎜に集中し，最大殻高は29㎜で，他層の殻高と比較してもほとんど変化がみられない。３層は，７・６層上と，北東側の一部が４層の一部に覆いかぶさるように堆積し楕円形を呈している。シオフキを主体にハマグリ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，25～30㎜に比較的集中し，最大殻高は47㎜で，全体的に小型である。シオフキの殻高は，26～36㎜の個体のものが多く，最大殻高は40㎜で比較的大型である。

11段階（２・１層）

11段階は，本跡の最上層に堆積している層である。２層は，４・３層上に不定形を呈して堆積する層で，シオフキ主体のハマグリ等を少量含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，25～45㎜の間に分布している。シオフキの殻高は，31～37㎜の個体のものが多く，最大殻高は41㎜である。１層は，３層上と一部暗褐色土上に細長の不整楕円形を呈して堆積する層で，ハマグリを主体にシオフキ等を含む混土貝層である。ハマグリの殻高は，24～32㎜の間に比較的集中しており，最大殻高は49㎜である。シオフキは，少量で殻高が破損しているため計測不能であった。

本跡は，17種類の貝類遺体が同定された。貝類組成をみると，ヒメシラトリ34,305点，シオフキ3,241点，ハマグリ726点，サルボウ151点，アサリ140点，アラムシロ93点，ウミニナ72点，キセルモドキ科９点，ナミマガシワ６点，カワニナ５点，ヤマトシジミ４点，アカニシ３点，カワアイ，オカチョウジガイ，ムギガイ，イシガイ各２点，オキシジミ１点がそれぞれ出土している。本跡の堆積状況を観察すると，上層がシオフキ主体の貝層に対して，中層から下層にかけてはヒメシラトリ主体の貝層である。なかでも，５・９・13・15・16層ではヒメシラトリの純貝層がみられ，ヒメシラトリが多量に出土していることは，第35号地点貝塚同様興味深い貝塚である。貝の平均的な採集範囲を殻高の成長から考えてみると，ヒメシラトリは，いずれの貝層も20～25㎜の間に集中している。ハマグリは，５・７層にやや大型化の傾向がみられるが，他は25～35㎜の間に比較的集中している。シオフキは，全体的に25～35㎜の間に集中しており，やや大型化が目立つ程度である。

第35号地点貝塚（第140号土坑覆土内貝層）（第162図）

本跡は，調査区の南部J3d$_4$区を中心に確認された第140号土坑の覆土内に貝殻が充填されて形成されている。第140号土坑は，第46号住居跡の南東側に重複しているが，出土遺物から第46号住居跡よりは古い遺構である。貝層は覆土の上層から下層にかけて堆積し貝層の最下層と土坑底面との比高は，ほとんどみられないことから，本跡は，土坑を掘って貝を投棄したか，あるいは土坑廃絶直後に貝殻が投棄されたものと思われる。貝層は，平面観察を通して，層位発掘を採用したので５段階に分けて堆積順に説明を加えることにする。

本跡の平面形は，径0.84ｍの円形を呈し，層厚は34㎝ほどである。

第１段階（６・５層）

６・５層とも本跡の最下層で，ほぼ土坑底面上に堆積する層である。貝層断面や平面図等から検討すると，西側に堆積する褐色土層とほぼ同時期に６層が，次いで５層が投棄されたものと思われる。６層は，土坑のほぼ中央部に不定形に堆積する層で，灰を多量に含みシオフキ主体の混貝土層である。シオフキは，殻高31～41㎜の間にあり，特に34～38㎜の間の個体が比較的多く集

中している。５層は，６層の東側に接し，不整楕円形を呈して堆積する層である。シオフキを主体にサルボウ等を含む混土貝層で，ハマグリの貝刃３点が出土している。シオフキは，殻高25～40㎜の間に分布し，特に，32～38㎜の間の個体が比較的多い。

第２段階（４層）

４層は、６・５層，褐色土上をスポッリ覆い土坑とほぼ同規模で堆積する円形の層である。圧倒的にヒメシラトリが多数をしめ，シオフキを含む純貝層である。シオフキは，殻高25～40㎜の間に個体があり，特に，32～38㎜の個体が比較的多数である。ヒメシラトリは，殻高19～25㎜の間に比較的集中し，最大殻高は26㎜である。

第３段階（３層）

３層は，４層上にほぼ円形を呈して堆積する層厚の最も厚い層である。シオフキを主体にハマグリ，サルボウ等を含む混土貝層である。シオフキは，殻高31～41㎜の間にあり，34～37㎜の間の個体が比較的多数である。

第４段階（２層）

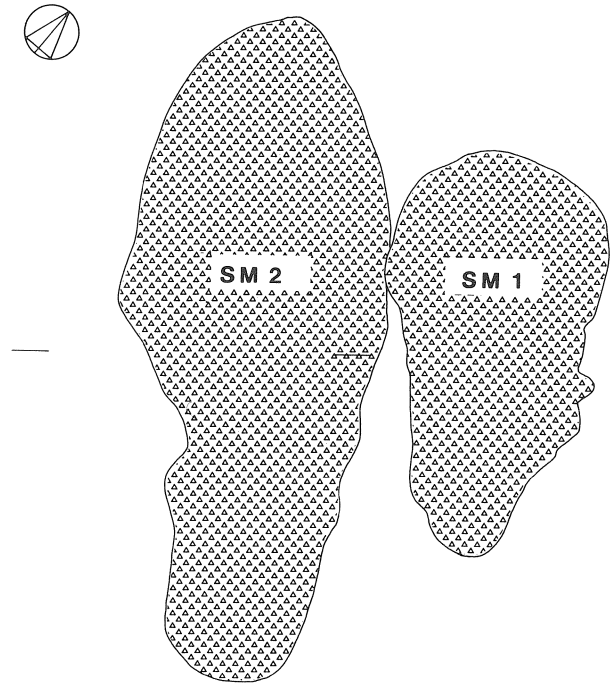
２層は，３層上のやや南東側の凹地に不整楕円形を呈してブロック状に堆積する層である。シオフキを主体にハマグリ，サルボウを少量含む混土貝層である。シオフキは，殻高33～44㎜の間にあり，35～40㎜の間の個体が比較的多数である。

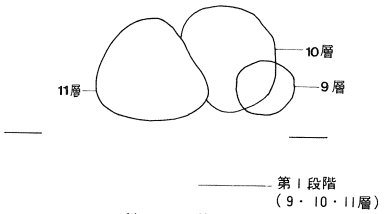
第５段階（１層）

１層は，３・２層上に不整円形を呈して堆積する層で，シオフキを主体にハマグリ，サルボウ等を含む混土貝層である。シオフキは，殻高33～43㎜の間にあり，34～38㎜の間の個体が比較的多数である。

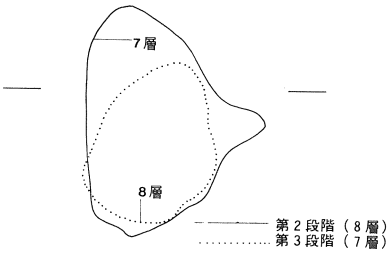
本跡の貝類組成をみると，シオフキ4,013点，ヒメシラトリ2,110点，サルボウ372点，ハマグリ320点，アサリ37点，ウミニナ，アラムシロ各９点，カワニナ，アカニシ各２点，オカチョウジガイ１点が出土している。本跡は，シオフキを主体に構成されているが，第34号地点貝塚と同様に下層の第４層にヒメシラトリが多量に出土していたことは，注目に値する貝層である。

シオフキの採集時の殻高を観察すると２層は殻高35～40㎜の間に，他の層は，34～38㎜の間に採集されており，２層は若干成長しているシオフキを採集していたものと思われる。

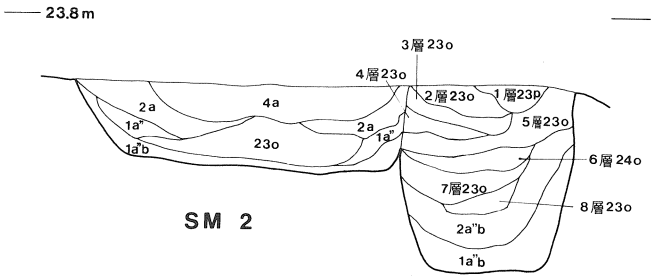


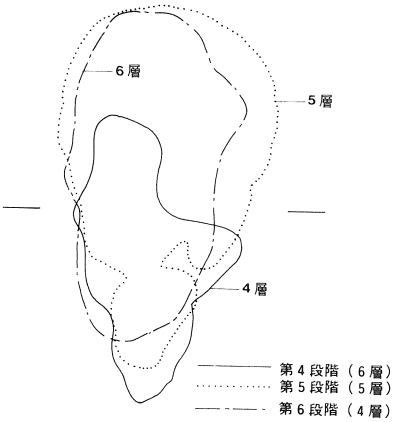


SMⅠ　第Ⅰ段階堆積平面図

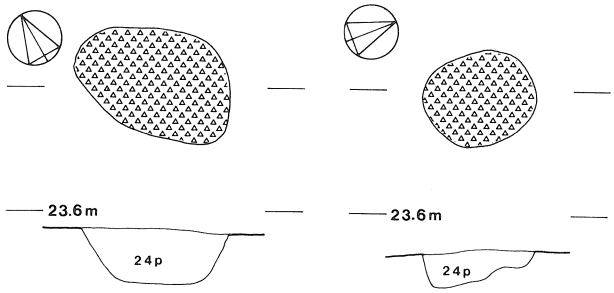


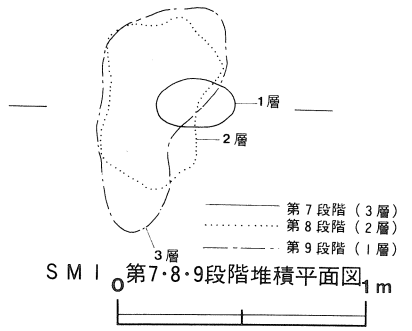
SMⅠ　第2・3段階堆積平面図





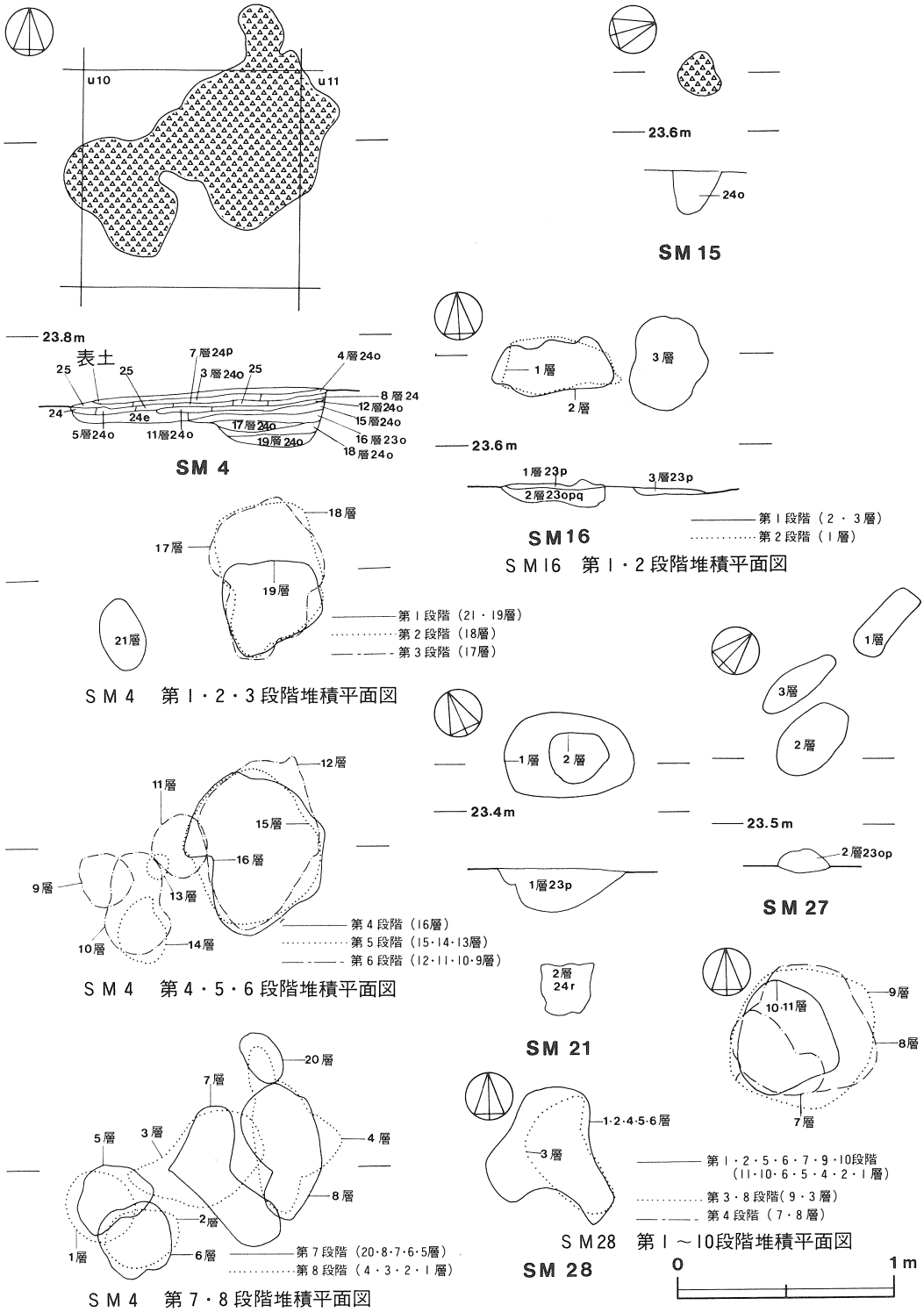
SMⅠ　第4・5・6段階堆積平面図



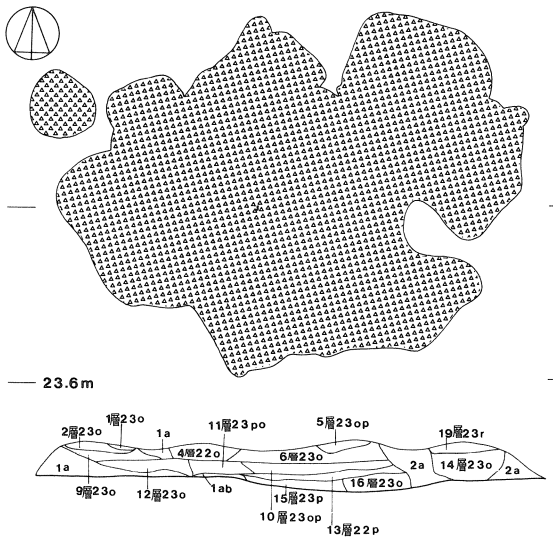


SMⅠ　第7・8・9段階堆積平面図

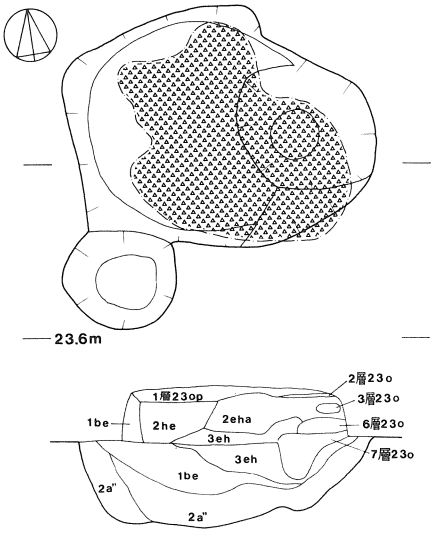
第159図　第1・2・3・14号地点貝塚実測図　(1)



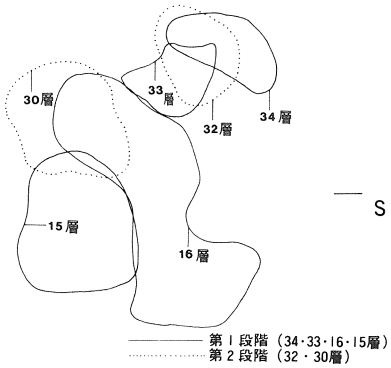
第160図　第4・15・16・21・27・28号地点貝塚実測図（2）



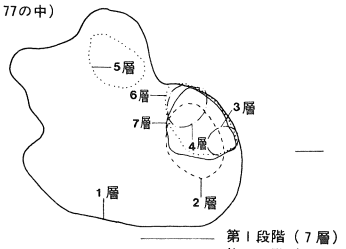
SM 13



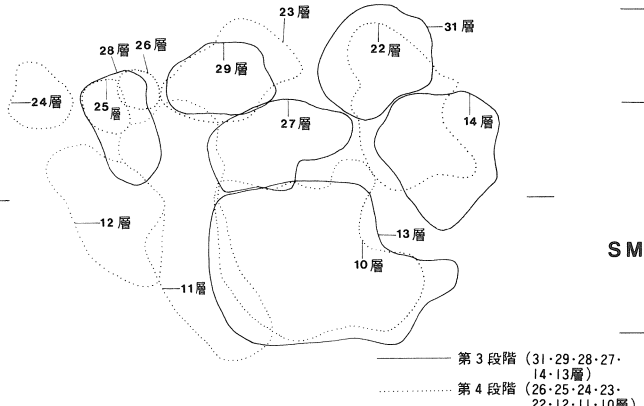
SM 22（SK77の中）



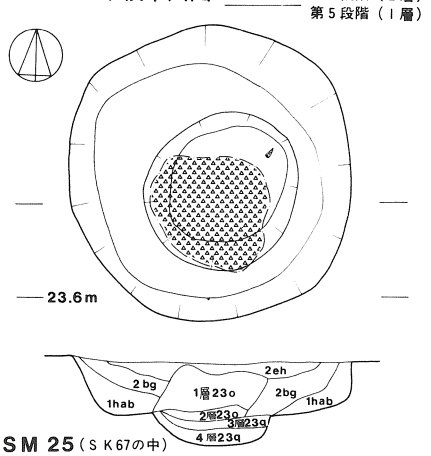
SM13　第1・2段階堆積平面図



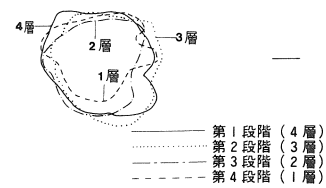
SM22　第1・2・3・4・5段階堆積平面図



SM13　第3・4段階堆積平面図



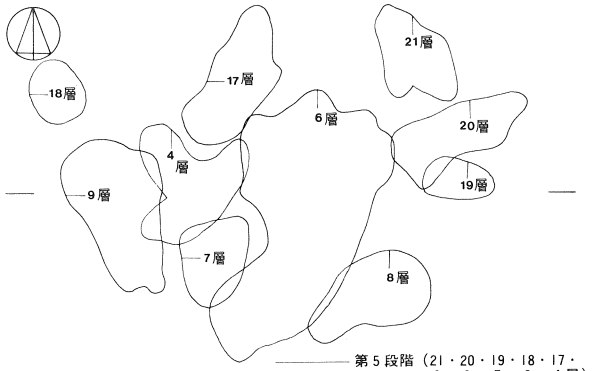
SM 25（SK67の中）



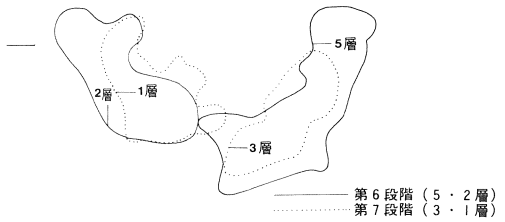
SM25　第1・2・3・4段階堆積平面図

0　1m

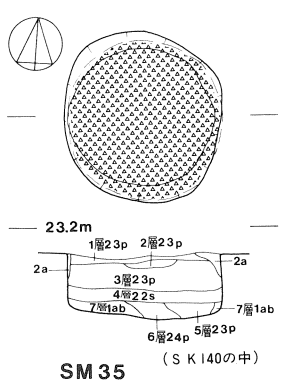
第161図　第13・22・25号地点貝塚実測図　(3)

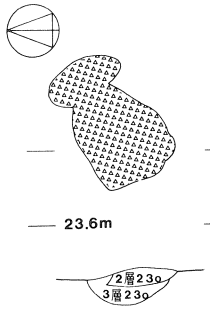


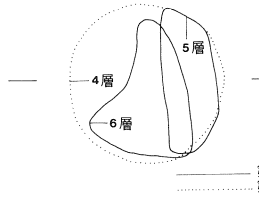
SM13　第5段階堆積平面図



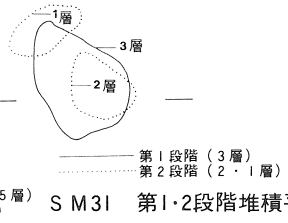
SM13　第6・7段階堆積平面図



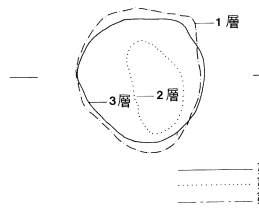




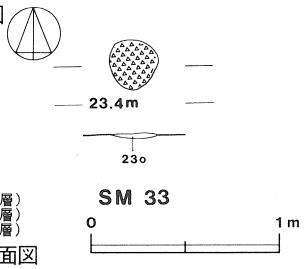
SM35　第1・2段階堆積平面図

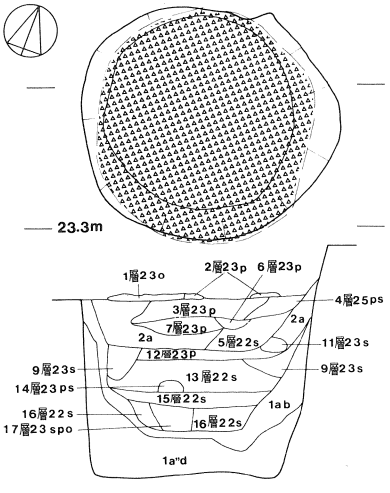


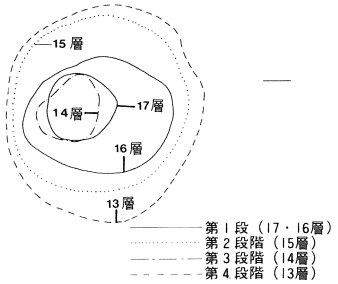
SM31　第1・2段階堆積平面図



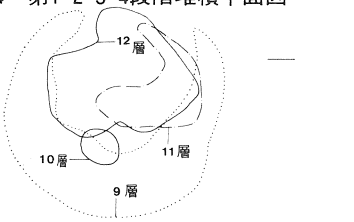
SM35　第3・4・5段階堆積平面図



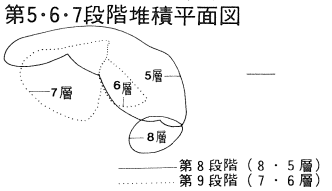




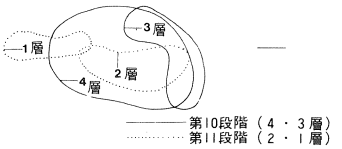
SM34　第1・2・3・4段階堆積平面図



SM34　第5・6・7段階堆積平面図

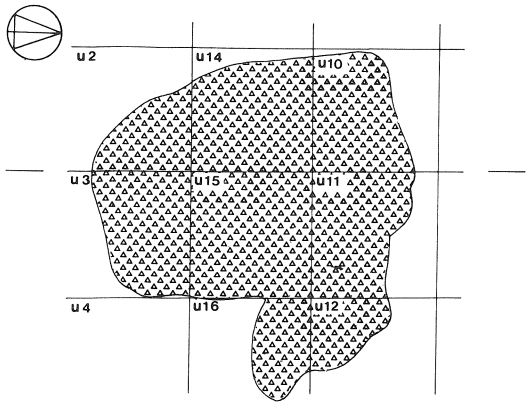


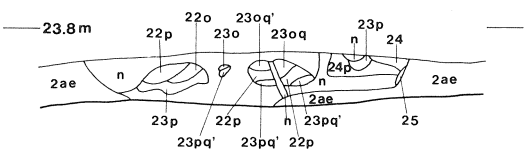
SM34　第8・9段階堆積平面図



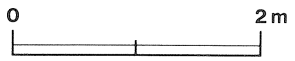
SM34　第10・11段階堆積平面図

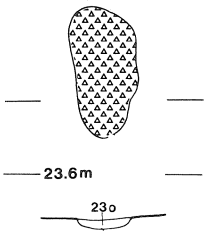
第162図　第13・31・33・34・35号地点貝塚実測図（4）



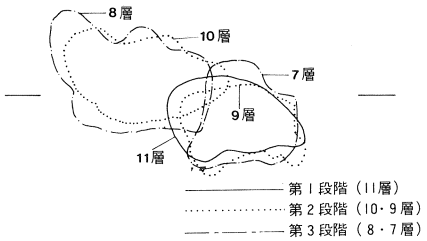


SM 11（S I 38の中）

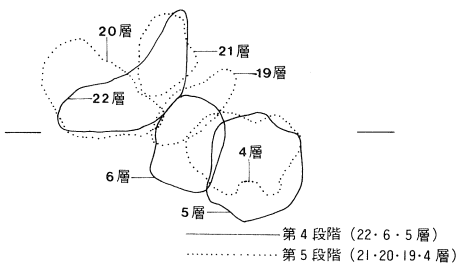




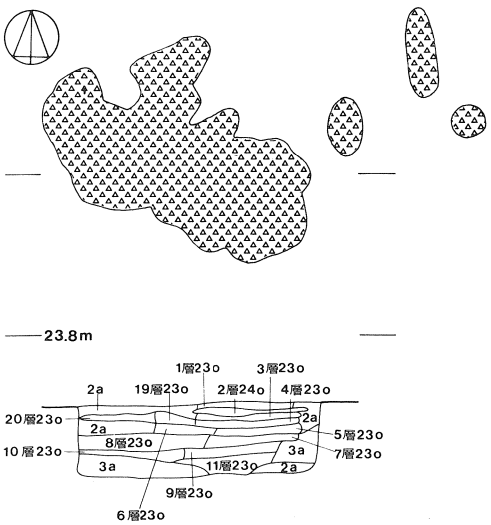
SM12（S I 38の中）



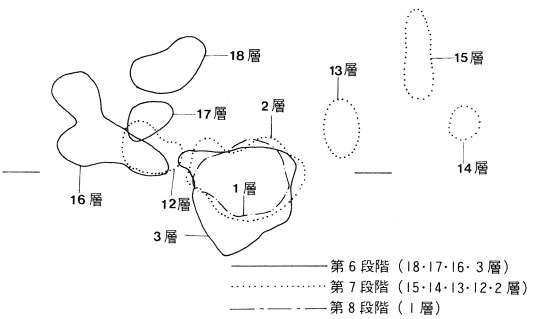
S M 6　第 I・2・3 段階堆積平面図



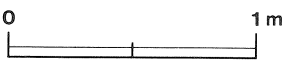
S M 6　第 4・5 段階堆積平面図



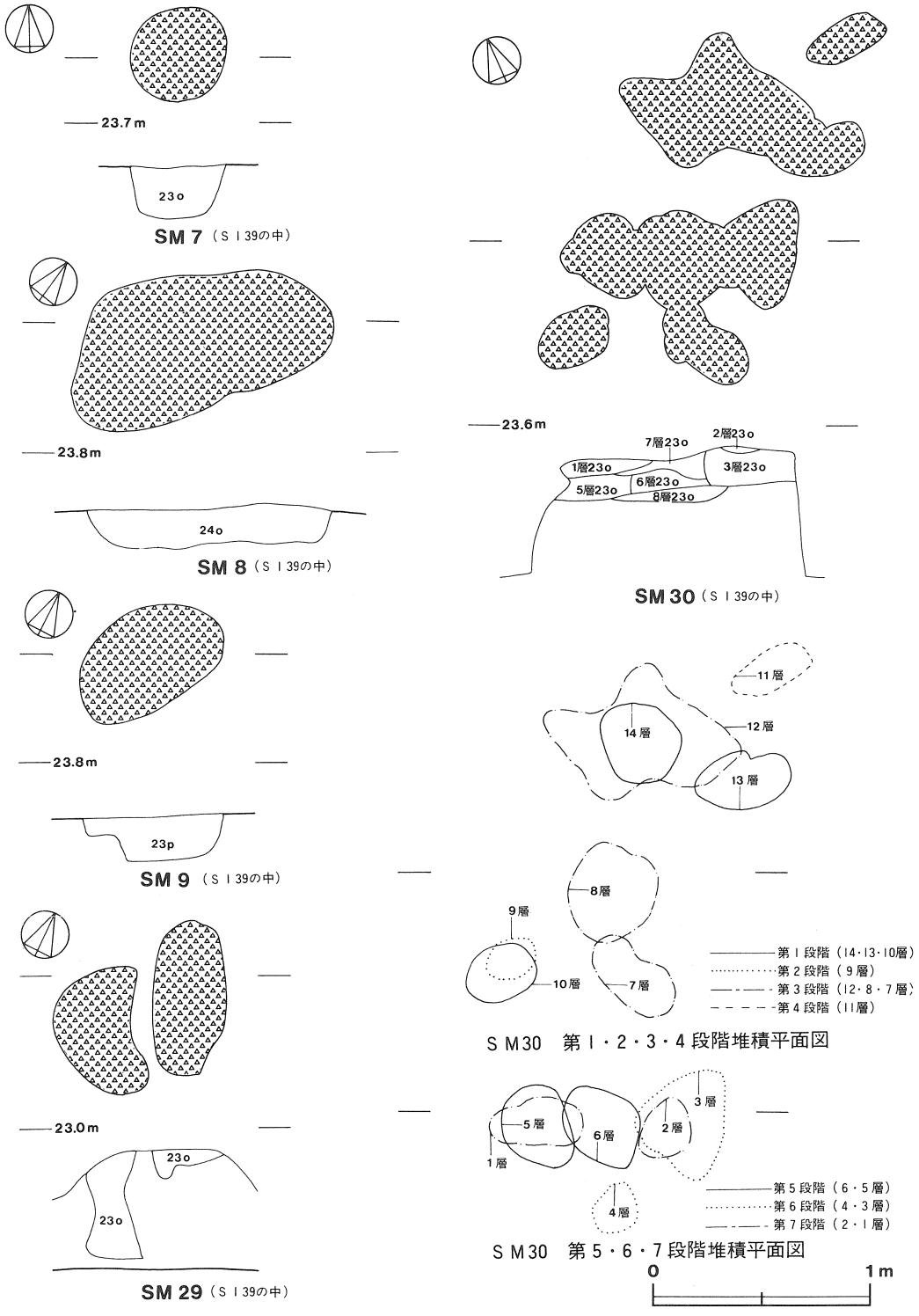
SM 6



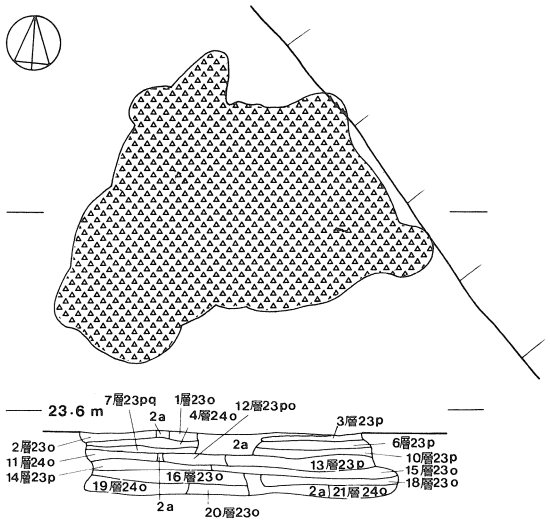
S M 6　第 6・7・8 段階堆積平面図



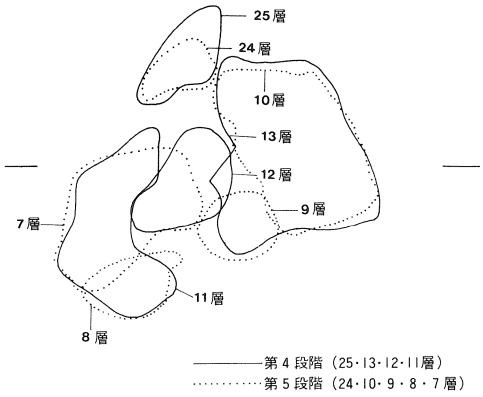
第163図　第 6 ・11・12号地点貝塚実測図 (5)



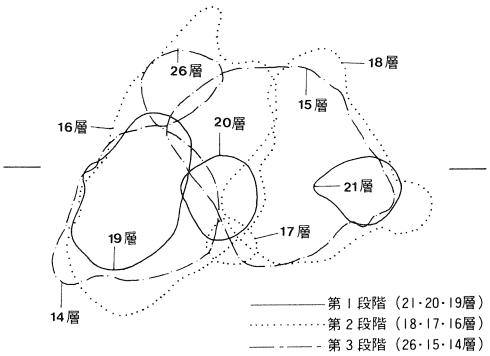
第164図　第 7 ・ 8 ・ 9 ・29・30号地点貝塚実測図 （6）



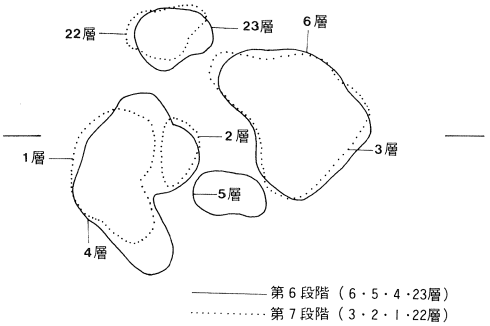
SM 10（S I 4Iの中）



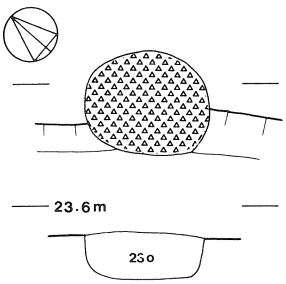
S M I0　第4・5段階堆積平面図



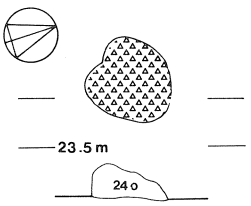
S M I0　第1・2・3段階堆積平面図



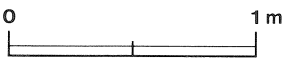
S M I0　第6・7段階堆積平面図



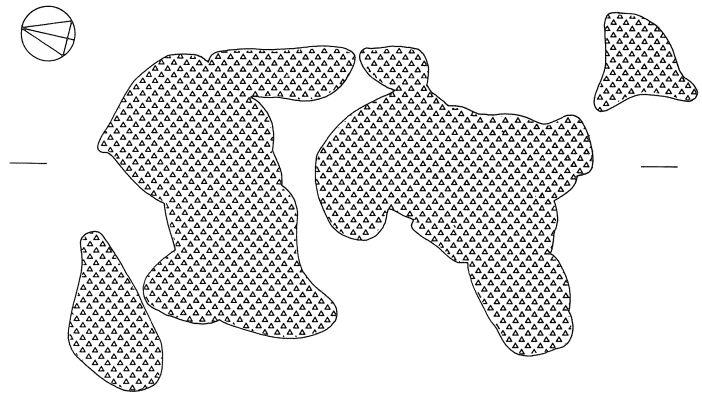
SM 5（S I 4Iの中）



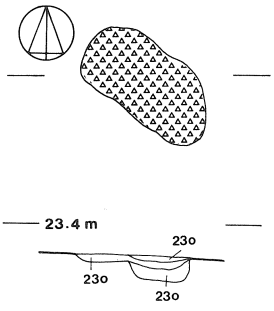
SM 32（S I 4Iの中）



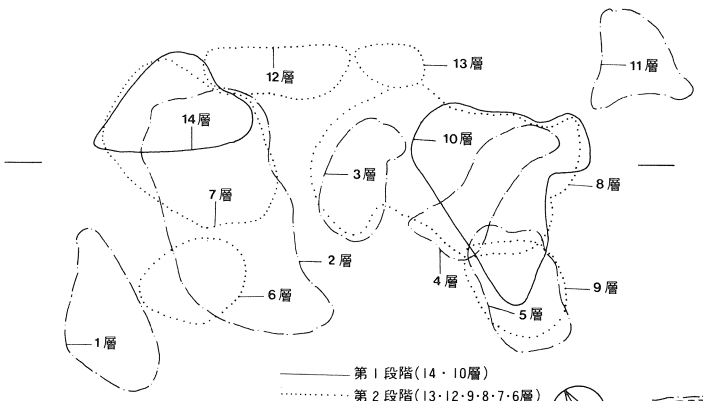
第165図　第5・10・32号地点貝塚実測図（7）



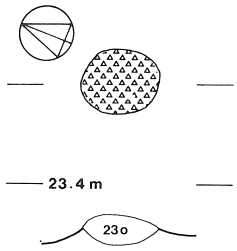
SM 23（S I 40の中）



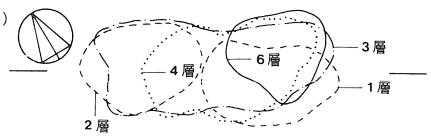
SM 20
（S I 42の中）

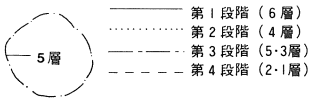


S M23　第 I・2・3 段階堆積平面図

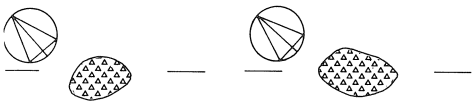


SM 24
（S I 42の中）



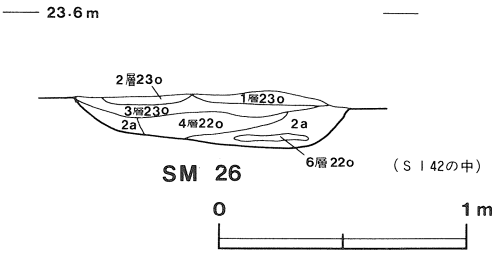


S M26　第 I・2・3・4 段階堆積平面図



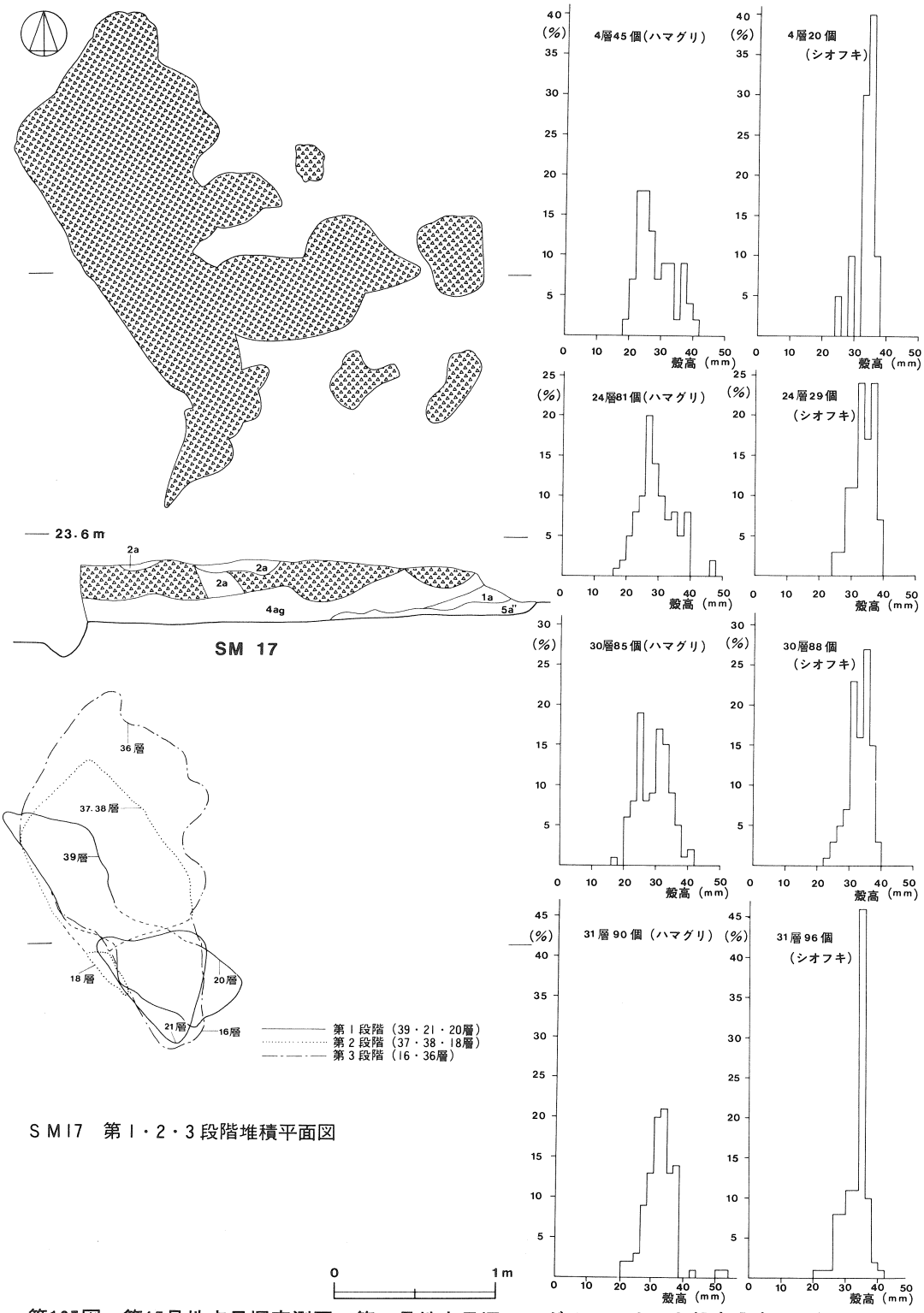
SM 18
（S I 42の中）

SM 19
（S I 42の中）



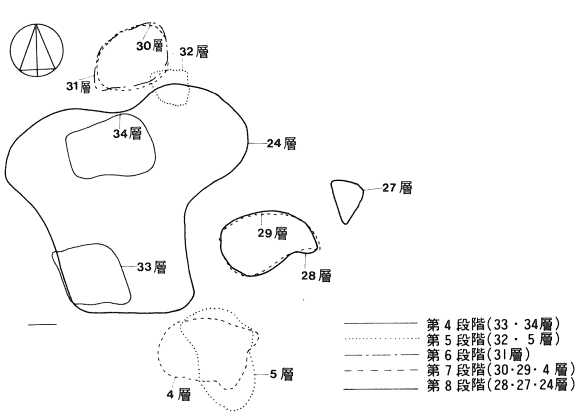
SM 26
（S I 42の中）

第166図　第18・19・20・23・24・26号地点貝塚実測図（8）

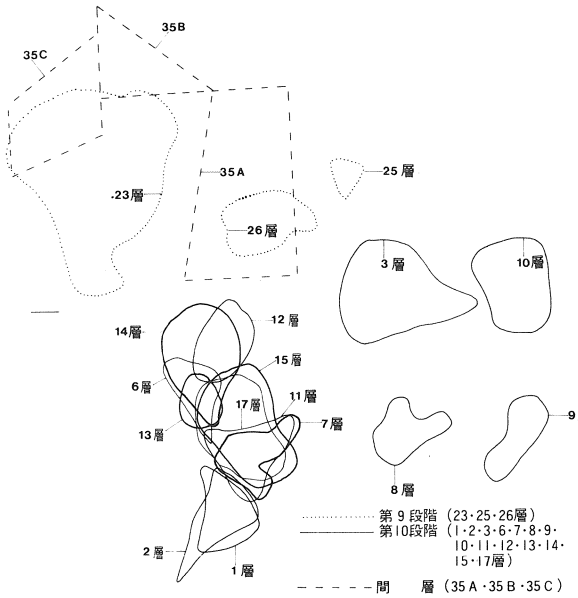


SM17　第1・2・3段階堆積平面図

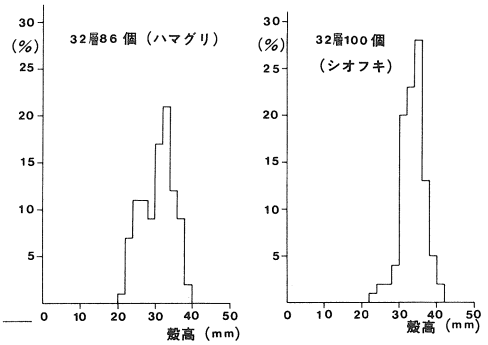
第167図　第17号地点貝塚実測図・第17号地点貝塚ハマグリ・シオフキ殻高分布図　(9)

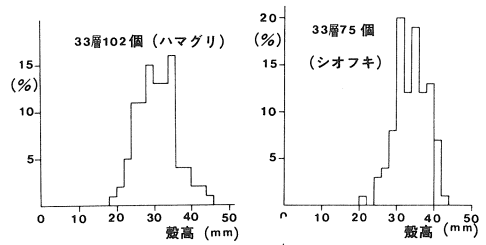


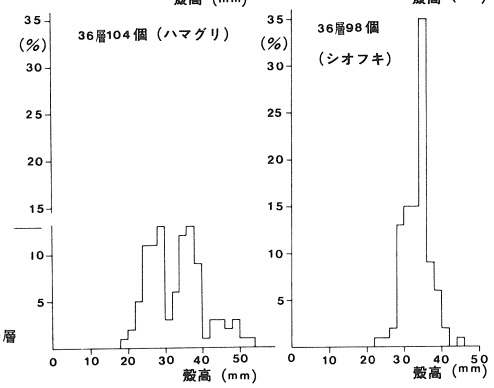
SMI7　第4・5・6・7・8段階堆積平面図

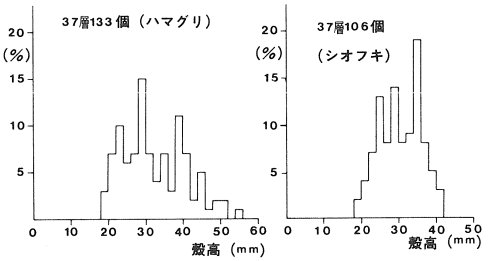


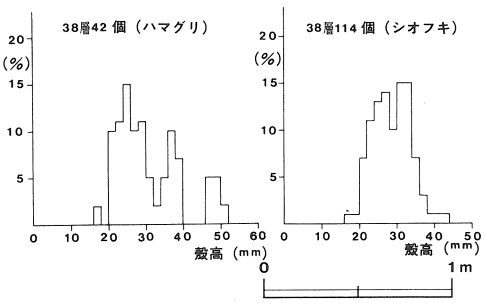
SMI7　第9・10段階堆積平面図

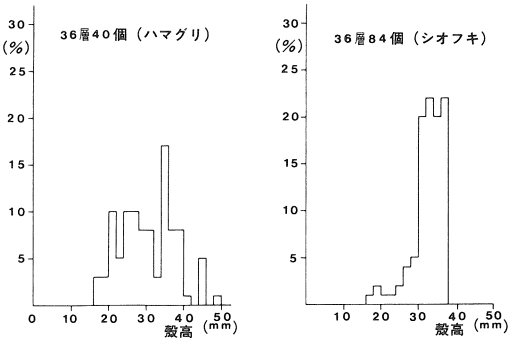












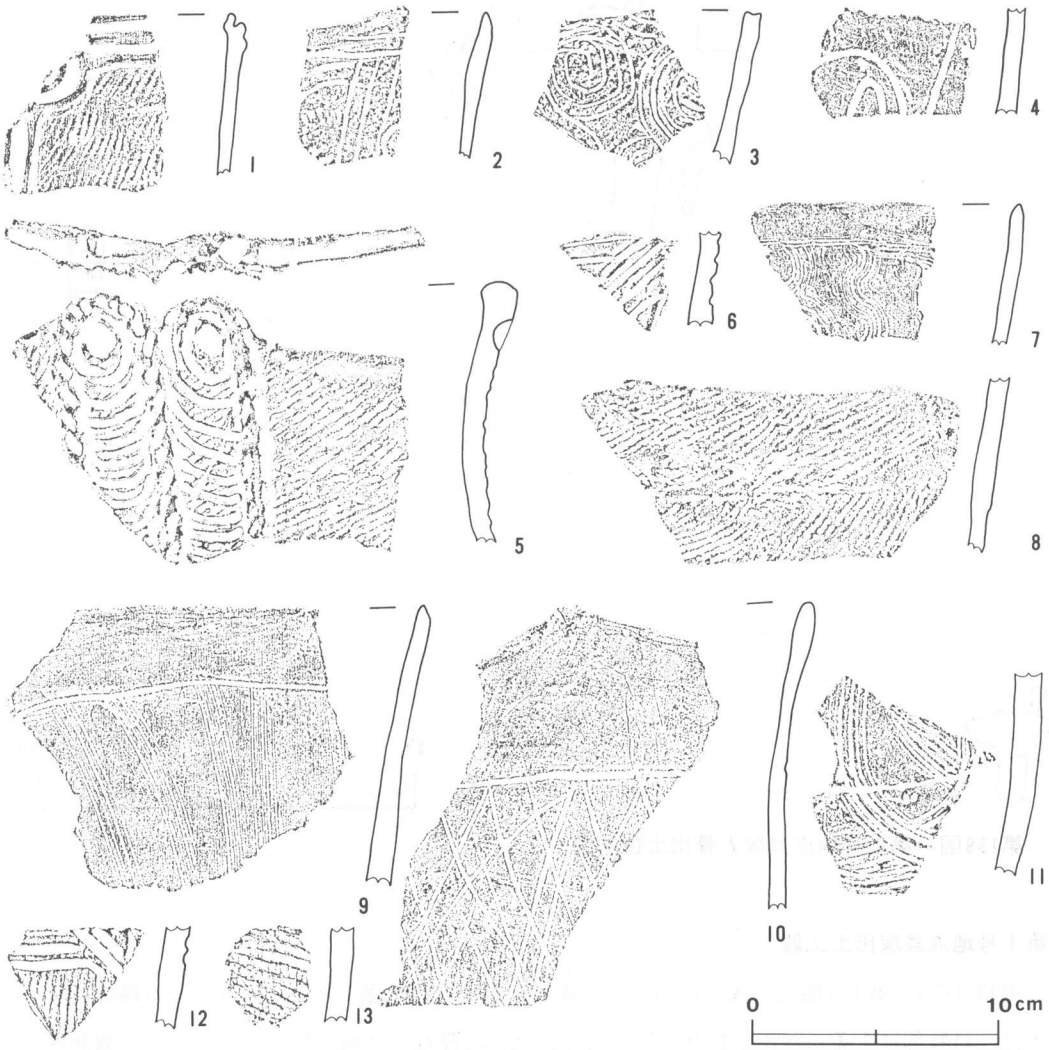
第168図　第17号地点貝塚実測図・第17号地点貝塚ハマグリ・シオフキ殻高分布図　(10)

第169図　第１号地点貝塚人骨出土位置図

第１号地点貝塚出土土器

第170図は，第１号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。１～３は口縁部片である。１は，口唇部に１条の沈線が巡り，以下縄文地文上に隆線で区画をしている。２は，波状縁で，口縁部に２条の沈線が巡り，以下縄文地文上に沈線が斜位に，曲線的に描かれている。３は，縄文地文上に沈線による渦巻状文が描かれている。４は胴部片で，沈線による曲線文が描かれている。５は波状を呈する口縁部片で，波頂部からキザミ目を付した隆線により「M」状に区画し，区画内には，上端に棒状工具による刺突文を施し，以下沈線を弧状に施している。地文は縄文である。６は胴部片で，沈線が横位，斜位に施されている。７は平縁の口縁部片で，口縁部無文帯

下に数条の沈線を横位に巡らし，以下条線文を波状に施している。9・10は，口縁部から胴部にかけての破片である。9は，口縁部無文帯下に1条の沈線が巡り，胴部には条線文が縦位，斜位に施されている。10は，波状縁を呈する幅の広い口縁部無文帯下に1条の沈線が巡り，胴部には，沈線が格子目状に施されている。11～13は胴部片で，11は，条線文が曲線的に，12は，縄文地文上に沈線が横位，斜位に，13は，縄文が施されている。

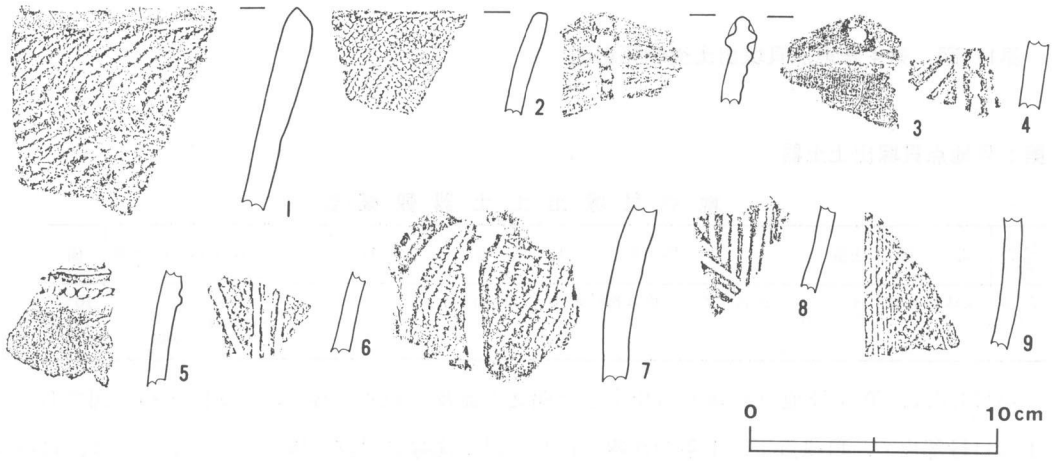


第170図　第1号地点貝塚出土遺物拓影図

第2号地点貝塚出土土器

第171図は，第2号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1～3は口縁部片で，縄文が施されている。3は，波状を呈しており，波頂下に2個の刺突文を施し，そこからキザミ

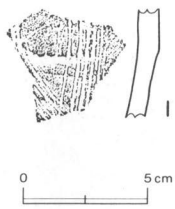
目を付した隆線が縦位に施されている。4～9は胴部片である。4は，平行沈線が垂下し，平行沈線の区画内には刺突文が施されている。5は，沈線とキザミ目を付した隆線が巡っている。6は，縄文地文上に平行沈線を縦位に施し，その沈線内に縦長の刺突文を施している。7は，縄文地文上に沈線による曲線文が描かれている。8は，沈線が縦位，斜位に施され，9は，縄文地文上に沈線が縦位に，曲線的に施されている。



第171図　第2号地点貝塚出土遺物拓影図

第3号地点貝塚出土土器

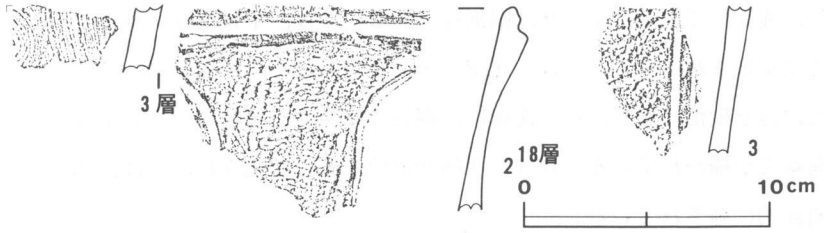
第172図は，第3号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1は胴部片で，条線文が斜位，縦位に施されている。



第172図　第3号地点貝塚出土遺物拓影図

第4号地点貝塚出土土器

第173図は，第4号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1は胴部片で，条線文が曲線的に施されている。2は口縁部片で，口縁直下に1条の沈線が巡り，以下縄文地文上に沈線による曲線文が描かれている。3は胴部片で，縄文地文上に2条の沈線が縦位に施されている。



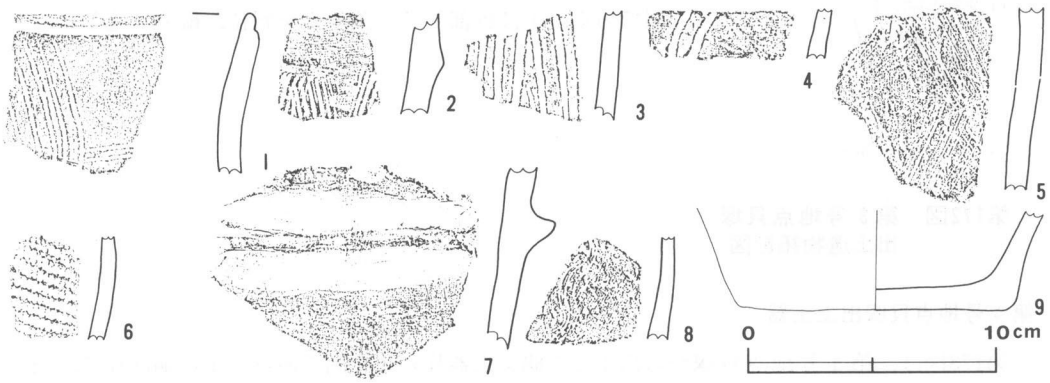
第173図　第4号地点貝塚出土遺物拓影図

第5号地点貝塚出土土器

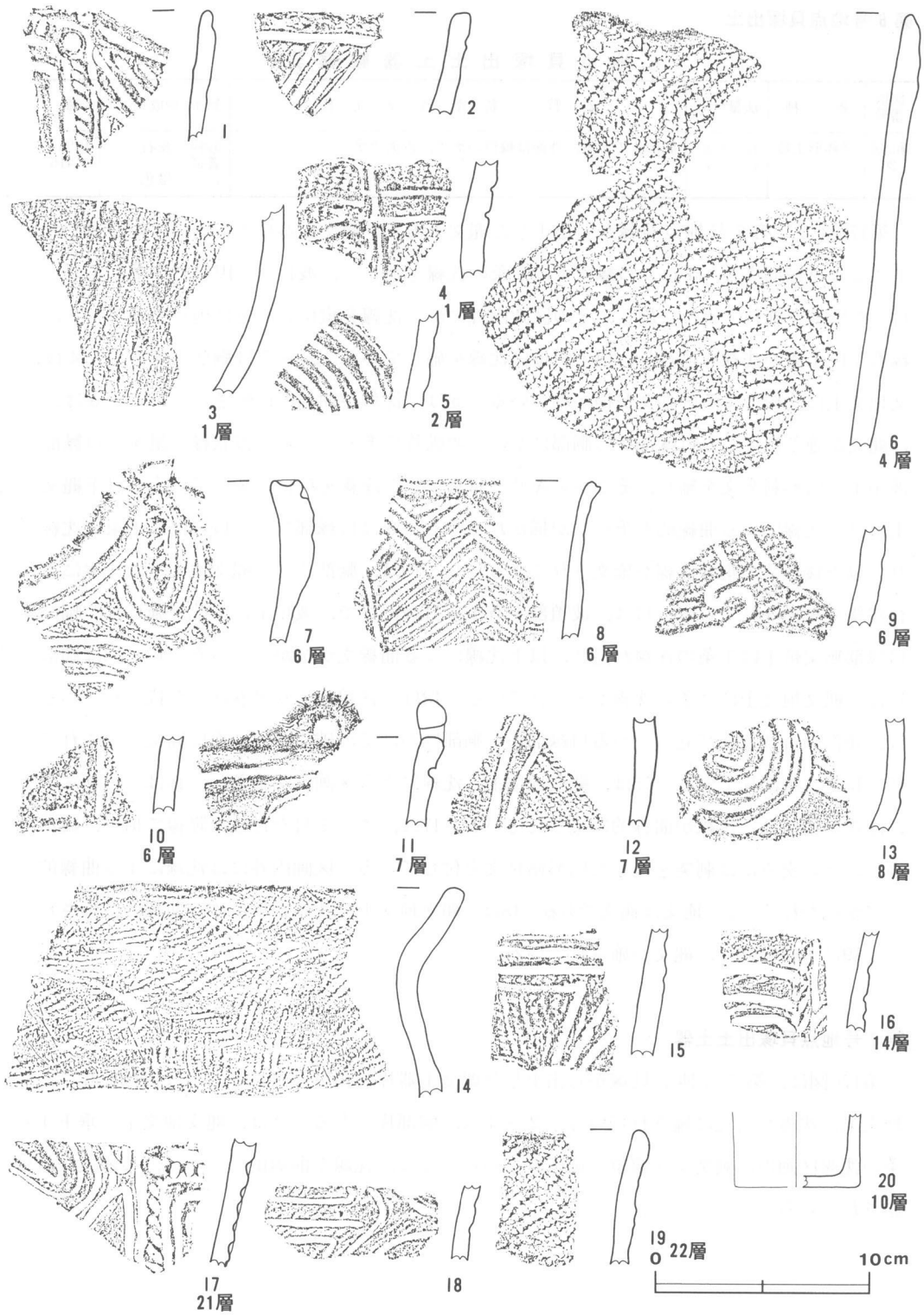
地点貝塚出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第174図 9	深鉢形土器	B(4.0) C 11.0	底部片で，外面は横位のナデ，内面ナデ。	砂粒 普通 にぶい赤褐色	10% P410

第174図は，第5号地点貝塚から出土した縄文土器及び縄文土器片の実測図・拓影図である。1は口縁部片で，口縁直下に1条の沈線が巡り，以下沈線が斜位に施されている。2は，口縁部上端欠損の口縁部片で，口縁部無文帯下に1条の微隆線が巡り，以下条線文が斜位に施されている。3～6・8は，胴部片である。3～4は，沈線が斜位に施され，5は，細沈線が斜位に施されている。6は，縄文が施されている。7は，口縁部上端欠損の口縁部から胴部にかけての破片で，1条の隆線が巡っている。8は，条線文が波状に施されている。



第174図　第5号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図



第175図　第6号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図

第6号地点貝塚出土

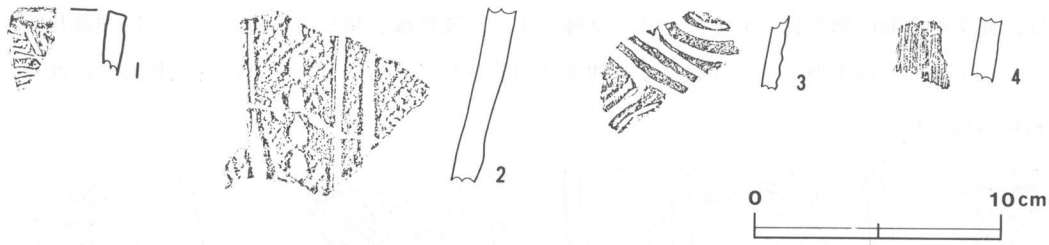
地点貝塚出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第175図 20	深鉢形土器	B(2.8) C 5.7	底部片である。外面は縦位のナデ，内面ナデ。	砂粒・長石 普通 にぶい橙色	10% P416

第175図は，第6号地点貝塚から出土した縄文土器及び縄文土器片の実測図・拓影図である。1・2は口縁部片で，1は，口縁直下に1条の沈線を巡らし，波頂下に円形刺突文とキザミ目を付した隆線を横位，縦位に施し，その区画内外には，沈線を縦位，斜位に施している。2は，口縁直下に1条の沈線を巡らし，以下斜位に沈線を施している。3～5は胴部片である。4は，縄文地文上に沈線による区画文が描かれている。5は，沈線が曲線的に施されている。6は，全面に縄文が施されている口縁部から胴部にかけての破片である。7は，波状縁を呈する口縁部片で，波頂下に円形刺突文を施し，そこからキザミ目を付した隆線を縦位に施している。以下縄文地文上には，沈線による曲線的モチーフが描かれている。8は口縁部片で，口唇部に1条の沈線が巡り，以下綾杉状の集合沈線が施文されている。9・10は，胴部片で，縄文地文上に沈線による蛇行沈線文が描かれている。11は，波頂部を有する口縁部片で，波頂下に1孔が施され，幅の狭い口縁部無文帯下に1条の沈線が巡り，以下沈線による曲線文が描かれている。12・13は胴部片で，12は，縄文地文上に2条の沈線が施されている。13は，沈線により渦巻状文が描かれている。14は，頸部から外反して立ち上がる口縁部から胴部にかけての破片で，全面に縄文が施されている。15～18は，胴部片である。15は，縄文地文上に沈線による区画文が施され，16は，キザミを付した隆線が縦位に，沈線が曲線的に施されている。17は，キザミ目を付した隆線で横位，縦位に区画し，その交点には刺突を施した円形貼付文を付している。区画内外には沈線による曲線的モチーフが描かれている。地文は縄文である。18は，縄文地文上に沈線が横位に，曲線的に施されている。19は口縁部片で，縄文が施されている。

第7号地点貝塚出土土器

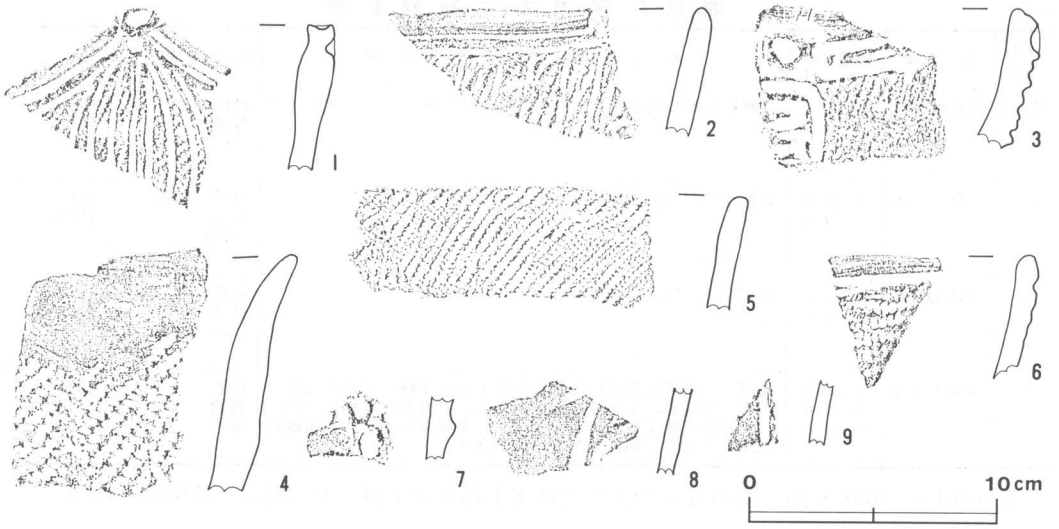
第176図は，第7号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で，縄文地文上に沈線が斜位に施されている。2～4は，胴部片である。2は，縄文地文上に垂下する2条の沈線区画内に刺突文が縦位に施されている。3は，沈線が曲線的に，4は，条線文が縦位に施されている。



第176図　第７号地点貝塚出土遺物拓影図

第８号地点貝塚出土土器

第177図は，第８号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。１～６は口縁部片である。１は，波状を呈し，口縁部には，２条の沈線が巡り，波頂部に押圧文が施され，波頂下の刺突文下には，沈線による弧状文が描かれている。地文は，縄文である。２は，口縁直下に２条の沈線が巡り，以下粗い縄文地文上には沈線が斜位に施されている。３は，口縁部に刺突を加えた円形貼付文と楕円区画文を施し，円形貼付文下には，蛇行沈線が垂下している。地文は，縄文である。４は，口縁部無文帯下に縄文が施されている。６は，幅の狭い口縁部無文帯下に１条の沈線が巡り，以下縄文が施されている。７～９は胴部片で，７は，刺突を加えた隆線が縦位に，８は，沈線が曲線的に，９は，沈線が縦位にそれぞれ施されている。

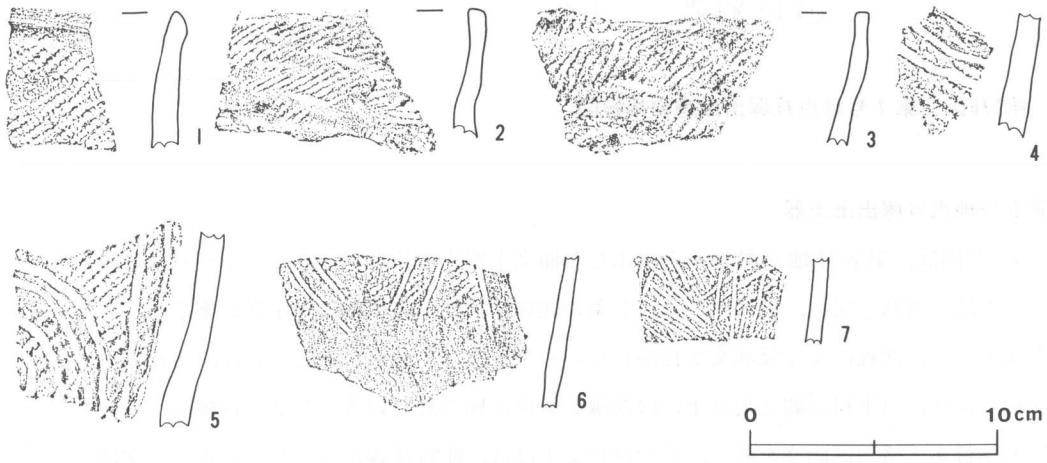


第177図　第８号地点貝塚出土遺物拓影図

第９号地点貝塚出土土器

第178図は，第９号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。１～３は口縁部片である。１は，幅の狭い口縁部無文帯下に１条の微隆線を巡らし，以下に縄文を施している。２・３

は，縄文が全面に施されており，2は，平縁，3は，波状縁を呈している。4～7は胴部片である。4・5は，縄文地文上に沈線による曲線文が施されている。6・7は，縄文地文上に沈線が斜位に施されている。



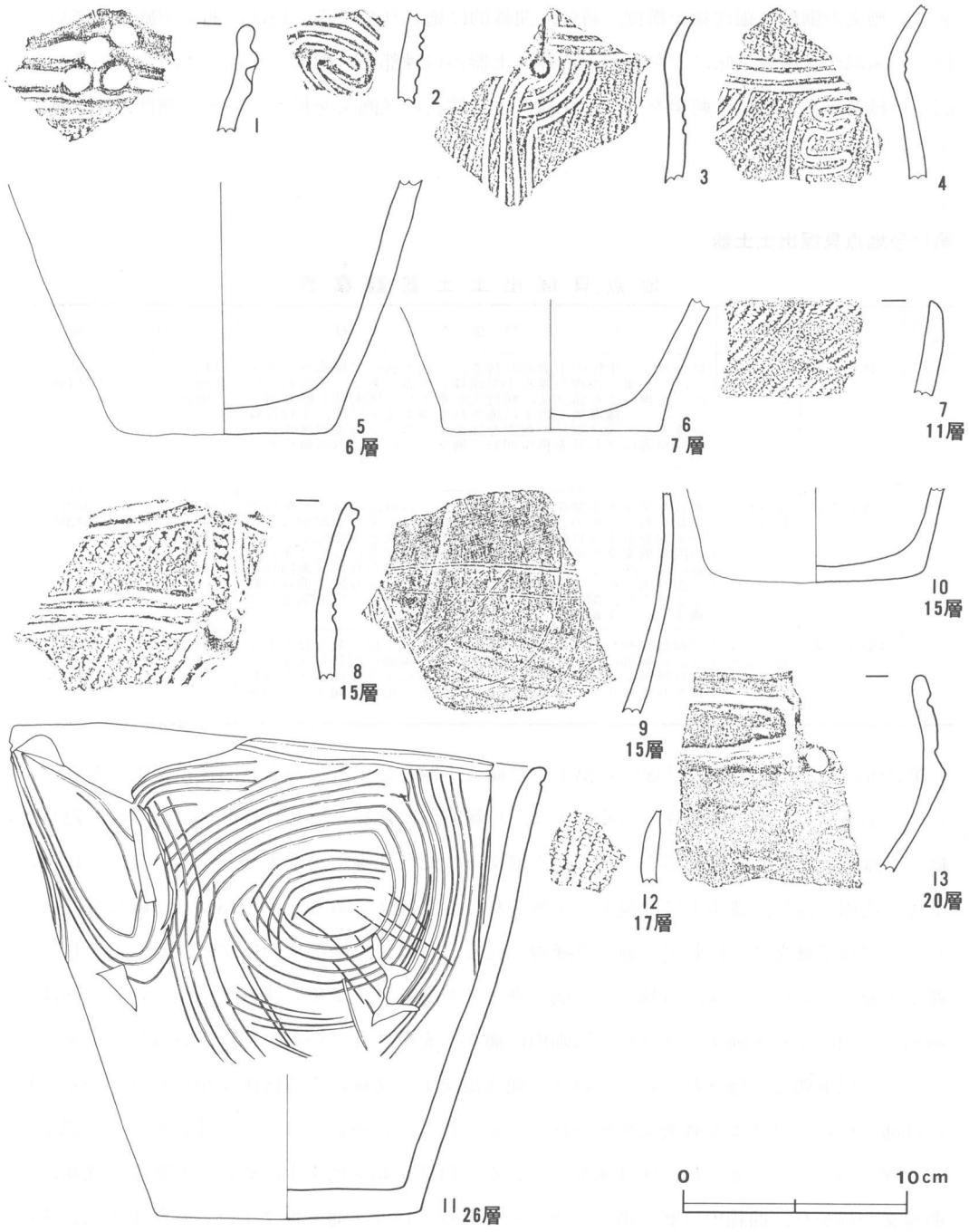
第178図　第9号地点貝塚出土遺物拓影図

第10号地点貝塚出土土器

地点貝塚出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第179図 5	深鉢形土器	B(11.2) C 9.6	深鉢形土器の底部片で，外面は縦位の丁寧なナデ，内面ナデ。	砂粒 普通 明赤褐色	15% P356
6	深鉢形土器	B(5.9) C 9.6	底部片で，外面は縦位のナデ，内面横ナデ。	砂粒・長石 普通 赤褐色	10% P355
10	深鉢形土器	B(4.2) C 9.6	底部片で，外面は縦位のヘラナデ，内面横ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	10% P354
11	深鉢形土器	A 23.8 B 22.0 C 11.8	底部から内彎気味に口縁部へ立ち上がる平縁の深鉢形土器である。口縁部に1条の沈線を巡らし，口縁部から胴部にかけて，櫛歯状施文具による5～7条の条線文が渦巻状と曲線的に施文される。胴部下半ナデ。内面ナデ。	砂粒 普通 橙色	80% P488

第179図は，第10号地点貝塚から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。1は，波状を呈する口縁部片で，波頂下に4個の円形刺突文が施され，口縁部には，沈線が巡る。以下縄文地文上に沈線が横位に施されている。2～4は胴部片で，2は，沈線による渦巻状文が描かれている。3は，縄文地文上に隆線が垂下し，その下端に刺突が施された円形文が貼付されている。さらに沈線が横位に，曲線的に施されている。4は，縄文地文上に3条の沈線が横位に施され，以下沈線による蕨手状文と弧状文が描かれている。7は口縁部片で，縄文が施されている。



第179図　第10号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図

8は，波状を呈する口縁部から胴部にかけての破片で，波頂下にキザミ目を付した隆線を垂下させ，その下端には棒状工具により刺突文を施している。口縁部には，沈線による横長の区画文を描き，また，隆線下には沈線による弧状文を描いている。地文は縄文である。9・12は胴部片で，

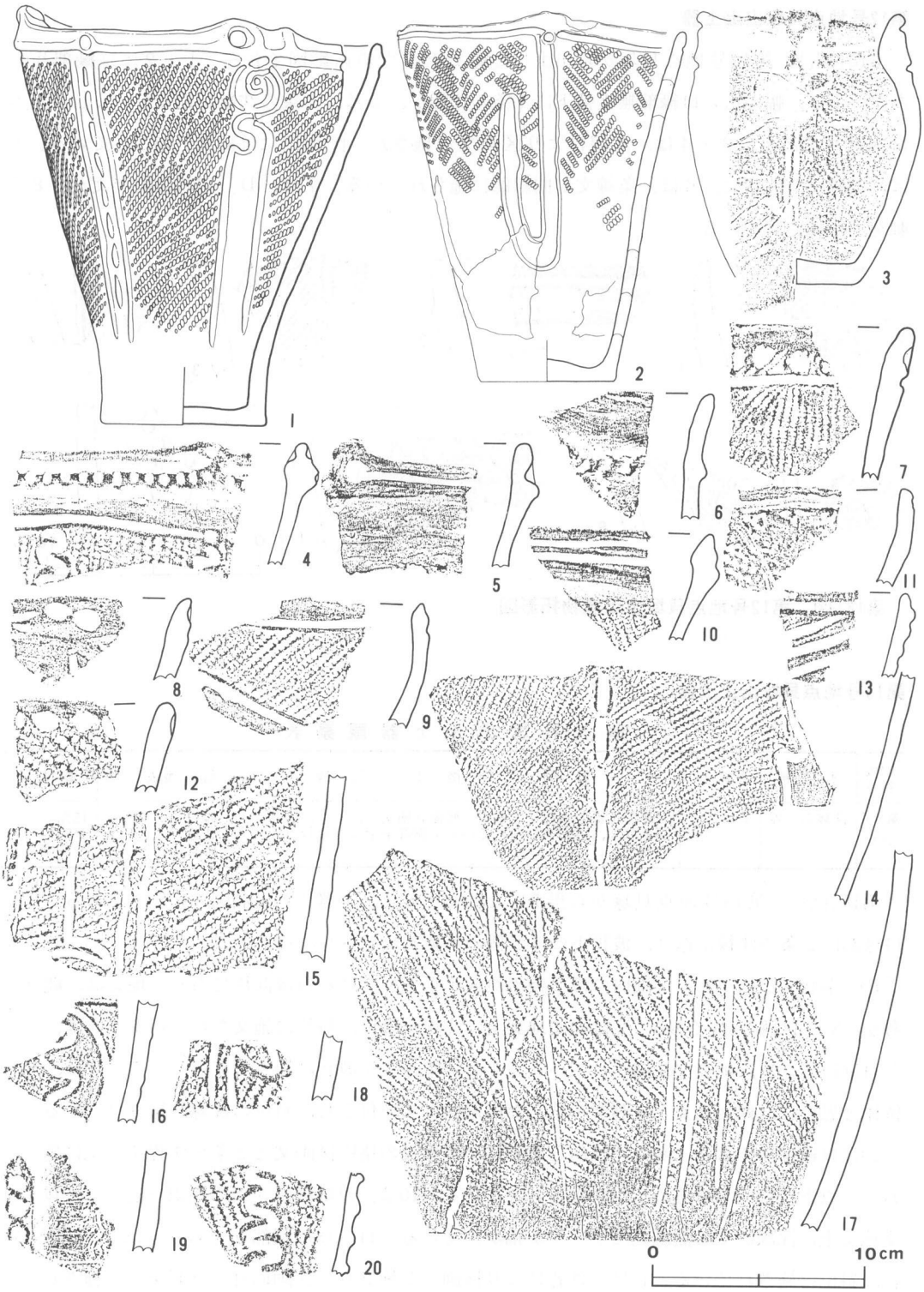
9は，無文の胴部に細沈線が横位，斜位，曲線的に施されている。12は，縄文が施されている。13は，頸部から内彎気味に立ち上がる浅鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。幅の広い口縁部無文帯下には刺突を施し，沈線により横長の区画文を描いている。胴部には，横位のナデが加えられている。

第11号地点貝塚出土土器

地点貝塚出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第180図 1	深鉢形土器	A 17.2 B 19.8 C 7.9	口縁部に3単位の小突起が付され，幅の狭い口縁部無文帯下には，1条の沈線が巡る小型深鉢形土器である。小突起下には，沈線による弧状文，蛇行文が垂下し，区画間を磨り消している。口縁部無文帯下に施された刺突文下には，平行沈線が垂下し，間に縦長の刺突を加えている。平行沈線区画外には，単節縄文ＬＲを横位回転で施文している。内面縦位のナデ。	砂粒 普通 黒褐色	90% P480
2	深鉢形土器	A 13.5 B 17.4 C 6.3	波状を呈する小型深鉢形土器である。口縁部には，3単位の突起を有するものと思われ，口縁部には1条の沈線が巡り，小突起を有する口唇部に2個の円形刺突文と小突起下に1個の円形刺突文が施されている。円形刺突文下には，2条の沈線により逆「し」字状を呈する区画文が描かれ，区画内は粗く磨り消されている。地文には単節ＬＲによる縦位羽状の縄文が施され，胴部下半は，磨り消されている。内面胴部上半横ナデ，下半縦ナデ。	砂粒 普通 暗褐色	85% P395
3	深鉢形土器	A 9.5 B 12.8 C 5.8	口縁部がやや外反して立ち上がり，胴部上位に最大径を有する。口縁部には，2条の沈線が巡り，両端に円形刺突文を施した隆線が縦位に貼付され，隆線を挟むように沈線が弧状に描かれ，以下その沈線が垂下している。地文は縄文で，内面ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	80% P372 摩滅気味

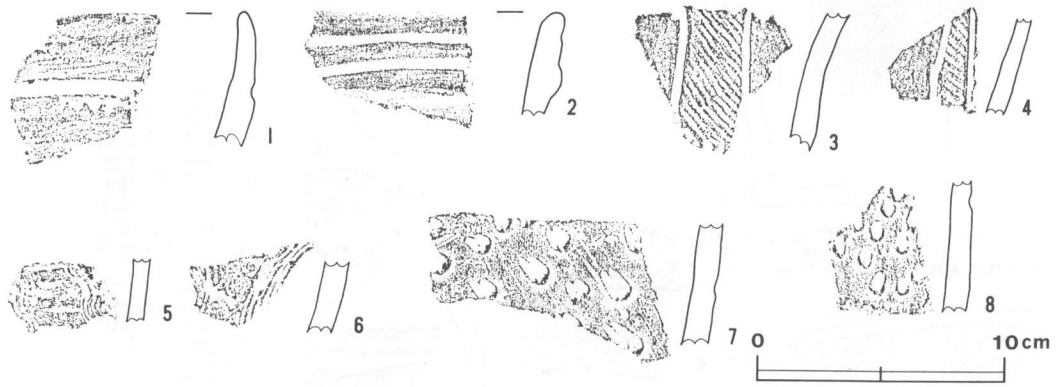
第180図は，第11号地点貝塚から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。4・5は，小突起をもつ口縁部片である。4は，口縁直下に沈線とキザミ目を付した隆線が巡り，口縁部下端にも1条の沈線が巡る。以下縄文地文上に蛇行沈線文が垂下している。5は，口唇部に1条の沈線が巡り，波頂下には刺突文が施され，以下無文である。6～13は，口縁部片である。6は，口縁部無文帯下に刺突を施した隆線が巡る。7は，口縁部に刺突文と沈線を巡らし，以下縄文を施している。8は，口縁部に2個の押圧文が施され，1条の沈線が巡っている。9は，口縁部に沈線による区画文が施され，区画内に縄文が充填されている。10は，口縁部に2条の沈線が巡り，以下縄文が施されている。11は，縄文地文上に沈線による区画文が描かれている。12は，口縁部に棒状工具による刺突文が施されている。13は，口縁直下に1条の沈線が巡り，以下斜位に沈線が施されている。14～20は胴部片である。14は，縄文地文上に縦長の刺突文と沈線による曲線文が描かれ，曲線内に磨り消しが施されている。15は，縄文地文上に沈線が垂下し，さらに，沈線による蕨手状文が描かれている。16は，縄文地文上に沈線により区画文が施され，区画内には蛇行沈線が垂下している。17は，縄文地文上に沈線が縦位に施され，胴部下半には縦位のナデが加えられている。18は，縄文地文上に沈線による曲線的モチーフが描かれている。19は，刺突文を施した隆線が縦位に施されている。20は，縄文地文上に蛇行沈線文が垂下している。



第180図　第11号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図

第12号地点貝塚出土土器

第181図は，第12号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部片である。1は，幅の広い口縁部無文帯下に1条の沈線が，2は，2条の沈線が巡っている。3～8は胴部片である。3・4は，沈線により区画文が施され，区画内には縄文が施されている。5は，条線文が波状に，6は，条線文が曲線的に施されている。7は，「D」字状に刺突文が，8も刺突文が施されている。



第181図　第12号地点貝塚出土遺物拓影図

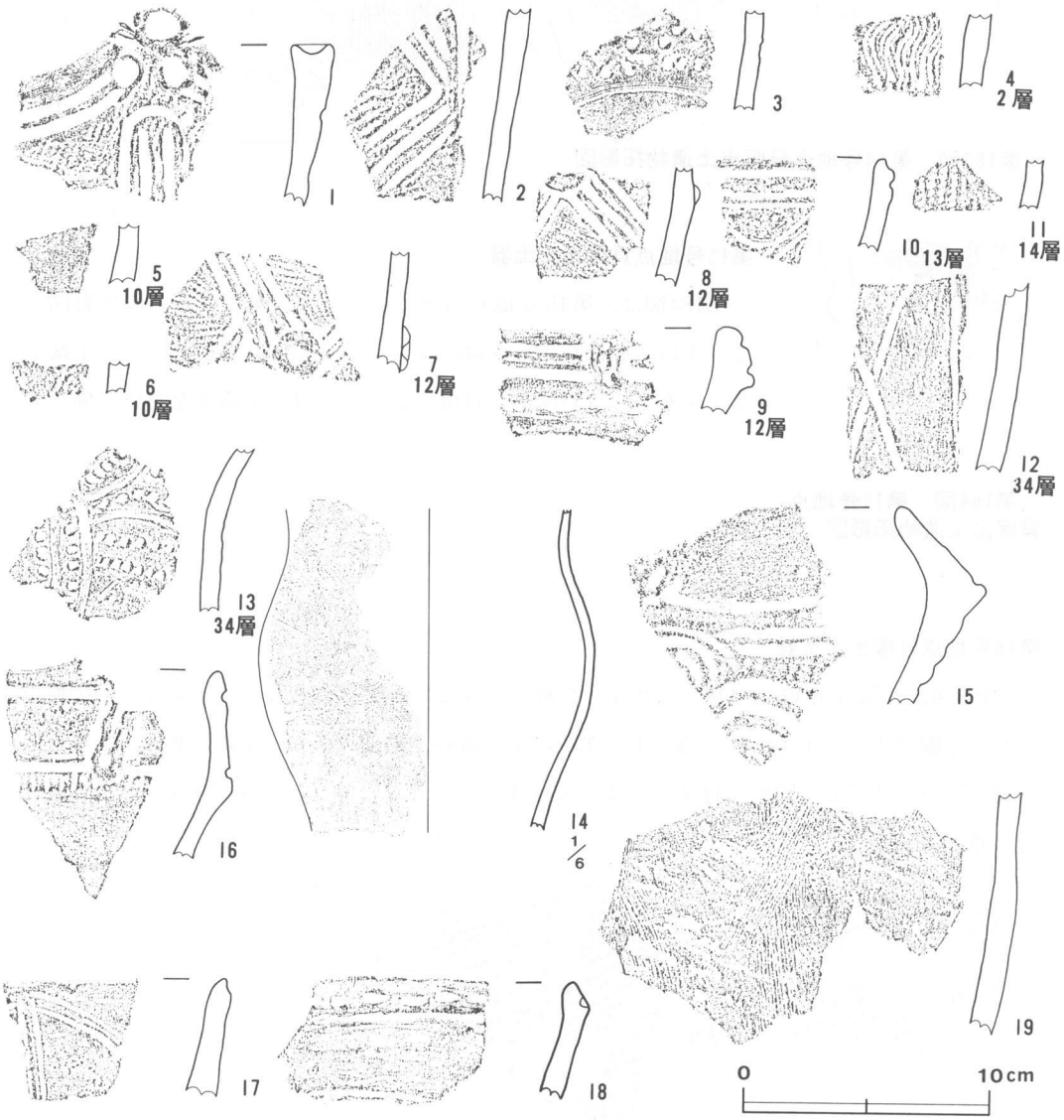
第13号地点貝塚出土土器

地点貝塚出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第182図 14	深鉢形土器	B(22.0)	深鉢形土器の胴部片である。櫛歯状施文具により，弧状文，渦巻状文，円形文を描いている。胴部下半は，縦位のナデ，内面ナデ。	砂粒 普通 灰褐色	15% P357 やや摩滅気味

第182図は，第13号地点貝塚から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。1は，口縁部に2条の沈線が巡り，波頂下には2個の刺突文が施され，その下端には，沈線による逆「U」字状文が描かれ，区画内には2条の沈線が垂下している口縁部片である。地文は，縄文である。2～8は胴部片である。2は縄文地文上に沈線が縦位，斜位に施文されている。3は，沈線が斜位に施され，刺突文が施されている。4は，条線文が波状に施されている。7・8は，同一個体と思われ，縄文地文上に刺突を施した円形貼付文が付され，斜位の沈線が施されている。9・10は口縁部片である。9は，隆線と沈線により横長の楕円区画文と2条の沈線を横位に施しており，以下は無文で横位のナデが加えられている。10は，口縁部に3条の沈線を巡らし，以下縄文地文上に沈線による曲線的モチーフが描かれている。11～13は胴部片である。12は，沈線が縦位，斜位に施されている。13は，沈線により区画文が施され，区画内外には刺突文が施されている。15は，口縁部片で，頸部より内彎して立ち上がり，口縁部無文帯下に沈線が施され，以下は

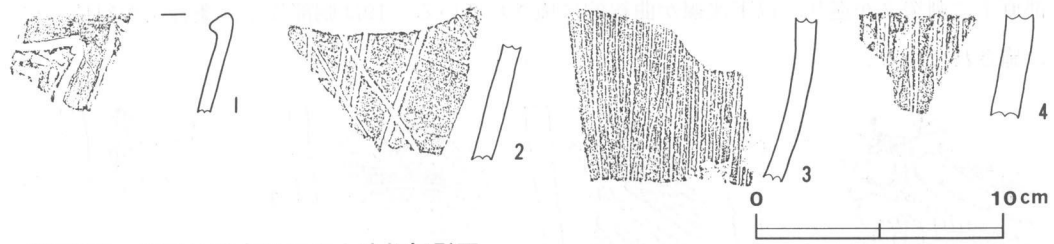
沈線により曲線的モチーフが描かれている。16～18は口縁部片である。16は，波頂下に沈線を施した隆線が斜位に貼付され，その下端には刺突が施されており，隆線を挟むように沈線が横位に施され，区画内には刺突文が施されている。口縁部下端には，キザミ目が横位に施され，以下横位のナデが加えられている。17は，無文の口縁部に沈線による文様が描かれている。18は，口縁部直下に刺突文が巡り，以下沈線が曲線的に施されている。19は胴部片で，条線文が斜位，縦位に施されている。



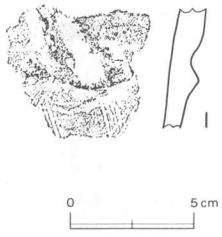
第182図　第13号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図

第14号地点貝塚出土土器

第183図は，第14号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で，口縁部無文帯下に沈線による区画を施し，区画内に刺突を施している。2～4は胴部片で，2は，沈線により格子目状文が描かれている。3・4は，条線文が斜位に施されている。



第183図　第14号地点貝塚出土遺物拓影図



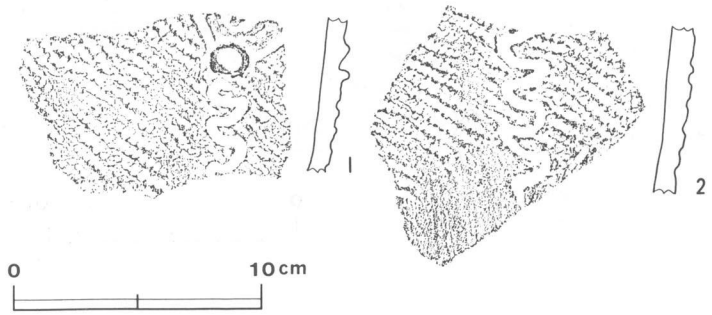
第184図　第15号地点貝塚出土遺物拓影図

第15号地点貝塚出土土器

第184図は，第15号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1は，胴部片で，沈線により「L」の字状を描き，その下端に刺突文を有する太い隆線を斜位に貼付し，以下条線文を斜位に施している。

第16号地点貝塚出土土器

第185図は，第16号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は，同一個体と思われる胴部片で，1は，縄文地文上に沈線による曲線文を描き，その下端に刺突を有する円形貼付文を付している。円形貼付文下には，蛇行沈線が垂下している。2は，縄文地文上に蛇行沈線が垂下している。



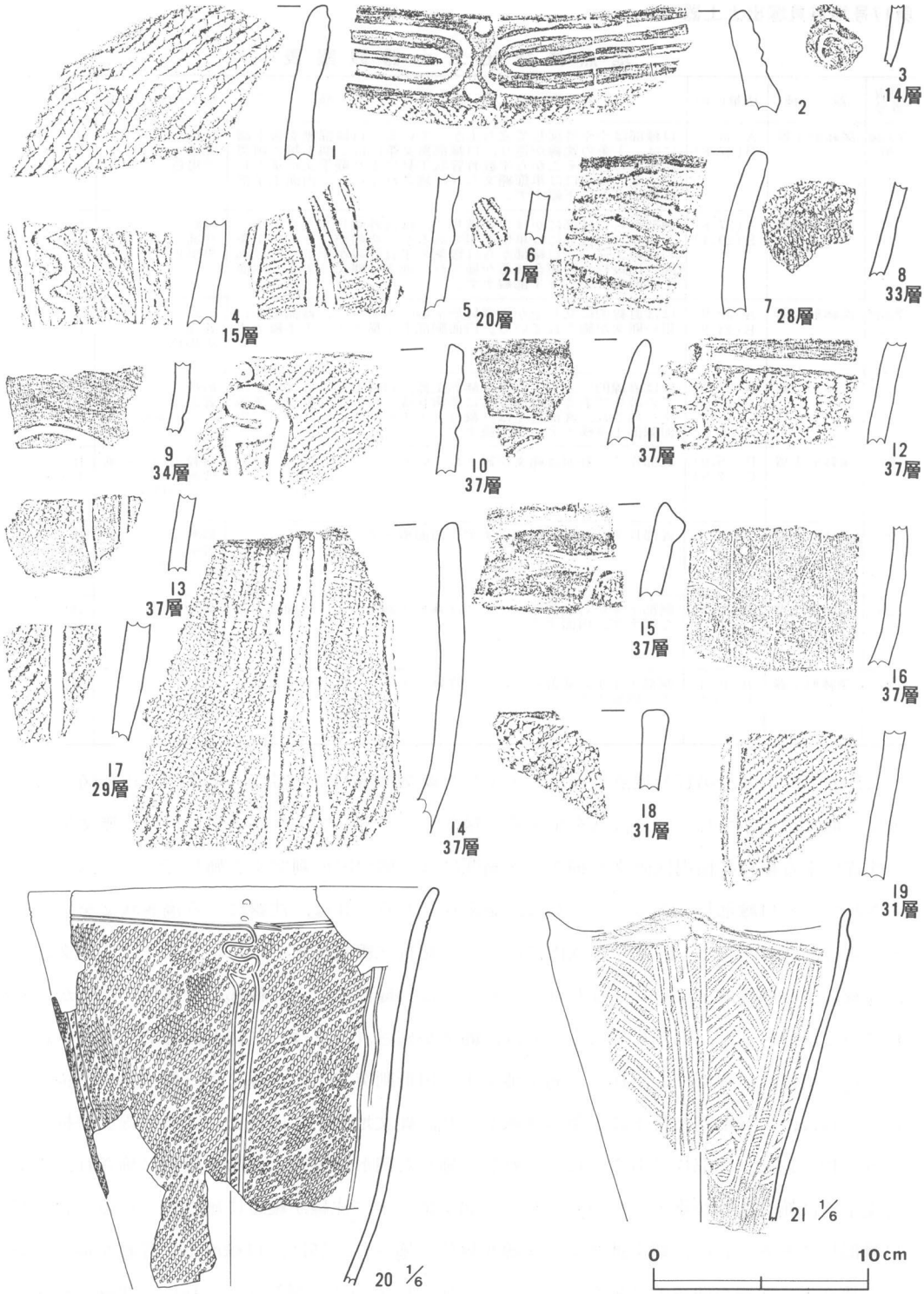
第185図　第16号地点貝塚出土遺物拓影図

第17号地点貝塚出土土器

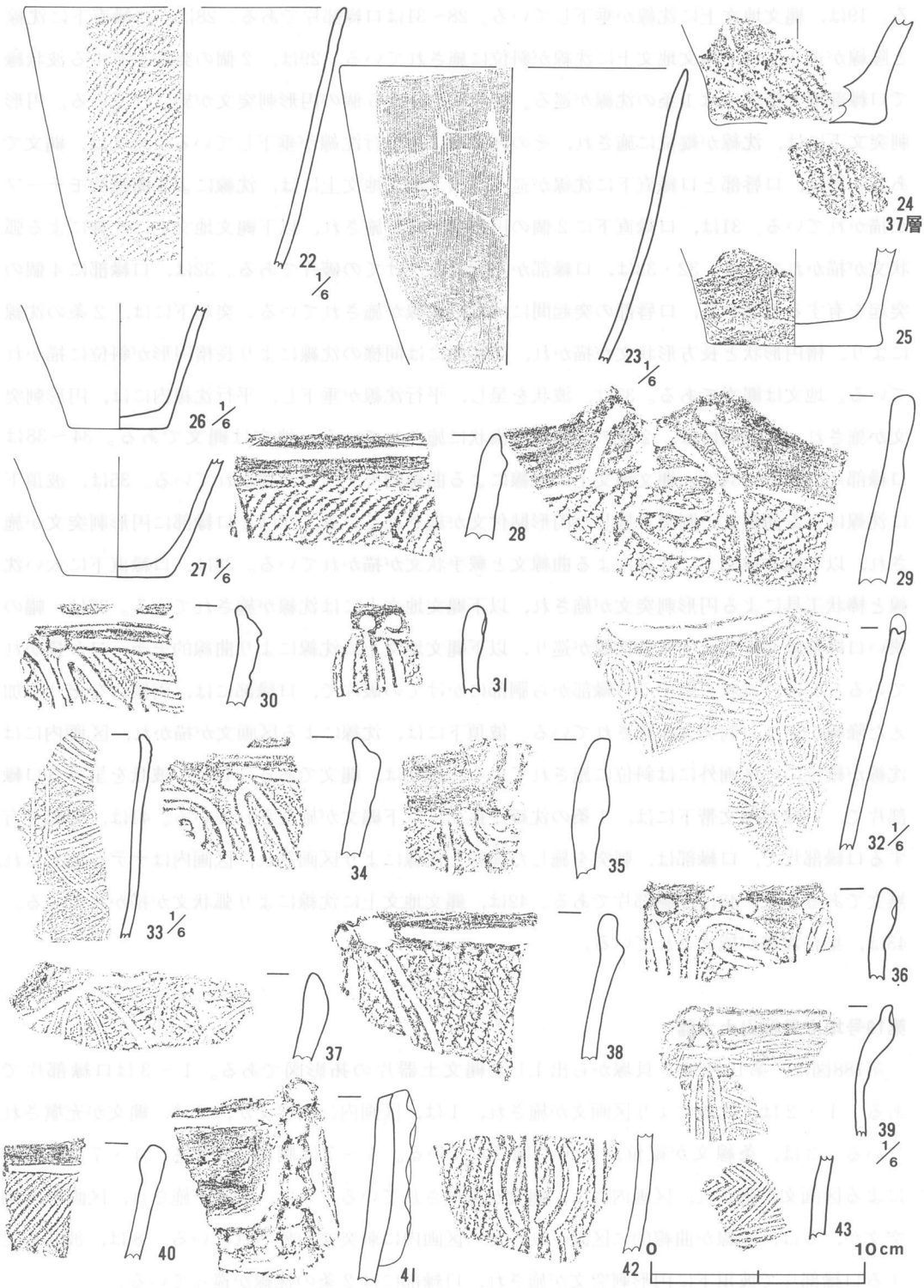
地点貝塚出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第186図 20	深鉢形土器	A 38.2 B(37.8)	口縁部はやや外反して立ち上がっている。口縁部無文帯下端には，1条の沈線が巡り，口縁部無文帯には2個1対の刺突が加えられ，そこから半截竹管状工具により蕨手文が垂下している。地文には単節縄文LRが施されている。内面上半部は横ナデ，以下縦ナデ。	砂粒 普通 黒褐色	70% P491
21	深鉢形土器	A(27.8) B(29.1)	胴部から口縁部にかけての破片で，ほぼ外傾して立ち上がっている。口縁部には単位不明であるが，突起が付され，1条の沈線が巡る。口縁部からは数条の平行沈線が垂下し，区画間には綾杉状の集合沈線が施され，地文は縄文である。内面上半部横ナデ，下半部縦ナデ。	砂粒 普通 黒褐色	20% P347
第187図 22	深鉢形土器	A(29.9) B(24.2)	ほぼ直線的に立ち上がる深鉢形土器の大破片で，器面全体に粗い縄文が施されている。内面胴部上半横ナデ，下半縦ナデ。	砂粒 普通 灰褐色	30% P361
23	深鉢形土器	A(32.4) B(27.8)	ほぼ直線的に立ち上がる深鉢形土器の口縁部から底部にかけての破片である。器面全体に櫛歯状施文具により縦位に条線文が施され，底面近くは，縦位のナデが加えられている。内面胴部上半横ナデ，下半縦ナデ。	砂粒 普通 にぶい黄橙色	20% P360
24	深鉢形土器	B(5.0) C(7.9)	底部片で，外面は縄文が施されている。	砂粒・長石・石英 普通 にぶい橙色	10% P421
25	深鉢形土器	B(4.6) C 8.2	底部片で，外面は縦位のナデ，内面横ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	10% P420
26	深鉢形土器	B(11.8) C 9.3	胴部下半から底部にかけての深鉢形土器である。外面は丁寧な縦ナデ，内面ナデ。	砂粒 普通 橙色	15% P346
27	深鉢形土器	B(10.1) C 9.6	胴部下半から底部にかけての深鉢形土器である。外面は縦ナデ，内面ナデ。	砂粒 普通 橙色	15% P358

第186・187図は，第17号地点貝塚から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。1は，縄文が施文されている波状を呈する口縁部片である。2は，幅の広い口縁部無文帯に2条の沈線による横長の楕円区画文を描き，区画間には2個の円形刺突文を施している。以下縄文が施されている口縁部片である。3～6は，胴部片である。3は，沈線による渦巻状文を描いている。4は，沈線が垂下し，その沈線内に刺突文と蛇行沈線文が施されている。5は，縄文地文上に沈線による曲線的モチーフが描かれている。7は口縁部片で，口縁部には横位のナデが加えられている。8・9は，胴部片である。8は，縄文が施され，9は，沈線が曲線的に施文されている。10・11は，口縁部片で，10は，縄文地文上の円形刺突文下に沈線による蕨手状文が描かれている。11は，口縁部無文帯下に1条の沈線が巡り，縄文地文上には沈線による曲線文が描かれている。12・13は，胴部片である。12は，刺突を施した円形貼付文と沈線が横位に施され，円形貼付文下には蛇行沈線が垂下している。13は，縄文地文上に沈線が縦位に施されている。14・15は，口縁部片である。14は，縄文地文上に沈線が縦位に施され，15は，口縁直下に隆線が巡り，以下縄文地文上に沈線が曲線的に施文されている。16・17・19は，胴部片で，16は，沈線が格子目状に施され，17は，縄文地文上に沈線が縦位に施されている。18は口縁部片で，縄文が施されてい



第186図　第17号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図　(1)

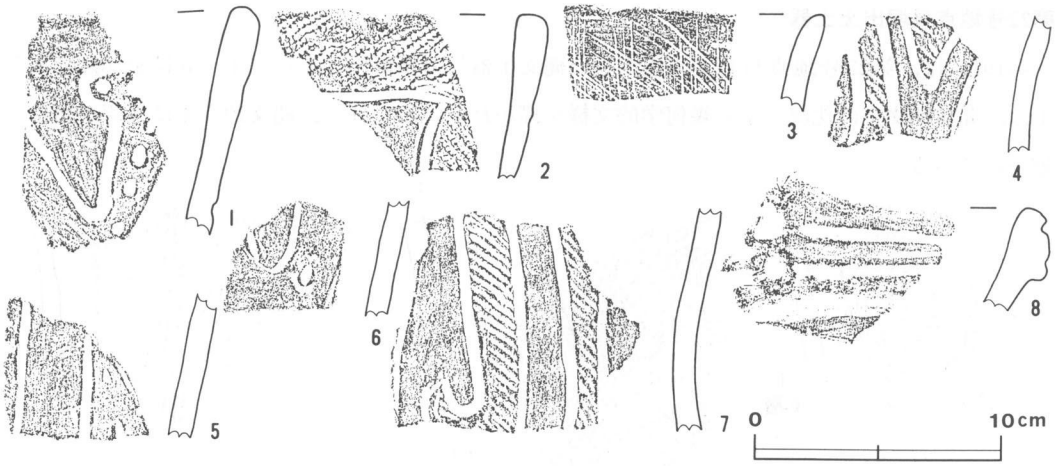


第187図　第17号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図　(2)

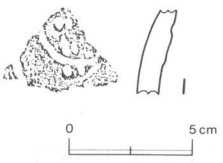
る。19は，縄文地文上に沈線が垂下している。28～31は口縁部片である。28は，口縁直下に沈線と隆線が巡り，以下縄文地文上に沈線が斜位に施されている。29は，２個の突起を有する波状縁で口縁部無文帯下には１条の沈線が巡る。突起下には，５個の円形刺突文が施されている。円形刺突文下には，沈線が縦位に施され，その区画内には蛇行沈線が垂下している。地文は，縄文である。30は，口唇部と口縁直下に沈線が巡り，以下縄文地文上には，沈線による曲線的モチーフが描かれている。31は，口縁直下に２個の円形刺突文が施され，以下縄文地文上に沈線による弧状文が描かれている。32・33は，口縁部から胴部にかけての破片である。32は，口縁部に４個の突起を有すると思われ，口唇部の突起間には太い沈線が施されている。突起下には，２条の沈線により，楕円形状と長方形状文が描かれ，突起間には同様の沈線により長楕円形が斜位に描かれている。地文は縄文である。33は，波状を呈し，平行沈線が垂下し，平行沈線内には，円形刺突文が施され，区画間には，２条の沈線が鋸歯状に施されている。地文は縄文である。34～38は口縁部片である。34は，縄文地文上に沈線による曲線的モチーフが描かれている。35は，波頂下に沈線による曲線文と刺突を施した円形貼付文が施されている。36は，口縁部に円形刺突文が施され，以下縄文地文上に沈線による曲線文と蕨手状文が描かれている。38は，口縁直下に太い沈線と棒状工具による円形刺突文が施され，以下縄文地文上には沈線が施されている。37は，幅の狭い口縁部無文帯下に１条の沈線が巡り，以下縄文地文上に沈線により曲線的モチーフが描かれている。39は，波状を呈する口縁部から胴部にかけての破片で，口縁部には，両側になぞりを加えた隆線が巡り，刺突文が施されている。波頂下には，沈線による区画文が描かれ，区画内には沈線が縦位に，区画外には斜位に施されている。地文は，縄文である。40は，波状を呈する口縁部片で，口縁部無文帯下には，１条の沈線が巡り，以下縄文が施文されている。41は，突起を有する口縁部片で，口縁部は，刺突を施した隆線と沈線により区画され，区画内はナデが加えられ，無文である。42・43は，胴部片である。42は，縄文地文上に沈線により弧状文が描かれている。43は，集合沈線が施文されている。

第19号地点貝塚出土土器

第188図は，第19号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。１～３は口縁部片である。１・２は，沈線により区画文が施され，１は，区画内に刺突文が，２は，縄文が充填されている。３は，条線文が縦位，斜位に施されている。４～７は胴部片である。４・７は，沈線による区画文が施され，区画内には，縄文が充填されている。５は，沈線が施され，区画外に刺突文が，６は，沈線が曲線的に区画され，その区画内に刺突文が施されている。８は，波状を呈する口縁部片で波頂下に円形刺突文が施され，口縁部には２条の沈線が巡っている。



第188図　第19号地点貝塚出土遺物拓影図

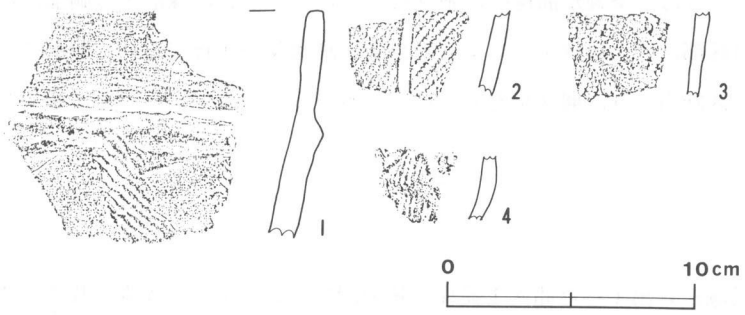


第189図　第20号地点貝塚出土遺物拓影図

第20号地点貝塚出土土器

第189図は，第20号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1は胴部片で，沈線が曲線的に施され，刺突文が縦位に施されている。

第21号地点貝塚出土土器

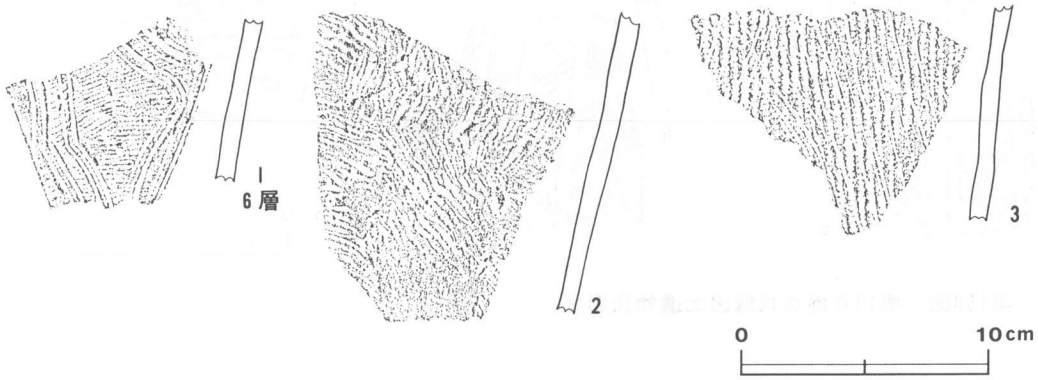


第190図　第21号地点貝塚出土遺物拓影図

第190図は，第21号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で，幅の広い口縁部無文帯下に隆線が巡り，以下縄文が部分的に施文されている。2～4は胴部片である。2は，縄文地文上に沈線が縦位に施されている。4は，沈線区画内に，縦長の刺突文が施されている。

第22号地点貝塚出土土器

第191図は，第22号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1～3は胴部片である。1は，縄文地文上に沈線による幾何学的文様が描かれている。3は，縄文地文上に沈線が斜位に施されている。



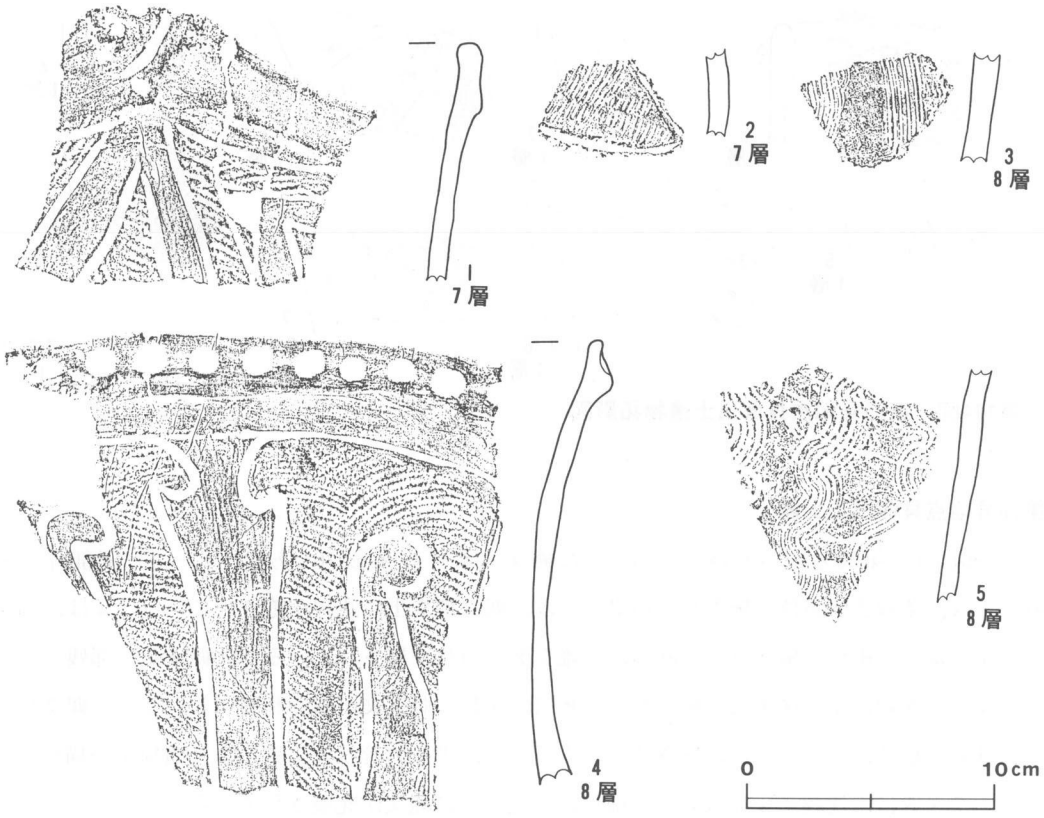
第191図　第22号地点貝塚出土遺物拓影図

第23号地点貝塚出土土器

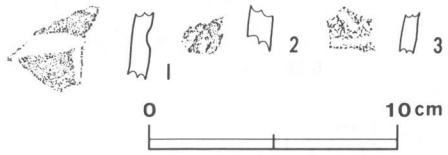
第192図は，第23号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1は，波状を呈する口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部に隆線が巡り，波頂部には，隆線と沈線が斜位に施され，隆線下端には，刺突文が施されている。胴部には，沈線による区画文が描かれ，区画内には縄文が充填されている。2・3・5は胴部片である。2は，沈線による区画文が施され，刺突文が雨だれ状に施されている。3は，条線が曲線的に施されている。4は，口縁部から胴部にかけての破片である。平縁の口縁部には，棒状工具による刺突文と隆線及び沈線が巡り，胴部には沈線による区画文が施され，区画内には，縄文が充填されている。5は，条線文が波状に施されている。

第24号地点貝塚出土土器

第193図は，第24号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1～3は胴部片で，1・3は，太い沈線が施されている。



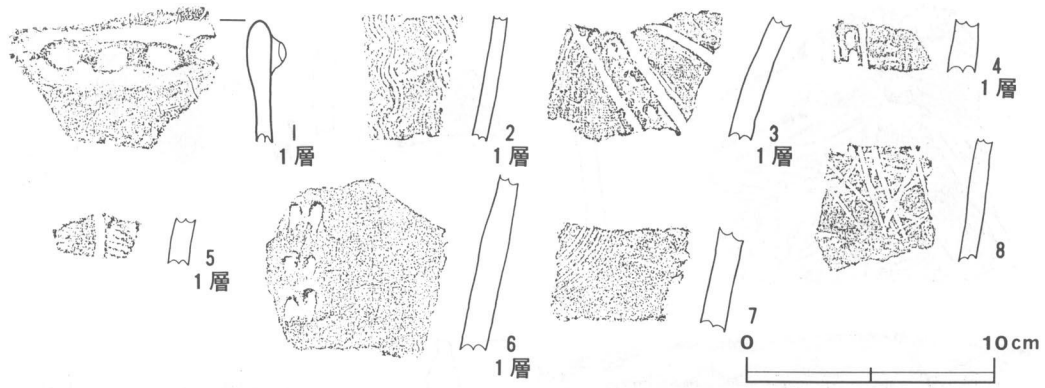
第192図　第23号地点貝塚出土遺物拓影図



第193図　第24号地点貝塚出土遺物拓影図

第25号地点貝塚出土土器

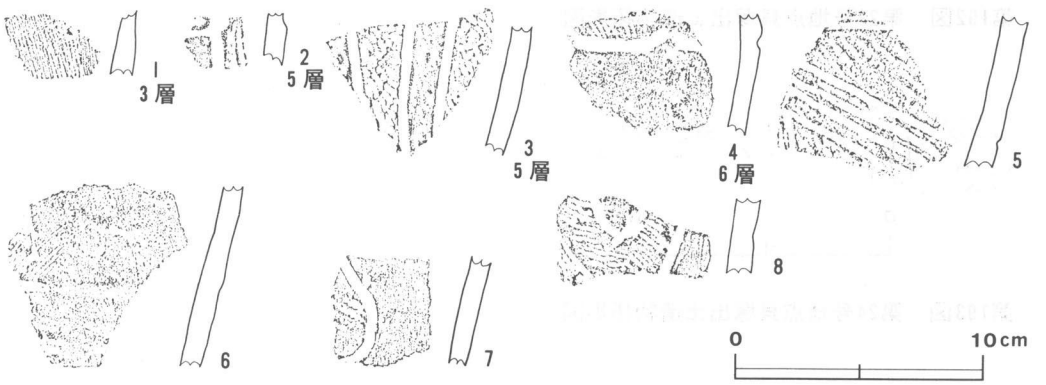
第194図は，第25号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。１は，波状縁を呈する口縁部片で刺突を加えた隆線が巡っている。２～８は胴部片である。２は，条線文が波状に施されている。３・４は，平行沈線が斜位に施され，その平行沈線内に刺突文が加えられている。５は，沈線により区画され，区画内には，縄文が充填されている。６は，半截竹管状施文具により刺突が縦位に加えられている。７は，条線文が曲線的に施されている。８は，沈線が斜位に施されている。



第194図　第25号地点貝塚出土遺物拓影図

第26号地点貝塚出土土器

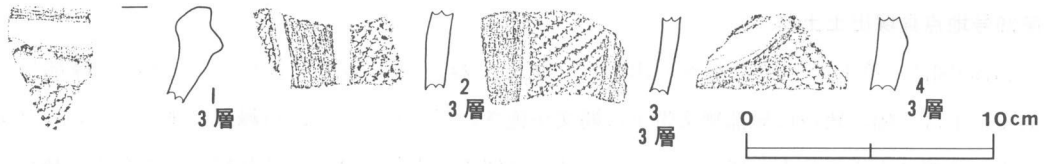
第195図は，第26号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1～8は胴部片である。1は，条線文が斜位に施されている。2は，縄文地文上に沈線が施されている。3は，縄文地文上に沈線が縦位に施され，区画内は，雑な磨り消しが施されているため縄文が一部残っている。4は，沈線による区画文が施され，区画内に細長い刺突文が施されている。5は，縄文地文上に沈線が横位，斜位，縦位に施されている。6は，半截竹管状施文具により曲線文が描かれている。7・8は，沈線により区画文が描かれ，区画内に縄文が充填されている。



第195図　第26号地点貝塚出土遺物拓影図

第27号地点貝塚出土土器

第196図は，第27号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で，口縁部の両側にナゾリを加えた隆線を巡らし，以下縄文を施している。2～4は胴部片で，2・3は，直線的な磨消懸垂文が施されている。4は，縄文に凹線が施されている。



第196図　第27号住居跡地点貝塚出土遺物拓影図

第28号地点貝塚出土土器

地点貝塚出土土器観察表

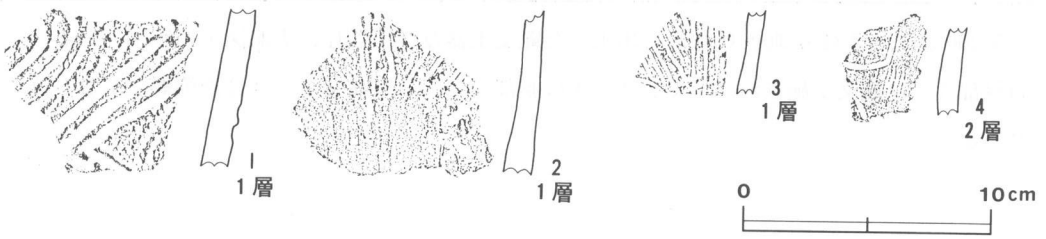
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第197図 3	深鉢形土器	B(3.5) C(10.4)	底部片で，底部がやや突出している。外面は縦ナデ，内面横ナデ。	砂粒 普通 明褐色	10% P422

第197図は，第28号地点貝塚から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。1・2は胴部片で，1は，沈線が施され，2は，条線文が縦位に施されている。

第197図　第28号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図

第29号地点貝塚出土土器

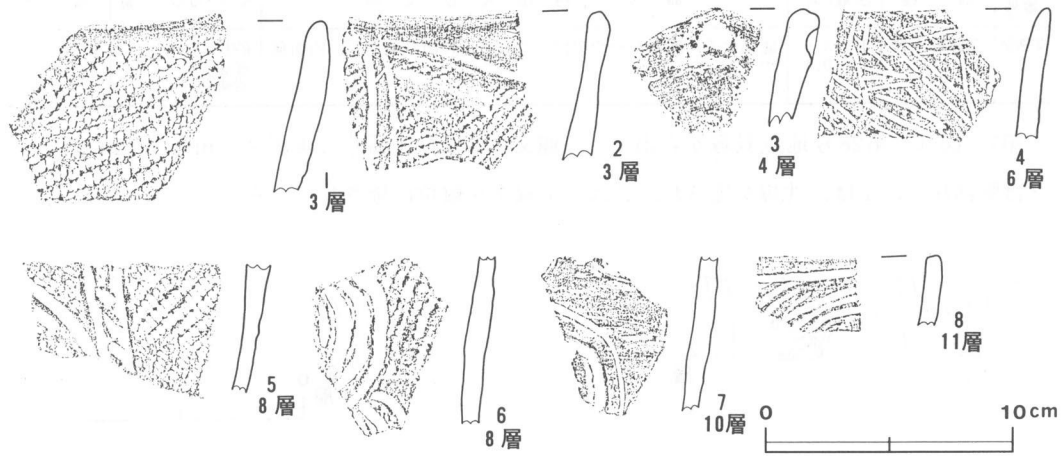
第198図は，第29号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1～4は胴部片である。1は，縄文地文上に沈線が曲線的に施され，2・3は，縄文地文上に沈線が斜位に施され，4は，沈線区画内に縦長の刺突文が施されている。



第198図　第29号地点貝塚出土遺物拓影図

第30号地点貝塚出土土器

第199図は，第30号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。１～４は口縁部片である。１は，幅の狭い口縁部無文帯下に縄文が施されている。２は，口縁部に施されている刺突文下に沈線による弧状文が描かれている。地文は縄文である。３は，波状縁で，波頂下に棒状工具による刺突文が施されている。４は，沈線が斜位に施されている。５～７は胴部片で，５は，縄文地文上に平行沈線が斜位に施され，区画内に刺突文が加えられている。６は，縄文地文上に太い沈線による曲線文が描かれている。７は，半截竹管状施文具により曲線文が描かれている。８は，口縁直下に１条の沈線が巡り，以下縄文地文上に沈線による曲線文が描かれている。



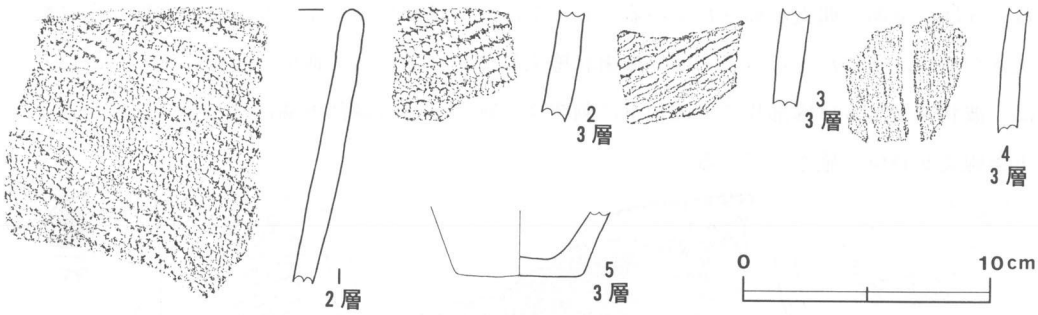
第199図　第30号地点貝塚出土遺物拓影図

第31号地点貝塚出土土器

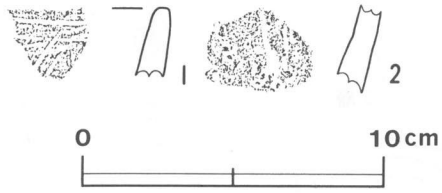
地点貝塚出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第200図 5	深鉢形土器	B(2.7) C 5.2	底部片で，外面は縦ナデ，内面横ナデ。	砂粒・長石 普通 にぶい橙色	10% P423

第200図は，第31号地点貝塚から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。１は，口縁部片で，縄文が施されている。２～４は胴部片で，２は縄文が，３は無節縄文ＬＲが施されている。



第200図　第31号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図



第201図　第32号地点貝塚出土遺物拓影図

第32号地点貝塚出土土器

第201図は，第32号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で，細沈線が横位，斜位に施されている。2は胴部片で，沈線が垂下しているが，摩滅気味である。

第33号地点貝塚出土土器

第202図は，第33号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1～3は胴部片である。1は磨消帯と縄文が，2は刺突文が，3は縄文が施されている。

第202図　第33号地点貝塚出土遺物拓影図

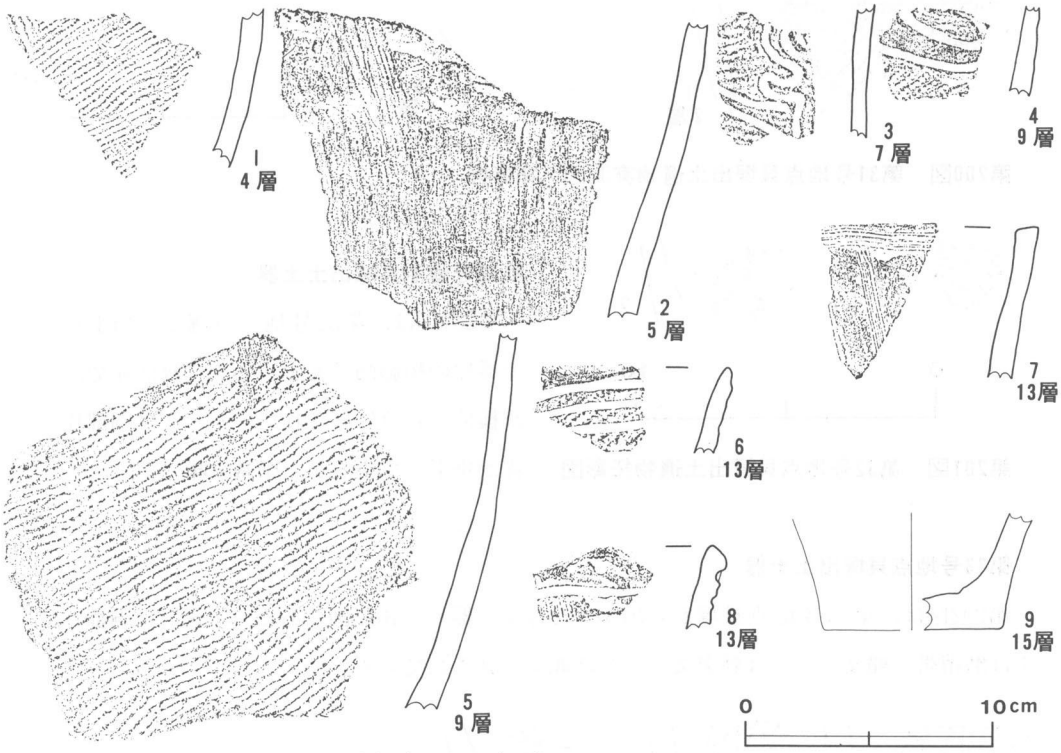
第34号地点貝塚出土土器

地点貝塚出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第203図 9	深鉢形土器	B(4.7) C(7.3)	底部片で，外面は縦位，斜位にナデ，内面ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	10% P424

第203図は，第34号地点貝塚から出土した縄文土器及び土器片の実測図・拓影図である。1～5は胴部片である。2は，胴下半部片で，縦位のヘラナデが加えられている。3は，縄文地文上に蛇行沈線が描かれている。4は，沈線による区画文が施され，区画外に縄文が充塡されてい

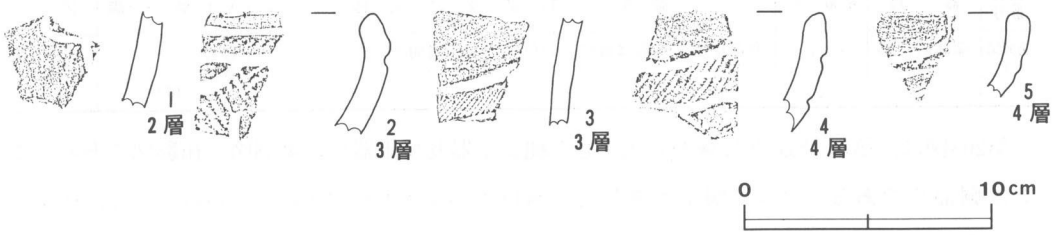
る。5は，全面に縄文が施されている。6・7は，口縁部片である。6は，縄文地文上に数条の沈線が横位に施されている。7は，櫛歯状施文具により条線文が横位，斜位に施されている。8は，波状を呈する口縁部片で，波頂下に刺突文が施され，口縁部下端には1条の沈線が巡る。以下条線文が斜位に施されている。



第203図　第34号地点貝塚出土遺物実測図・拓影図

第35号地点貝塚出土土器

第204図は，第35号地点貝塚から出土した縄文土器片の拓影図である。1は，沈線が曲線的に施されている胴部片である。2は，波状を呈する口縁部片で，口縁部に2条の沈線が巡り区画内に縄文が施され，以下沈線による区画文が施され，区画内に縄文が施されている。3は，沈線区画内に縄文が施されている胴部片である。4・5は口縁部片である。4は，2条の沈線により区画文が描かれ，区画内には，縄文が施されている。5は，口唇部から沈線が施文されている。



第204図　第35号地点貝塚出土遺物拓影図

表 6　貝類遺体集計表

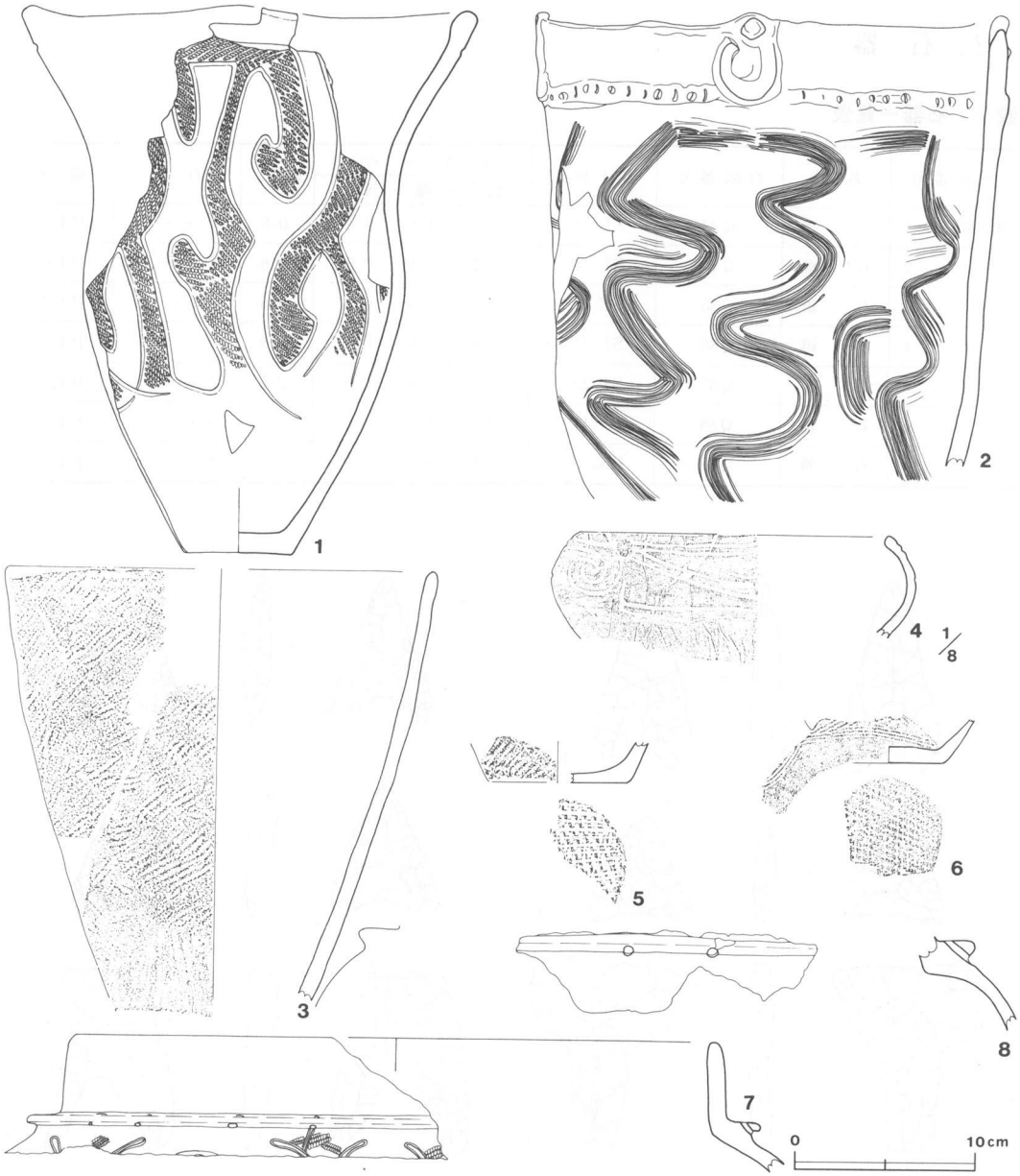
種類 / 地点貝塚	1 サルボウ	2 ナミマガシワ	3 ヤマトシジミ	4 アサリ	5 オキシジミ	6 ハマグリ	7 シオフキ	8 ヒメシラトリ	9 サビシラトリ	10 オオノガイ	11 イシガイ	12 イボキサゴ	13 ウミニナ	14 イボウミニナ	15 カワアイ	16 カワニナ	17 アカニシ	18 イボニシ	19 ムギガイ	20 アラムシロ	21 ヒロクチカノコ	22 キセルモドキ科	23 オオガイチョウジ	24 ヒダリマイキ	25 不明	計
1	738	6	5	26	19	6,404	1,276	6		61			92	2		80	20	13		26		4		3		8,781
2	549	2	1	113	2	3,049	416			14			2		1	4	4									4,157
3	60		1	2	1	95	118	1					1		2	1	8	1		1						292
4	61	3	8	6	13	825	570	28		8			9	1	1	10	2	1		4						1,550
5					3	178	120			1			5													307
6	109	4	2	2	5	1,550	241	3		9			16			2		1		6						1,950
7	53	1			1	190	136			3			5					1		1						391
8	30	1			3	297	77						4			1	4									417
9	48					155	306						5													514
10	275		5	26	9	4,480	3,272	43		2			52		2	19	40	3		19	5	1			5	8,258
11	496	14	3	349	34	3,315	19,144	1,234	7	9			65			10	1	7		39	1	14		2		24,744
12	16					87	7																			110
13	3,380	722	3,076	148	70	10,514	6,193	2		1		1	31		6	3	10	11		7	2	1		1		24,179
14	13			1		78	98																			190
15	4					40	6			1							1									52
16	129	4	17	8	3	333	503									1	3									1,001
17	726	37	16	38	15	4,574	4,894	1,280		10			109		2	34	11	6	2	46		9				11,809
18	1					6	1																			8
19	24	1				106	47			1							3									182
20	25		2	1		98	19																			145
21	77		50	1	3	59	111																			301
22	71		27	2	2	458	328			1			1			3	1	1								895
23	1,087	92	220	10	11	2,980	511	1		3			3	1	6	2	5	2		1		1			1	4,937
24	26	1			3	90	26			1			8		1											156
25	707	8	23	8	2	674	191	1		1			18			1	5	1		10					1	1,651
26	197	2	19	11	8	2,648	393	1	3	37			16		1	2	8			10		2				3,358
27	73	2	2	2	2	240	52	1									4									378
28	574	6	6	44	2	4,059	1,650	5			1		15			3		2		2			5			6,374
29	16		3			144	27			2																192
30	219	8	111	15	1	2,359	459	15		21			27		1	2	2	2		6					1	3,249
31	159	1	30	4	2	627	130			7			10		5	4	3	1		1						984
32	4					54	11						3		1	1										74
33	5					9	2								1											17
34	151	6	4	140	1	726	3,241	34,305	1				72		2	5	3		2	93		9	2		18	38,781
35	372			37		320	4,013	2,110					9			2				9			1			6,873
計	10,475	921	3,631	994	215	51,821	48,589	39,036	11	193	1	1	578	4	32	190	138	53	4	281	8	41	8	6	26	157,257

第10節　その他の人工遺物

1　遺構外出土遺物

遺構外出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第205図 1	深鉢形土器	A(24.1) B 30.9 C 5.9	口縁部が外傾し，胴部上位でくびれ，胴部中位がふくらみ，小さな底部へ至る。口縁部には，幅の狭い無文帯を有し，胴部には沈線により「J」字状，逆「J」字状を連結したり，組み合わせたりしてモチーフを描き，区画内には単節縄文LRを充填している。文様帯の下端は雑ではあるが，沈線で区画されており注目される。内面胴上半部横ナデ，下半部縦ナデ。	砂粒 普通 黒褐色	80% P252
2	深鉢形土器	A 25.4 B(27.1)	平縁を呈し，胴部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がっている。底部欠損。口縁部は，幅の広い無文帯で，4単位の隆線による「J」字状文が貼付され，下端には，キザミを施した隆線が巡っている。胴部は，楕歯状施文具による条線文が波状に施され，地文は無文である。内面上半部横ナデ，下半部縦ナデ。	砂粒 普通 暗褐色	90% P329
3	深鉢形土器	A(23.2) B(24.0)	胴部から口縁部にかけてやや内彎して立ち上がる深鉢形土器の破片である。全面に縄文が施されている。内面にはナデが加えられている。	砂粒 普通 にぶい褐色	30% P377
4	鉢形土器	A(34.0) B(11.4)	鉢形土器の口縁部片である。口縁部には刺突を施した円形貼付文が3個付され，沈線による渦巻状文と2条1組の横位と斜位の沈線により口縁部文様帯が構成されている。地文は無文である。内面横ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	20% P406
5	深鉢形土器	B(2.2) C(7.8)	底部片である。外面には縄文が施され，底部には網代痕を有し，内面横ナデ。	砂粒 普通 にぶい褐色	5% P479
6	鉢形土器	B(2.5) C(6.0)	底部片である。外面には数条単位の沈線が横位，斜位に施されている。底部には網代痕を有し，内面ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	5% P413
7	有孔鍔付土器	A(35.5) B(7.2)	やや内傾して立ち上がる口縁部片である。胴部は沈線で区画され，区画内には縄文が施されている。孔が鍔の部分にみられ，器壁を貫通せずに鍔そのものに穿たれている。孔に擦痕は認められない。内面には赤彩痕が残り，横位のヘラナデ。	砂粒・礫 良好 にぶい赤褐色	10% P167
8	有孔鍔付土器	B(4.5)	口縁部欠損の頸部から胴部にかけての破片である。胴部は内彎しながら頸部に至り，内側に陵を有している。鍔部に孔がみられ，器壁を貫通せずに鍔そのものに穿たれている。地文は無文である。内面横ナデ。	砂粒 普通 にぶい橙色	10% P70

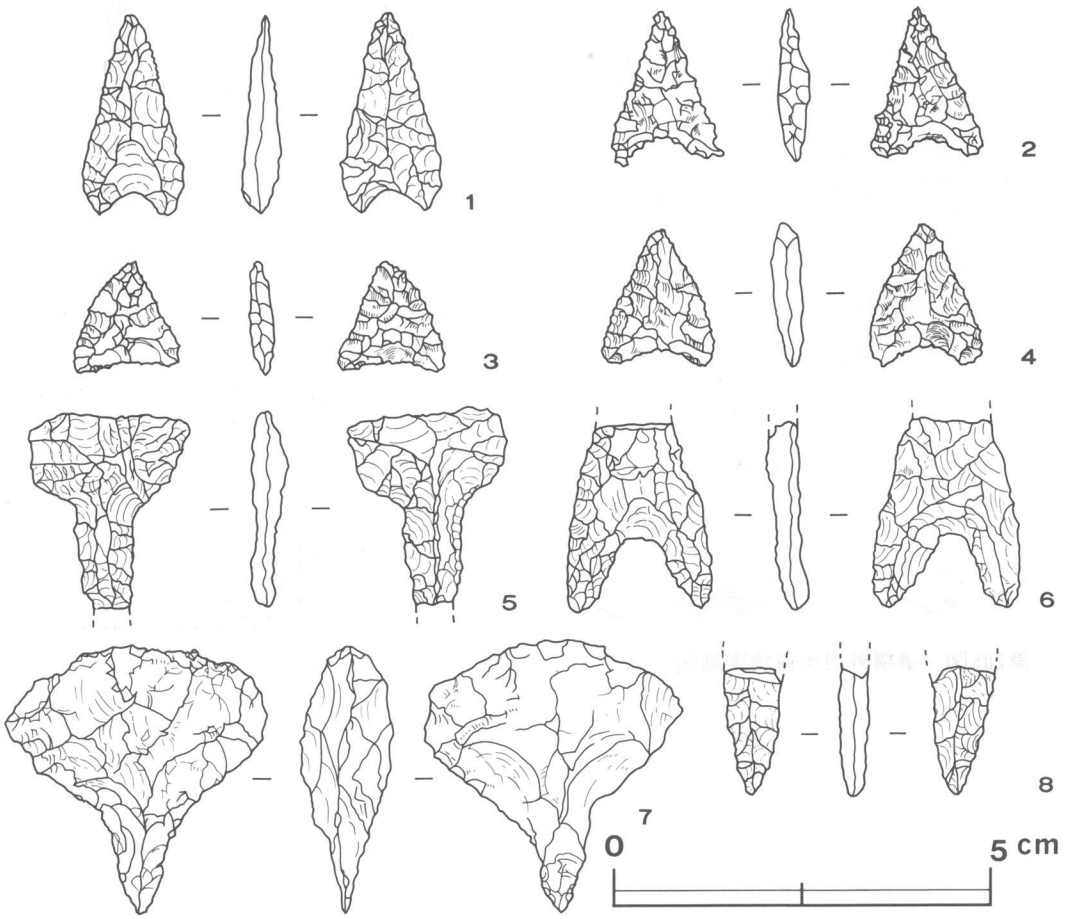


第205図　遺構外出土遺物実測図

2 石 器

表7 石器一覧表 (1)

図版番号	名称	台帳番号	出土地点	大きさ(cm) 長さ・幅・厚さ			重量(g)	石質	備考
第206図 1	石鏃	Q83	SI 3	2.7	4.5	5.5	0.5	チャート	PL60
2	石鏃	Q84	SI 4	2.1	1.4	0.5	0.6	チャート	PL60
3	石鏃	Q85	SK 13	1.5	1.5	0.3	0.5	石英	PL60
4	石鏃	Q86	SI 37	1.8	1.6	0.4	0.9	石英	PL60
5	石錐	Q87	SI 22	2.6	2.1	0.5	2.5	チャート	PL60
6	石鏃	Q88	SI 41	2.5	1.9	0.5	2.0	メノウ	PL60
7	石錐	Q89	$I3a_8$	3.5	3.5	1.2	11.5	チャート	PL60

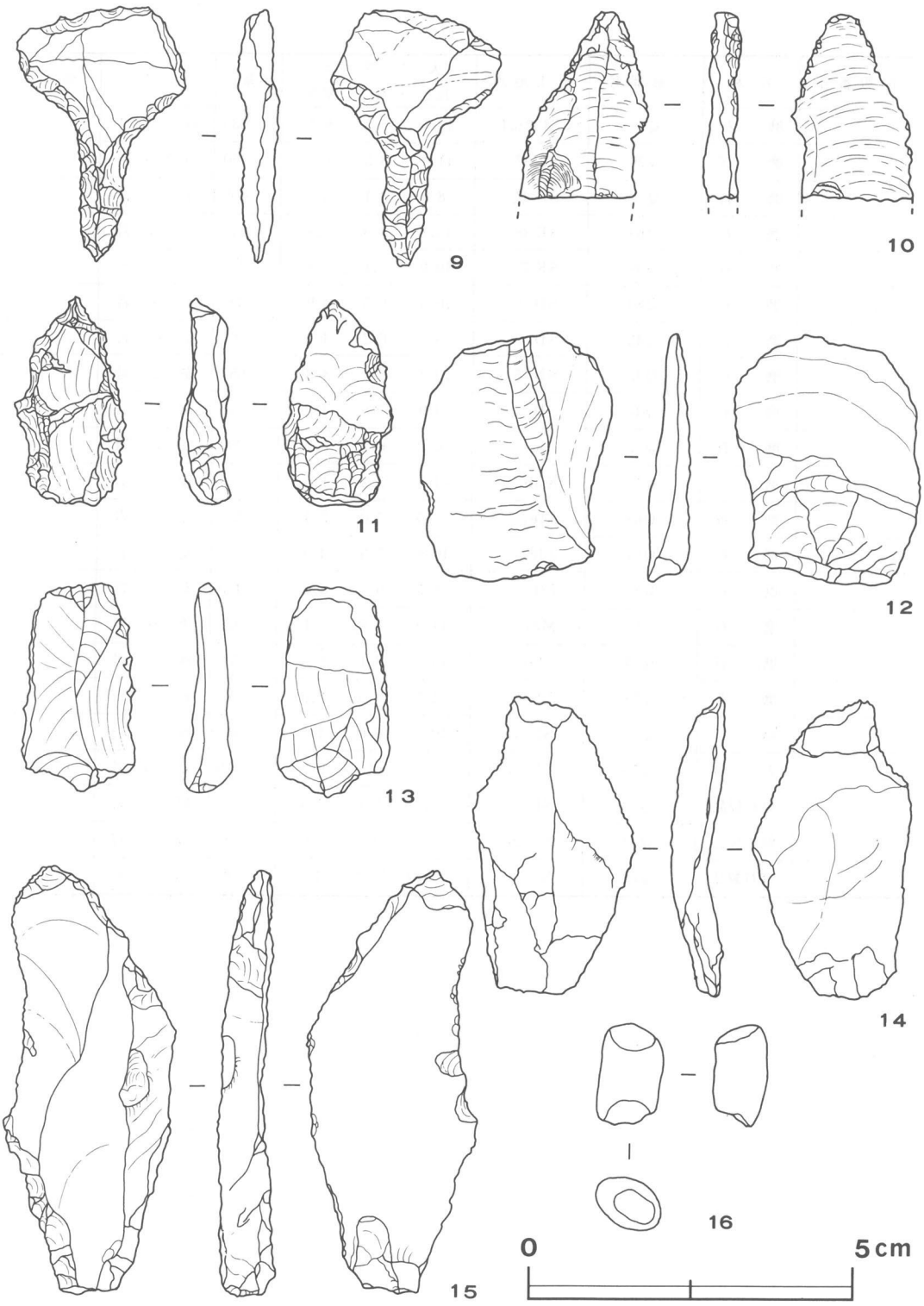


第206図 石器実測図 (1)

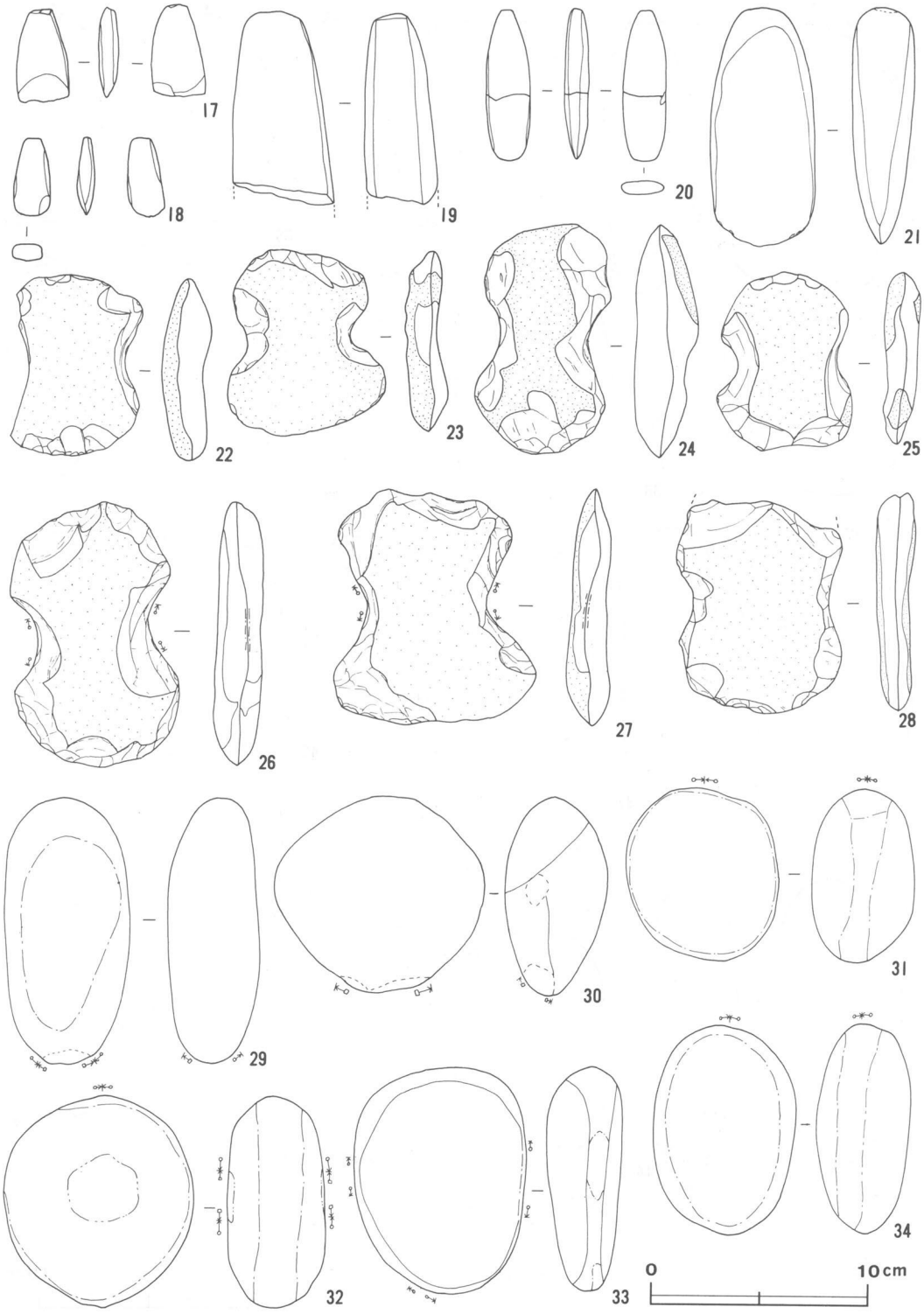
図版番号	名称	台帳番号	出土地点	大きさ (cm) 長さ・幅・厚さ			重量(g)	石質	備考
第206図 8	石錐	Q90	SI 9	1.7	0.8	0.4	0.5	チャート	PL60
第207図 9	石錐	Q91	J3b$_2$	3.9	2.5	0.6	4	チャート	PL60
10	剥片	Q92	SI 13	3.0	1.8	0.6	3	黒曜石	
11	ポイント	Q93	J2c$_9$	4.9	2.4	1.0	11	黒曜石	PL60
12	剥片	Q94	SI 3	3.9	2.9	0.6	6	頁岩	
13	ブレード	Q95	I3a$_8$	3.3	1.8	0.8	3	メノウ	
14	剥片	Q96	SI 3	4.6	2.5	1.0	7	メノウ	
15	スクレイパー	Q97	SI 40	6.7	2.6	0.9	12	頁岩	PL60
16	管玉	Q98	I2c$_0$	1.7	1.0	0.8	2	蛇紋岩	PL60
第208図 17	磨製石斧	Q 6	SI 9	4.3	2.4	0.9	15	結晶片岩	PL60
18	磨製石斧	Q30	SK 6	3.7	1.7	0.8	5	結晶片岩	PL60
19	磨製石斧	Q12	SI 23	(0.9)	4.8	3.1	(245)	閃緑岩	PL60
20	磨製石斧	Q28	SK 81	7.0	2.1	1.1	30	結晶片岩	PL60
21	磨製石斧	Q47	J4e$_1$	11.0	4.9	2.9	290	緑泥片岩	PL60
22	打製石斧	Q 5	SI 9	8.4	5.6	2.1	135	安山岩	PL61
23	打製石斧	Q31	SK 25	8.5	7.5	1.8	120	安山岩	
24	打製石斧	Q58	J3e$_6$	10.7	6.3	2.8	200	流紋岩	PL61
25	打製石斧	Q57	K3a$_2$	8.1	6.3	1.6	105	砂岩	PL61
26	打製石斧	Q33	SK 70	12.2	7.5	2.2	260	流紋岩	PL61
27	打製石斧	Q29	SK 71	10.8	9.3	1.9	220	結晶片岩	PL61
28	打製石斧	Q37	SD 4	9.9	7.7	1.8	185	流紋岩	
29	敲石	Q10	SI32・34	12.3	5.8	4.2	445	安山岩	PL61
30	敲石	Q 8	SI 39	9.0	9.7	4.7	490	流紋岩	
31	磨石	Q11	SI32・34	8.0	7.1	5.3	375	安山岩	
32	磨石	Q 2	SI 3	9.6	8.8	4.5	525	安山岩	
33	磨石	Q16	SI 11	10.4	7.9	3.4	395	砂岩	
34	磨石	Q17	SI 22	9.7	6.6	4.3	395	安山岩	
第209図 35	磨石	Q 9	SI 16	(12.4)	9.3	4.2	(700)	砂岩	
36	磨石	Q26	SI 33	10.0	8.7	3.6	445	流紋岩	PL61
37	磨石	Q18	SI32・34	9.7	7.2	4.5	480	安山岩	PL61
38	磨石	Q13	SI 43	8.1	7.8	3.1	340	安山岩	
39	磨石	Q41	SK103	10.5	7.3	3.8	460	安山岩	
40	磨石	Q38	SK 25	10.0	8.1	3.9	415	安山岩	PL61
41	磨石	Q60	J3b$_6$	13.0	8.3	4.1	805	砂岩	

図版番号	名称	台帳番号	出土地点	大きさ (cm) 長さ・幅・厚さ	重量(g)	石質	備考
第209図 42	磨石	Q66	$I3i_4$	10.2 7.9 4.1	495	安山岩	PL61
43	磨石	Q40	SK106	10.6 7.7 4.2	600	安山岩	
44	磨石	Q63	$J2a_0$	12.8 6.1 4.1	455	安山岩	
45	磨石	Q65	$J3e_4$	11.0 7.1 1.1	490	安山岩	
46	磨石	Q61	$J3a_4$	10.0 7.5 5.7	640	安山岩	PL61
第210図 47	砥石	Q7	SI 9	12.0 6.1 1.4	155	粘板岩	
48	砥石	Q75	$J3e_6$	(5.5) 4.5 1.8	(75)	砂岩	
49	石棒	Q15	SI 35	22.8 4.8 4.7	635	結晶片岩	PL62
50	石棒	Q45	SI 12	29.6 11.4 9.4	4,450	流紋岩	PL62
51	石棒	Q55	表採	(6.9) (2.9) (2.0)	(60)	結晶片岩	
52	軽石製品	Q71	$J3b_3$	12.0 5.0 5.5	50	軽石	PL62
53	軽石製品	Q24	SI 39	6.7 7.8 5.1	35	軽石	PL62
54	軽石製品	Q70	SI 16	13.8 6.8 6.4	135	軽石	
55	凹石	Q21	SI 22	(13.8) 13.4 9.2	(2,050)	安山岩	PL62
56	凹石	Q81	$J3g_2$	(10.3) (10.5) 3.5	(360)	安山岩	PL62
57	石皿	Q72	$I3f_5$	(17.4) 15.0 6.8	(2,600)	砂岩	
	磨製石斧	Q27	SK63	(5.3) 3.1 1.6	(45)	結晶片岩	PL60
	磨製石斧	Q34	SK113	(7.8) 7.3 4.1	(340)	流紋岩	
	磨製石斧	Q48	$J3i_5$	(6.9) 5.8 3.0	(220)	硬砂岩	PL60
	磨製石斧	Q49	$J3d_4$	(6.3) 4.7 2.5	(130)	チャート	PL60
	磨製石斧	Q50	$I3a_9$	7.6 3.8 2.1	75	結晶片岩	
	磨製石斧	Q52	$I3i_4$	(5.5) 4.0 1.8	(75)	緑泥片岩	
	磨製石斧	Q53	$J3g_6$	(5.0) (3.0) 3.0	(85)	結晶片岩	
	磨製石斧	Q54	$J3b_3$	(6.2) 4.3 20.0	(85)	流紋岩	PL60
	磨製石斧	Q74	$J3a_8$	(5.2) 6.5 3.7	(220)	結晶片岩	PL60
	打製石斧	Q1	SI 3	(5.0) 6.1 2.3	(90)	砂岩	
	打製石斧	Q14	SI 37	(5.9) 9.8 3.1	(185)	砂岩	
	打製石斧	Q32	SK102	(10.0) 5.0 1.7	(105)	頁岩	
	打製石斧	Q35	SD 4	(6.1) 7.2 1.2	(85)	流紋岩	
	打製石斧	Q36	SD 4	(5.6) 7.7 2.1	(115)	流紋岩	
	打製石斧	Q56	$J3a_3$	(5.8) 6.8 1.8	(75)	流紋岩	
	打製石斧	Q59	$J3f_2$	(6.7) 6.0 2.5	(115)	雲母片岩	
	磨石	Q68	SI 19	9.3 8.0 6.9	720	礫岩	
	磨石	Q77	SI 20	11.0 6.8 4.5	520	硬砂岩	

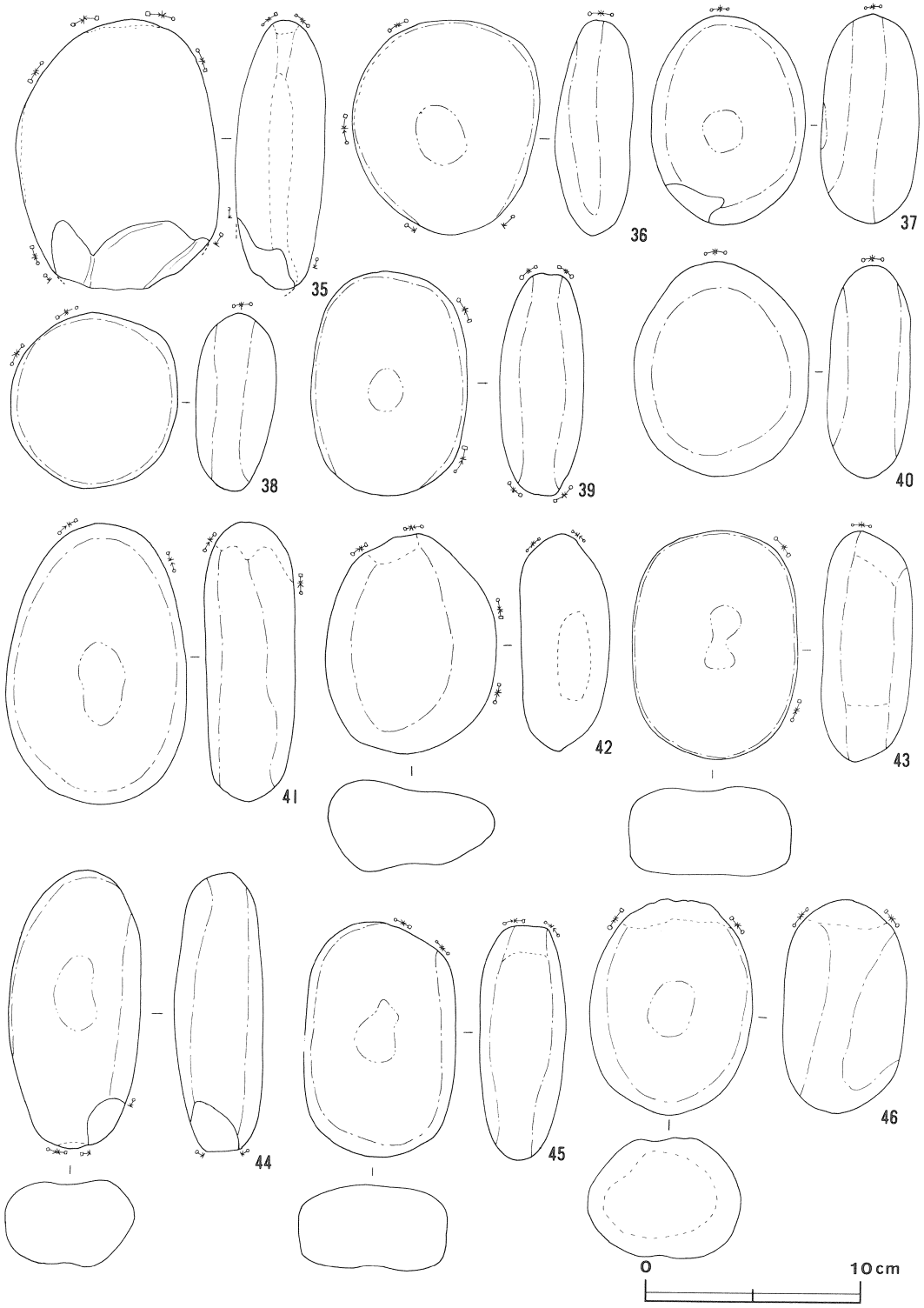
図版番号	名称	台帳番号	出土地点	大きさ(cm) 長さ・幅・厚さ			重量(g)	石質	備考
	磨石	Q19	SI32・34	12.8	6.2	6.1	635	砂炭	
	磨石	Q20	SI 37	11.4	8.3	6.2	760	石英斑岩	
	磨石	Q 3	SI 37	(8.0)	9.1	3.7	(405)	安山岩	
	磨石	Q69	SK 38	10.1	7.9	3.8	415	安山岩	
	磨石	Q39	SK 77	10.0	7.1	3.8	440	アブライト	
	磨石	Q80	SD 9	(6.3)	6.5	4.9	(390)	流紋岩	
	磨石	Q42	SD 5	9.3	6.2	4.7	390	安山岩	
	磨石	Q43	SD 5	10.8	8.4	4.3	650	安山岩	PL61
	磨石	Q44	SD 5	9.9	7.8	4.9	585	安山岩	
	磨石	Q78	$J3d_7$	(6.7)	6.7	3.7	(300)	流紋岩	
	磨石	Q51	$K3b_1$	(4.5)	3.2	1.6	(35)	砂岩	
	磨石	Q62	$J4e_2$	9.5	7.0	3.4	335	石英斑岩	
	磨石	Q67	$J3c_5$	10.8	7.9	4.0	455	安山岩	
	磨石	Q82	$I3h_3$	(8.5)	6.7	4.6	(450)	安山岩	
	磨石	Q76	$M3e_1$	14.9	7.8	7.1	1,070	流紋岩	
	磨石	Q64	$I3e_3$	10.8	8.1	5.6	720	砂岩	
	磨石	Q73	$J2j_7$	(4.5)	4.9	3.0	(100)	安山岩	
	砥石	Q 4	SI 5	10.0	10.6	4.7	(640)	砂岩	
	石臼	Q79	SD 3	11.1	10.5	9.7	(915)	安山岩	PL62
	軽石製品	Q22	SI 16	6.0	5.6	3.3	20	軽石	
	軽石製品	Q23	SI 16	5.7	5.4	3.6	20	軽石	
	軽石製品	Q25	SI 38	(7.3)	7.3	3.8	(85)	軽石	



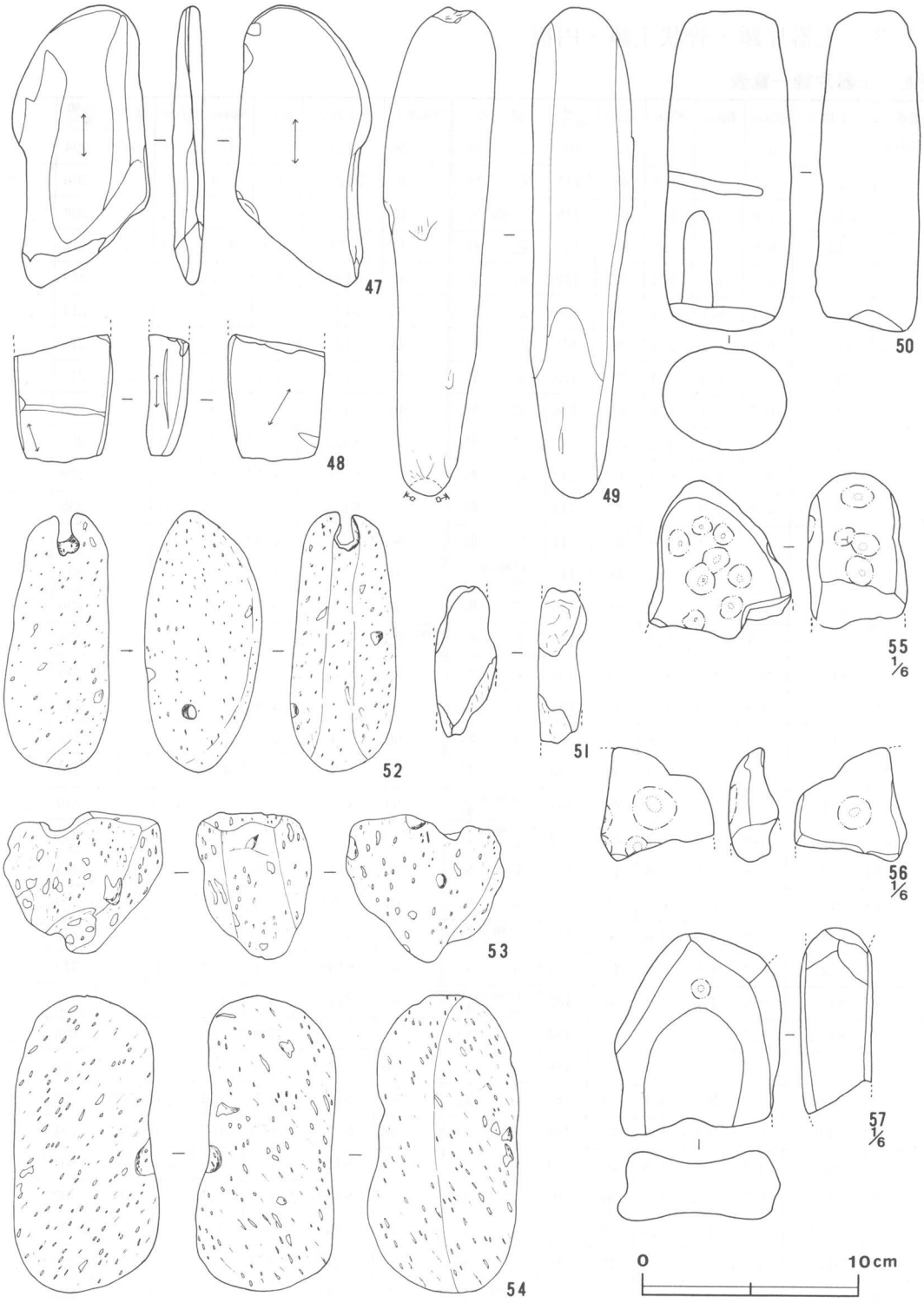
第207図　石器実測図　(2)



第208図　石器実測図　(3)



第209図　石器実測図　(4)



第210図　石器実測図　(5)

3　土器片錘・管状土錘・円板

表8　土器片錘一覧表

(1)

図版番号	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	台帳番号	備　考	図版番号	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	台帳番号	備　考
第211図1	SI2	6.6	6.5	1.0	60	105	完　形	38	SI24	4.0	3.2	0.8	16	204	完　形
2	SI2	7.0	4.2	1.2	48	111	完　形	39	SI25	4.5	3.0	1.5	22	206	口縁部片完形
3	SI2	7.4	5.3	1.2	(63)	115	一部欠	40	SI26	4.7	4.9	1.1	29	208	完　形
4	SI2	6.6	6.1	1.2	69	119	完　形	41	SI26	4.8	4.7	1.0	33	212	完　形
5	SI3	6.0	4.8	1.3	52	112	完　形	42	SI26	5.6	5.1	1.3	40	213	完　形
6	SI3	6.1	5.1	1.3	51	120	完　形	43	SI26	5.5	4.2	1.7	37	214	口縁部片完形
7	SI3	6.0	4.2	0.9	29	121	完　形	44	SI28	6.9	4.3	0.9	39	218	完　形
8	SI3	4.5	4.3	0.9	27	123	完　形	45	SI28	4.8	3.4	1.1	26	219	口縁部片完形
9	SI3	6.0	5.4	1.2	51	128	完　形	46	SI28	7.6	7.3	1.1	62	225	完　形
10	SI3	5.8	4.7	1.2	38	131	完　形	47	SI28	3.7	3.7	1.0	18	227	完　形
11	SI3	4.0	4.8	0.9	16	142	完　形	48	SI28	5.9	4.8	1.0	33	228	完　形
12	SI3	4.1	3.9	1.2	25	143	完　形	49	SI28	4.7	5.3	1.0	29	230	完　形
13	SI5	6.1	5.9	1.0	39	144	完　形	50	SI28	4.8	3.8	0.9	22	231	完　形
14	SI5	6.8	5.2	1.0	48	145	口縁部片完形	51	SI29	3.7	3.3	0.9	17	233	完　形
15	SI5	4.5	3.3	1.0	24	146	完　形	52	SI30	5.3	4.1	1.0	27	236	完　形
16	SI5	3.3	1.8	1.0	9	150	完　形	第212図53	SI30	4.9	3.9	1.0	19	238	完　形
17	SI5	5.3	3.9	1.2	33	152	完　形	54	SI31	4.0	3.3	1.3	26	240	完　形
18	SI7	5.9	5.3	1.0	42	154	完　形	55	SI31	4.8	2.7	1.5	33	242	口縁部片完形
19	SI7	6.3	3.8	0.8	21	514	完　形	56	SI31	6.6	5.8	1.1	56	244	完　形
20	SI8	5.2	4.2	1.2	36	160	完　形	57	SI33	5.1	4.5	1.0	32	248	完　形
21	SI16	5.4	3.7	0.8	26	165	口縁部片完形	58	SI33	5.7	4.9	0.7	29	249	完　形
22	SI17	3.9	4.0	1.1	26	167	口縁部片完形	59	SI35	5.2	4.2	1.0	30	254	完　形
23	SI20	7.8	5.2	0.8	46	173	完　形	60	SI38	5.6	4.3	1.0	26	265	完　形
24	SI21	6.6	7.0	1.2	67	175	完　形	61	SI38	4.4	4.2	1.2	22	270	完　形
25	SI21	4.9	3.5	0.8	20	178	口縁部片完形	62	SI39	5.6	4.3	1.2	34	272	口縁部片完形
26	SI22	6.4	4.8	1.1	45	179	完　形	63	SI39	5.6	3.2	1.1	23	273	完　形
27	SI22	5.5	4.3	1.3	36	182	口縁部片完形	64	SI39	4.8	4.1	1.2	27	277	完　形
28	SI22	5.4	2.8	1.0	22	184	完　形	65	SI39	4.4	3.8	1.1	19	286	完　形
29	SI22	5.6	4.5	1.1	32	186	完　形	66	SI39	8.1	7.1	1.2	84	289	完　形
30	SI22	5.2	3.7	1.1	33	187	完　形	67	SI39	4.7	3.6	1.0	22	292	口縁部片完形
31	SI22	6.6	3.6	1.8	42	188	完　形	68	SI39	6.0	4.7	1.1	41	294	口縁部片完形
32	SI22	4.5	3.5	1.4	26	191	完　形	69	SI39	5.2	4.6	0.9	30	304	完　形
33	SI22	5.7	4.2	1.3	30	192	完　形	70	SI39	4.6	3.7	0.7	16	307	完　形
34	SI22	5.0	4.4	1.1	29	193	完　形	71	SI39	4.6	3.3	1.3	21	258	完　形
35	SI22	4.1	4.1	1.9	29	195	完　形	72	SI43	4.3	4.2	1.1	25	282	完　形
36	SI22	5.5	3.9	1.5	32	197	口縁部片完形	73	SI43	5.6	3.9	1.0	28	283	完　形
37	SI24	4.1	2.9	1.0	15	203	完　形	74	SM11	5.0	4.6	0.9	23	310	完　形

図版番号	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	台帳番号	備考
第212図 75	SM17	5.5	5.9	1.2	50	314	完形
76	SM35	5.3	4.5	0.9	27	320	完形
77	SK10	4.8	4.2	1.1	28	332	完形
78	SK37	3.7	3.0	1.0	17	334	完形
79	SK49	7.3	6.0	1.2	56	337	完形
80	SK56	6.4	4.1	1.2	37	341	完形
81	SK63	9.1	6.6	1.2	76	342	完形
82	SK86	7.9	5.4	1.0	47	351	完形
83	SK86	8.1	7.0	0.8	57	352	完形
84	SK102	5.5	3.9	1.0	26	358	完形
85	I3a$_6$	5.8	4.6	1.1	37	366	完形
86	I3a$_7$	7.7	6.4	1.6	97	367	完形
87	I3f$_3$	6.4	5.8	0.9	43	368	完形
88	I3f$_4$	6.7	4.7	1.0	34	369	完形
89	I3f$_4$	5.7	4.7	1.4	48	370	完形
90	I3f$_4$	4.6	4.4	1.3	27	371	ノッチ4 完形
91	I3f$_9$	5.6	5.9	1.4	59	372	完形
92	I3h$_3$	4.0	4.0	0.9	20	373	完形
93	I3h$_3$	5.1	3.4	1.0	23	374	完形
94	J3a$_2$	4.3	4.0	1.0	21	377	完形
95	J3b$_5$	5.7	4.6	0.9	29	383	完形
96	J3b$_5$	5.7	4.5	1.0	35	386	完形
97	J3c$_5$	6.8	5.5	0.9	45	392	完形
98	J3e$_5$	5.7	4.2	1.4	38	400	完形ノッチ3 口縁部片
99	J3e$_5$	7.6	8.2	1.0	67	399	完形
100	J3j$_5$	7.0	4.8	1.1	43	405	完形
101	J3h$_4$	4.0	3.7	0.9	18	408	完形
102	J3e$_4$	6.6	4.5	1.3	50	384	完形
第213図 103	I3f$_3$	6.2	4.5	0.9	36	441	完形
104	J3f$_2$	7.2	6.1	1.1	56	446	完形
105	I3h$_3$	4.4	4.0	1.1	23	450	完形
106	K3b$_5$	4.5	3.6	1.1	21	451	完形
107	H3a$_2$	7.0	5.6	1.4	69	452	完形
108	J3a$_1$	5.5	3.7	1.2	28	470	口縁部片 完形
109	J3a$_2$	4.5	4.4	0.9	24	473	完形
110	J3e$_1$	4.3	3.1	1.1	20	485	完形
111	J4b$_1$	6.5	3.7	1.1	34	493	口縁部片 完形
112	表採	6.2	3.7	2.3	56	503	口縁部片 完形
	SI2	(3.6)	4.1	0.9	(20)	100	半欠
	SI2	4.2	2.6	0.9	13	101	完形
	SI2	(6.4)	(5.2)	1.1	(30)	102	半欠
	SI2	(3.7)	6.2	0.9	(31)	103	半欠
	SI2	(5.2)	4.2	1.4	(28)	104	一部欠
	SI2	(5.9)	4.5	0.7	(24)	106	一部欠
	SI2	4.4	3.2	1.1	(21)	107	一部欠
	SI2	(3.8)	4.1	1.3	(26)	108	半欠
	SI2	2.9	3.1	1.5	14	109	口縁部片 完形
	SI2	3.8	2.2	1.4	16	110	完形
	SI2	5.6	5.0	1.1	40	113	完形
	SI2	(5.2)	6.1	1.2	(49)	114	半欠
	SI2	(3.2)	5.3	1.1	(27)	116	半欠
	SI2	(4.6)	3.9	1.4	(24)	117	一部欠
	SI2	3.2	3.4	1.3	18	118	完形
	SI3	6.9	3.8	1.0	34	122	完形
	SI3	(4.1)	5.1	1.0	(28)	124	半欠
	SI3	(3.7)	(4.0)	0.8	(11)	125	半欠
	SI3	4.7	4.6	0.9	24	126	完形
	SI3	5.7	5.2	1.1	41	127	完形
	SI3	7.3	4.8	1.7	63	129	口縁部片 完形
	SI3	(4.2)	4.6	1.2	(27)	130	半欠
	SI3	(3.5)	3.0	1.1	(15)	132	半欠
	SI3	4.2	3.9	0.9	(17)	133	口縁部片 半欠
	SI3	3.5	2.5	0.8	11	134	完形
	SI3	2.5	2.0	0.9	7	135	完形
	SI3	4.5	3.0	1.1	22	136	完形
	SI3	(2.8)	3.0	1.0	(11)	137	半欠
	SI3	(2.7)	4.6	1.2	(19)	138	半欠
	SI3	2.9	5.6	1.2	(24)	139	半欠
	SI3	(3.3)	4.1	1.0	(18)	140	半欠
	SI3	4.5	4.6	1.6	35	141	完形
	SI5	(3.3)	3.2	1.0	(27)	147	半欠
	SI5	3.5	3.4	1.3	20	148	完形
	SI5	(3.6)	5.2	0.7	(15)	149	半欠
	SI5	4.3	2.8	0.7	14	151	完形
	SI5	5.5	4.8	1.3	49	153	口縁部片 完形
	SI7	(3.7)	4.5	1.0	(19)	155	半欠
	SI7	3.4	3.1	1.1	17	156	完形
	SI7	(4.5)	4.8	1.0	(30)	157	一部欠

図版番号	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	台帳番号	備考	図版番号	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	台帳番号	備考
	SI7	(3.6)	3.9	1.1	(30)	158	半欠		SI26	5.2	5.0	1.5	(48)	217	半欠
	SI7	(3.7)	(2.4)	1.3	(9)	159	半欠		SI28	(3.3)	4.0	1.2	(19)	220	半欠
	SI8	(5.1)	3.2	1.1	(32)	161	一部欠		SI28	(6.6)	5.7	1.0	(49)	221	一部欠
	SI8	5.3	4.7	1.2	31	515	完形		SI28	6.1	5.2	1.0	45	222	完形
	SI9	4.3	3.9	1.1	21	162	完形		SI28	(1.7)	3.8	0.9	(7)	223	半欠
	SI9	(3.6)	4.3	1.3	(25)	163	半欠		SI28	(3.5)	3.8	1.0	(14)	224	半欠
	SI11	(5.0)	6.4	1.1	(37)	309	半欠		SI28	(4.5)	4.9	1.2	(33)	226	半欠
	SI13	(3.7)	(4.3)	0.8	(12)	164	半欠		SI28	(3.4)	3.7	0.9	(16)	228	半欠
	SI14	(3.3)	4.2	0.8	(14)	168	半欠		SI28	(4.4)	3.0	0.9	(13)	232	半欠
	SI16	(3.9)	5.8	1.2	(26)	166	口縁部片半欠		SI29	3.9	4.1	1.3	25	234	完形
	SI17	(4.1)	4.3	0.8	(20)	522	半欠		SI30	6.7	4.9	1.1	42	235	完形
	SI17	5.3	4.0	0.6	20	523	完形		SI30	4.2	3.6	0.6	9	237	完形
	SI19	4.8	3.1	1.0	19	169	完形		SI31	(4.5)	5.3	1.3	(42)	239	半欠
	SI19	(3.5)	4.0	1.1	(17)	170	半欠		SI31	(4.8)	5.7	1.2	(41)	241	半欠
	SI20	(4.3)	4.9	1.0	(21)	171	半欠		SI31	4.5	4.0	1.1	22	243	完形
	SI20	4.3	4.5	1.4	31	172	完形		SI32	(4.4)	8.2	0.9	(3.7)	245	半欠
	SI20	4.0	4.3	1.4	28	174	完形		SI32	(5.1)	3.8	0.8	(19)	246	半欠
	SI21	5.0	4.2	1.0	23	176	完形		SI32	(1.3)	4.3	0.7	(12)	247	半欠
	SI21	(7.1)	5.8	1.2	(48)	177	一部欠		SI33	3.1	3.1	1.0	14	250	完形
	SI22	5.2	3.0	1.2	24	180	口縁部片完形		SI33	(4.1)	3.6	1.1	(19)	251	半欠
	SI22	(2.8)	3.8	1.0	(14)	181	半欠		SI35	(7.0)	5.0	1.4	(66)	252	一部欠
	SI22	5.1	5.2	1.0	46	183	完形		SI35	4.2	4.9	0.6	(16)	253	半欠
	SI22	5.2	4.3	1.2	25	185	完形		SI37	(5.4)	5.6	1.1	(38)	255	半欠
	SI22	(5.2)	5.2	1.4	(44)	189	半欠		SI37	(6.3)	3.6	1.4	(35)	256	一部欠
	SI22	(5.8)	4.2	1.1	(29)	190	半欠		SI37	(4.2)	3.8	1.6	(21)	257	半欠
	SI22	(5.0)	4.5	1.3	(27)	194	半欠		SI38	4.9	2.9	1.1	22	259	完形
	SI22	5.0	3.7	1.1	24	196	完形		SI38	(5.0)	3.1	0.8	(15)	260	半欠
	SI23	2.9	3.6	1.0	12	198	完形		SI38	(4.0)	4.4	1.0	(21)	261	半欠
	SI24	5.9	4.0	0.9	58	199	完形		SI38	(3.9)	4.7	1.1	(24)	262	口縁部片半欠
	SI24	(3.2)	4.4	0.8	(15)	200	半欠		SI38	(3.9)	4.0	0.8	(17)	263	半欠
	SI24	(3.5)	3.4	0.7	(30)	201	半欠		SI38	(4.7)	3.7	0.9	(20)	264	半欠
	SI24	(3.1)	4.3	(1.1)	(18)	202	半欠		SI38	(6.2)	3.2	1.2	(28)	266	口縁部片一部欠
	SI24	(3.0)	4.8	0.8	(16)	205	半欠		SI38	(4.7)	5.0	1.4	(41)	267	半欠
	SI26	(4.3)	4.4	1.1	(30)	207	半欠		SI38	(4.6)	3.9	1.0	(17)	268	半欠
	SI26	4.2	3.2	1.1	14	209	完形		SI38	6.3	4.7	1.4	49	269	完形
	SI26	4.3	4.6	0.9	22	210	完形		SI38	5.6	4.0	1.2	29	271	完形
	SI26	(9.2)	0.7	1.3	(110)	211	一部欠		SI39	4.1	3.4	0.9	14	274	完形
	SI26	(3.5)	3.7	0.7	(14)	215	半欠		SI39	5.8	5.2	1.1	39	275	完形
	SI26	4.6	4.2	1.2	32	216	完形		SI39	5.5	4.6	0.9	31	276	完形

図版番号	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	台帳番号	備考
	SI39	5.6	4.1	1.2	37	278	完形
	SI39	(3.0)	2.9	0.9	(8)	279	半欠
	SI39	(3.4)	3.4	1.1	(18)	287	半欠
	SI39	(5.1)	3.8	1.3	(20)	288	半欠
	SI39	(3.4)	2.8	0.8	(10)	290	半欠
	SI39	(5.2)	4.5	0.8	(26)	291	半欠
	SI39	(5.8)	5.2	0.7	(19)	293	半欠
	SI39	3.5	3.6	0.9	12	295	完形
	SI39	(4.5)	4.2	0.8	(17)	296	半欠
	SI39	(4.7)	3.9	0.7	(15)	297	半欠
	SI39	(7.6)	5.6	0.8	(43)	298	半欠
	SI39	4.8	3.9	1.8	39	299	完形
	SI39	4.7	3.6	1.0	21	300	完形
	SI39	6.0	4.6	0.7	21	301	完形
	SI39	(4.3)	5.7	1.1	(32)	302	半欠
	SI39	(5.1)	4.4	1.1	(26)	303	半欠
	SI39	4.7	4.0	0.9	18	305	完形
	SI39	(8.5)	5.6	1.1	(56)	306	一部欠
	SI39	3.4	3.1	0.8	12	308	完形
	SI43	5.6	6.9	1.4	59	280	完形
	SI43	(4.9)	4.8	1.0	(29)	281	半欠
	SI43	4.4	2.8	1.0	12	284	完形
	SI43	(4.6)	4.4	0.9	(20)	285	半欠
	SM13	5.1	3.9	1.0	24	311	完形
	SM17	4.9	4.1	1.0	25	312	完形
	SM17	3.8	4.0	0.7	16	313	完形
	SM26	8.1	4.9	1.4	55	315	完形
	SM34	3.5	4.3	1.3	19	316	完形
	SM35	(4.2)	5.5	1.0	(25)	317	半欠
	SM35	(4.2)	4.3	1.1	(24)	318	半欠
	SM35	(5.3)	4.2	1.0	(24)	319	半欠
	SD4	(4.7)	(5.5)	1.1	(26)	321	半欠
	SD5	(3.3)	4.1	1.0	(18)	322	半欠
	SD5	3.5	2.8	1.0	14	323	完形
	SD5	(2.8)	3.7	0.9	(13)	324	口縁部片 半欠
	SD5	5.1	3.2	1.1	20	325	口縁部片 完形
	SD5	6.4	5.3	1.3	46	326	完形
	SD8	(5.6)	4.8	1.2	(38)	327	半欠
	SD8	5.5	4.3	1.0	36	328	完形

図版番号	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	台帳番号	備考
	SD8	5.3	4.2	0.9	26	329	完形
	SD8	(3.7)	5.2	0.9	(21)	330	半欠
	SD8	(5.3)	4.6	1.2	(35)	331	半欠
	SD8	5.0	4.0	1.4	30.1	521	完形
	SK21	4.7	4.2	0.8	13	333	完形
	SK47	6.9	5.9	1.0	57	335	完形
	SK48	(3.3)	3.2	0.8	(11)	336	半欠
	SK52	(4.7)	3.6	0.9	(19)	338	一部欠
	SK52	4.6	4.7	1.0	27	339	完形
	SK52	3.9	2.8	1.1	12	340	完形
	SK63	5.5	4.2	1.1	34	343	完形
	SK63	(3.0)	4.0	1.1	(18)	344	半欠
	SK63	(3.7)	5.0	1.0	(26)	345	半欠
	SK63	4.6	5.0	1.1	27	346	完形
	SK63	4.8	4.5	1.1	33	347	口縁部片 完形
	SK63	4.5	4.3	0.9	20	348	完形
	SK63	4.8	4.9	0.9	30	349	完形
	SK85	(4.4)	4.1	1.1	(22)	350	半欠
	SK86	4.7	4.2	1.0	23	353	完形
	SK86	4.8	6.8	0.9	36	354	完形
	SK88	(2.4)	3.1	0.8	(7)	355	半欠
	SK92	4.8	3.4	0.7	13	356	完形
	SK100	(5.1)	4.4	1.1	(24)	357	半欠
	SK106	(4.7)	5.7	1.0	(32)	359	口縁部片 半欠
	SK106	6.0	5.1	1.2	40	360	完形
	SK106	(4.9)	6.1	1.1	(36)	361	口縁部片 半欠
	SK113	4.1	3.8	0.9	16	362	完形
	SK123	(4.8)	5.6	0.9	(30)	363	半欠
	SK123	5.1	5.5	1.1	34	364	完形
	SK123	(5.7)	4.2	1.0	(25)	365	一部欠
	$I3j_7$	4.7	4.4	1.2	3.0	375	完形
	$I4j_2$	(5.1)	4.6	1.4	(33)	376	口縁部片 半欠
	$J3a_6$	(2.9)	3.3	1.2	(15)	378	半欠
	$J3a_6$	4.8	4.8	1.2	32	379	完形
	$J3b_5$	4.2	3.6	1.1	21	380	完形
	$J3b_5$	4.8	4.2	0.9	28	381	完形
	$J3b_5$	2.9	4.0	1.0	14	382	完形
	$J3b_5$	5.3	4.2	1.0	27	385	完形
	$J3b_5$	5.2	4	1.1	27	387	完形

図版番号	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	台帳番号	備考
	J3b5	5.1	4.2	1.0	26	389	完形
	J3b5	(7.2)	5.0	1.0	(47)	390	一部欠
	J3c4	(6.8)	7.0	1.0	(56)	391	半欠
	J3c5	(4.2)	3.1	1.1	(20)	393	口縁部片 半欠
	J3d3	(3.6)	3.9	0.8	(13)	394	半欠
	J3d5	(3.9)	4.2	1.5	(30)	395	半欠
	J3d5	(5.8)	7.0	0.9	(40)	396	半欠
	J3d5	(5.1)	5.9	1.2	(36)	397	半欠
	J3d5	(3.7)	3.6	1.0	(16)	398	半欠
	J3f1	3.8	3.0	0.8	10	401	完形
	J3f5	(7.9)	7.7	1.1	(77)	402	完形
	J3g1	3.8	5.6	1.3	30	403	完形
	J3g2	(3.0)	4.4	1.3	(18)	404	半欠
	J3j5	6.3	4.6	1.0	32	406	完形
	K3b6	(5.7)	4.2	1.2	(33)	407	一部欠
	J3e4	5.9	6.0	1.3	42	388	完形
	I3j9	6.4	5.3	1.1	49	434	完形
	K3d1	5.5	4.7	0.8	49	435	完形
	I4h1	5.3	5.0	1.0	33	436	完形
	K3b0	4.6	3.7	1.0	21	437	口縁部片 完形
	K2a8	5.0	4.7	0.8	22	438	完形
	J3c4	3.9	3.6	0.9	14	439	完形
	I3h6	7.3	4.9	1.0	46	440	完形
	J3d8	5.4	4.7	1.0	30	442	口縁部片 完形
	J3a4	(5.2)	3.8	0.9	(19)	443	一部欠
	H3h6	5.8	5.5	1.1	46	444	完形
	I4i1	6.0	3.6	1.0	28	445	完形
	J3d7	4.5	3.2	1.1	20	447	完形
	J3b6	5.3	4.2	0.9	29	448	口縁部片 完形
	J3b6	3.6	2.5	0.9	10	449	完形
	I2d0	(6.1)	5.5	1.6	(5.3)	453	半欠
	I3b6	6.0	4.7	1.4	47	454	完形
	I3g0	(5.4)	6.3	1.3	(57)	455	半欠
	I3h3	7.4	5.4	1.0	56	456	完形
	I3h6	(5.8)	5.1	1.1	(47)	457	一部欠
	I3i0	6.5	5.8	1.1	51	458	完形
	I3i9	5.3	4.1	0.9	25	459	完形
	I3j6	(4.7)	3.5	1.0	(17)	460	半欠
	I3j9	6.0	6.0	1.1	50	461	完形
	I4f1	(7.3)	4.4	1.0	(43)	462	半欠
	I4j1	(6.8)	5.9	1.0	(53)	463	半欠
	J2c0	5.9	5.0	1.3	44	464	完形
	J2d0	(3.7)	3.9	1.1	(22)	465	半欠
	J2e9	(3.9)	5.3	1.0	(19)	466	半欠
	J3a1	(3.7)	6.3	0.9	(26)	467	半欠
	J3a1	(4.1)	3.8	1.1	(21)	468	半欠
	J3a1	(3.6)	5.5	1.2	(28)	469	半欠
	J3a2	(3.4)	3.5	1.1	(14)	471	半欠
	J3a2	(4.1)	4.3	1.3	(29)	472	半欠
	J3a4	(3.8)	4.5	1.0	(22)	474	半欠
	J3a4	(5.9)	4.3	0.9	24	475	半欠
	J3a6	(2.8)	4.1	0.6	(9)	476	半欠
	J3a6	(3.7)	4.2	1.0	(21)	477	半欠
	J3a7	(6.1)	5.9	1.3	(45)	478	半欠
	J3b6	(4.5)	4.2	1.0	(21)	479	半欠
	J3c6	(3.8)	5.1	0.9	(23)	480	半欠
	J3c1	(7.7)	6.1	0.9	(50)	481	口縁部片 半欠
	J3d3	(3.9)	5.5	1.2	(26)	482	半欠
	J3d3	6.3	5.2	1.4	54	483	完形
	J3d8	(4.2)	3.9	1.1	(19)	484	半欠
	J3e3	(3.9)	3.7	0.9	(11)	486	半欠
	J3e3	(4.9)	5.9	0.9	(36)	487	半欠
	J3f3	(4.5)	5.6	1.0	(34)	488	半欠
	J3f4	(4.1)	4.0	0.8	(18)	489	半欠
	J3f6	(3.1)	3.0	1.1	(14)	490	半欠
	J3g5	(3.8)	5.8	1.4	(36)	491	口縁部片 半欠
	J3j8	(6.2)	5.7	1.5	(53)	492	半欠
	J4b2	(3.2)	4.3	0.9	(14)	494	半欠
	J4b3	4.7	4.9	1.0	29	495	完形
	J4b3	(5.1)	5.3	0.6	(22)	496	半欠
	J4c1	4.8	4.0	1.0	23	497	完形
	J4c1	5.9	4.7	1.0	32	498	完形
	J4c2	(4.2)	5.3	1.0	(23)	499	半欠
	K3a3	(3.4)	4.6	1.0	(17)	500	口縁部片 半欠
	K3b6	(5.8)	5.2	1.0	(33)	501	半欠
	表採	5.4	3.0	1.0	24	502	完形
	表採	(4.4)	4.0	1.1	(21)	504	半欠

※胴部は未記入，半欠は半分欠損。

表 9　管状土錘・円板一覧表

図版番号	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備　考	図版番号	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備　考
第213図 113	J3j$_5$	6.2	4.5	3.8	145	管状土錘	11	SI 37	3.6	3.9	1.0	16	円　板
1	SI 2	3.2	3.2	1.0	14	円　板	12	SK63	5.1	5.4	0.1	28	有孔円板
2	SI 5	3.5	3.8	0.8	14	円　板	13	J3h$_4$	4.3	4.3	0.8	18	円　板
3	SI 5	4.4	4.5	1.0	26	穿孔途中	14	J3d$_6$	3.8	3.9	0.7	15	円　板
4	SI 5	4.8	4.8	1.0	31	穿孔途中	15	J3j$_4$	6.5	6.5	1.3	77	円　板
5	SI 5	4.8	4.4	0.8	24	円　板	16	K3b$_0$	4.7	4.5	0.9	26	円　板
6	SI 11	3.4	3.7	0.8	15	円　板	17	F4i$_1$	4.2	4.2	1.0	22	円　板
7	SI 11	4.2	4.2	1.1	25	円　板	18	J3b$_4$	4.2	4.5	0.9	21	円　板
8	SI 34	3.3	3.5	1.0	17	円　板	19	J3b$_4$	2.6	2.2	0.6	6	円　板
9	SI 34	3.4	3.4	0.8	12	円　板	20	J3b$_4$	3.0	3.0	0.8	10	円　板
10	SI 37	3.2	3.2	0.9	11	円　板							

4　把手・土製品

表10　土製品一覧表

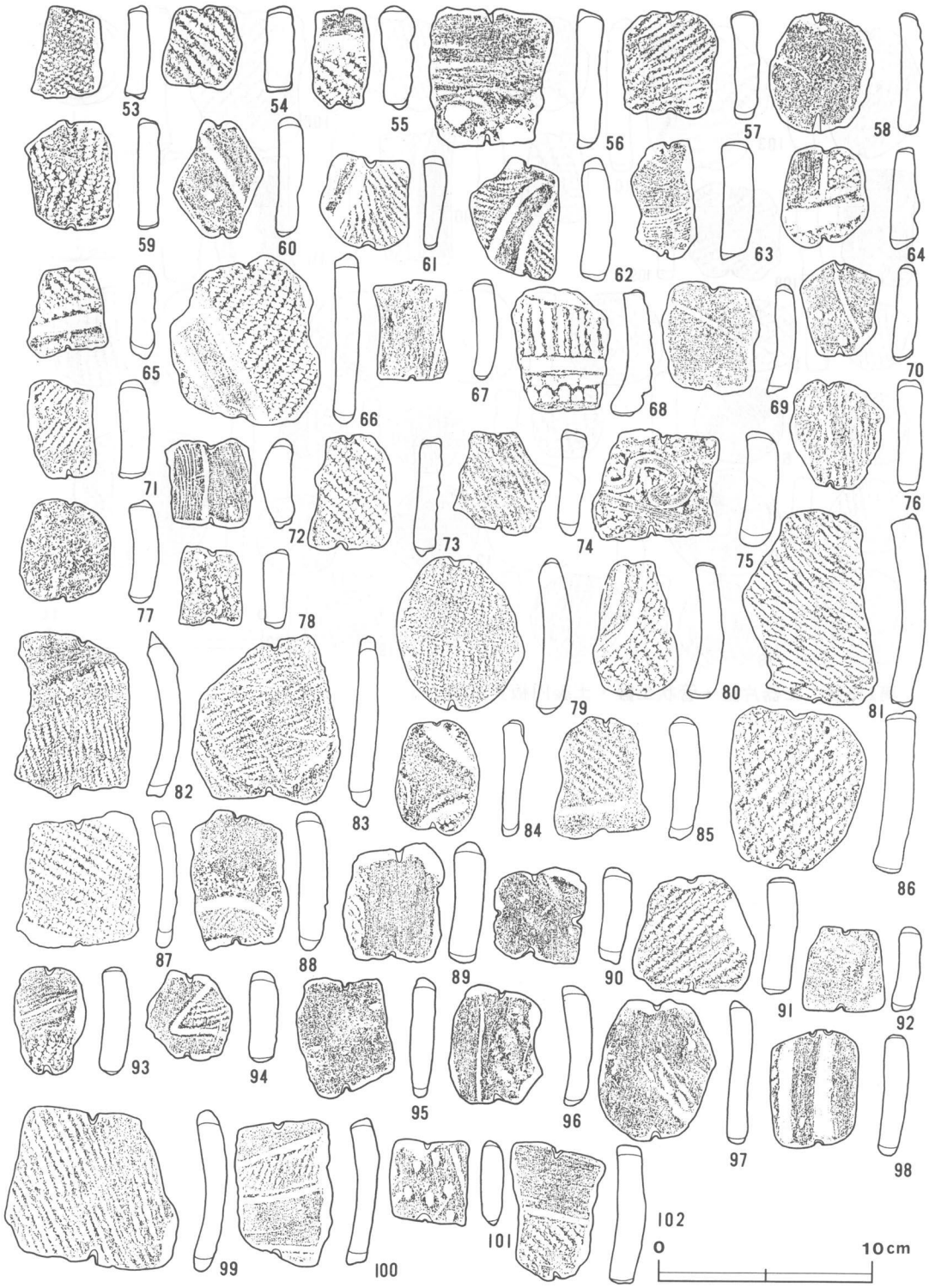
図版番号	器種	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	図版番号	器種	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
第214図 15	土　偶	J3g$_5$	(5.8)	(6.1)	3.9	95	胸　部	18	蓋形土製品	SM30	6.5	(5.4)	3.0	69	
15	土　偶	J2e$_0$	(8.3)	(3.9)	4.0	95	胸　部	19	垂飾り	SI28	5.7	5.7	1.0	50	2孔
17	土　偶	J3a$_1$	(6.0)	(4.1)	2.9	40	頭・胸部	20	耳　栓	J3b$_1$	2.5	2.5	1.4	9	

5　貝刃・貝製品

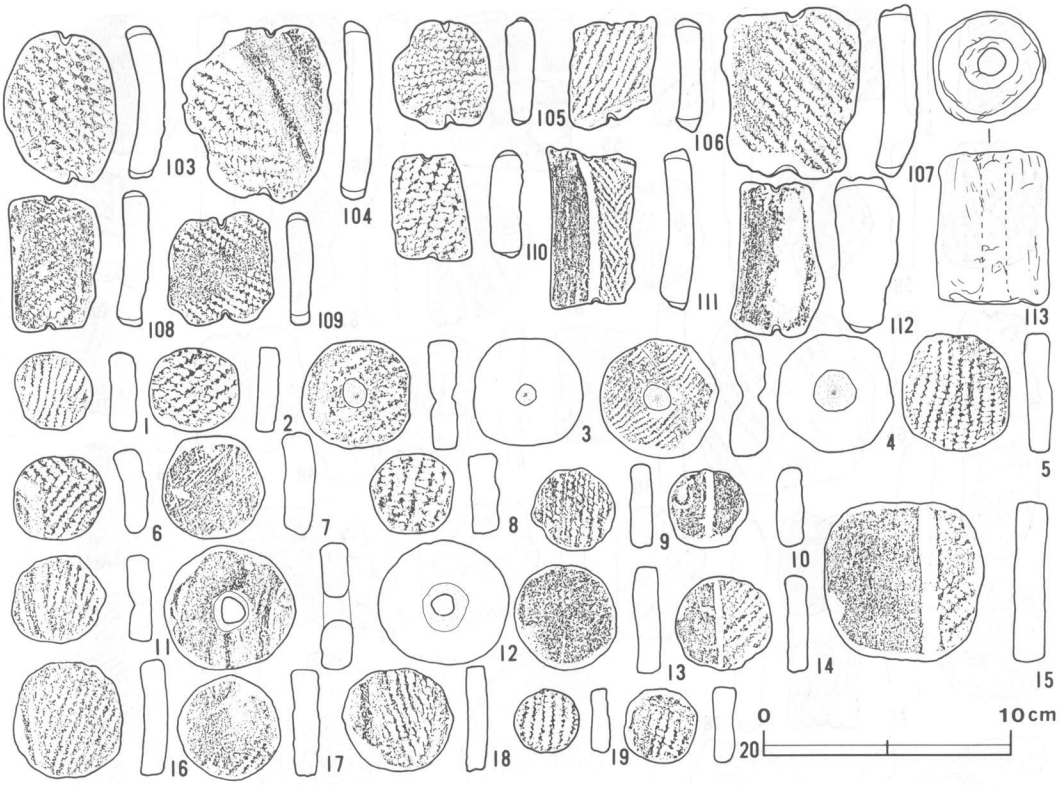
表11　貝刃一覧表

図版番号	出土地点	層位	大きさ(cm)		重量	貝　種	備考	図版番号	出土地点	層位	大きさ(cm)		重量	貝　種	備考
			高	長	(g)						高	長	(g)		
第215図 1	SM1	20	4.8	6.2	14	ハマグリ	右	第215図 11	SM17	37	5.9	6.2	21	ハマグリ	右
2	SM1	24	4.0	5.0	8	ハマグリ	左	12	SM26	3	2.1	6.2	4	ハマグリ	不明
3	SM10	15	4.8	5.9	13	ハマグリ	右	13	SM28	1	4.6	6.1	13	ハマグリ	左
4	SM11	覆土	5.1	6.7	18	ハマグリ	左	14	SM28	1	3.2	4.2	4	ハマグリ	左
5	SM11	8	5.0	6.2	19	ハマグリ	左	15	SM35	5	5.2	6.7	22	ハマグリ	右
6	SM11	13	4.4	5.7	14	ハマグリ	左	16	SM35	5	5.1	6.5	16	ハマグリ	左
7	SM11	12	5.1	6.8	20	ハマグリ	左	17	SM35	5	4.9	6.0	22	ハマグリ	右
8	SM11	3	4.5	5.9	12	ハマグリ	右	18	SM35	4	5.6	6.6	21	ハマグリ	左
9	SM17	37	5.7	7.4	23	ハマグリ	右	19	SM10	4	5.2	6.1	19	カガミガイ	右
10	SM17	22	5.7	7.3	22	ハマグリ	右								

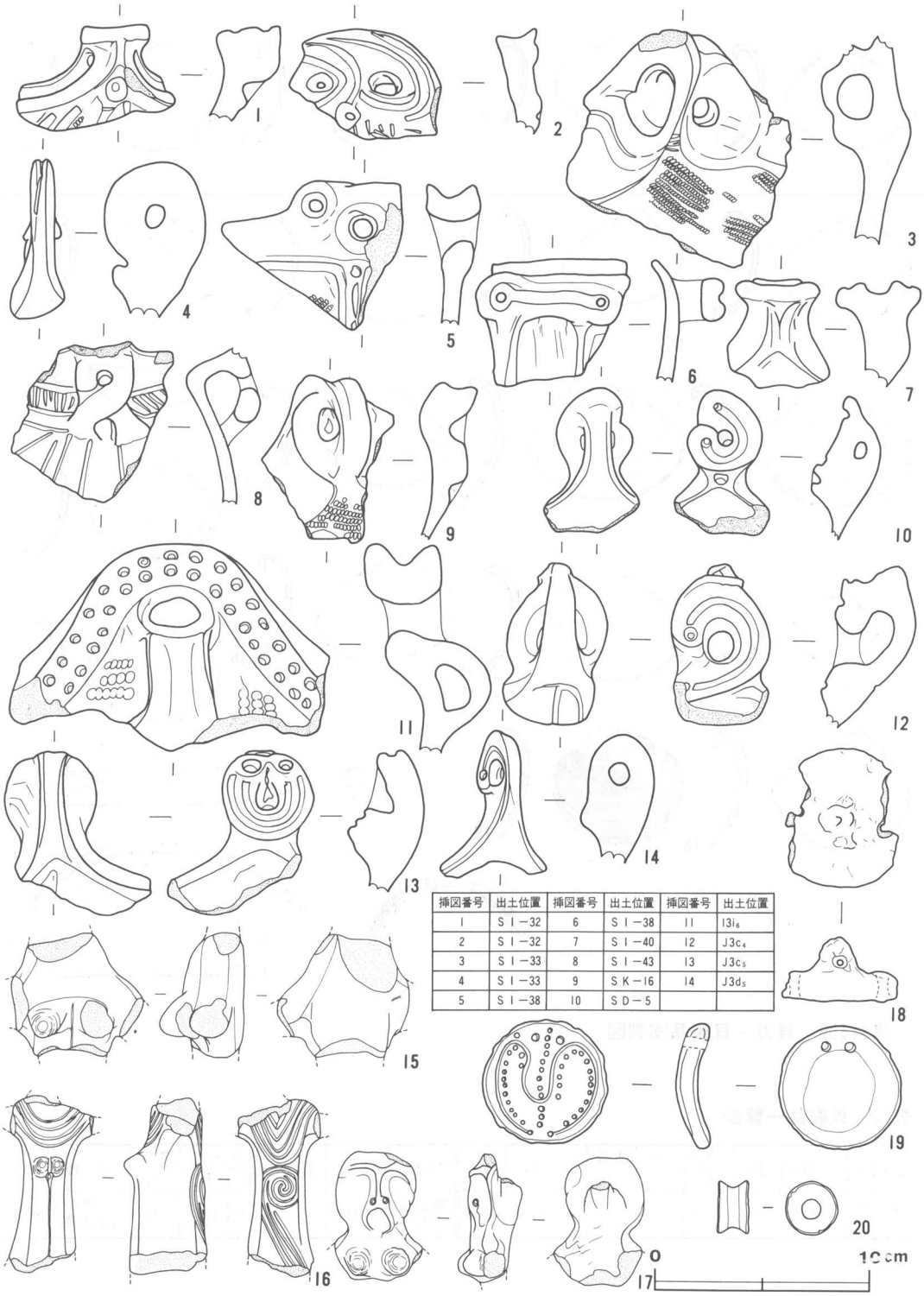
第211図　土器片錘実測図　(1)



第212図　土器片錘実測図　(2)



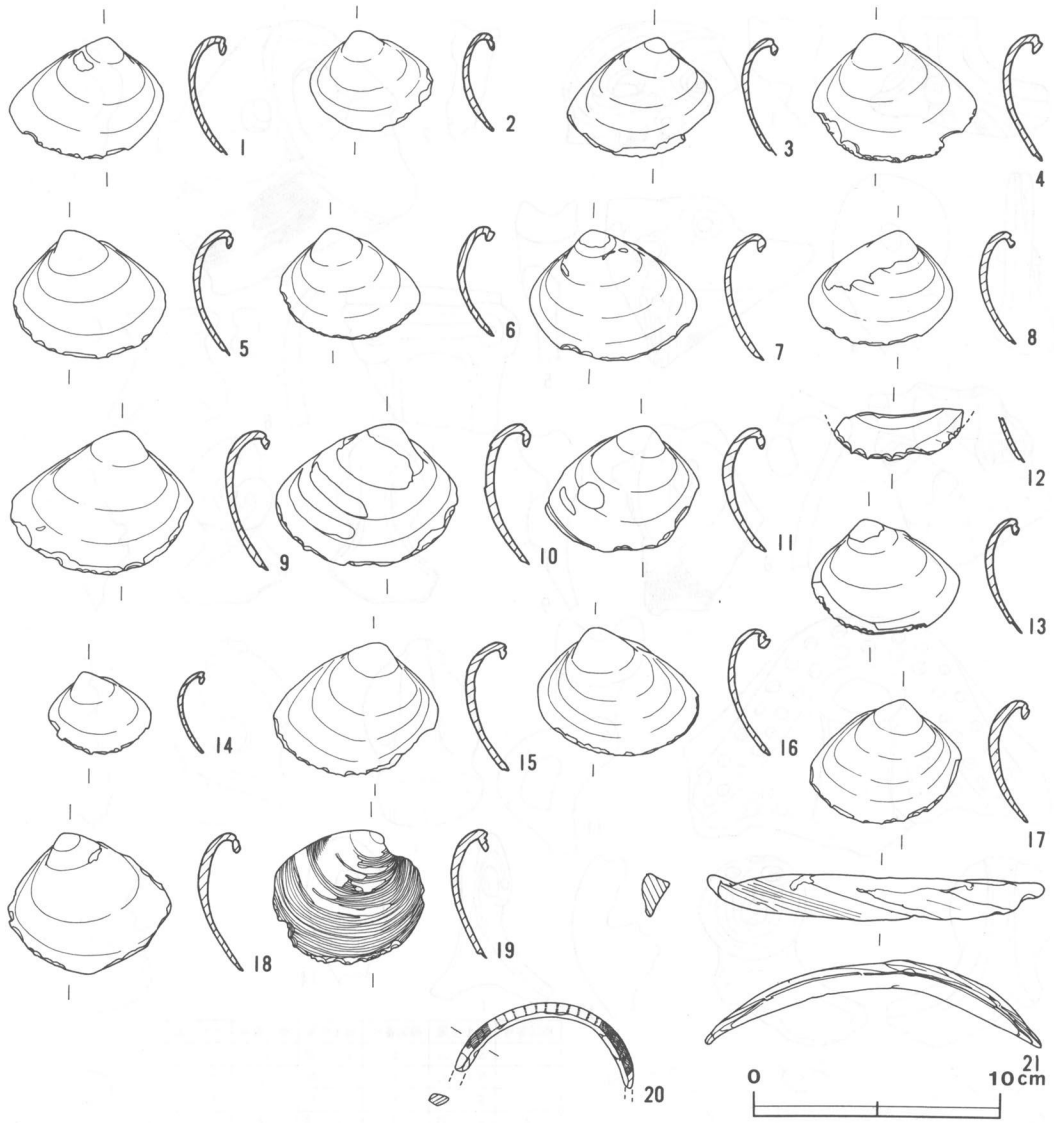
第213図　土器片錘・管状土錘・土製円板実測図　(3)



挿図番号	出土位置	挿図番号	出土位置	挿図番号	出土位置
1	S I −32	6	S I −38	11	I3i$_6$
2	S I −32	7	S I −40	12	J3c$_4$
3	S I −33	8	S I −43	13	J3c$_5$
4	S I −33	9	S K −16	14	J3d$_5$
5	S I −38	10	S D −5		

0 10cm

第214図　把手・土製品実測図



第215図　貝刃・貝製品実測図

表12　貝製品一覧表

図版番号	出土地点	層位	大きさ(cm)		重量	貝　種	備考	図版番号	出土地点	層位	大きさ(cm)		重量	貝　種	備考
			高	長	(g)						高	長	(g)		
第215図 20	SM26	3	1.0	7.2	6	ベンケイガイ	貝輪	第215図 21	SM11	5	1.8	13.7	32	ミミガイ科 (あわび貝類)	垂飾り

第4章　ま　と　め

第1節　遺　　構

南三島遺跡5区から検出された遺構を時代別に分けると次のとおりである。

時　代	遺構名	数	時　代	遺構名	数
縄文時代	竪穴住居跡	24軒	弥生時代	竪穴住居跡	1軒
	土　　坑	113基	古墳時代	竪穴住居跡	19軒
	埋　　甕	14基	平安時代	竪穴住居跡	1軒
	炉　　穴	1基	中世以降	地下式坑	9基
	屋外炉	5基		溝	12条
	地点貝塚	35基		井戸状遺構	1基

以下調査によって明らかになった事実と問題点について遺構ごとにまとめることにする。

1　竪穴住居跡について

(1)　縄文時代

竪穴住居跡は24軒で，調査区の中央部から南側にかけて検出されている。そのうち約25%は重複しているが，覆土の堆積状態などからでも新旧関係の明確にならないものが一部みられる。出土した土器などにより時期が判定できたものは23軒であり，時期不明の1軒を含めて縄文時代中期後葉から縄文時代後期前葉の住居跡で，1・2・6・7区同様ほぼ継続して集落が営まれていたものと思われる。集落の分析には，時期の判定できたこれらの23軒の住居跡を使用して時期区分を次のように行った。

Ⅰ期 ……加曽利EⅢ式期の土器が出土した住居跡（第2・3・7・26・31号住居跡）

Ⅱ期 ……加曽利EⅢ～EⅣ式期の土器が出土した住居跡（第8号住居跡）

Ⅲ期 ……称名寺式期の土器が出土した住居跡（第11・15・33・40・42・44・45号住居跡）

Ⅳ期 ……堀之内Ⅰ式期の土器が出土した住居跡（第4・12・13・14・32・38・39・41・43・46号住居跡）

Ⅰ期の住居跡は5軒検出されているが，この期の集落は，2・6・7区を中心に生活が営まれていたものと思われる。2区及び6・7区に検出された加曽利EⅢ式期の住居跡で5区に近いものは，2区では，第66・73・101・114号住居跡，6区では，第74・85号住居跡である。Ⅱ期の住居跡は，わずか1軒のみで，この住居跡も6区で営まれた集落の一部と思われ南西側に位置している。

表13　住居跡分類集計表

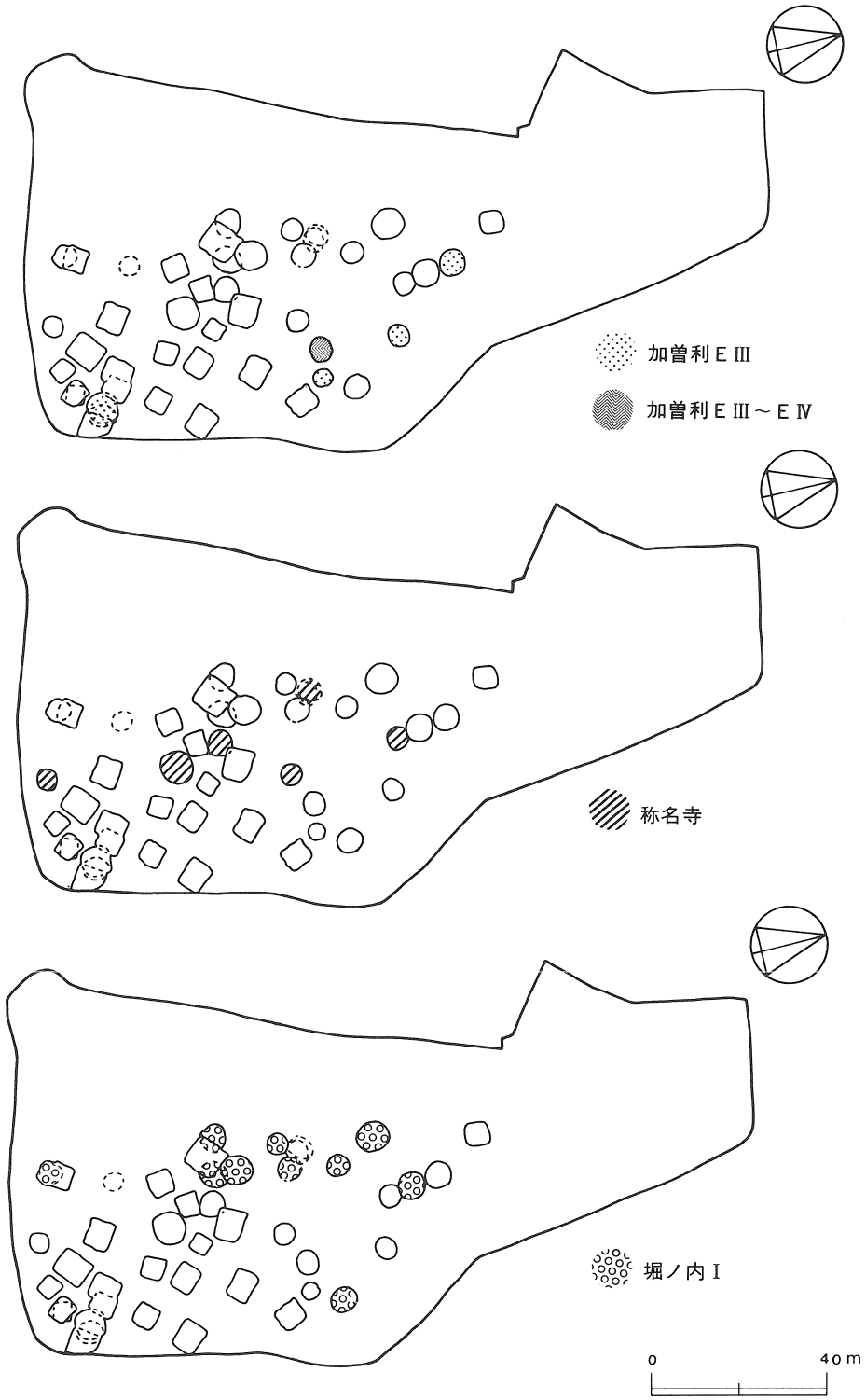
時期	長形 ＼ 形状 ＼ 炉の有無	円形 炉	円形 なし	楕円形 炉	楕円形 なし	合計
加曽利EIII式期	未満 ～ 4.0	1				1
	以上 未満 4.0 ～ 4.5					
	4.5 ～ 5.0					
	5.0 ～ 5.5	1		1		2
	5.5 ～ 6.0					
	6.0 ～ 6.5					
	6.5 ～			1	1	2
	小計	2		2	1	5
加曽利EIII～IV式期	～ 4.0					
	4.0 ～ 4.5					
	4.5 ～ 5.0					
	5.0 ～ 5.5				1	1
	5.5 ～ 6.0					
	6.0 ～ 6.5					
	6.5 ～					
	小計				1	1
称名寺式期	～ 4.0					
	4.0 ～ 4.5					
	4.5 ～ 5.0	1			1	2
	5.0 ～ 5.5	2		1		3
	5.5 ～ 6.0					
	6.0 ～ 6.5					
	6.5 ～			2		2
	小計	3		3	1	7
堀之内I式期	～ 4.0					
	4.0 ～ 4.5					
	4.5 ～ 5.0			1		1
	5.0 ～ 5.5		1	1		2
	5.5 ～ 6.0			2		2
	6.0 ～ 6.5			1		1
	6.5 ～			4		4
	小計		1	9		10
	時期不明			1		1
	合計	5	1	15	3	24

Ⅲ期になると，７軒の住居跡が検出され，１・２・６・７区にも同時期の住居跡が検出されているが，住居跡軒数などから当調査区が集落の中心となっていたものと思われる。また，第44・45号住居跡が重複していることから，建替えなどが行われたものと思われる。Ⅳ期の住居跡は，10軒と最も多く，しかも，１・２・６・７区には検出されなかった時期の住居跡である。第216図の住居跡分布図をみると，J3・K3区にかけては同時期の住居跡が検出されていないことから，集落の中でも広場として利用されていた空間とも考えられる。さらに，当遺跡の南端に第32号住居跡が検出されていることから，今後調査される３区にも集落が広がるものと考えられる。

住居跡の平面形状と規模についてみると，Ⅰ期の住居跡は５軒検出され，楕円形３軒に対して，円形は２軒である。規模では，長径5.0ｍ以上～5.5ｍ未満の住居跡と，6.5ｍ以上の住居跡がそれぞれ２軒ずつと，4.0ｍ未満の小型の住居跡が１軒である。Ⅱ期は，楕円形を呈して，長径5.0ｍ以上～5.5ｍ未満の住居跡が１軒のみである。Ⅲ期は，住居跡の数は，やや増加して７軒検出されている。平面形は，楕円形４軒，円形３軒でほぼ同数である。規模では，長径4.5ｍ以上～5.5ｍ未満の住居跡が５軒で多く，6.5ｍ以上の大型の住居跡が２軒である。Ⅳ期には，住居跡の数はさらに多くなり，10軒が検出されている。平面形は，円形の住居跡１軒，楕円形の住居跡が９軒で，圧倒的に楕円形の住居跡が多い。また，規模は，長径５ｍ以上～６ｍ未満の中型の住居跡と6.5ｍ以上の大型の住居跡が各々４軒ずつで大半を占めている。また，第39号住居跡は，いわゆる柄鏡形住居跡で，柄部を除いた主体部は，長径4.94ｍ，短径4.50ｍの楕円形を呈して比較的小型である。炉は，中央からやや南側に位置する地床炉である。主柱穴は確認されなかったが，13か所の壁柱穴が検出されている。壁柱穴については，当遺跡の縄文時代中期から後期にかけての住居跡から検出されてはいないが，形状や規模についてはそれ程の差が認められないことから，柄鏡形住居跡は特殊な住居跡ではなく，一般的な住居跡の一つであったものと思われる。類例を龍ヶ崎市内に求めてみると，「廻り地Ａ遺跡」で４軒，「仲根台Ｂ遺跡」で３軒検出されている。

炉についてみると，炉を伴う住居跡は20軒で，83％に当る。これまでに調査を終えた１・２・６・７区と比較すると，１・２区で64％，６・７区で54％の住居跡が炉を伴っていることから，当遺跡の住居跡の方が炉を伴う割合いは高くなっている。

炉は，形態別に２類に分類することができる。１類は，床面を皿状，椀状に掘りくぼめた地床炉で，当遺跡で検出された住居跡の大半を占めている。２類は，深鉢形土器の破片を炉壁に沿って部分的に囲っている『土器片囲い炉』で，第38・41号住居跡の２軒が検出されている。また，第38・39・41・44号住居跡廃絶後に貝殻が投棄されて地点貝塚が形成されているが，これら貝塚直下の炉内覆土には，白い灰が全体的には軟らかく，一部は硬く堆積しており注目される。



第216図　縄文時代中期加曽利ＥⅢ・ＥⅢ～ＥⅣ，縄文時代後期称名寺式・
堀之内Ⅰ式期住居跡分布図

(2) 弥生時代

竪穴住居跡は，第１号住居跡の１軒のみで，調査区の最北部に位置し，平面形は，長軸5.4ｍ，短軸5.16ｍの隅丸方形を呈している。炉は，ほぼ中央部に位置する地床炉で，貯蔵穴が，南西コーナー部寄りに検出されている。これまで調査を終えた１・２・６・７区からは，弥生時代の住居跡や遺物は検出されず，また，当遺跡からも１軒ということで集落構成に検討を加えることはできないので，１軒のみ検出された事実を報告しておくにとどめたい。

(3) 古墳時代前期（五領期）

五領期に比定される竪穴住居跡は，調査区の南部から19軒検出されている。その内住居跡の約25％に当る５軒が縄文時代や同時期の住居跡と重複している。これらの住居跡を出土遺物から下記の２期に分けて各住居跡の特徴や集落の構成及び変遷についてふれてみたい。

Ⅰ期　当遺跡から出土した五領期の土器の中でも，やや古い方に属する第６群第１類の土器を伴う住居跡。（第18・20・22・25・28・37号住居跡）

Ⅱ期　当遺跡から出土した五領期の土器の中でも，比較的新しい方に属する第６群第２類の土器を伴う住居跡。（第５・９・10・16・17・19・21・24・27・29・30・34・35号住居跡）

Ⅰ期の住居跡は，６軒検出されており，第218図の住居跡分布図をみると半円状に集落が構成されているものと思われる。さらに，Ⅱ期になると，13軒の住居跡が検出され，Ⅰ期の内側にほぼ円形状を呈して集落が構成される住居跡群と，これらの集落の北東側に構成される小ブロックの住居跡群の２か所に分かれる。Ⅰ・Ⅱ期を通して共通することは，集落の中央部に当るJ3区には，同時期の住居跡が検出されていないことから広場的な要素を持った空間と考えられる。

なお，昭和57年度に調査した２区からは，五領期の住居跡が４軒検出されているが，５区に隣接している第82・84号住居跡は，今回の集落の一部を構成するものと考えられ，なかでも，第84号住居跡は，出土遺物や規模からⅠ期に属するものと考えられる。第63・187号住居跡の２軒は，今回の集落とかなり距離が離れていることから同一グループとは考えられないので，その存在については，別途に考慮しなければならないであろう。

次いで，平面形状及び規模についてみると，Ⅰ期の住居跡は，６軒検出され，隅丸長方形が４軒，隅丸方形が２軒である。長軸は，4.5ｍ以上5.0ｍ未満の住居跡１軒に対し，6.5ｍ以上の住居跡は５軒で，住居跡の規模は，比較的大型化の傾向がみられる。Ⅱ期の住居跡は，13軒検出され，隅丸長方形８軒，隅丸方形は５軒で，Ⅰ期の住居跡とほぼ同じような割合で検出されている。長軸は，5.0ｍ以上6.5ｍ未満の住居跡は９軒，6.5ｍ以上7.0ｍ未満の住居跡が２軒で，Ⅰ期と比べると中型化の傾向がみられる。

長軸方向をみると，Ⅰ期の住居跡では，北東を指すのは４軒で，北西を指すのは２軒である。

第218図　弥生・古墳（五領Ⅰ・Ⅱ期）・平安時代住居跡分布図

表14　縄文時代の住居跡一覧表

住居跡番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 壁高(cm)	床面	柱穴数	炉	覆土	出土遺物	時期	備考
SI 2	I3e$_9$	N－76°－E	楕円形	5.09×4.45	22～30	平坦	6	地床炉	自然	縄文土器片1,168点	加・EⅢ	
3	I3b$_6$	N－31°－W	楕円形	7.90×5.67	22～34	平坦	12	地床炉	自然	縄文土器片2,539点 石器1点	加・EⅢ	SK11
4	I3c$_6$	N－38°－W	楕円形	6.72×6.04	14～18	平坦	7	地床炉	自然	縄文土器片28点 石器1点	堀之内Ⅰ	SI 15
7	I4j$_1$		円形	3.92×3.80	32～38	平坦	3	地床炉	自然	縄文土器片527点	加・EⅢ	
8	I3j$_9$	N－78°－W	楕円形	5.36×4.74	29～43	平坦	8	なし	自然	縄文土器片512点	加・EⅢ～EⅣ	
11	J3a$_7$		円形	4.95×4.80	30～43	平坦	7	地床炉	自然	縄文土器片261点 石7点	称名寺	SK15
12	I3e$_3$	N－9°－E	楕円形	7.16×6.56	13～23	平坦	6	地床炉	自然	縄文土器片43点	堀之内Ⅰ	SK16・SK17
13	I4h$_4$	N－2°－E	楕円形	5.75×5.37	32～40	平坦	8	地床炉	自然	縄文土器片359点 石4点	堀之内Ⅰ	
14	I3g$_4$	N－5°－E	楕円形	5.10×4.75	23～33	平坦	5	地床炉	自然	縄文土器片249点 石1点	堀之内Ⅰ	
15	I3d$_7$	N－49°－W	不整楕円形	5.17×4.76	25～30	平坦	8	地床炉	自然	縄文土器片54点	称名寺	SI 4
26	K3c$_0$	N－42°－E	楕円形	7.45×7.00	なし	平坦	9	なし	自然	縄文土器片132点	加・EⅢ	SI 22・24
31	K3c$_0$	N－20°－E	(不整円形)	(5.30)×(5.05)	なし	平坦	9	地床炉	自然	縄文土器片964点	加・EⅢ	SI 26
32	K3c$_1$	N－6°－E	(不整円形)	(5.20)×(5.00)	18～22	多少凹凸	13	なし	自然	縄文土器片1,222点 石1点	堀之内Ⅰ	SI 34
33	J3g$_5$	N－33°－E	(楕円形)	(7.04)×(6.37)	24～35	中央部やや凹む	8	地床炉	自然	縄文土器片2,848点 石2点	称名寺	SK74・75・76,埋甕(M1)
36	J3i$_2$	N－6°－E	(楕円形)	(5.20)×(4.80)	なし	平坦	5	地床炉	なし	なし	不明	SD9・SK44
38	J3b$_3$	N－24°－E	楕円形	7.29×6.74	12～28	平坦	19	地床炉	自然	縄文土器片2,283点 石6点	堀之内Ⅰ	SI46・SM11・12 M10・SK73
39	I3j$_2$	N－14°－E	楕円形	4.94×4.50	14～31	多少凹凸	13	地床炉	自然	縄文土器片8,362点 石6点	堀之内Ⅰ	SK127・SM6・7・8・9・29・30 柄鏡形住居跡

40	K3d$_4$	N－70°－E	不整楕円形	4.70×4.24	16～22	中央から南西がやや高い	9	な し	自然	縄文土器片554点 石1点	称名寺	SM23
41	I3j$_4$	N－6°－W	楕 円 形	5.68×5.45	6～16	平 坦	9	土器片囲い炉 地床炉	自然	縄文土器片261点	堀之内I	SK118・SD5・SM5・10・32
42	J3d$_5$	N－22°－W	(不整楕円形)	(6.83)×(5.88)	な し	平 坦	10	地 床 炉	自然	縄文土器片15点	称名寺	SI20・21・SK113・124・125・128・129・130・131・135・SM19・20・24・26
43	J3c$_1$	N－45°－W	(不整楕円形)	(6.15)×(5.65)	な し	平 坦	13	地 床 炉	自然	縄文土器片653点	堀之内I	SI 37・SK120・121・122・123
44	I3i$_3$		(円 形)	(5.20)	な し	平 坦	9	地 床 炉	なし	縄文土器片28点	称名寺	埋甕(M12) SI 45・SD5
45	I3i$_3$		(円 形)	(5.00)	な し	平 坦	9	地 床 炉	なし	縄文土器片28点	称名寺	埋甕(M6・13) SI 44・SD5
46	J3d$_3$	N－39°－E	楕 円 形	6.60×5.69	5～7	平 坦	15	地 床 炉	自然	縄文土器片1,640点	堀之内I	SI37・38・SK105・114(SM28)・140(SM35)・SM17

表15　弥生時代住居跡一覧表

住居跡番号	位置	長軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	柱穴数	炉	覆土	出土遺物	時期	備考
SI 1	H3i$_4$	N－10°－E	隅丸方形	5.40×5.16	7～14	中央に低く傾斜	4	地 床 炉	自然	縄文土器片・弥生土器片45点	弥生・後	

表16　古墳時代住居跡一覧表

住居跡番号	位置	長軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	柱穴数	炉	覆土	出土遺物	時期	備考
SI 5	J4a$_2$	N－21°－W	長 方 形	5.92×5.01	32～49	平 坦	8	地 床 炉	自然	縄文土器片620点・土師器片327点・石器2点	五 領	焼失家屋
9	J3d$_0$	N－46°－W	隅丸長方形	6.60×5.08	26～53	平 坦	7	地 床 炉	自然	縄文土器片897点・土師器片80点・石器1点・石1点	五 領	
10	J4g$_2$	N－41°－W	隅丸長方形	6.60×5.41	31～43	平 坦	4	地 床 炉	自然	縄文土器片571点・土師器片145点・石1点	五 領	焼失家屋
16	J3i$_0$	N－46°－W	隅丸方形	5.18×4.94	26～41	平 坦	10	地 床 炉	自然	土器片472点(大半は土師器)	五 領	
17	J3g$_8$	N－39°－W	隅丸長方形	5.75×5.01	37～45	平 坦	4	地 床 炉	自然	縄文土器片1,446点・土師器片160点・石2点	五 領	壁溝有り・焼失家屋SK18
18	J3h$_7$	N－27°－E	方 形	4.84×4.70	11～23	平 坦	3	地 床 炉	自然	縄文土器片385点・土師器片72点	五 領	焼失家屋 SK19
19	J3e$_7$	N－48°－E	隅丸方形	4.13×3.92	17～25	平 坦	5	地 床 炉	自然	縄文土器片1,252点・土師器片382点・石6点	五 領	SK20
20	J3d$_6$	N－58°－W	隅丸長方形	7.20×6.10	27～39	平 坦	6	地 床 炉	自然	縄文土器片3,697点・土師器片111点・石12点	五 領	SI42 SK21・22・23・24・26・28・29・37壁溝有り
21	J3f$_4$	N－82°－E	不整方形	5.04×4.60	20～26	平 坦	4	地 床 炉	自然	縄文土器片3,227点・土師器片206点・石1点	五 領	SI 42
22	K3c$_0$	N－53°－W	(隅丸長方形)	(7.10)×(6.60)	28～36	平 坦	4	地 床 炉	自然	縄文土器片2,837点・土師器片223点・石4点	五 領	SI 26・31
24	K3b$_9$	N－40°－E	隅丸長方形	5.60×4.60	31～33	平 坦	5	地 床 炉	自然	縄文土器片1,089点・土師器片261点・石1点	五 領	SI 26
25	K3a$_8$	N－42°－E	(隅丸長方形)	(6.54)×(5.60)	24～31	平 坦	5	地 床 炉	自然	縄文土器片750点・土師器片123点・石1点	五 領	SI 24
27	K3d$_8$	N－35°－W	隅丸長方形	5.71×4.35	18～32	西壁に向いやや傾斜	5	地 床 炉	自然	土器片706点・石3点	五 領	SI 23
28	K3c$_6$	N－48°－E	隅丸長方形	7.34×6.05	38～43	多少凹凸有り	4	地 床 炉	自然	縄文土器片1,353点・土師器片261点・石4点	五 領	SK47・48 焼失家屋
29	K3d$_7$	N－32°－W	隅丸台形	4.36×4.04	21～29	平 坦	4	地 床 炉	自然	縄文土器片781点・土師器片125点	五 領	
30	K3a$_5$	N－55°－W	長 方 形	6.25×5.51	12～20	平 坦	6	地 床 炉	自然	縄文土器片2,094点・土師器片93点・石1点	五 領	SK78
34	K3b$_1$	N－56°－W	隅丸長方形	5.20×(4.80)	18～24	平 坦	3	地 床 炉	自然	縄文土器片1,589点・土師器片81点・石2点	五 領	SI 32 SK55 焼失家屋
35	J3g$_3$	N－9°－W	方 形	5.23×5.13	5～24	凹 凸	4	地 床 炉	攪乱	縄文土器片1,241点・土師器片202点・石1点	五 領	SK66・98
37	J3d$_2$	N－48°－E	隅丸方形	7.91×7.50	32～49	平 坦	11	地 床 炉	自然	土器片20,178点・石5点	五 領	SI 43・46

表17　平安時代住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	柱穴数	炉	覆土	出土遺物	時期	備考
SI 23	K3d$_8$	N－69°－W	(隅丸長方形)	(4.90)×(4.28)	19～25	平坦	4	カマド	自然	土器片706点	平安時代	SI 27 SK42

2　土坑について

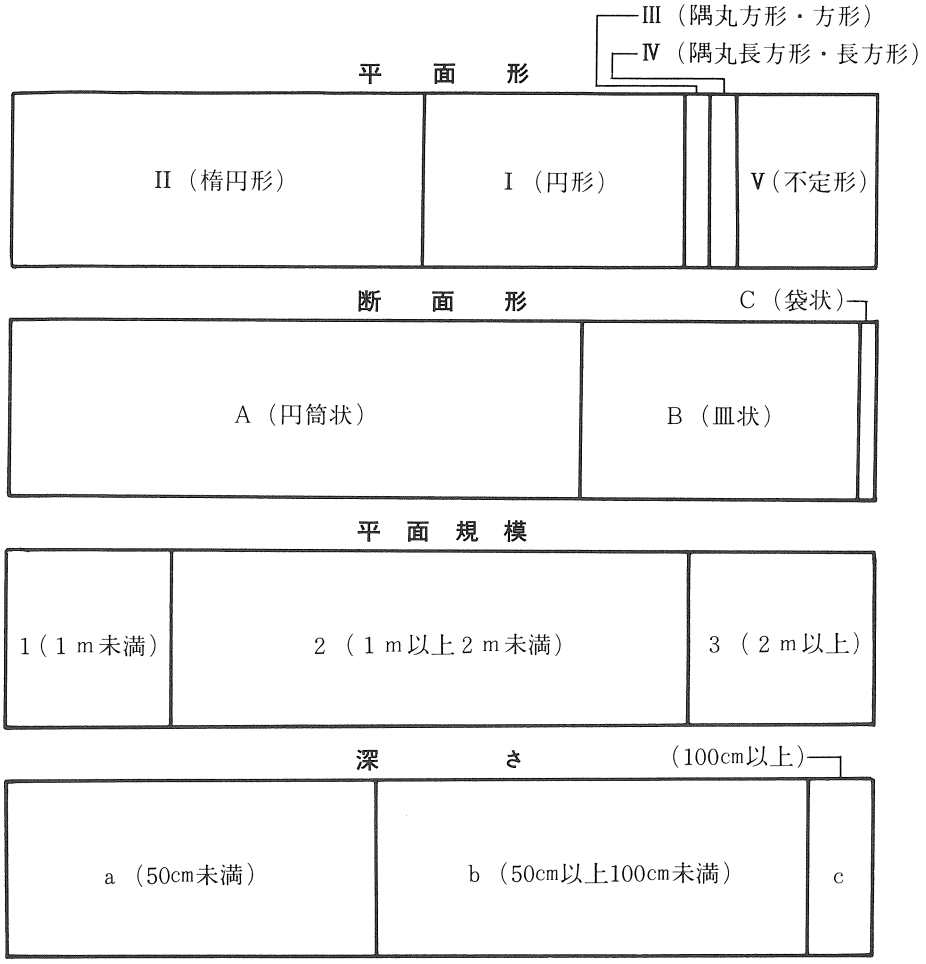
当遺跡の5区から検出された土坑は140基を数えるが，これらの土坑のうち調査中に3基に分かれたり，炉穴，屋外炉，地下式坑，埋甕，井戸状遺構に分類したものや，欠番などが出たため最終的に土坑として整理した数は113基である。

これらの土坑の多くは，調査区の中央から南側に密集して検出されており，土坑の中には，住居跡内に位置するものや，土坑どうし重複しているものもみられる。また覆土から遺物が出土した土坑は78基で全体の69%であり，土師器を出土した10基の土坑の他は，出土した遺物の大半が縄文土器片であることから，その大半は縄文時代中期後葉から後期前葉に比定されるものと思われる。これらの土坑は，様々な形態をもって存在し，これらを逐一詳細に検討することは困難であるが，第3章第1節2の（7）で述べた分類基準に基づいて行った形態分類に従って概略を述べることにする。

表18　土坑形態分類一覧表

規模・深さ ＼ 平面形・断面形		I			II			III			IV			V			計
		A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	
1	a		6		1	6		1						1			15
	b	2												1			3
	c				1												1
小計		2	6		2	6		1						2			19
2	a	2	4		6	6			1			2		1	3		25
	b	13	1		18	2	1	2						3	1		41
	c	3		1													4
小計		18	5	1	24	8	1	2	1			2		4	4		70
3	a				3	1					1				2		7
	b	1			7	1								4	1		14
	c	1									1			1			3
小計		2			10	2					2			5	3		24
合計		22	11	1	36	16	1	3	1		2	2		11	7		113

表19　土坑の形態分類



◦平面形

表19に示したように平面形は，Ⅱ類（楕円形）に属するものが53基で47％を占め，次いで，Ⅰ類（円形）が34基の31％，Ⅴ類不定形に属するものが18基の16％，Ⅲ類（隅丸方形・方形）・Ⅳ類（隅丸長方形・長方形）に属するものが各4基で3％となっている。当遺跡から検出された土坑の大半は，Ⅰ・Ⅱ類に属している。

◦断面形

表19に示したように断面形は，A類（円筒状）に属するものが74基で65％を占め，次いでB類（皿状）に属するものが37基の33％，C類（袋状）に属するものは少なく2基の2％となっている。また，A～C類の中で土坑底面にピットを有するものは，A類6基，B類1基の計7基の6％である。当遺跡から検出された土坑の大半は，断面形が円筒状，皿状を呈するものが98％と

大部分である。袋状を呈するものは２基ときわめて少ない。

◦平面規模

表19に示したように長径や長軸の長さをみると，２類（１ｍ以上２ｍ未満）に属するものが半数以上の70基で62％を占め，次いで，３類（２ｍ以上）に属するものが24基の21％，１類（１ｍ未満）に属するものが19基の17％である。長径，長軸の最小は0.4ｍ，最大は3.56ｍである。

◦深さ

表19に示したように深さについてみると，ｂ類（50cm以上100cm未満）に属するものが58基の51％で，過半数を占め，ａ類（50cm未満）に属するものが47基の42％，ｃ類（100cm以上）に属するものが８基の７％となっている。最も浅い土坑が11cm，最も深い土坑が203cmである。

◦形態

前述した平面形，断面形，規模，深さの４要素を組み合わせて形態分類を行った。その結果として，当遺跡で最も多くみられる形態は，土坑形態分類一覧（表18）からⅡA2bの土坑で18基の16％を占めている。次いで，ⅠA2bの13基の12％，ⅡA3bの７基の６％，ⅠB1a，ⅡA2a，ⅡB1a，ⅡB2a，の各々の６基で５％の順となり，それ以外の形態を示す土坑はさらに少なくなる。これらの土坑の中で最も多く検出されたⅡA2bの土坑の平面形は，楕円形を呈し，断面形は円筒状で，規模は１ｍ以上２ｍ未満で，深さは50cm以上100cm未満のものである。

土坑の性格や用途については，墓壙説，貯蔵坑説，作業場説などが考えられるが，いずれも決定的な資料は残されていないため不明である。

3　溝について

当遺跡の５区から検出された溝は，12条で，調査区の全域にわたって検出されている。12条のうち，北西から南東方向に掘られたものが，第４－Ａ・４－Ｂ・４－Ｃ・５号溝，北東から南西方向に掘られたものが，第７－Ａ・７－Ｂ・８号溝，方向が途中から変わるものは，第１・２・３・９号溝である。これらの溝の中で，第１号溝は，昭和58年度調査の７区の第８号溝と，第３号溝は，６区の第11・12・13号溝と雷紋状に渦まいてそれぞれつながっており，第５号溝は，昭和57年度調査の２区の第３号溝とつながっている。また，溝と溝とが合流しているものもあり，第４－Ｂ号溝は，第７－Ｂ号溝と，第４－Ｃ号溝は，第７－Ａ号溝と，第５号溝は，第６・７－Ａ・７－Ｂ・８号溝とそれぞれ合流している。長さは最長のものが第５号溝の82.8ｍで，他に，８ｍ前後の溝は１条，13ｍ前後の溝は３条，30ｍ前後の溝は３条，40ｍ前後の溝は１条，50ｍ前後のものは３条である。上幅については，第１・８・９号溝が西側の谷津に向かって傾斜しながら広がっているため，最大幅は600cm前後あるが，他の溝では，第５号溝が最大幅で173～213cmで，最小幅は第２号溝で19～33cmである。深さは第２号溝の95cmの部分が最も深く，第６号溝の８cmの部分が最も浅い。

また，明らかに傾斜がわかるのは，第１・６・７-Ａ・７-Ｂ・８・９号溝である。

出土遺物からみると，各溝とも縄文土器片や陶器片が少量出土しているが，覆土からのもので溝埋没途中での流れ込みと思われ，各溝の時期を明確にすることは難しい。第５号溝については，古墳時代前期の第20号住居跡の東コーナー部を掘り込み，同じく２区では同時期の第84号住居跡を掘り込んでいることから，古墳時代前期以降であると思われる。また，溝の性格についても明確でない。

4　地下式坑について

当遺跡から検出された地下式坑は９基である。位置は，調査区の南西部に８基，南部の農道下に１基である。これらのうち２基は，攪乱を受けたり，農道下のため竪坑は不明であるが，他は，主室と竪坑よりなっている。第７号地下式坑だけに天井部が残っており，他は天井部が崩落している。

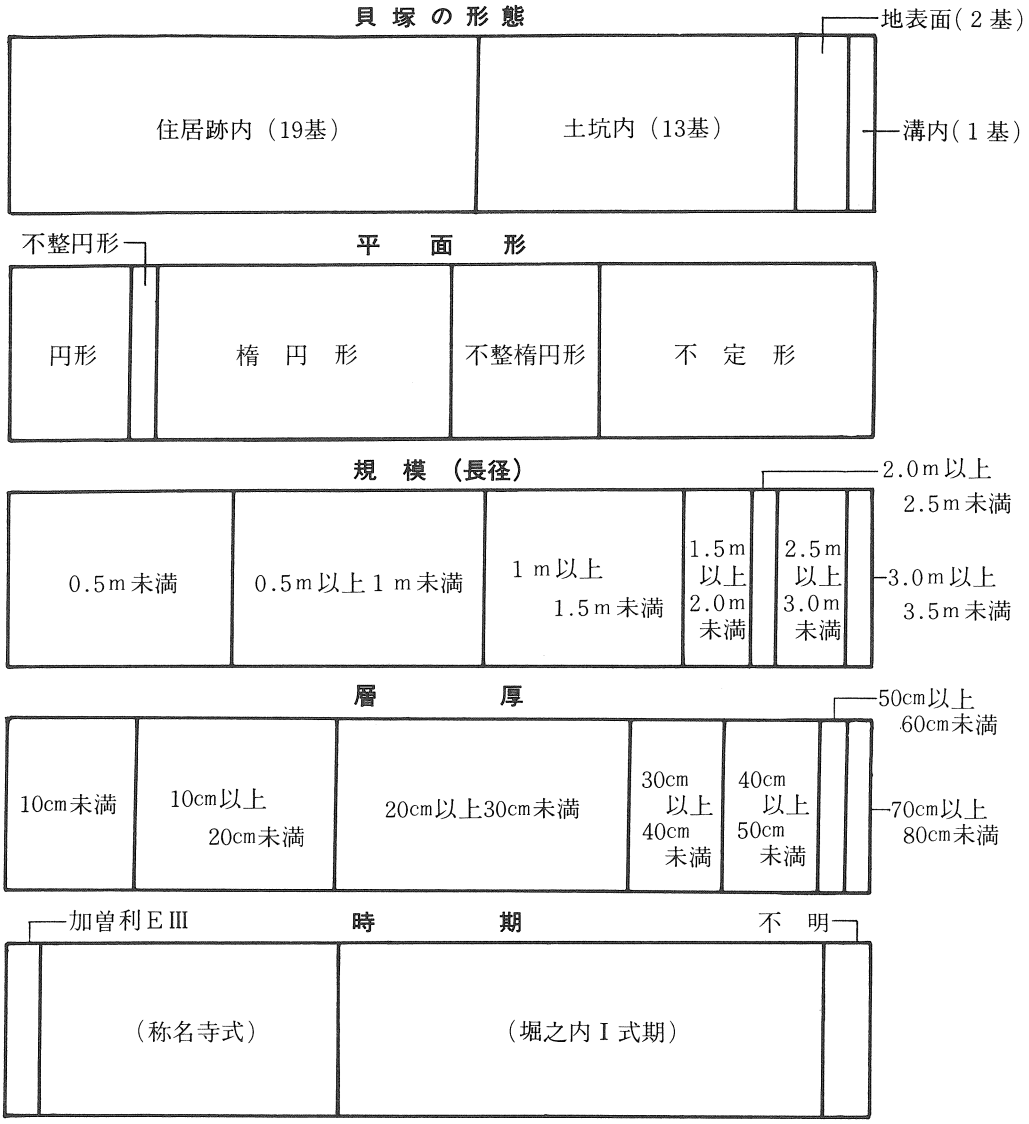
主室の平面形及び規模は，形状が不明の第９号地下式坑を除いて，長軸1.76～3.2ｍ，短軸1.32～2.12ｍの長方形及び隅丸長方形を呈している。遺構確認面より底面までの深さは，1.0～2.89ｍで，大半がハードローム層を掘り抜いて砂質粘土層まで掘り込んでおり，前述のように天井部が崩落して遺構確認面から深い竪坑状になっている。竪坑の底面は，長軸（長径）0.85～1.4ｍの円形や隅丸長方形を呈しているものが多くみられる。半田堅三氏の分類によれば，大半が有段Ｉ類「竪坑底面と主室底面との間に段差があり，その途中に階段等の施設を持たないもの」（註１）である。主軸方向をみると，各方向に散らばっているが，なかでも第３・４・６・７号地下式坑は，Ｎ－59°～83°－Ｗを示しており，若干規則性があるように思える。土層は，ローム粒子，ロームブロックを含む褐色土，暗褐色土を主に10層前後の土層が堆積している。特に，天井部が残っている第７号地下式坑は，竪坑から主室へ斜め下に流れ込んだように堆積している。

出土遺物は，覆土の中ほどから縄文式土器，土師器，内耳土器，陶器等の破片や獣骨が少量出土しているが，埋没途中での流れ込みと思われ，本遺構の時期や性格及び使用目的を明確にすることは困難である。

5　地点貝塚について

当遺跡の５区から検出された地点貝塚は35か所で，主に調査区の中央からやや南側の縄文時代後期の住居跡や土坑の密集地域に検出されており，遺構の少ない北側からは全く検出されていない。これらの地点貝塚は，（表20）をみるとわかるように，第11・17号地点貝塚等のように廃絶された住居跡内への投棄により形成されたものが19基で過半数の54％を占め，次いで土坑内へ投棄されたものが13基の37％で比較的多い。さらに，当時の地表面へ投棄されたものが２基の６％

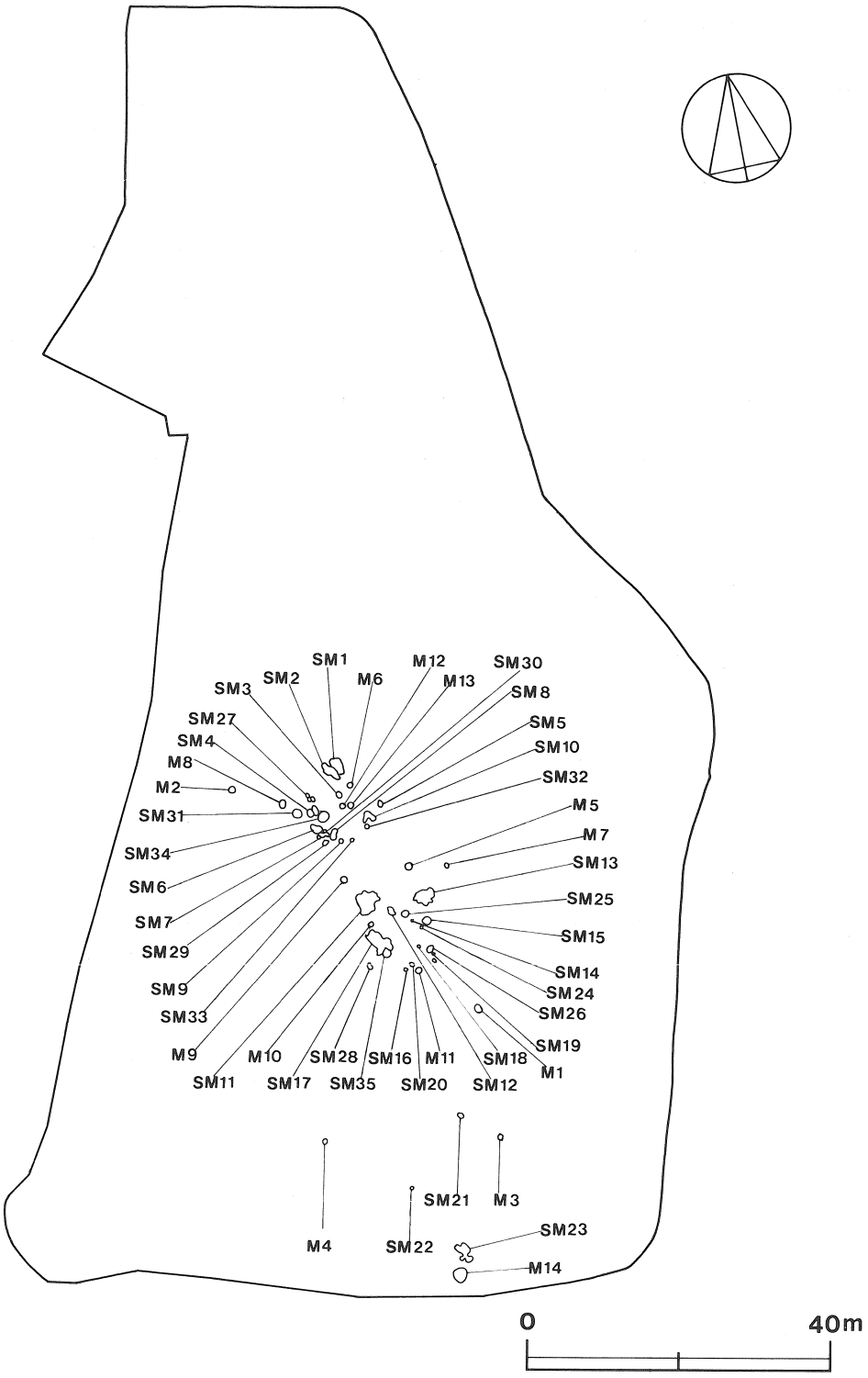
表20　地点貝塚の形態別分類



の順である。また，第2号地点貝塚のように第5号溝内から検出されたものは1基の3％であるが，この地点貝塚は，土層，断面図等から本来は第1号地点貝塚と同一のものと思われるが，溝構築時に削平され，溝廃絶後に貝殻が流れ込んで形成されたものである。以下これら35か所の地点貝塚の平面形や規模及び時期について概略を述べることにする。

◦平面形

表20に示したように楕円形が12基の34％，不定形が11基の32％，不整楕円形が6基の17％，



第219図　地点貝塚・埋甕遺構分布図

表21　地点貝塚一覧表

地点貝塚番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 層厚(cm)	出土遺物	時期	備考
SM 1	I3h$_3$	N－28°－W	不整楕円形	1.73×1.12	57	ハマグリ・シオフキ・魚骨・人骨 縄文土器片少量	堀之内	SK138
2	I3h$_3$	N－36°－W	不整楕円形	2.68×1.18	18	ハマグリ・シオフキ 縄文土器片少量	堀之内	SD5
3	I3i$_3$	N－42°－W	楕円形	0.47×0.37	20	シオフキ・ハマグリ 縄文土器片極少量	不明	SK44
4	I3i$_2$	N－71°－E	不定形	1.30×0.71	48	ハマグリ・シオフキ 縄文土器片極少量	堀之内	SK102
5	I3i$_4$	N－29°－W	楕円形	0.61×0.43	19	縄文土器片少量	堀之内	SI41
6	I3j$_2$	N－54°－W	不定形	1.35×0.77	29	ハマグリ・シオフキ・サルボウ 縄文土器片少量	堀之内	SI39
7	I3j$_2$		円形	0.42	20	ハマグリ・シオフキ・サルボウ 縄文土器片極少量	堀之内	SI39
8	I3j$_2$	N－34°－E	楕円形	1.28×0.64	18	ハマグリ・シオフキ・サルボウ 縄文土器片少量	堀之内	SI39
9	I3j$_3$	N－24°－E	楕円形	0.72×0.45	20	シオフキ・ハマグリ 縄文土器片少量	堀之内	SI39
10	I3j$_4$	N－58°－E	不定形	1.50×1.30	25	ハマグリ・シオフキ 縄文土器片少量	堀之内	SI41
11	J3b$_3$	N－35°－E	不定形	3.12×2.35	25	シオフキ 縄文土器片少量	堀之内	SI38
12	J3b$_3$	N－2°－W	楕円形	0.51×0.26	4	ハマグリ 縄文土器片少量	称名寺	SI38
13	J3c$_5$	N－73°－E	不定形	2.48×1.80	13～28	ハマグリ・シオフキ・サルボウ・ヤマトシジミ・ナミマガシワ 縄文土器片少量	堀之内	SK80・83
14	J3c$_5$	N－22°－E	楕円形	0.45×0.39	13	縄文土器片極少量	称名寺	
15	J3c$_5$	N－46°－E	不整楕円形	0.20×0.18	22	ハマグリ・シオフキ・サルボウ 縄文土器片極少量	称名寺	SK85
16	J3e$_4$	N－84°－W	不整楕円形	1.13×0.54	12	シオフキ 縄文土器片極少量	堀之内	SK94
17	J3d$_3$	N－8°－W	不定形	2.93×2.27	29	縄文土器片多量	堀之内	SI46
18	J3d$_5$	N－64°－W	楕円形	0.26×0.16	4	ハマグリ	不明	
19	J3e$_5$	N－37°－W	楕円形	0.32×0.18	6	ハマグリ・シオフキ 縄文土器片少量	称名寺	SI42
20	J3e$_4$	N－47°－W	楕円形	0.66×0.35	9	ハマグリ・サルボウ 縄文土器片極少量	称名寺	SI42・SK135
21	J3j$_4$	N－62°－W	楕円形	0.60×0.39	42	シオフキ 縄文土器片極少量	堀之内	SK78
22	K3b$_3$	N－40°－W	不整楕円形	1.40×0.96	47	縄文土器片極少量	堀之内	SK77
23	K3d$_4$	N－37°－W	不定形	2.70×1.20	14～22	ハマグリ・サルボウ・ヤマトシジミ・シオフキ 縄文土器片少量	称名寺	SI40
24	J3e$_4$	N－22°－E	楕円形	0.44×0.36	12	ハマグリ・シオフキ・サルボウ 縄文土器片極少量	称名寺	SI42・SK113
25	J3c$_4$	N－44°－W	不整楕円形	0.71×0.62	38	サルボウ・ハマグリ 縄文土器片少量	称名寺	SK67
26	J3d$_5$	N－61°－W	不定形	1.00×0.40	4～20	ハマグリ・シオフキ・サルボウ 縄文土器片少量	称名寺	SI42・SK130
27	I3i$_2$	N－35°－W	不定形	1.04×0.45	33	ハマグリ 縄文土器片極少量	加曽利EⅢ	SK102
28	J3d$_3$		円形	0.65	30	ハマグリ・シオフキ 縄文土器片極少量	称名寺	SI46・SK114
29	I3j$_2$	N－27°－E	不定形	0.90×0.64	49	ハマグリ・シオフキ 縄文土器片極少量	堀之内	SI39
30	I3j$_2$	N－69°－W	不定形	1.62×1.00	19	ハマグリ・シオフキ・サルボウ 縄文土器片少量	堀之内	SI39
31	I3i$_1$	N－39°－E	楕円形	0.81×0.52	20	ハマグリ・シオフキ 縄文土器片少量	堀之内	SK116
32	I3j$_4$	N－15°－E	不整円形	0.34×0.31	13	ハマグリ・シオフキ 縄文土器片極少量	堀之内	SI41
33	I3j$_2$		円形	0.25	3	ハマグリ 縄文土器片極少量	称名寺	
34	I3i$_2$		円形	1.10	70	ヒメシラトリ・シオフキ・ハマグリ 縄文土器片少量	堀之内	SK127
35	J3d$_4$		円形	0.84	34	シオフキ・ヒメシラトリ 縄文土器片少量	称名寺	SI46

円形が５基の14％，不整円形が１基の３％の順で，比較的楕円形及び不定形を呈するものが多い。

◦規模

表20に示したように長径でみると，0.5m以上１ｍ未満が10基の29％，0.5ｍ未満が９基の26％，１ｍ以上1.5ｍ未満が８基の23％，1.5ｍ以上２ｍ未満，2.5ｍ以上３ｍ未満各々３基ずつで８％，２ｍ以上2.5ｍ未満，３ｍ以上3.5ｍ未満各々１基ずつで３％の順となっている。当遺跡で検出された地点貝塚の多くは，２ｍ未満の小規模のものが多く，過半数以上の86％を占めている。

◦層厚

表20に示したように層厚は，20cm以上30cm未満が12基の34％で最も多く，次いで10cm以上20cm未満が８基の23％，10cm未満が５基の15％，30cm以上40cm未満，40cm以上50cm未満が各々４基ずつで11％，50cm以上60cm未満，70cm以上80cm未満が各々１基ずつで３％の順である。当遺跡で検出された地点貝塚は，比較的層厚の薄いものが多く，層厚の厚い50cm以上のものはわずかに２基のみである。以上のことから当遺跡で検出された地点貝塚の多くは，楕円形か不定形を呈し長径２ｍ未満で，層厚の薄い小規模の地点貝塚といえる。

◦時期

当遺跡５区からは，縄文時代中期から後期，弥生時代，古墳時代，平安時代の住居跡が検出されているが，35か所の地点貝塚を出土遺物から時期別に分けると表20のとおりである。加曽利ＥⅢ期に比定されると思われる地点貝塚は，３％の１か所のみである。これまで調査を終えた南三島遺跡１・２・６区で検出されている地点貝塚の大半が加曽利ＥⅢ～ＥⅣ期に比定されることに比べると，同時期の貝塚は，当調査区では極めて少ない。称名寺式期になると12か所の34％で比較的多くなり，堀之内Ⅰ式期になると20か所の57％で過半数を占めている。これらのことから当調査区で検出された地点貝塚の大半は，縄文時代後期の称名寺式から堀之内Ⅰ式期に比定されるものが中心となっている。また，出土遺物の少ない２か所の地点貝塚も分布状況からほぼ同時期のものと思われる。これまで調査を終えた１・２・６区の地点貝塚の時期が前述のように縄文時代中期の加曽利ＥⅢ～Ⅳ期であるに対して，当調査区では，縄文時代後期の称名寺式期～堀之内Ⅰ式期であることは注目される。

第２節　遺　　物

１　土器について

南三島遺跡５区から出土した土器は，大半が縄文式土器であり，次いで土師器が出土している。

また，極少量であるが，弥生式土器片，中世陶器片，内耳土器片も出土している。当遺跡出土の縄文式土器は，早期の野島式土器が少量みられ，貝殻条痕文系土器群に属する。つづいて，中期後半の加曽利Ｅ式土器，なかでも加曽利ＥⅢ・Ⅳ式に比定される土器が多く出土している。後期になると，称名寺式，堀之内式，加曽利Ｂ式土器と続いているが，最も多く出土している土器は，堀之内Ⅰ式期に比定される土器である。器種としては，深鉢形土器が圧倒的に多く，その他鉢形土器，有孔鍔付土器等が見られる。弥生式土器は，第１号住居跡から少量の土器片が出土しただけである。古墳時代の土師器は，五領期に比定される19軒の住居跡から数多く出土している。器種としては，甕形土器，台付甕形土器，壺形土器，埦形土器，高坏形土器，甑形土器等である。また，平安時代の10世紀末に比定される住居跡１軒が検出されており，高台付坏形土器，甕形土器等が少量出土している。この内，縄文時代中・後期の土器片は，調査区の中央部から南部にかけての住居跡や土坑及び地点貝塚等の覆土から多量に出土している。ここでは，当遺跡から出土した縄文式土器及び土師式土器を，説明の便宜上，時期や型式から大きく７群に分けて概略を述べることにする。なお，各群の土器については，各遺構ごとに掲載した実測土器及び出土土器観察表を参照されたい。

第１群　縄文時代早期後葉（野島式）

第２群　縄文時代中期後葉後半から終末（加ＥⅢ～ＥⅣ）

第３群　縄文時代後期初頭（称名寺）

第４群　縄文時代後期前葉（堀之内）

第５群　弥生時代後期

第６群　古墳時代前期（五領期）

第７群　平安時代　10世紀末

第１群土器

第１群土器は，早期後葉の野島式に比定される土器群で，第２号屋外炉・第３号炉穴の上面及びグリッドから少量出土しているにすぎない。出土した土器片は，ほとんどが小破片で，器厚は薄手のものが多く，繊維の混入はみられるが量は少なく，焼成は総じて普通である。文様は微隆起線によって直線的，平行線的，幾何学的な区画を施し，区画内を微隆起線や沈線で充填しているものが若干みられるが，多くは，表裏面共貝殻条痕文による施文が主となっている。(第151図１)

第２群土器

第２群土器は，縄文時代中期後半から終末にかけての加曽利ＥⅢ・ＥⅣ式に比定される土器群で，第４群の土器に次いで多く出土している。ここでは深鉢形土器を対象に第２群土器を，さらに２類に分けて概略を述べることにする。

第１類　加曽利ＥⅢ式に比定される土器群で，器種によりａ・ｂの２種に分ける。

ａ種　器形がキャリパー形を呈する深鉢形土器である。口縁部文様帯は，隆線，沈線により渦巻文や楕円形，長方形の区画文を組み合せて構成されるものと，沈線で構成されるものとがみられる（第12図１・５）。渦巻文は，第12図３のようにくずれて退化の傾向が明瞭に認められ，さらに新しくなると，口縁部文様帯は列点文や沈線文で構成されるようになる（第12図２，第37図２）。また，加曽利ＥⅡ式に現われはじめた磨消手法が盛行し，第３号住居跡出土の深鉢形土器（第12図５）にみられるように胴部の直線的磨消帯は，幅が広くなると共に，第31号住居跡出土の深鉢形土器（第37図１）のように磨消帯に１本の沈線を付加する例も少量ではあるがみられるようになる。

ｂ種　胴部が緩くくびれ，口縁部に向って内彎しながら開く器形を呈する深鉢形土器である。文様構成は，胴部に隆線による大きな渦巻文を主とした曲線的文様を描いているものや，沈線により「Ｕ」字状,「Ｖ」字状，逆「Ｖ」字状及びそれらを連結した文様が描かれ，区画間には縄文が充填されている例が多い（第８図１）。

第２類　加曽利ＥⅣ式に比定される土器群で，加曽利ＥⅢ式から発達したものである。

器形は，胴部がくびれ，口縁部に向って内彎しながら開く深鉢形土器が中心である。口縁部文様帯は微隆線で区画され，胴部は，微隆線や沈線で曲線的文様が描かれており，第49号土坑出土の深鉢形土器（134図10），第63号土坑出土の深鉢形土器（第135図11）が好例と言えよう。

第３群土器

第３群土器は，縄文時代の後期初頭の称名寺Ⅰ・Ⅱ式に比定される土器群である。器形は，胴部下位で張りを有し，胴部中位でくびれながら口縁部にかけて大きく外傾する深鉢形土器である。文様構成は，沈線により「Ｊ」字状文,「Ｍ」字状文，渦巻状文を描いているものが多く，また，少ないが長方形状や「＋」字形状文等の区画文を描いているものもある。第３群土器をさらに２類に分けて概略を述べることにする。

第１類　称名寺Ⅰ式に比定される土器群

文様が沈線により「Ｊ」字状文,「Ｍ」字状文，渦巻状文等が描かれ，区画内に縄文が施文されているもので，第33号住居跡から出土した埋甕（第145図１）や第45号住居跡から出土した埋甕（第149図14）が好例と言えよう。また，第33号住居跡から出土した土器片（第47図66）は，東北南部に分布する綱取系土器の影響を受けているものと思われ，文様構成は，第１類と似ているが，綱取系土器と共通する手法が認められる。

第２類　称名寺Ⅱ式に比定される土器群

文様が沈線により「Ｊ」字状文やスペード文が描かれ，区画内には刺突が施されているものである。第45号住居跡から出土した埋甕（第147図７）は好例と言える。

第4群土器

第4群土器群は，縄文時代後期前葉の堀之内Ⅰ式に比定される土器群である。第4群土器は，当遺跡の中では最も出土量の多い土器である。

器形としては，胴部上位でややくびれながら外反して立ち上がるものと底部から外反して立ち上がるものが多く，深鉢形土器が中心となっている。文様構成としては，縄文地文上に沈線により蕨手状文，弧状文，蛇行文等が描かれている。当遺跡から出土している第4群土器をさらに4類に分けて概略を述べることにする。

第1類　堀之内Ⅰ式の古い段階に比定される土器群

縄文地文上に1本の太目の沈線にて単独のモチーフや，卵形文と蕨手状文が連結したモチーフと蕨手状文が交互にくりかえされ，口縁部には刺突を伴う沈線が巡る土器が多くなる。第150図15，第180図1が好例と思われる。

第2類　堀之内1式の第1類に次ぐ段階に比定される土器群

単独モチーフを施文する沈線がやや細くなると共に多条化の傾向とこれらのモチーフが横位に斜位に連結されてくる傾向がみられる土器が多くなる。第57図2・4，第59図13などが好例と思われる資料である。

第3類　堀之内Ⅰ式の第2類に次ぐ段階に比定され新しい段階の土器群

単独文様を連結している空間を充填させたり，モチーフを描く沈線や連結線も第2類よりさらに多条化し，全体的に密集，集合化する傾向がみられる。代表的な例としては，第57図1，第179図11，第58図8があげられる。

第4類　4類は，1～3類に分類したいわゆる精製土器に伴う粗製土器を一括した。

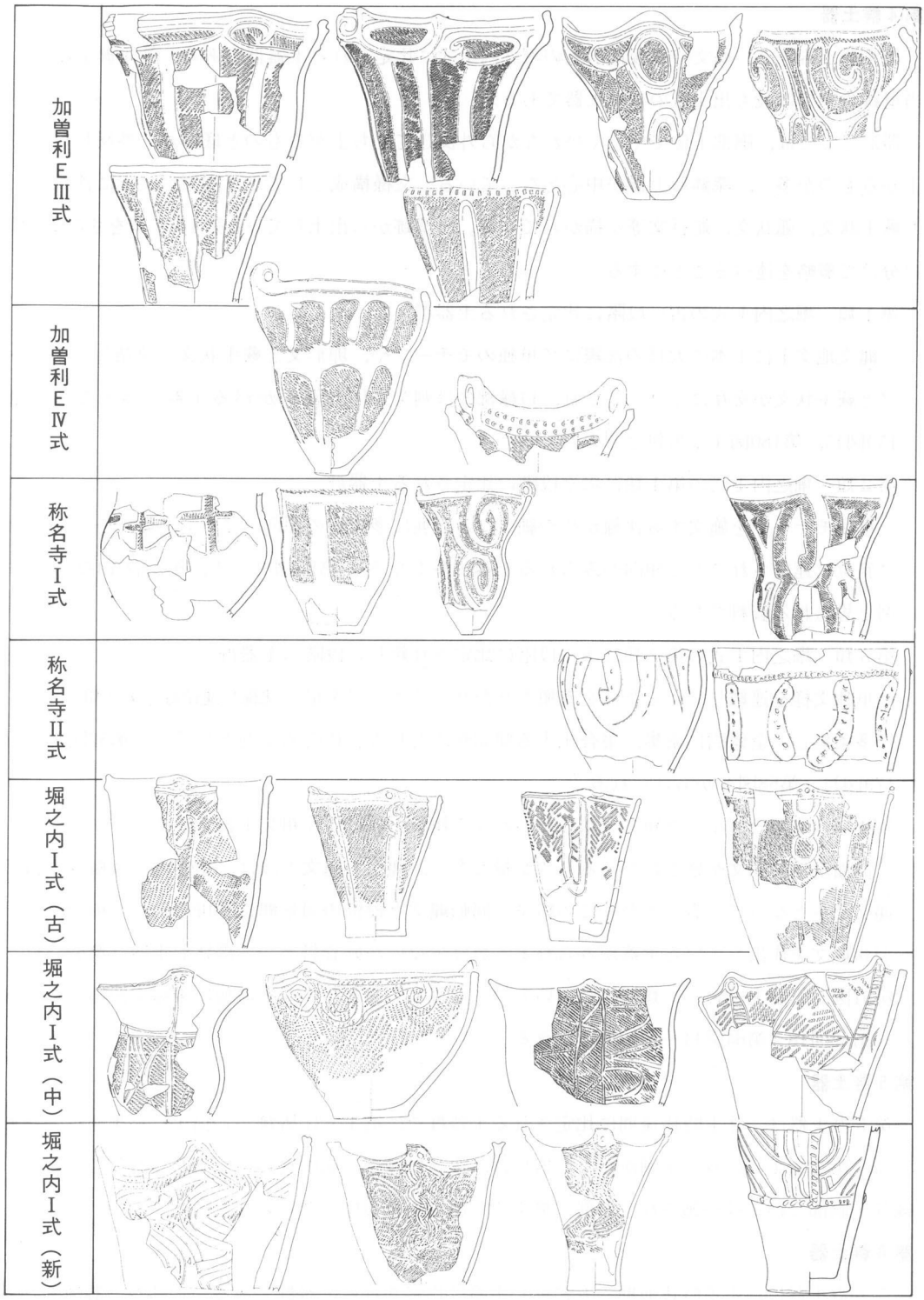
器面全体に縄文が施されているものが量も多く，縄文の施文方法は，基本的には横位の回転縄文が主となっている。また，この横位の回転縄文と縦位の回転縄文を併用して一種の縦位の羽状縄文を作出している土器がみられる。数は少ないが好資料として深鉢形土器（第62図51，第51図5）が上げられ，類例の少ないもので注目しておきたい。その他に条線文を施した土器（第52図18，第64図14～19）もみられる。

第5群土器

第5群土器は，弥生時代後期に比定される土器群で，第1号住居跡から出土した半完形の甕形土器（第77図1）のみしか例がなく，器形は，複合口縁で，胴中位でやや張りを有している。口縁部と胴部に撚糸紋が施され，頸部は無文で，斜位の整形痕が認められる。

第6群土器

第6群土器は，古墳時代前期の五領期の中頃に比定される土器群である。土師器の器種としては甕形土器，台付甕形土器，壺形土器，坏形土器，器台形土器，甑形土器，埦形土器などがあげられ



第220図　南三島遺跡（５区）出土土器変遷図

る。土器をみると五領期の特徴である複合口縁や頸部が「く」の字状を呈するもの，或いは胴部がほぼ球形を呈するものが多く，整形技法としては，ハケ目整形が施されているものが圧倒的に多くみられる。これらの土器を器形や整形技法で2類に分けて概略を説明することにする。

第1類　当遺跡出土の五領期の中でも古い方に属する土器群である。

器形としては，口縁部が複合口縁を呈し，やや内彎して立ち上がる壺形土器（第97図15，第89図6）や，やや長胴を呈する甕形土器（第87図12・13）の他に坩形土器（第79図2，第114図4）を上げることができる。整形技法としては，口縁部にキザミ目のある台付甕形土器（第108図1）ハケ目整形後に縦位の丁寧なヘラ磨きが施されている壺形土器（第91図3，第118図4）や甕形土器（第79図9）に特色がみられる。

第2類　当遺跡出土の五領期の土器の中ではやや新しい方に属する土器群である。

器形としては，胴部がほぼ球形に近くなる甕形土器（第99図10，第110図7・8，第121図9）や壺形土器がある。整形技法としては，一般的に口縁部に施されているキザミ目がなくなり，ハケ目整形が主流になる。また，無文の土器も少ないがみられる。

以上器形や整形技法を通して第6群土器を2類に分けてみたが，これらの土師器の他に，特殊な出土遺物としては，第9号住居跡から出土した皿状土器（仮称)(第82図2）や第20号住居跡から出土した炉器台形土器（第99図6・7）などがみられる。後者については，龍ヶ崎市内では隣接する屋代A遺跡に類例があり，県内では千代田村の志筑遺跡にも出土例がみられる。また，土製品では，球状土錘が同時期の10軒の住居跡から出土しており，特に第5号住居跡からは53個出土し，その内44個は一括して出土していたことは注目される。

第7群土器

第7群土器は，第23号住居跡から出土した土器のみで出土量も少ない。

器種としては，高台付坏形土器（第123図1・2），坏形土器，甕形土器が上げられる。高台付坏形土器は，体部が底部より内彎して立ち上がり，内面には，丁寧なヘラ磨きの後黒色処理が施されているのが特徴的である。坏形土器（第123図5）は，体部が内彎して立ち上がり，甕形土器（第123図6）は，胴部がほぼ筒状を呈している。以上のことから本群は，平安時代の10世紀の末頃に比定されるものと思われる。

2　土製品・貝製品・石器について

土製品は，球状土錘，管状土錘，土器片錘，垂飾り，土偶等で，住居跡等の遺構や遺構外から出土している。球状土錘の大半は，住居跡の覆土から出土し，なかでも第5号住居跡からは，全部で54個も出土しており注目される。土器片錘は，遺構や遺構外から385個出土しており，抉(えぐ)りの数は大半が2か所であるが，4か所あるものも（第212図90）みられる。重量は，最大110g，

最小７ｇで，平面形状は不整長方形，不定形が過半数を占める。垂飾りは１点のみで，ほぼ円形を呈し，沈線や刺突文により曲線文が描かれている。土偶は３点出土しており，沈線による渦巻文や曲線文が描かれているもの（第214図16）.は，縄文時代後期前葉に比定されるものと思われる。他の２点も焼成や胎土などからほぼ同時期のものと思われる。

貝製品は，貝刃，貝輪，垂飾りで，いずれも地点貝塚の貝層中から出土しており，縄文時代後期前葉に含まれる。貝刃は，全部で19点出土しており，カガミガイ製が１点で，他はハマグリ製である。刃部の加工は，伊皿子貝塚の貝刃のように腹縁の内側に施されているものはなく，全て腹縁の外側に施されており，龍ヶ崎市内では廻り地Ａ遺跡にも類例がみられ一般的なものと思われる。垂飾りはミミガイ科に属する貝で，貝の両端に凹状の加工痕がみられる。

石器は，石鏃，石棒，磨製石斧，打製石斧，敲石，砥石，軽石，凹石，石皿等で，遺構や遺構外から264点出土している。なかでも多いのが磨石で152点，次いで石鏃22点，磨製石斧20点，打製石斧17点の順で，軽石，石棒は６点と少ない。また，石質をみると安山岩，流紋岩，砂岩，結晶片岩等が比較的多く使われていることがわかる。

３　自然遺物について

自然遺物は，貝類遺体，魚類遺体のほかわずかであるが獣骨，鳥骨，種子類等の遺体が出土している。

貝類遺体は，貝類遺体集計表（表６）からみてもわかるとおり24種同定され，ハマグリ，シオフキ，ヒメシラトリ，サルボウ，ヤマトシジミの順で出土している。中でも出現頻度の高いハマグリ，シオフキ，サルボウは，35か所の地点貝塚から平均して出土しているが，ヒメシラトリについては，第34号地点貝塚だけで，当遺跡内の地点貝塚出土総量の約85％も集中して出土しており特異な貝塚である。またヤマトシジミは，第13号地点貝塚からまとまって出土しており興味がもたれる。

これらの貝類の中で，ハマグリ，シオフキ，アサリ，ヒメシラトリ等は，内湾の砂泥底の潮間帯に生息し，ヤマトシジミは河口近くの汽水域に，カワニナは淡水域の河川湖沼の砂泥底にそれぞれ生息している。

陸産貝類としては，キセルモドキ科，オカチョウジガイ，ヒダリマキマイマイが少量であるが出土しており，これらの陸産貝類は平地などの樹間や落葉下，或いは庭園，水田の草や石等に生息するもので，ヒダリマキマイマイ類を除くといずれも食用等として供されたものではないと思われる。

南三島遺跡では，１・２区でも縄文時代中期の加曽利Ｅ期に比定される地点貝塚が検出され，シオフキが圧倒的多数を占めて出土し，６区でも加曽利Ｅ期に比定される地点貝塚から，量的に

は少ないが，シオフキを主体にハマグリ等が出土している。今回調査した５区のほぼ縄文時代後期の称名寺式から堀之内Ⅰ式期に比定される35か所の地点貝塚からは，前述のようにハマグリ，シオフキ，ヒメシラトリの順で採集されている。１・２・６区と５区出土の採集された貝種を比較すると若干の相違がみられるが，それが時期により当時の生息環境の微妙な変化によるものなのか，縄文人の嗜好の差によるものなのかは注目される。さらに，今後近辺遺跡の地点貝塚を伴う廻り地Ａ遺跡や仲根台Ｂ遺跡から出土した貝類遺体との比較検討や魚類遺体の分析等を通して，当遺跡周辺の古環境復元を進めていきたい。

引　用　文　献

註１　半田堅三「本邦地下式壙の類型学的研究」『伊知波良』1979年

参　考　文　献

茨城県教育財団『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10　南三島遺跡１・２区』昭和59年

茨城県教育財団『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書９　仲根台Ｂ遺跡・町田遺跡』昭和59年

茨城県教育財団『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書７　廻り地Ｂ遺跡』昭和57年

千葉県文化財センター『千葉南部ニュータウン７　木戸作遺跡（第２次）』1979

村田文夫「縄文集落」『考古学ライブラリー36』ニュー・サイエンス社昭和60年

港区伊皿子貝塚遺跡調査会『伊皿子貝塚遺跡』1981

埼玉県庄和町・尾ヶ崎遺跡調査会『尾ヶ崎遺跡　縄文・古墳時代集落跡の調査』1984

『上総国分寺台発掘調査概報1983．３　西広貝塚第４次調査』昭和58年

市立市川考古博物館『シンポジウム堀之内式土器資料集　各地の堀之内式土器とその変遷』1982

茨城県教育財団『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書11　南三島遺跡６・７区』昭和60年

茨城県教育財団『冬木地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　冬木Ａ貝塚・冬木Ｂ貝塚』昭和55年

茨城県教育財団『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書６　成沢遺跡・屋代Ａ遺跡』昭和57年

今橋浩一，長岐勉，鈴木正博「常総台地に於ける縄文式後期前葉の土器群の一属性について」『古代』第63号，昭和52年

終章　むすび

昭和59年度に発掘調査を実施した，竜ヶ崎ニュータウン建設地域内における南三島遺跡５区からは，縄文時代早期，中期，後期，弥生時代，古墳時代前期，平安時代の貴重な遺構や遺物が検出された。

調査結果からみると，遺構や遺物の大半は，調査区の中央から南部にかけて検出され，縄文時代中期の加曽利ＥⅢ～ＥⅣ式期，後期の称名寺式期，堀之内Ⅰ式期，古墳時代前期の五領期に比定される。なかでも，堀之内Ⅰ式期の遺物の量は膨大であり，特に第39号住居跡は，いわゆる「柄鏡形住居跡」として注目される。また，35か所の地点貝塚が住居跡や土坑内覆土から検出され，貝層出土の土器から縄文時代後期に形成されたものであることが判明した。縄文時代後期初頭の土器の中には，東北南部の綱取系の影響を受けていると思われる土器も一部にみられ，文化の交流が広域的に行われていたことがうかがわれる。さらに，古墳時代前期の五領期に比定される住居跡19軒が検出され，出土遺物から少なくとも２期にわたって生活が営まれていたことが確認できた。Ⅰ期の住居跡は，比較的大型で，Ⅱ期になると中型化の傾向を示している。特に，Ⅱ期の第５号住居跡からは，甕と甑のセットや球状土錘が54個も出土しており興味深い。

当遺跡の立地する台地は，南西側や北側に支谷が複雑に入り込み，南側は龍ヶ崎市街地を含む沖積低地へと続いており，集落を形成するには恵まれた環境ということができる。縄文時代の中期から後期にかけては，調査区の中央から南部にかけての平坦地に，古墳時代前期になると，南部の平坦地にそれぞれ集落を形成し生活を営んでいたものと思われる。ところで，当遺跡５区は，既に報告されている１・２・６・７区と広範囲につながっており，さらに，今後調査される３・４区の成果を合わせて南三島遺跡として総合的に検討を加えて調査報告をしていきたい。

なお，この報告書をまとめるにあたっては，龍ヶ崎市教育委員会をはじめ，関係各位の御協力と御指導をいただいたことに，文末を借りて，心から感謝の意を表したい。

附章　南三島遺跡５区地点貝塚出土の自然遺物同定

－特に貝層の季節性と魚骨組成・貝類組成・殻高組成との関連について－

小池裕子（埼玉大学教養部助教授）
森本治美（駒沢大学学生）

茨城県教育財団が昭和56年度から発掘調査を進めている竜ヶ崎ニュータウン建設計画地域内の南三島遺跡では，住居跡あるいはピット内からハマグリやシオフキを主体にした貝の集積（ここでは地点貝塚とする）が多数検出されている。本報告にかかわる５区からは，SM1からSM35まで35か所の地点貝塚が発掘された。これらの地点貝塚の時期・堆積状況・構成貝等に関しては，第３章第９節を参照されたい。地点貝塚内の貝層は，層位的に発掘され，各発掘単位の乾燥重量を計量したのち，１㎜と４㎜のふるいを用いて水洗選別され，１㎜と４㎜のふるいに残ったサンプルから，魚骨・微小貝・獣骨片・炭化材などの微小遺物がひろい出された。これらの微小遺物および，発掘中に発見された特殊自然遺物（人骨・大型獣骨片・植物遺体など）の同定について依頼を受けた。

また，SM1・SM17・SM28・SM34の４地点貝塚においては，筆者自身が層位発掘を行なったり，あるいは，貝層断面の観察に基づき層位区分を行なった。これら４つの地点貝塚に関しては，貝層の季節推定を行ない，貝層サンプル中の魚骨や獣骨の組成変化に関して考察したので，ここに報告する。

魚　骨

魚骨の同定

今回扱った魚骨資料は，南三島遺跡５区内のSM１からSM35の地点貝塚の各貝層資料を，４㎜と１㎜のふるいで水洗選別した後ひろいだし作業を行なって得られた資料で，原則として，検出されたすべての魚骨資料を同定対象としたが，魚骨の出土量の多いSM1に限り，各層1,000点程度を同定して，魚骨組成を求めるにとどめた。

魚骨資料はまず椎体・下顎・棘・稜鱗など部位別に分別され，次に各部位に関して，目あるいは科・種の段階まで同定した。同定に際しては，「日本産魚類大図鑑」（益田他，1984）の種名に従い，「日本産硬骨魚類の中軸骨骼の比較研究」（堀田，1961）および上高津貝塚（小宮，1978），冬木貝塚（赤沢・小宮，1983），伊皿子貝塚（金子他，1983）等を参照した。

魚骨資料の同定の結果，確認された魚種は次の13群である（PL72）。

軟骨魚綱　Chondrichthyes

エイ目　Rajiformes

硬骨魚綱　Osteichthyes

ニシン目　Clupeidae

カタクチイワシ科　Engraulididae

ウナギ　*Anguilla japonica* Temminck *et* Schlegel

サケ亜目　Salmonoidei

コイ科　Cyprinidae

サバ科　Scombridae

アジ科　Carangidae

スズキ科　Serranidae

タイ科　Sparidae

ハゼ科　Gobiidae

フグ目　Tetraodotiformes

カレイ目　Pleuronectidae

上記のなかで，軟骨魚綱としてはサメ目とエイ目があるが，これに属すると思われる椎体のうち，その大きさがどれも直径２～５㎜であり，エイ目の尾刺がいくつか確認されているため，この遺跡の立地などから，エイ目とした。また，硬骨魚綱においては，同定はいずれも目，科の段階にとどめたが，椎体の大きさがどれも２～４㎜程度の小型魚であり，この大きさから推定すると，ニシン目においてはニシンやカタクチイワシに，アジ科においてはマアジ，ハゼ科においてはマハゼ，コイ科においてはウグイ，サケ亜目においてはアユなどに限定されると思われる。なお，ニシン目の中のカタクチイワシに関しては，大きさや形態的特徴から，独立の１群として扱った。また，ウナギについては，同じウナギ目のアナゴ科と比べて，椎体や歯骨の特徴は，現生ウナギと共通点が多く，また，利根川水系という立地を考慮し，ウナギと推定した。

なおサケ，スズキなどの大型魚（直径10㎜以上の椎体）は検出されなかった。

各地点貝塚における魚骨組成

表22に各地点貝塚の貝層における魚骨資料の同定結果を示す。この遺跡でもっとも出現頻度が高かった魚種はウナギである。次いで，アジ科，ハゼ科，コイ科，タイ科，ニシン目があげられる。

次に各地点貝塚における魚骨組成とその特徴を述べる。

SM1は魚骨量が全地点貝塚中でもっとも多く，1～11層の全層から各数万点の魚骨が検出された。このSM1の魚骨はウナギを主体とし，ハゼ科，アジ科を含む組成であった。魚骨組成の層位的変化をみると（第221図，SM1），主体となったウナギは，2層，5層，10層で多い。また，純貝層の4層，7・8層ではウナギが減少し，反対にアジ科，ハゼ科が増加する傾向が認められた。特に7・8層でその傾向が顕著にあらわれている。

SM4ではユニット10が貝層部分に相当し，このユニットの各層から魚骨が確認された。なかでも最下層にある20層の混貝土層では，魚骨の出土量が多かった。魚骨組成はウナギ主体であった。

SM6も同じように魚骨量は少ないものの各層から出土している。魚骨組成はウナギ主体であるが，アジ科が多い層もある。特に9－11層は他の層にくらべて魚骨量も多く，ウナギよりもアジ科のほうが多く確認された。

SM10は混貝土層である4－8層，混土貝層である9－18層，そして混貝土層である19－23層の3群にわけられる。魚骨組成は他の地点貝塚と同様にウナギも含まれるが，アジ科の検出が多いのもSM10の特徴である。魚骨は各層から出土しているが，4層，16層，19層でピークをもつ。ウナギの量は多い層と少ない層がはっきりとわかれており，このうち4層，19層ではウナギよりもアジ科が多く検出された。

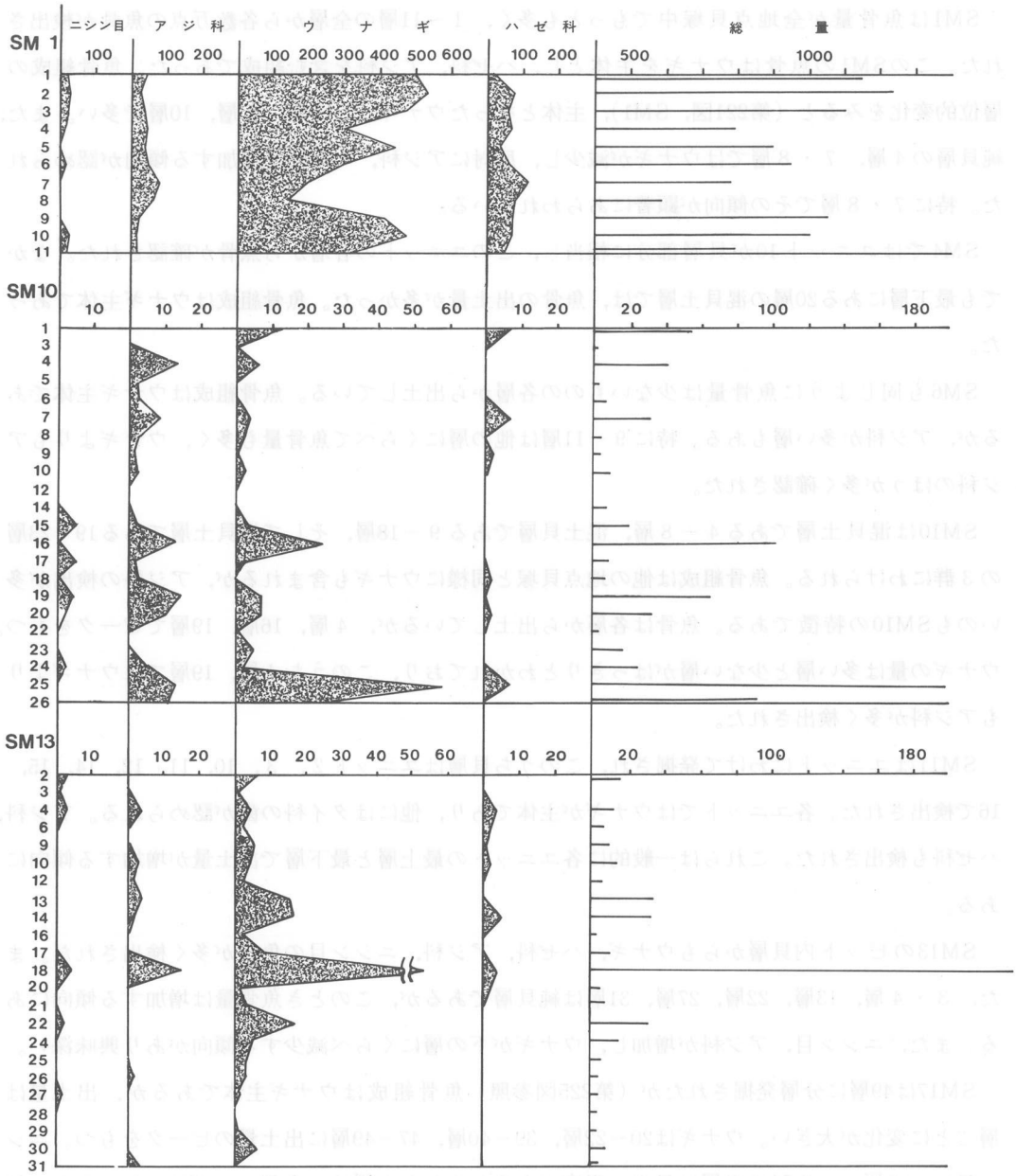
SM11はユニットにわけて発掘され，このうち貝層はユニット2，3，10，11，12，14，15，16で検出された。各ユニットではウナギが主体であり，他にはタイ科の歯が認められる。アジ科，ハゼ科も検出された。これらは一般的に各ユニットの最上層と最下層で出土量が増加する傾向にある。

SM13のピット内貝層からもウナギ，ハゼ科，アジ科，ニシン目の魚骨が多く検出された。また，3・4層，13層，22層，27層，31層は純貝層であるが，このとき魚骨量は増加する傾向にある。また，ニシン目，アジ科が増加し，ウナギが下の層にくらべ減少する傾向があり興味深い。

SM17は49層に分層発掘されたが（第225図参照）魚骨組成はウナギ主体であるが，出土量は層ごとに変化が大きい。ウナギは20－22層，39－40層，47－49層に出土量のピークをもつ。ニシン目は，39層，ハゼ科は41層に目立つ程度である。これらの層は，大型ハマグリ，シオフキの純貝層と一致している。

SM30では魚骨が出土する層とそうでない層がはっきりわかれている。魚骨組成ではアジ科が主体であり，ウナギ，ハゼ科がこれに次ぐ。

以上は層位がはっきりとした地点貝塚であり，これ以外の地点貝塚SM2，3，5，7，8，9，12，14，15，16，18，19，21，22，23，24，25，26，28，29，31，32，34，35は規模が小さいため，一括で取り上げているが，それらの魚骨組成はこれらの地点貝塚に準ずる。



第221図　魚骨の組成図

表22　南三島遺跡5区出土魚骨の同定結果一覧表

(1)

地点貝塚層名＼魚種	軟骨魚類（椎）	エイ科（尾棘）	ニシン目（椎）	カタクチイワシ科（椎）	サケ科（椎）	コイ科（椎）	コイ科（咽頭歯）	コイ科（えらぶた）	ウナギ科（椎）	ウナギ科（前歯骨）	サバ科（椎）	アジ科（椎）	アジ科（鱗）	スズキ科（椎）	スズキ科（上顎骨）	タイ科（椎）	タイ科（歯骨）	タイ科（歯）	タイ科（棘）	ハゼ科（椎）	ハゼ科（上顎骨）	ハゼ科（歯骨）	フグ科（椎）	フグ科（下顎）	カレイ目（椎）	その他（椎）
SM1　I－1	6		21	7					497	2	1	39	19		3					28	19	6	2	2		456
2	2		27				1		536		8	25	22		3					81	36	21	5	1		559
3	1		23				2		472		1	35	9		5			1		60	32	10	8	2	2	511
4	4		14						304	1	8	42	2		1					71	15	9	13			345
5	1						1		448	7	1	37	1		4					41	31	9	1			387
6	1		17				3		299	2	8	47			1			1		65	16	4	2		2	512
7	2						6		197	1		76	6		3			1		119	30	12	2			391
8	5			7					139		12	60			1	1				77	9	8				298
9	4								411		3	20								76	18	5	4			538
10			25						474	1	2	14	5		2		1			72	33	12	8			413
11	6		20				1		311	1		17	1							51	26	11	5	1		424
SM2　I	1								76			15	3							3		4				142
I－SD－5	4								153	2		16	1		2			1		5	13	7	1			231
II－SD－5													2		4			1			4	7				
SM3　I													2													
II－1			1						1				2													
SM4　u－10－7																										
12																										
14									1																	
15																										
16			3						7				3													
17																					1					1
18												1						3								
19	1																	1								
20			1	8					54			3	1								1		1			95
21																										
SM5　II					1																1				1	4
SM6　I－12				1					1																	
13			1																							
14																										
16																										
17																										
18																										
19																										
20																										
21			1																							
22																										
u－2－19			2	3					3			2													1	3
II－1																										1
4			2	1																						
5									1			2														1
7																										2
8			1						1			1														

魚種 / 地点貝塚層名	軟骨魚類（椎）	エイ科（尾棘）	ニシン目（椎）	カタクチイワシ科（椎）	サケ科（椎）	コイ科（椎）	コイ科（咽頭歯）	コイ科（えらぶた）	ウナギ科（椎）	ウナギ科（前歯骨）	サバ科（椎）	アジ科（椎）	アジ科（鱗）	スズキ科（椎）	スズキ科（上顎骨）	タイ科（椎）	タイ科（歯骨）	タイ科（歯）	タイ科（棘）	ハゼ科（椎）	ハゼ科（上顎骨）	ハゼ科（歯骨）	フグ科（椎）	フグ科（下顎）	カレイ目（椎）	その他（椎）
SM6 9									7		11							1		1						
10									4		4	3	1							1						15
11	2		4	4	1				7		1	10	1		1				2		2					19
SM7 I		1			2													2								13
II																										5
SM8 I																	1									2
II	1										1		1													3
SM9 I	1								1			2			4								1			16
II	1				2												1	7	1	1						11
SM10 I－22									1																	1
24			2						2			5		1												14
25	1			9					59		1	13	1							7	4	1	1			108
26									18			11														64
II－4									6			13		1												19
5												1														
8	1											2														2
9				3								1	2							1						
16	1			5					24			13														61
17			5						2			1														
19			4						7			14	1					2				2				33
20			2						7		2	10								1						10
23									5																	11
I－II－1									12											6						37
3				2														1								
6												2														4
7									3			8								6						12
10									2			2	1													4
12																										
14																										6
15			5						3			2									2					10
18							3					2								1						3
SM11 u－2－2			19						123		1	47	1	4						18	6	5	1			174
3									1																	
4									8																	1
5									5									1								
6									7	1																1
u－3－3																										
4											1															4
5									1					2				1								2
6									1																	
7												1														
u－10－3									2									1								2
4									1									1								

魚種 / 地点貝塚層名	軟骨魚類（椎）	エイ科（尾棘）	ニシン目（椎）	カタクチイワシ科（椎）	サケ科（椎）	コイ科（椎）	コイ科（咽頭歯）	コイ科（えらぶた）	ウナギ科（椎）	ウナギ科（前歯骨）	サバ科（椎）	アジ科（椎）	アジ科（鱗）	スズキ科（椎）	スズキ科（上顎骨）	タイ科（椎）	タイ科（歯骨）	タイ科（歯）	タイ科（棘）	ハゼ科（椎）	ハゼ科（上顎骨）	ハゼ科（歯骨）	フグ科（椎）	フグ科（下顎）	カレイ目（椎）	その他（椎）
SM11 5																										3
6									3					1		1		6								9
7																		4								3
u－11土器片									4									3								9
1									1																	
2									2																	2
3					1				4					1				1								4
4									4									1								
5									8																	6
6									13									2		2						25
7																				1						3
8									6									1		2						7
9														1												1
10									7					4				3								5
11									1																	6
12			6		2				8									2		1						20
13									1													1				5
u－12－2																		2								1
3									2																	2
4																										
5												1						1								
u－14－1																		1								
2									2																	8
3																										
4									1																	2
5									5									1								1
6			4						22			3						8								23
u－15－1																										
2																										
3																										2
4												1														
5									5			2						1				1				13
6									8	1		1														3
7									5																	1
8									1																	1
u－16－4																										
SM12 II	1			4			1		9			23								6	1					35
SM13 I－2			2						5																	5
3																										
4			2						4			3								2						2
6	1								2											1						2
9									5																	4
10									4			2								1			1		1	5

地点貝塚層名 ＼ 魚種	軟骨魚類（椎）	エイ科（尾棘）	ニシン目（椎）	カタクチイワシ科（椎）	サケ科（椎）	コイ科（椎）	コイ科（咽頭歯）	コイ科（えらぶた）	ウナギ科（椎）	ウナギ科（前歯骨）	サバ科（椎）	アジ科（椎）	アジ科（鱗）	スズキ科（椎）	スズキ科（上顎骨）	タイ科（椎）	タイ科（歯骨）	タイ科（歯）	タイ科（棘）	ハゼ科（椎）	ハゼ科（上顎骨）	ハゼ科（歯骨）	フグ科（椎）	フグ科（下顎）	カレイ目（椎）	その他（椎）
SM13 12									2			1														2
13	1								15			3									1					14
14									16		2	1								4		1				12
16									1																	1
17	1								8																	2
18			4						93	1		15	6				1			3	6	1				125
20									1											2		1				2
21									3																	3
22	2		2						17						1											12
24									5																	2
25									3																	2
26									3			1										1				
27			1						1																	
28																										1
29	2								1																	
30	1								6																	3
31												3														
II－1－1			6						7			4								3						9
2									6			1			1							1				
3	3		4						17		1	13						1		2						
4															2											
5	3		14				3		270	2		39	33	1				2		25	40	13	1			355
6	1		6						12			5								4					1	15
7									4																	1
9			2						2																	
10									22			18								4	1					16
12	1								1											1						3
13	1								15			1								1		1				11
14									4			1								1						1
15					2				10			2								1		1				3
16			1						4			3														1
I．II－19									5			1														10
SM14 II	1		11		1				5									1								23
SM15 II	1								22			5						2								21
SM16 I－1									5		1	9								4	1	1		1	2	12
4			4						4											1						7
u－2－II－4				3					1			1														2
SM17 I－5									4																	3
7				4					23				1													22
9						1			1																	2
10					1				5				1													11
11	2				2				3				1								2					13
12																						1				

地点貝塚層名 ＼ 魚種	軟骨魚類（椎）	エイ科（尾棘）	ニシン目（椎）	カタクチイワシ科（椎）	サケ科（椎）	コイ科（椎）	コイ科（咽頭歯）	コイ科（えらぶた）	ウナギ科（椎）	ウナギ科（前歯骨）	サバ科（椎）	アジ科（椎）	アジ科（鱗）	スズキ科（椎）	スズキ科（上顎骨）	タイ科（椎）	タイ科（歯骨）	タイ科（歯）	タイ科（棘）	ハゼ科（椎）	ハゼ科（上顎骨）	ハゼ科（歯骨）	フグ科（椎）	フグ科（下顎）	カレイ目（椎）	その他（椎）
SM17 13									1																	
14																										
15	3						1							1		2				3						8
16	1		3		3			1	1									1								11
17	1			4					3						1		1	1			1			1		10
18	1								4																	3
19																										3
20				6	1				65											4	1					32
21				14					122			1					2	4		1		2			1	59
22									16													1				2
24	2								1																	1
26				4					2											1	1	1				1
29									1				2													1
30									1					1												
31	1		1															1								1
32				1					4					1						1		1				7
33				2					24									3		1			2			22
34				2					2																	
35	1		4	3					2		4							1								6
36	1		7						74	2								4		1			1			36
37									17									1								9
38			2						33																	10
39	1		9	6	3				148	2		5		1	1	1				2			2			71
40	5	1	2	8	6				151	3		2		6	1			9	2	7	1	3				132
41	4				6		1		130	1		1	1		1	1		3	1	31	9	3	2			234
42									3		1	2		1		1										13
43									3									1								2
44	3								3			3														6
45									1				1													
46																										1
47	2								422		1							3		4	5					137
48	2		6						177			2						2		2	1	1				95
49			4						59											4	1	1				42
II－1	2								20			4						1		4		1				29
2					2				32	1	1							2		2	2					26
3	1								17			5		4				3		1			1			33
4	1								3				1					1								2
8	1								7					2		5		5								
SM18 I．II																										
SM19 I					1				1																	
SM21 I									10																	
II																				5						11
SM22 I－2									1											1						2

地点貝塚層名 ＼ 魚種		軟骨魚類（椎）	エイ科（尾棘）	ニシン目（椎）	カタクチイワシ科（椎）	サケ科（椎）	コイ科（椎）	コイ科（咽頭歯）	コイ科（えらぶた）	ウナギ科（椎）	ウナギ科（前歯骨）	サバ科（椎）	アジ科（椎）	アジ科（鱗）	スズキ科（椎）	スズキ科（上顎骨）	タイ科（椎）	タイ科（歯骨）	タイ科（歯）	タイ科（棘）	ハゼ科（椎）	ハゼ科（上顎骨）	ハゼ科（歯骨）	フグ科（椎）	フグ科（下顎）	カレイ目（椎）	その他（椎）
SM22	5									2							1										5
	6									9				2							1						8
	7									1																	5
SM23	I－8												1														
	10																		1								1
	11	4			2	2				20	1		3		4				9		3	4					65
	II－2									86																	25
SM24	II																		1								1
SM25	I－1			4						34		1	3		2		5		1		3	4					67
	2			2						7									1								2
	3	1								3																	7
	4			11						8																	11
	II－2									4																	2
	4																										
SM26	I－3	1								4			1														3
	4									2																	1
	II－1																										2
SM28	9									4	1																
SM29	1	1						1		2									3		2	1					18
	2			1						3																	9
SM30	1																										8
	2																							1			
	3									5	1		5						4								28
	4									1										1							
	5	1				2				8			5														22
	7																										
	8									2			5						1								8
	9																1										
	10									18			21	1							4						40
	11																										
	12									3			29	13			3	1	1		2	1	1				58
	13				2	3				5			34		6	2	3				14						41
	14									2			5								4						6
SM31	1																		2								1
	2																		1	1							1
	3	2								5																	24
SM32	1			2									3				1		1		1		1		1		12
SM34	5																	2	2								
	13					1									2											6	2
SM35	2																										1
	4			2		2				4					2												3
	5									3																5	2
	6			2		1				1							1										1

獣　骨

南三島５区の貝層から出土した哺乳類遺体はきわめて少なく，大部分が小型の破片として出土したため，同定可能なものは，下記の３種にとどまり，主に歯を有する骨片であった。

イノシシ　*Sus scrofa*（PL72）

出土歯種を表23に示す。これらの顎骨はSM1，SM11，SM17，SM32と散在して出土した。このうちSM17の37層では右上顎第２・第３乳臼歯が出土したが，この37層は破砕貝層で，後述の季節推定では夏期の堆積と推定されその上位の純貝層の春の層の間には時間的間隔のある層であったことは興味深い。

表23　イノシシ歯顎リスト

出　土　地　点	部　　位
SM　1　II 20層	m_3
SM11　u－10－5層	左側下顎P_2
SM17　37層	右側下顎P_4
SM17　37層	上顎 m_2　m_3
SM32（SI41内）	左側上顎 m_3M_1

シカ　*Cervus nippon*（PL72）

ふつう貝塚からはイノシシと並んで普遍的に出土するが，この遺跡からは，シカと同定される歯は検出されず，同定可能な骨片としてわずかに距骨が発見されたにすぎなかった。

タヌキ　*Nyctereutes Procyononoides*（PL72）

SM17の37層から左下顎骨が出土した。下顎骨に犬歯第３・第４前臼歯と第１後臼歯が残存していたが，第１・第２前臼歯はすでに脱落していた。

このほか哺乳類遺体として，げっ歯類の歯・脊椎骨などが検出されている。また鳥類遺体と考えられる破片も数片出土した。

植物遺体（PL72）

植物遺体としては，SM11，SM34の各貝層から，くぬぎ（ぶな科）*Quercus acutissima* Carruthの堅果が数十点検出された。

SM1・SM17・SM28・SM34地点貝塚における貝層の季節性

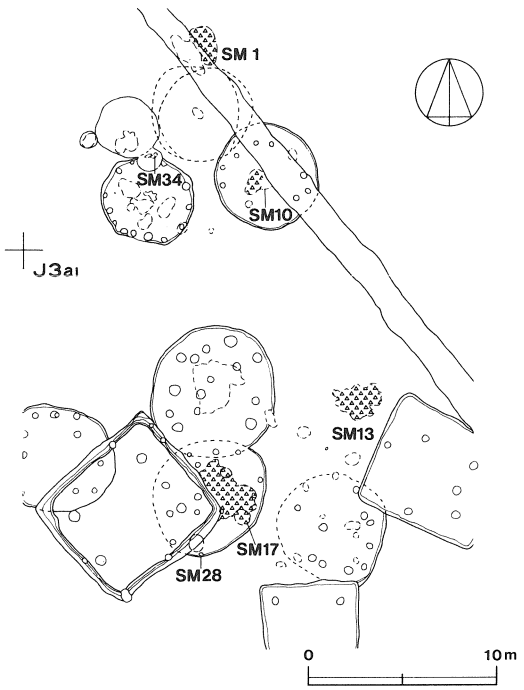
分析資料と方法

上記の各地点貝塚において層位的に発掘された各貝層から，分析用の完形貝（ハマグリ）10－15個体を選択し，常法によってレプリカを作成し（小池，1979），顕微鏡下で，冬輪を検出しながら経年成長を調べ，また最終冬輪からの成長線本数を数え，その貝が採取された季節を推定した。

ハマグリの成長速度

SM1・SM17・SM28・SM34の各地点貝塚の大型ハマグリ40点の貝殻の成長速度を，（第223図）示す。Walfordの定差式によって満年齢の殻高を算定すると，満1年で約20mm，満2年で30～35mm，満3年で36～42mmに達した。

南三島遺跡のこれらのハマグリの殻成長はかなり速く，この値を南関東の各時期の貝塚出土のハマグリと比較すると，縄文時代前期の稲荷丸遺跡や弥生時代の祝部貝塚に匹敵する成長速度を示した。利根川水系の縄文後期に属するこの貝塚のハマグリが，南関東の貝塚の中で，もっとも貝殻成長の速いグループに比較されうることは，今後興味ある課題になろう。

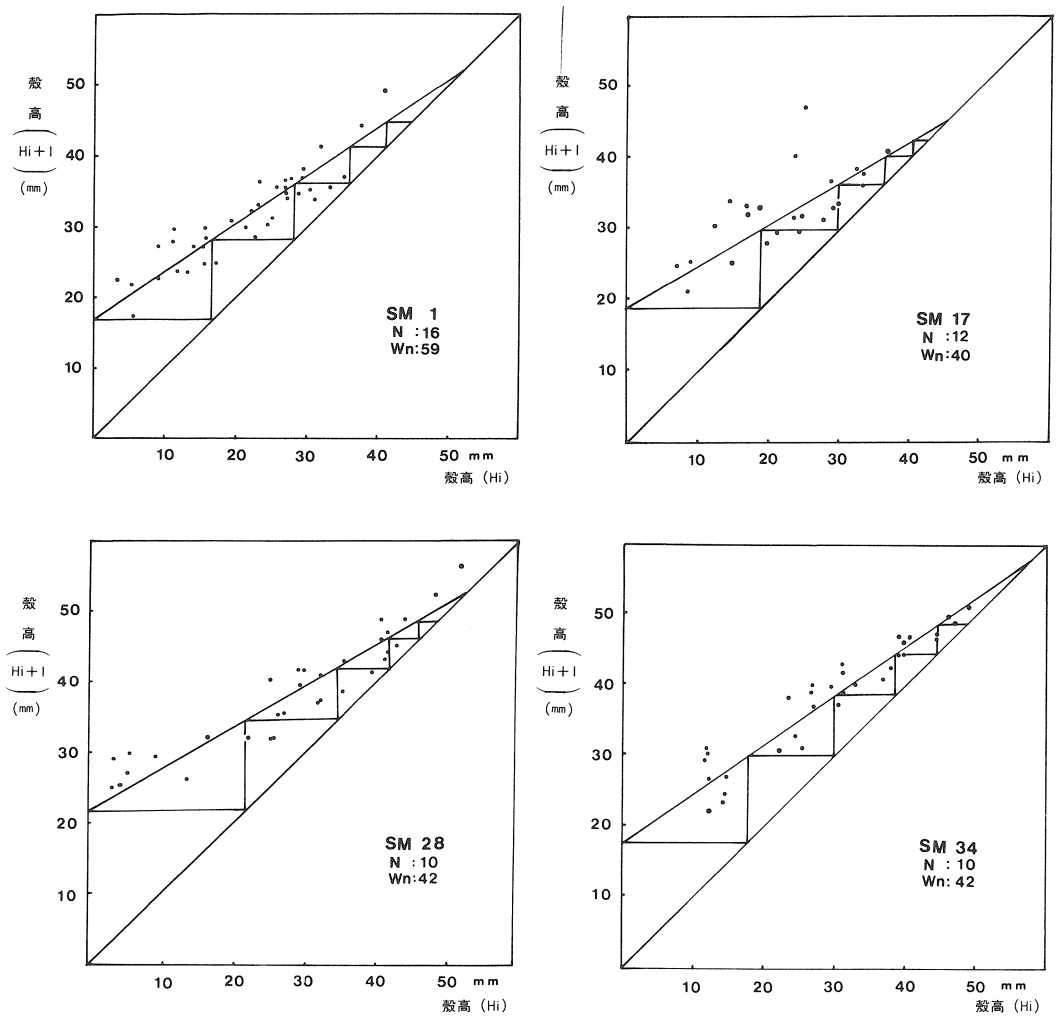


第222図　SM 1 ・10・13・17・28・34
地点貝塚遺構配置図

貝層の季節性

SM1（第224図・第159図参照）

〈発掘所見〉SM1はSK138の覆土中に堆積した地点貝塚で，中央セクションより北側のⅠ区では，1層から11層まで，9つの貝層と2つの間層に分層して発掘された。このうち4・5層および7層・8層がハマグリ主体の純貝層で2つの純貝層を挟んで最上層の1～3層，純貝層の下層の10～11層は混貝率のやや低い混土貝層を呈していた。貝類組成は1層のシオフキ主体層を除きハマグリの出現率が高かった。SM1の特徴は魚骨の多いことで，貝層断面でも，特に6層付近では魚骨が点々と層位的に確認できた。SM1の魚骨組成については前章を参照されたい。



第223図　ハマグリの成長速度

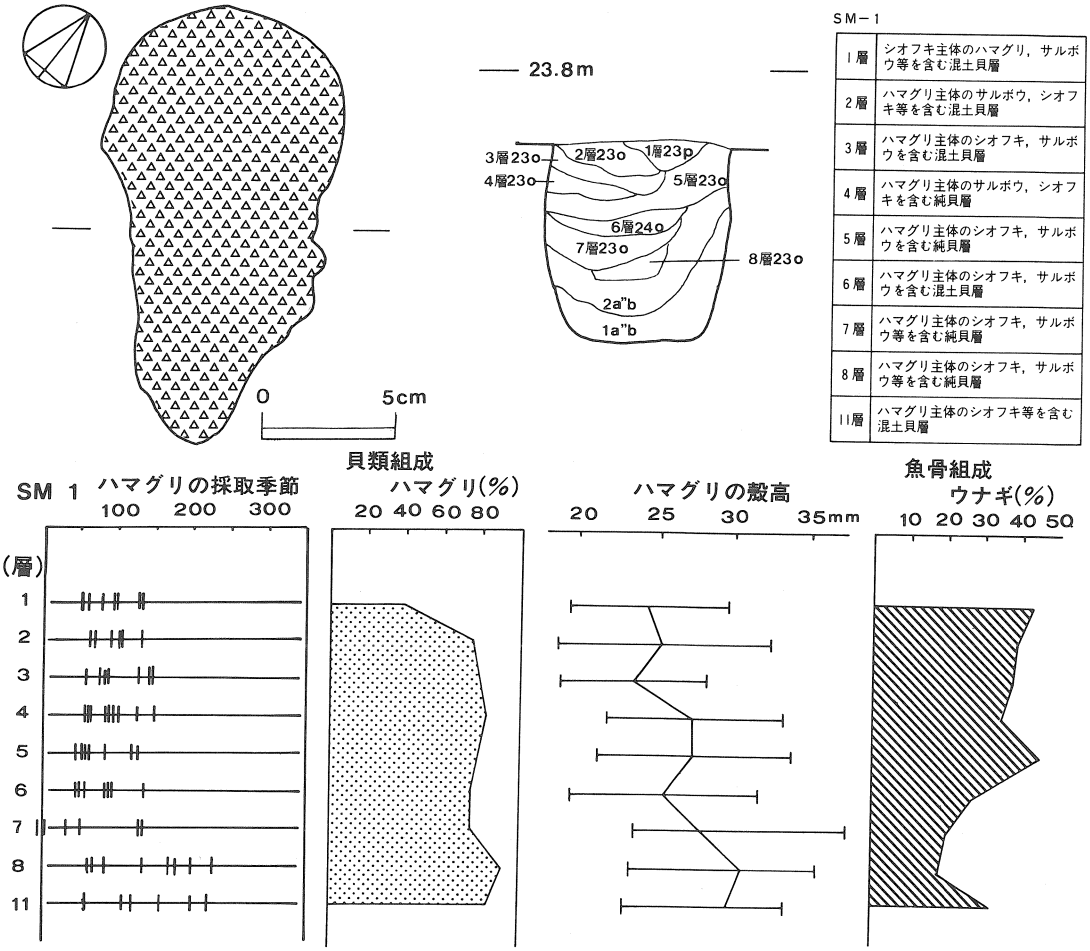
表24　ハマグリの冬輪時の殻高成長（mm）

(1)

ハマグリ個体番号	第1冬輪	第2冬輪	第3冬輪	第4以上の冬輪	ハマグリ個体番号	第1冬輪	第2冬輪	第3冬輪	第4以上の冬輪
SM1					SM17				
1層－14	3.5	22.3	28.6		23層－4	16.6	31.2		
4層－2	－	26.1	35.6	41.0	24層－3	15.3	32.0		
4層－4	4.9	21.7	29.7	34.5	30層－1	8.3	24.0	40.3	
4層－7	14.0	27.0	34.7		30層－7	－	24.7	31.8	37.5, 41.1
4層－14	15.3	29.6	36.5		33層－9	12.5	30.2	33.7	38.0
5層－14	15.6	28.8	36.7		36層－8	19.6	28.0	31.2	
6層－10	13.0	23.6	33.0		37層－9	6.8	24.8	29.6	36.9
6層－11	11.8	23.5	36.1	40.1, 40.9	37層－10	15.2	25.9	32.0	35.8
7層－4	8.5	27.3	34.0		38層－6	8.4	21.2	29.8	33.2, 36.0
7層－12	15.6	24.2	30.3		39層－10	15.7	33.4		
8層－4	14.6	27.3	35.9		40層A－1	8.6	25.1	46.5	
8層－5	9.6	29.5	38.0	44.1	40層A－10	19.2	33.2	38.1	41.1
8層－9	10.7	27.0	36.7						
11層－2	19.1	30.8	34.6						
17層－14	4.8	17.1	24.9	31.0, 33.5, 35.2, 37.6					
18層－1	9.1	22.3	32.1	41.2, 49.5					

(2)

ハマグリ個体番号	第1冬輪	第2冬輪	第3冬輪	第4以上の冬輪	ハマグリ個体番号	第1冬輪	第2冬輪	第3冬輪	第4以上の冬輪
SM28					SM34				
2層－9	9.2	29.3	39.8	41.5, 43.5, 45.6	3層－4	－	25.6	31.2	39.1, 44.5, 47.4
3層－9	－	25.6	32.0		3層－9	12.4	22.4	30.8	37.4
4層－4	4.1	25.3	32.0	37.0	5層－5	－	31.2	43.1	
6層－4	3.2	29.1	41.8	44.2, 48.8, 52.2, 56.4	11層－5	14.5	24.6	32.7	40.1
6層－6	5.3	(30.0)	41.9	47.2	12層－5	12.1	30.3		
8層－7	3.2	25.1	40.9	48.8	12層－10	15.2	27.2	37.1	41.0, 46.8
8層－8	16.6	32.1	41.2	46.0	13層－9	－	26.9	40.0	46.3, 49.7
9層－5	22.0	32.1	37.4		13層－10	12.4	26.8	39.1	47.1
10層－1	5.2	27.1	35.6	43.0	15層－1	14.2	23.6	38.2	42.7, 47.3
11層－1	13.6	26.3	35.4	38.6	15層－6	11.7	29.6	39.8	44.5, 47.0, 49.0, 51.5

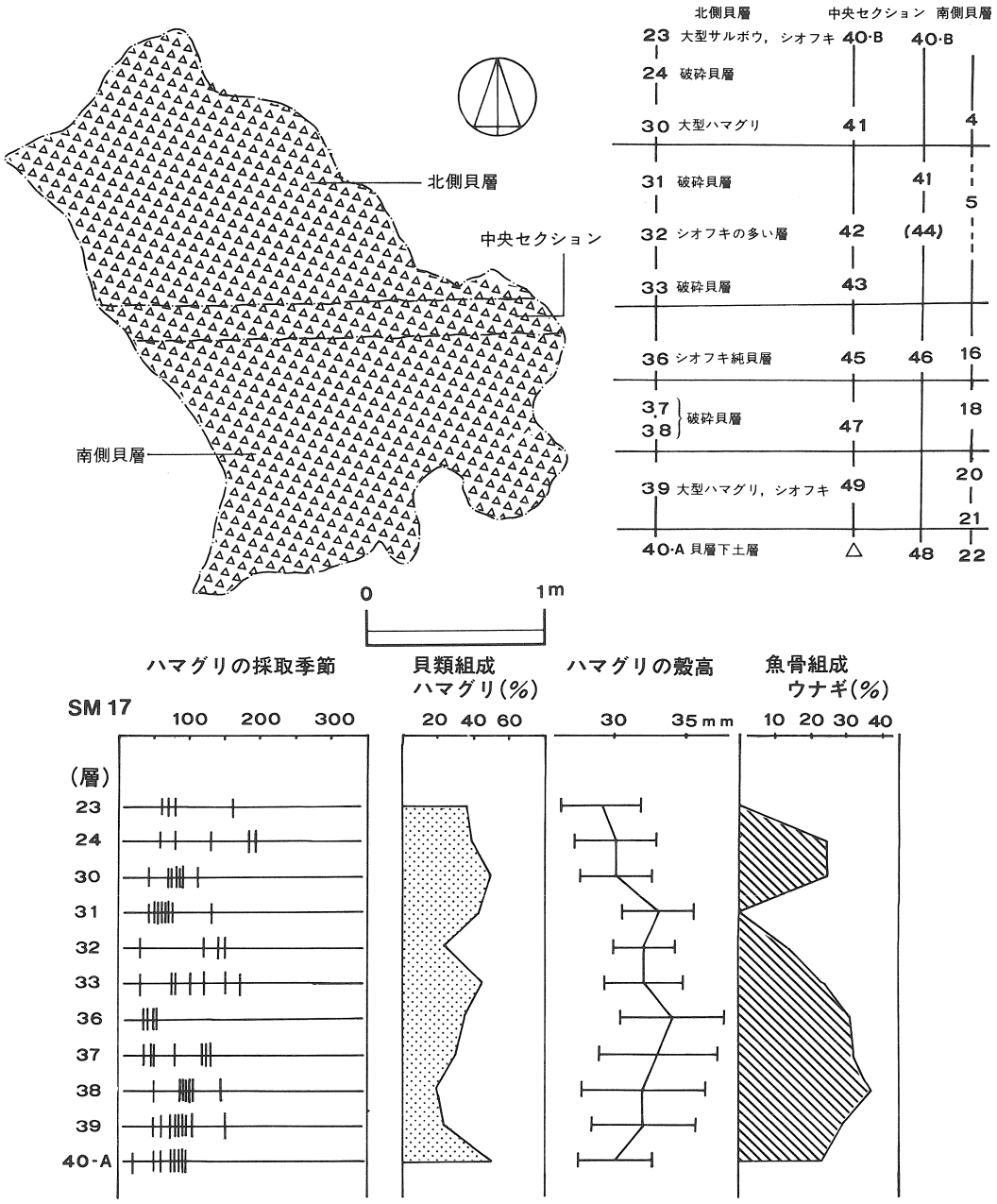


第224図　SM1の貝層の季節性

〈季節推定〉ハマグリを用いた貝殻成長線による季節推定の結果，SM1の１層から６層までは季節組成にあまり変化がなく春期の後半から夏期の前半に採取された貝で占められていた。７層では冬輪形成直後に採取された貝が検出され，その下の８層および10層の春期の後半から秋期前半までの巾広い採取期をもつ層との間に時間的間隙をもつ可能性を示した。従って，１層～７層が８・11層とは別の年周期ユニットをなすと考えられる。

〈貝層の季節性〉ハマグリの採取季節を指標した貝層の季節性を，貝類組成，ハマグリ殻高変化，魚骨組成のデータと比較検討した。貝類組成は前述のように１層のシオフキ層を除き，残りの層はハマグリ主体であったが，７層に始まる年周期ユニットの中で，貝の採取期の開始から２層までがハマグリ主体で，最上層の１層ではシオフキの混入が認められた。SM1のハマグリの殻高は全般的に標準偏差が大きく，小型貝と大型貝が混っていることを示しているが，年周期の変わり目

である７層とその下位の８層で大型化する傾向を示した。反対に魚骨組成の主体をなすウナギの出現を見ると，この年周期の変わり目で減少する傾向を示した。



第225図　SM17の貝層の季節性

SM17（第225図・第167図参照）

〈発掘所見〉ＳＭ17の地点貝塚はSI46住居跡の覆土をほぼおおう径320㎝×280㎝の範囲にひろが

っていた。貝層上面の分布をみると攪乱がはいっていて，貝層はみかけ上，いくつかのブロックに分かれたが，層位発掘終了後，層位関係図を作成してみると，貝層全体としては，セクション北側で確認できた23～40-A層が主流で，他区の貝層もこれらの層のいずれかに統括できると思われる。

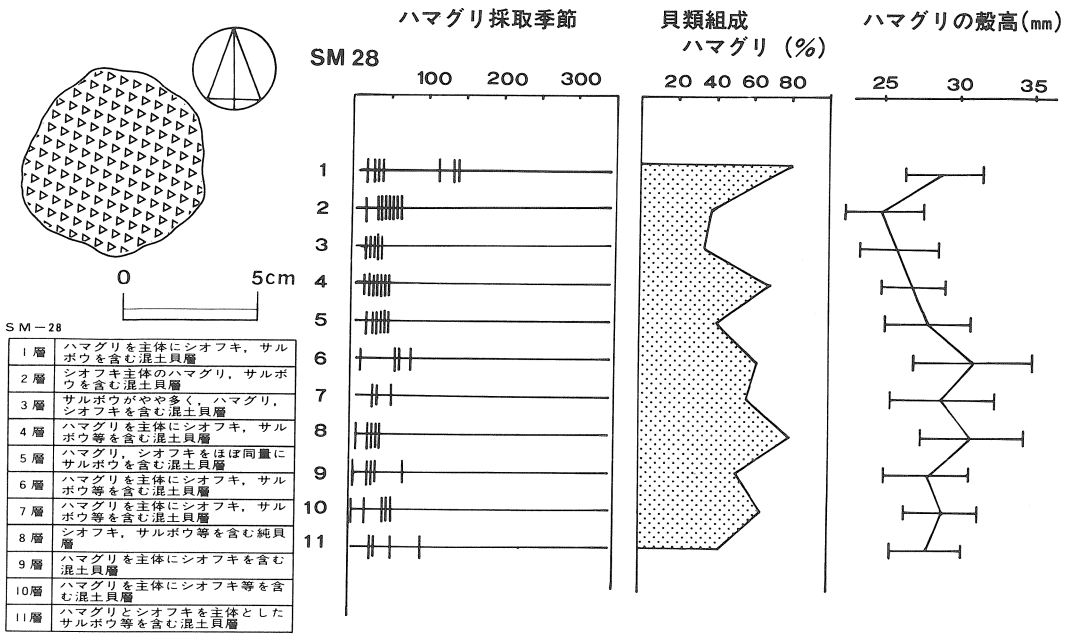
この23～40-A層の間には，貝層下土層の40-A層のほか，次の３つの破砕貝層が広く認られた。つまり37～38層の破砕貝層，シオフキ主体の32層をはさむ33層～31層の破砕貝層，および大型ハマグリの30層が介在したその上層の24層である。

〈季節推定〉一方貝の季節推定の結果では，40-A層から37層は一連の層として，春の後半から夏の前半の層として一括できるが，これらの層と春の前半を示す36層の間には時間的な間隙がある。33層と32層はやや幅のある春の後半から夏の範囲を示し，その上層の春の中旬に集中する31層とはおもむきを異にする。31層から30層，24層へは漸次春の後半から夏期へ変化するように読みとれる。つまり季節推定では37層と36層の間，32層と31層の間に時間的なギャップがあり，40-A層～37層，36層～32層，31層～24層の３つのグループに大別できそうである。

〈貝層の季節性〉これらの結果と先程の発掘所見とを比較してみると，37・38層の破砕貝層は，その上層の36層との間に季節的な間隙が認られよく照合した。その次の33～31層の破砕貝層群については，発掘所見では31層と30層の間，季節推定では32層と31層の間と，少しくいちがうものの，いずれも36層から32層までのユニットとして認られる。最上層のユニットは31層から始まり24層の破砕貝層で終る。

つまりこのSM17では，まず春に採取された貝が純貝層として堆積し，やがて夏までの採取期をすぎると破砕貝層を形成しながら，堆積的にはひとつのユニットを形成し，これが時間的な年周期サイクルを表現していたようである。SM17ではこのような堆積ユニットが46層～37層，36層～32層，31層～24層と３回くりかえされ，すくなくとも３つの別々の年を経過した堆積であることを示唆した。

このサイクルに沿って貝類組成・殻高や魚類組成の変化をみると，年周期サイクルの変り目にあたる36層のシオフキ層はぬきんでて大きな堆積をもつ貝層であるが，一般に春の層は純貝層となる傾向が認められる。またハマグリの殻高も春先の季節組成をもつ36層と31層ではやや大きくなり，前後の層と比較するとピークを形成するようにみうけられる。このSM17からは，魚骨の出土も多かったが，このうち31層の春の層では魚骨（主としてウナギ）の出土量が相対的に減少したのは興味深い。



第226図　SM28の貝層の季節性

SM28（第226図・第150図参照）

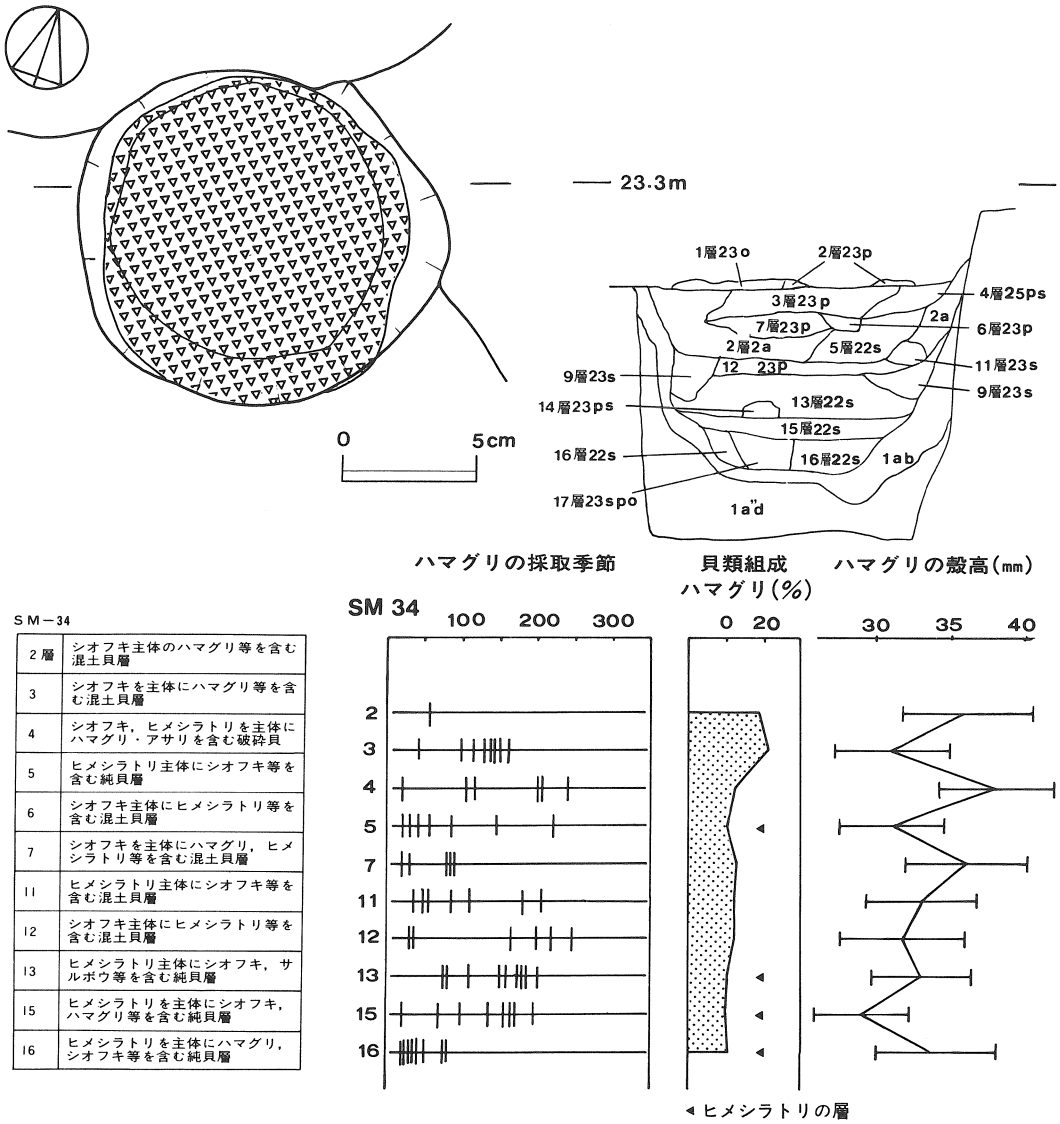
〈発掘所見〉長径60cm，厚さ20cmの小さな貝の堆積であるこの貝層は，ステレオ写真法によって各貝層ごとに写真記録を行なった。

貝層は１～11層に細分されたが，７層の炭化物・灰まじりの層をさかいに上半分と下半分に大別できた。上半分の１～６層までは貝類組成のちがいによって細分され，下半分では８層のハマグリ純貝層から次第に混土率がさがり貝層下土層へ移行した。

〈季節推定〉上半分の貝層群では５層から１層にかけて季節が春から夏へ段々推移しており，一方下半分の貝層群では11層から６層までが一連の季節推移と考えられる。下半分と上半分の最終冬輪パターンはたがいに異なり，別々の年に採取された貝層群と考えたい。

〈貝層の季節性〉発掘所見では，７層の炭化物・灰層が明瞭であったが，季節推定の結果ではむしろその上位の６層までが連続した堆積関係をもつという若干のくいちがいをみせた。

殻高の大きさは平均25mm～31mmまでかなりのばらつきを示し，特に４～２層までが小型化していた。



SM−34

2層	シオフキ主体のハマグリ等を含む混土貝層
3	シオフキを主体にハマグリ等を含む混土貝層
4	シオフキ，ヒメシラトリを主体にハマグリ・アサリを含む破砕貝
5	ヒメシラトリ主体にシオフキ等を含む純貝層
6	シオフキ主体にヒメシラトリ等を含む混土貝層
7	シオフキを主体にハマグリ，ヒメシラトリ等を含む混土貝層
11	ヒメシラトリ主体にシオフキ等を含む混土貝層
12	シオフキ主体にヒメシラトリ等を含む混土貝層
13	ヒメシラトリ主体にシオフキ，サルボウ等を含む純貝層
15	ヒメシラトリを主体にシオフキ，ハマグリ等を含む純貝層
16	ヒメシラトリを主体にハマグリ，シオフキ等を含む純貝層

第227図　SM34の貝層の季節性

SM34（第227図・第162図参照）

〈発掘所見〉　SM34はSK127の覆土中に発見された貝層で，長径120cm厚さ70cmを計る。貝層発掘では1～17の層に分別されたが，層位関係図に示すように，主な貝層の上下関係は，17・16→15→13→11・12→5→4・3の順に堆積していたと判断された。

貝層の最下層の15・16・17層はヒメシラトリの純貝層を呈し，ハマグリ・シオフキを含む小ブロックの14層を介在して13層へと移行していた。12層は11層とほぼ同じ大型ハマグリとシオフキの組成をもつが，混土率が下り，その直上には間層が堆積していた。9・10層はヒメシラトリの

出現率の高い小ブロックで，部分的な攪乱かもしれない。６・７・８層は土層の上位にある大型ハマグリを含むシオフキの層で，あまり大きな単位の層ではない。５層はかなりまとまったヒメシラトリ主体の層で，その上位のシオフキ主体の２～４層へと明確に変化していった。

〈季節組成〉　上下関係の明確な２・３・５・６・７・11・12・13・15・16についてハマグリを用いて季節推定を行なった。最下層の16層は春先に採取された貝で占められ，その上位の13・15層は春の後半から秋へと明瞭な季節推移を示した。11層は種々の季節を示す不明瞭な層であったが，７層以降では，再び明瞭な季節推移を示し，春に採取された貝で構成される７層が春～夏にの季節組成を持つ５・４・３層へ変る。ただし３層が夏期に集中するのに対し，４・５層では春から秋まで分散していることから，一部４・５層と３層の間で発掘層位が混同した可能性もある。

〈貝層の季節性〉　貝類組成では前述のように，５・13・15・16層がヒメシラトリを主体とし，次いでシオフキが多く，ハマグリは数％しか含まれていなかった。ハマグリの殻高は全体に大きく，ほとんどの層で平均30㎜を越えた。これらの貝類組成・ハマグリ殻高変化と季節変化との間には，特に顕著な傾向性は認められないようだ。

掲載不可

掲載不可